

Title	東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造
Sub Title	
Author	三上, 直光(Mikami, Naomitsu) 澤田, 英夫(Sawada, Hideo) 春日, 淳(Kasuga, Atsushi) 上田, 広美(Ueda, Hiromi) 岡田, 知子(Okada, Tomoko) 峰岸, 真琴(Minegishi, Makoto) 鈴木, 玲子(Suzuki, Reiko) 岡野, 賢二(Okano, Kenji) 東南アジア諸言語研究会(Tōnan Ajia shogengo kenkyūkai)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2006
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA76665784-00000000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造

東南アジア諸言語研究会編

慶應義塾大学言語文化研究所

まえがき

東南アジア諸言語研究会は、慶應義塾大学言語文化研究所の共同研究プロジェクトとして、1998年4月に発足した。研究会の目的は東南アジア、とりわけ大陸部の主要言語を対象とした記述研究にある。その最初の成果は『東南アジア大陸部諸言語の「行く・来る」』（2003年：慶應義塾大学言語文化研究所刊）として結実した。本書はそれに次ぐ第2冊目の論文集である。

東南アジア諸言語に関する記述研究の現状は、主要言語に限っても、なお絶対的に不足していると言わざるをえない。我々の研究会はその欠を補うべく、より多くの言語現象について記述を行い、将来の研究のための基礎を築くことを目指している。

本書では、言語の構造のなかでも最も基本的な構造のひとつと考えられる名詞句構造を取り上げ、東南アジア大陸部6言語（ベトナム語、クメール語、タイ語、ラオ語、ビルマ語、ロンウオー語）を対象として分析・記述を行う。本書が今後、この分野の基本文献として長く活用されることを願ってやまない。

研究会参加者は次の通りである。（五十音順）

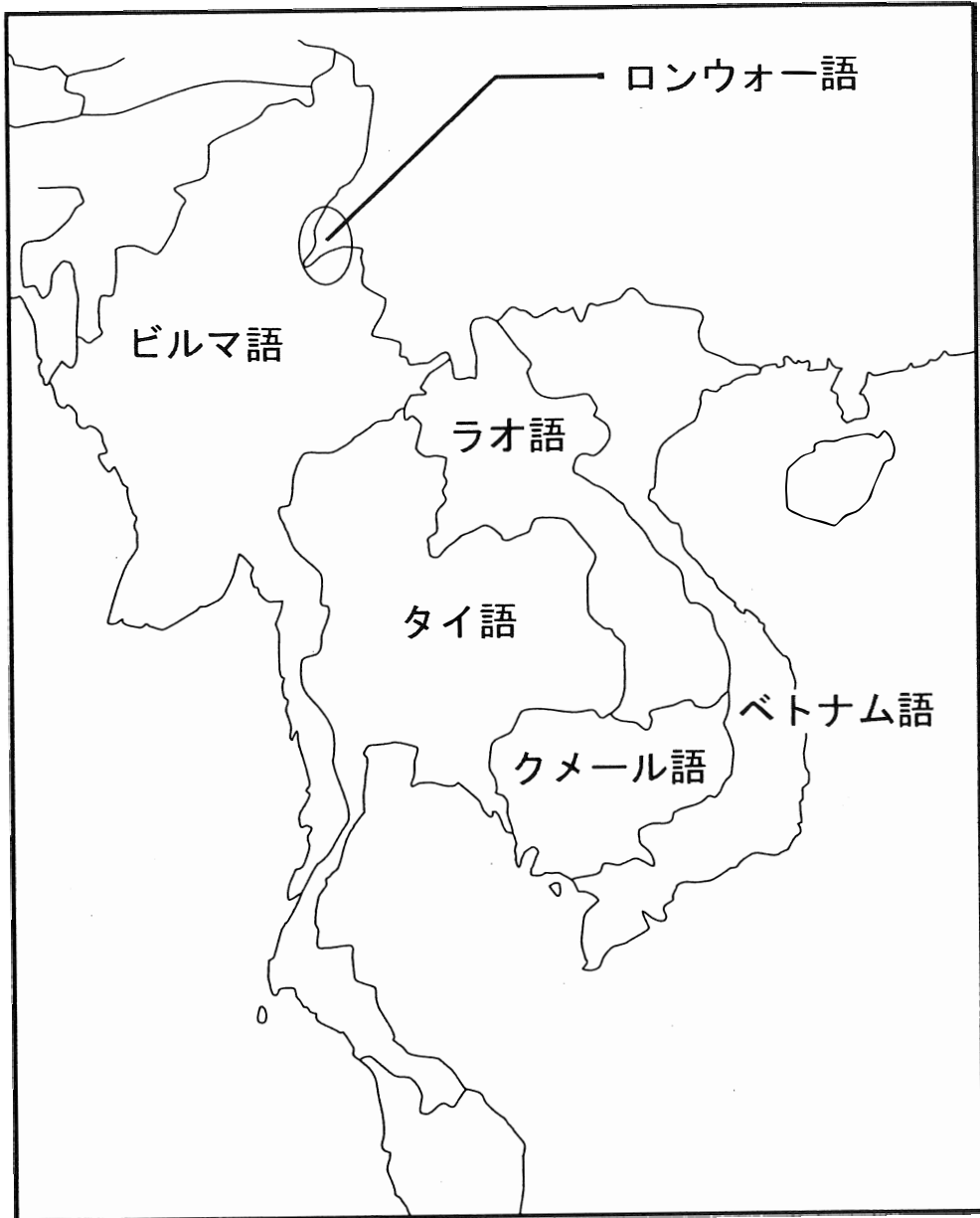
上田広美 岡田知子 岡野賢二 春日 淳 澤田英夫 嶋尾 稔 鈴木玲子
三上直光 峰岸真琴

東南アジア諸言語研究会
代表者 三上直光

目次

まえがき	三上直光
本書の目的と記述の内容	三上直光 1
名詞句構成要素の分類	澤田英夫 3
ベトナム語の名詞句構造	春日 淳 5
クメール語の名詞句構造	上田広美、岡田知子 45
タイ語の名詞句構造	峰岸真琴 89
ラオ語の名詞句構造	鈴木玲子 119
現代口語ビルマ語の名詞句の構造	岡野賢二 155
ロンウオー語の名詞句構造	澤田英夫 197
東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造	三上直光 221

東南アジア大陸部の言語



本書の目的と記述の内容

三上 直光

1 本書の目的

本書は東南アジア大陸部で話される6言語（ベトナム語、クメール語、タイ語、ラオ語、ビルマ語、ロンウォー語）の名詞句構造の記述を目的としている。特定の現象や構造を、複数の言語を対象として記述する場合、言語相互の対照を念頭に置かず、置かないかによって、記述の内容は大きく変わってくるが、本書では前者の立場に立ち、可能な限り各言語の記述内容を統一するように努めた。具体的には、いずれの論文も次章「名詞句構成要素の分類」に掲げられている日本語の用例の対応表現を検討することを記述の出発点としている。つまり、本書は個々の言語の特徴に加えて、言語間の異同もより簡単に確認できるような記述を目指そうとしている。

2 記述の内容

名詞句構造の記述に当たってまず問題にすべきことは、名詞句とは何か、ということである。しかしながら、それを明確に述べることは難しく、本書で扱う言語においても今後の研究に俟つところが大きい。そこで、本書ではとりあえず「名詞を主要部（head）とし、それに修飾語句が付け加えられた統語的単位」を名詞句と考え、次の表現を含む名詞句を取り上げている。

- (1) 複数表現
- (2) 量化表現
- (3) 所有者表現
- (4) 指示表現
- (5) 名詞的修飾表現
- (6) 動詞的修飾表現

(1)～(6)の名称は日本語の用例に基づいたものであり、言語によっては日本語とは異なった表現形式で表されることもある点に注意されたい（たとえば、日本語では名詞的修飾表現で表されるものに、言語によっては動詞的修飾表現が対応する、など）。

いずれの論文も上記の分類に従って記述が進められるが、記述の内容で特に注目されるのは、主要部の名詞（以下、主要名詞と呼ぶ）と修飾語句との結合形態とその意味に関わる問題である。結合形態は、それを大まかに分類すると、修飾語句が主要名詞と直接結びつく形式と修飾語句が主要名詞を修飾することを示す何らかの標識（所有者標識、修飾節標識など）を伴う形式の2種類になる。上記(3)(5)(6)の表現においては、いずれの言語も、ひとつの修飾表現に対して両方の形式が扱われている。したがって、各々の形式がどのような意味を表すか、という結合形態と意味との関係が明らかにされるような記述が

求められることになる。

結合形態は単位認定の問題とも無関係ではない。ある要素の結合が語か、句か、節か、あるいはそれ以外のものかの認定については、程度の差こそあれ、どの言語においても絶対的な基準を設けることは容易ではない。ことに孤立語の類型に属する言語では、形態的基準に多くを期待できないだけに、いっそう困難をきわめる。本書で扱う、ベトナム語、クメール語、タイ語、ラオ語はその典型例である（膠着語的性格の強いビルマ語、ロンウオー語にもその種の問題は存在する）。とはいえ、形式的な手がかりが全くないというわけではない。数少ない手がかりのひとつが、上に述べた主要名詞と修飾語句との結合形態である。一般に主要名詞と修飾語句が直接結びついた形式が複合語（複合名詞）として、そして両者の関係を示す標識が介在した形式が句として認定されることが多いからである。しかし、これはあくまで傾向として言えることであり、意味的基準なども含めた認定基準が検討される必要がある。

名詞句構造の記述には、名詞句の構成要素間の共起関係や位置関係（語順）に関する制約も含まれなければならない。この点も、どの結合形態が選ばれるかによって左右される。

このように、主要名詞と修飾語句との結合形態は様々な問題と関連しており、多角的に分析されるべき課題のひとつである。本書所収の論文はいずれも結合形態をめぐる上記諸問題に記述の重点を置いている。

名詞句構成要素の分類

澤田英夫

本書に含まれる各論文では、主名詞の前後に置かれ主名詞とともに名詞句を形成する要素を、次の6つに分類する。

グループ1：複数表現

名詞句の表す対象が複数であることを表示する形態素。この形態素を伴う主要部名詞を持つ名詞句は、複数個体を指示する。具体的な数量には言及しない。

グループ2：量化表現

1. 名詞句の表す対象の具体的な数量を特定する数詞を含む表現：日本語の「1つの」「2つの」「約200の」「何十もの」などに当たるもの。
2. 名詞句の表す対象の、数量の範囲（多少、全体の中の割合など）を表す表現：「多くの」「わずかな」「全ての」「ほとんどの」「いくつかの」などに当たるもの。

本論集では、1.として日本語の「1冊の」「2冊の」および疑問の「何冊の？」に、2.として「ある」「全ての」「ほとんどの」「数冊の」「わずかな」「たくさん」に対応する各言語の形式を取り扱う。

グループ3：所有者表現

典型的には、名詞句の表す対象の持ち主を表す表現。（名詞句の主名詞が動詞から派生した出来事名詞である場合はその出来事の主体を表すが、本書では割愛。）

1. 人称の区別を担うもの：日本語の「私（たち）の」「あなた（たち）の」「彼（女）（ら）の」および「誰の」「誰かの」などに当たるもの。
2. 固有名を含むもの：日本語の「××先生の」「ウー＝マウンマウンの」などに当たるもの。
3. 特定の名詞句を含むもの：日本語の「彼の弟の」「あの先生の」などに当たるもの。
4. 特定性の低い名詞句を含むもの：日本語の「バンコク市民の」などに当たるもの。

名詞（句）と、主名詞に対する関係を表示する、いわゆる「属格」の形態素の組み合わせによって作られることが多い。

本論集では、日本語の「私の」「あなたの」「彼の」「彼女の」「母の」「その金持ちの」などに対応する各言語の形式を取り扱う。

グループ4：指示表現

名詞句の表す対象の、話し手「聞き手に対する位置関係や遠近の度合を表したり、聞き手に選択肢の中からの選択を求めたりする表現：日本語の「こ（れら）の」「そ（れら）の」「あ（れら）の」；「どの」「どちらの」に当たるもの。

具体物を指示する「直示的」用法と、文脈中に現れた名詞句を指示する「照応的」用法がある。

本論集では、日本語の「こ（れら）の」「そ（れら）の」「あ（れら）の」「どの」「誰の」などに対応する各言語の形式を取り扱う。

グループ5：名詞的修飾表現

主名詞を修飾する表現のうち、名詞句そのもの、あるいは、名詞句＋主名詞に対する関係を表示する形態素の組み合わせからなるもの。

グループ6：動詞的修飾表現

主名詞を修飾する表現のうち、動詞そのもの、あるいは、動詞（句）＋主名詞に対する関係を表示する形態素の組み合わせからなるもの。後者の典型例は「名詞修飾節」である。

修飾表現のどれがグループ5に属し、どれがグループ6に属するかは、言語依存的なものである。日本語の例を挙げる。

グループ5：「外国の」「ラオ語の」「言語学の」「子供向けの」「ベトナム人の」「医者」（「医者である」という意味において）「ぼろぼろの」「金持ちの」

グループ6：日本語の「分厚い」「大きい」「高価な」「古い」「難しい」「背の高い」「古い」「親しい」「親切的な」「良い」「悪い」「昨日買った」「父がくれた」「机の上にある」「まだ読んでいない」「昨日会った」「一緒に住んでいる」「しばらく会っていない」などに当たるもの。

本論集では、グループ5の例として、日本語の「外国の」「××語の」（言語名）「言語学の」「子供向けの」（以上、主名詞が無生物「本」の場合）；「××人の」（民族・国家名）「医者」（＝医者である）（以上、主名詞が有生物「友人」の場合）などに対応する各言語の形式を取り扱う。

また、グループ6の例としては、「分厚い」「大きい」「高価な」「古い」「ぼろぼろの」「難しい」「昨日買った」「父がくれた」「机の上にある」「まだ読んでいない」（主名詞が「本」の場合）；「背の高い」「古い」「裕福な」「親しい」「親切的な」「良い」「悪い」「昨日会った」「一緒に住んでいる」「しばらく会っていない」（主名詞が「友人」の場合）などに対応する各言語の形式を取り扱う。

ベトナム語の名詞句構造

春日 淳

目次

はじめに

- 1 ベトナム語概要、本稿での表記
 - 2 インフォーマント、資料
 - 3 先行研究
 - 4 ベトナム語の名詞句構造
 - 4.1 ベトナム語の名詞句の基本構造
 - 4.2 名詞に前置する要素
 - 4.2.1 複数表現
 - 4.2.2 量化表現
 - 4.2.3 焦点標識
 - 4.2.4 類別詞
 - 4.2.5 2つ以上の要素の共起
 - 4.3 名詞に後置する要素
 - 4.3.1 名詞的修飾表現
 - 4.3.2 動詞的修飾表現
 - 4.3.3 名詞的修飾表現と動詞的修飾表現の共起
 - 4.3.4 所有者表現
 - 4.3.5 指示表現
 - 4.3.6 複数の要素の共起
 - 5 まとめ
- おわりに
- 注
- 参考文献

はじめに

本稿は、ベトナム語の名詞句の構造について、澤田「名詞句構造調査の手引き」（暫定版）（2003）に従ったインフォーマントへの聴き取り調査から得られた結果を分析、記述し、ベトナム語の句構造の研究、文法研究への貢献を目指したものである。本稿で名詞句の中心を成すものとして扱った名詞は、その意味範疇からは主に<生物>を表す名詞の中の<ヒト>を表す名詞、<ヒト以外の生物>を表す名詞、<無生物>を表す名詞で、このほかの、時を表す名詞、位置を表す名詞、心理・感情・知覚を表す名詞、事柄を表す名詞などは扱っていない。

1 ベトナム語概要、本稿での表記

ベトナム語は、系統的にはオーストロアジア語族中のモン・クメール語族の一語派であるベト・ムオン語派に属する。主にベトナム国内に話され、国内ではその人口約 78,700,000 人（2001 年現在）のおよそ 86%にあたるキン族が母語とし、それ以外の民族も公用語として使用している。ベトナム以外では、カンボジア、ラオス、タイなどにも一定数の話者がいる。

1.1 ベトナム語の音韻構造

本稿の中のベトナム語の表記は、現行のベトナム語正書法による表記を用いる。以下、音節構造、音素目録を示す。音節構造の中の()は、その音素の有無両方の可能性を表す。音素表記の隣の()内は綴り字である。音素目録中の声門破裂音/?/を表す綴り字はない。声調の欄の()内は、文字 a に声調記号をつけたものである。

[1] 音節構造 $C_1(w)V(C_2)/T$ [C₁: 頭子音, w: 介母音, V: 主母音, C₂ 末子音, T: 声調]

[2] 頭子音

p(p)	t(t)	tʃ(tr)	c(ch)	k(k/c/q)	ʔ(zero)
	t ^h (th)				
b̄(b)	d̄(d)				
m(m)	n(n)		ɲ(nh)	ŋ(ng/ngh)	
f(ph)	s(x)	ʃ(s)			h(h)
v(v)	z(d/gi)	ʒ(r)		ʎ(g/gh)	
	l(l)				

[3] 主母音

単母音	i(i)	u(u)	u(u)
	e(ê)	ə(ơ)/ă(â)	o(ô)
	ɛ(e)	a(a)/ă(ã)	ɔ(o)
二重母音	iə(iê/yê/ia)	ua(ươ/ua)	uə(uô/ua)

[4] 介母音

w(o/u)

[5] 末子音

p(p) t(t) k(c/ch)

m(m)	n(n)	ŋ(ng/nh)
w(o/u)	j(i/y)	

[6] 声調

中平	(a)
低降	(à)
降昇	(ǎ)
高昇+喉頭化	(ǎ̃)
高昇	(á)
低降+喉頭化	(a)

1.2 ベトナム語の統語構造

ベトナム語はいわゆる単音節言語であり、「1音節=1形態素=1語」を基本としている。2音節以上の語はその複合形式または派生形式として構成されている。語は、語形変化を一切しない。修飾の語順は、被修飾語を修飾語が後ろから修飾する。ただし、ベトナム語に多く存在する漢語語彙の場合は、1語内のレベルでは、漢語そのものの修飾語順を保存したまま使われているものが多い。被修飾語+修飾語の修飾語順は、名詞句のみならず、動詞句においてもいえることである。文中の主語、動詞、補語の語順はSVO型である。以下これらの例を示しておく。

語の構成と修飾語順：

(1) bò
牛

(2) bò đực
牛 雄の
雄牛

(3) trường Đại học Quốc gia Hà Nội
学校 大学 国家 ハノイ
[場] [大学] [国家] [河内] ([]内は相当する漢字)
ハノイ国家大学

語の複合あるいは派生：

(4) sửa
直す、修理する

- (5) chũa
直す、治療する、修理する
- (6) sửa chữa (sửa と chũa の複合形式)
直す、修理する
- (7) vui
楽しい
- (8) vui vẻ (vui の派生形式)
楽しく

動詞句中の修飾語順：

- (9) Hà nói nhanh. (nhanh が nói を修飾)
(人名) 話す 速い
ハーは速く話す。
- (10) Hà sống vui vẻ. (vui vẻ が sống を修飾)
(人名) 住む 楽しく
ハーは楽しく暮らしている。

文中の語順 (SVO)：

- (11) Hà sửa chữa xe đạp.
(人名) 修理する 自転車
ハーは自転車を修理する。

2 インフォーマント、資料

インフォーマントは ヴー・ダン・クエ (Vũ Đăng Khuê) 氏 (1952 年生まれ、男性) にお願いした。繰り返し同じ項目について聞かれるという煩わしさにもかかわらず、快くご協力いただいたことに心より感謝申し上げたい。聞き取り調査に用いた調査票は澤田(2003)である。本稿に現れる句や文の例は、筆者があらかじめ用意しインフォーマントのチェックを受けたものか、調査の中でインフォーマントから直接得られたものである。

3 先行研究

これまで、ベトナム語研究の歴史の中で名詞にあたる語句に語源、意味、文中の構成

分としての役割などの点から言及した研究は数多いが、ベトナム語の文法範疇の中で名詞を他の品詞と区別して取り上げ、それを名詞句という枠組みの中で詳細に分析した研究としては Nguyễn Tài Căn (1975)が最初でもっとも包括的な研究である。その後この N.T.Căn(1975)の成果を受けてこれを再検討、批判する形で Cao Xuân Hạo (1982)および(1994)などが現れ、最近では Hoàng Dũng, Nguyễn Thị Ly Kha (2004)、Nguyen Tuong Hung (2004)、Trần Đại Nghĩa (2005)などの研究がある。H.Dũng, N.T.Ly Kha(2004)は名詞句中名詞に後置される要素について分析し、T.Đ.Nghĩa(2005)は N.T.Căn(1975)の中で示された名詞句中の構成要素の範疇と語順との関係の問題を改めて取り上げ検討したもので、N.T.Hung(2004)は生成文法の視点から名詞句全体の再分析を試みたものである。

4 ベトナム語の名詞句構造

4.1 ベトナム語の名詞句の基本構造

ベトナム語の名詞に何らかの要素が前置、あるいは後置され一つの名詞句を成すとき、その基本構造はつぎのようなものである。

量化表現／複数表現＋（焦点標識）¹＋（類別詞）＋名詞＋名詞的修飾表現＋動詞的修飾表現²＋所有者表現＋指示表現

上の基本構造を成す名詞句の各要素の出現には、以下のような条件が付加される。

1) 量化表現と複数表現は一部の語を除いて基本的には共起せず、どちらかが起こる。ただし、後に見るように量化表現の中 *hầu hết*<ほとんど>、*tất cả*<すべての>などは複数表現とも共起することができる。

2) 焦点標識 (*cái*) は、名詞句の中心となる名詞になんらかの理由で焦点が当たる場合にのみ現れる。

3) 類別詞は、量化表現や複数表現との共起の際、名詞の意味範疇によって現れる場合も現れない場合もある。

4) 名詞的修飾表現が動詞的修飾表現の後ろに起こることもある。

5) 動詞的修飾表現のうち修飾節は所有者表現の後ろに起こるのが基本的な語順である。

6) 指示表現は後に見るように所有者表現の前に起こることもあるが、基本的な位置は名詞句末である。

以下では、名詞に前置あるいは後置する要素について、その基本的意味・用法とともに他の要素との共起の可能性について具体的な例を示しながら検討する。

4.2 名詞に前置する要素

4.2.1 複数表現

ベトナム語の複数表現の最も代表的なものは、*các* と *những* である³。*các* は漢語の〈各〉に由来し「複数あるものをすべて数え上げたその全体」を指す語である。一方 *những* は「ある限定を受けて不特定多数あること」を表し、名詞に後置される限定句（修飾表現、所有者表現、指示表現）とともに用いるのが基本的用法である。後に 4.2.5 節で見るようにこれら 2 つの複数表現はどちらも、量化表現の中の *hầu hết*〈ほとんど〉、*tất cả*〈すべての〉とも共起する。

名詞のもつ意味範疇が〈生物〉の中の〈ヒト〉を表す名詞の中(12)のように〈人〉を表す *người* に *các* が直接前置する場合、(13)が示すようにお前たち〉という特別なニュアンスの用法となる。

(12) *các người*
人
お前たち

(13) *Tôi nói cho các người nghe nhé! Đây không phải là chuyện đùa.*
わたし 言う ~ために お前たち 聞く [文末詞] これ
[否定] [繋詞] 話 冗談
お前たちに言うておく。これは冗談ではないぞ。

〈ヒト〉を表す名詞の中でも *bạn*〈友人〉は(14)のように *các* が直接前置し名詞の後ろになんの限定句もない場合、(15)のように〈みなさん〉という意味の呼称として用いられる⁴。

(14) *các bạn*
友人
みなさん（呼称として用いる）

(15) *Xin chào các bạn.*
[丁寧] あいさつする みなさん
みなさんこんにちは。

一方(16)のように名詞の後ろに限定句がある場合は、複数の友人すなわち〈友人たち〉の意味となる。

(16) *các bạn ấy*
友人 その

その友人たち

sinh viên<学生>などの語は(17)のように名詞に các が直接前置した形が複数を表す<学生たち>の意味で普通に用いられる。

- (17) các sinh viên
学生
学生たち

<ヒト以外の無生物>を表す名詞の場合は(18)のように直接前置することではなく、(19)の例のように名詞との間に類別詞を介するのが基本的な用法である。

- (18) * các bò này
牛 この

- (19) các con bò này
[類別詞] 牛 この
この牛たち

名詞が<無生物>を表す場合も、(20)のように類別詞を介さないで các が名詞に直接前置する形は口語表現の場合を除いては言わず、(21)のように類別詞を介するのが基本的な用法である。

- (20) * các sách
本
(この表現を(21)と同様の意味で言う人もいる)

- (21) các quyển sách
[類別詞] 本
(複数ある) 本 (全体)

<ヒト>を表す名詞については上の(12)~(15)および(17)で見たように các は前置する名詞が何を示しているかその範囲が明らかな場合は類別詞などを介さず名詞に直接前置し名詞の後ろに限定句がない形で用いられる。前置する名詞の範囲を明らかにするためには(16)のように限定句がつく。<ヒト以外の生物>や<無生物>を表す名詞には、名詞が種類を表し個体を直接表してはいないという性格上、個体として捉えられたものの集合全体を

表すために(19)、(21)のように類別詞を介すると考えられる。

一方 *những* は以下(22)~(35)で見るように名詞に後置される限定句とともに用いられるのが基本的な用法である。

người <人>に前置した形では(23)のように限定句を伴えば<~の人>という意味となる。

(22) * *những người*
人

(23) *những người này*
人 この
この人たち

bạn <友人>に *những* が前置され、名詞の後ろの限定句によって限定を受けた(24)~(28)では<~の人たち>の意味となり、話し手の友人を直接示してはいない。

(24) *những bạn này*
友人 この
この人たち

(25) *những người bạn* + 限定句
人 友人
~の人たち

(26) *Đây là những người bạn mà tôi chưa bao giờ*
これ [繫詞] 人たち [関係詞] 私 [未然] いつ
gặp ở Nhật Bản.
会う ~で 日本
これは日本では一度も会ったことのない人たちだ。

(27) *những người bạn này*
[複数] 人 友人 この
この人たち (親しみを込めた表現, 話し手の友人ではない)

(28) *Những người bạn này rất tốt với người Việt Nam.*
この人たち とても よい ~に対して ベトナム人

この人たちはベトナム人にとっても親切だ。

sinh viên<学生>などの語には直接前置するが、この場合も名詞の後に限定句があるのが基本的な用法である。

(29) những sinh viên này
学生 この
これらの学生

(30) những sinh viên Việt Nam
学生 ベトナム
ベトナムの学生

những が<ヒト以外の生物>を表す名詞に前置する場合は(32)のように類別詞を介さなくてはならない。

(31) * những bò này
牛 この

(32) những con bò này
[類別詞] 牛 この
これらの牛

<無生物>を表す名詞の場合は(34)のように類別詞を介さない形もあるが、(35)のように類別詞を介するのが基本的な用法である。

(33) * những sách
本

(34) những sách này
本 この
これらの本

(35) những quyển sách này
[類別詞] 本 この
これらの本

限定句がない(36)のような用法や数詞とともに用いられた(37)は数が多いことを強調して言う用法である。

(36) những muỗi là muỗi
 蚊 [繫詞] 蚊
 たくさんの蚊

(37) ăn những năm bát com đầy
 食べる 5 茶碗 飯 満ちた
 山盛りの飯を5杯も食べる

4.2.2 量化表現⁵

量化表現の中、hầu hết<ほとんど>、tất cả<すべての>は複数表現とも共起するが、その他の量化表現は一般に複数表現とは共起しない。

4.2.2.1 数詞、mấy<いくつかの>、một số<若干の>

以下で見るように数詞および mấy<いくつかの>が名詞に対し似たような現れ方をするのに対し、một số<若干の>はかなり異なった現れ方をする。一般に、数詞および mấy については名詞が<ヒト以外の生物>あるいは<無生物>を表す場合、類別詞の介在する方が基本的で文法的な用法である⁶。この場合の類別詞は、名詞を数える際の助数詞としての働きをする。

数詞は người<人>に前置し<ヒト>を数える<～人>という意味になる。

(38) một người
 1 人
 1 人

bạn<友人>は(39)のように数詞が直接前置する場合と(40)、(41)のように người や親族名称由来の語を介する場合とがあるが<一人の友人>を表す意味に大きな違いはない。

(39) một bạn
 1 友人
 1 人の友人

(40) một người bạn
1 人 友人
1人の友人 ((39)より自然な言い方)

(41) một anh bạn
1 兄 友人
1人の友人 (親しみを込めた表現)

sinh viên<学生>などの語は(42)のように数詞が直接前置するのが基本的な用法であるが、親しみを込めた表現では(44)のようなものもある。

(42) một sinh viên
1 学生
1人の学生

(43) ?⁷ một người sinh viên
1 人 学生

(44) một anh sinh viên
1 兄 学生
1人の学生さん

親族名称を表す語の場合は(45)、(46)のように数詞が直接前置する場合と người を介する場合とあるが意味に大きな差のない場合と(47)と(48)のように意味に大きな差の生じる場合とがある。

(45) một anh
1 兄
1人の兄

(46) một người anh
1 人 兄
1人の兄

(47) một con
1 子 (親に対する)

1 人の子 (子の年齢が小さい場合)

- (48) một người con
1 人 子 (親に対する)
1 人の子 (子の年齢が大きい場合)

mấy の現れ方は数詞とよく似ている。bạn には(49)のように直接前置する形と(50)のように người を介する形とがあり、sinh viên <学生> のような語には(51)のように直接前置する。

- (49) mấy bạn
いくつかの 友人
数人の友人 / みなさん (呼びかけ)

- (50) mấy người bạn
いくつかの 人 友人
数人の友人

- (51) mấy sinh viên
いくつ 学生
何人かの学生

以下 <ヒト以外の生物> を表す名詞の場合と <無生物> を表す名詞について数詞と mấy の現れ方を同時に見るが、いずれも類別詞を介するということが共通しているのがわかる。

- (52) một con bò
1 [類別詞] 牛
1 頭の牛

- (53) mấy con bò
いくつかの [類別詞] 牛
数頭の牛

- (54) * mấy bò
いくつかの 牛

- (55) một quyển sách

1 [類別詞] 本
1 冊の本

(56) một quyển
1 [類別詞]
1 冊

(57) * một sách
1 本

(58) mấy quyển sách
いくつかの [類別詞] 本
数冊の本

(59) * mấy sách
いくつかの 本

一方、một số<若干の>は数詞や mấy と異なり<生物>であっても<無生物>であっても(60)、(62)、(64)、(66)のように類別詞を介さず名詞に直接前置するのが基本的な用法である。しかし中には(61)のような表現や(65)のように類別詞を介した形で現れるものがある⁸。

(60) một số bạn
若干の 友人
数人の友人

(61) một số người bạn
若干の 人 友人
数人の友人

(62) một số sinh viên
若干の 学生
数人の学生

(63) * một số con bò
若干の [類別詞] 牛
数頭の牛

- (64) một số bò
若干の牛
数頭の牛
- (65) một số quyển sách
若干の [類別詞] 本
数冊の本
- (66) một số sách
若干の本
数冊の本

4.2.2.2 hầu hết<ほとんど>、tất cả<すべての>、mọi<あらゆる>

hầu hếtは(67)~(69)で見るとように<ヒト>を表す名詞の中では người<人>や bạn<友人>には直接前置しないが sinh viên<学生>のような語句⁹ならば直接前置する。

- (67) * hầu hết người
ほとんど 人
- (68) * hầu hết bạn
ほとんど 友人
- (69) hầu hết sinh viên
ほとんど 学生
ほとんどの学生

tất cả<すべての>¹⁰は(70)のように người<人>には直接前置せず、bạn<友人>にも(71)のような直接前置した形は基本的には許容しがたく、(72)のように người を介した形は許されない。一方 sinh viên<学生>のような語では、(73)のように直接前置する。

- (70) * tất cả người
すべての 人
- (71) ? tất cả bạn
すべての 友人

(72) * tất cả người bạn
すべての 人 友人

(73) tất cả sinh viên
すべての 学生
すべての学生

mọi<あらゆる>については、これを(74)のように người<人>に直接前置させた mọi người の形は<皆>という意味となり¹¹、bạn<友人>には(75)、(76)のように直接前置することも、người を介した形も許されない。それに対し sinh viên<学生>などの語には(77)のように直接前置する¹²。

(74) mọi người
あらゆる 人
皆

(75) * mọi bạn
あらゆる 友人

(76) * mọi người bạn
あらゆる 人 友人

(77) mọi sinh viên
あらゆる 学生
すべての学生

これまで見てきたように、hầu hết、tất cả、mọi の中、hầu hết と tất cả は単独ではよく似た現れ方を示す¹³。これはこれら2つの語がそれぞれ「ある範囲にある集団」の<ほとんど>あるいは<すべて>を表し、người<人>や bạn<友人>という語はこの範囲を認識しにくい語であるために直接前置できず、sinh viên<学生>という語はこの範囲が認識されやすい語であるために直接前置することができるのではないかと考えられる¹⁴。一方 mọi は hầu hết や tất cả と異なり、直接前置する語も người<人>、khi<時>、nơi<場所>、điều<事>など一般的で限定を受けないものが多い。

4.2.2.3 ít<少ない、わずかな>、nhiều<多い、たくさんの>

ít<少ない、わずかな>、nhiều<多い、たくさんの>は名詞の意味範疇に関わらず名詞に直接前置する。

- (78) ít người
わずかな 人
わずかな人 (人がわずか)
- (79) nhiều người
たくさんの 人
たくさんの人
- (80) ít sinh viên
わずかな 学生
わずかな学生 (学生がわずか)
- (81) nhiều sinh viên
たくさんの 学生
たくさんの学生 (学生がたくさん)
- (82) ít sách
わずかな 本
わずかな本 (本がわずか)
- (83) nhiều sách
たくさんの 本
たくさんの本

ítは bạn に前置する場合、(85)のように người を介さず直接前置するのに対し nhiều は(86)、(87)のように người を介する場合と介さない場合とがある。

- (84) * ít người bạn
わずかな 人 友人
- (85) ít bạn
わずかな 友人
わずかな友人 (友人がわずか)

(86) **nhieu** **người** **bạn**
 たくさんの 人 友人
 たくさんの友人

(87) **nhieu** **bạn**
 たくさん 友人
 たくさんの友人

ít+名詞の表現には(88)のような名詞句としての用法の他に(89)のようなく～がわずかしかない>という意味の叙述表現としての用法もある。

(88) **Tôi** **có** **ít** **bạn** **Nhật.**
 私 ある わずかな友人 日本
 私には日本人の友人がわずかしかない。

(89) **Tôi** **ít** **bạn** **Nhật** **lắm.**
 私 わずかな友人 日本 ととも
 私には日本人の友人がとてもわずかしかない。

nhieu+名詞の表現にも上で見た **ít**+名詞の表現と同様、(90)のような名詞句としての用法のほかに(91)のようなく～がたくさんある>という叙述表現としての用法もある。

(90) **Tôi** **có** **nhieu** **bạn** **Việt Nam** **ở** **Mỹ**
 私 ある たくさんの 友人 ベトナム ～に アメリカ
lắm.
 ととも
 私はアメリカにベトナムの友人がとてもたくさんいる。

(91) **Anh ấy** **vui tính** **nên** **nhieu** **bạn** **lắm.**
 彼 陽気な ～なので たくさん 友人 ととも
 彼は陽気な性格なので友人がたくさんいる。

4. 2. 2. 4 名詞の意味的な単数／複数と量化表現

名詞が **bạn**<友人>のように意味的に単数を表している場合と、**bạn bè**<友人(一般)>、**友人たち**>のように意味的に複数を表している場合とでは、量化表現との共起に違いが見

られる。

数詞や *mấy* <いくつかの>との共起では(92)~(95)のように意味的に単数の *bạn* が数詞や *mấy* と共起できるのに対し(96)~(99)のように意味的に複数の *bạn bè* は数詞や *mấy* と共起できない。

(92)=既出(39)

một bạn
1 友人
1人の友人

(93)= 既出(40)

một người bạn
1 人 友人
1人の友人 ((92)より自然な言い方)

(94)= 既出(49)

mấy bạn
いくつかの 友人
数人の友人/みなさん (呼びかけ)

(95)= 既出(50)

mấy người bạn
いくつかの 人 友人
数人の友人

(96) * *một bạn bè*
1 友人

(97) * *một người bạn bè*
1 人 友人

(98) * *mấy bạn bè*
いくつかの 友人

(99) * *mấy người bạn bè*
いくつかの 人 友人

tất cả <すべての>との共起では、直接前置できるのが(101)のように *bạn bè*のみであるが、複数表現の *các* との共起は(102)のように *bạn* とも(103)のように *bạn bè* とも可能である。

(100)=既出(71) ? tất cả bạn
 すべての 友人

(101) tất cả bạn bè
 すべての 友人
 すべての友人

(102) tất cả các bạn
 すべての 友人
 すべての友人

(103) tất cả các bạn bè
 すべての 友人

mọi<あらゆる>との共起については(104)～(107)に見るように、bạn、bạn bèいずれとも、mọi を直接前置した形や người を介した形での共起はない。

(104)= 既出(75) * mọi bạn
 あらゆる 友人

(105) * mọi bạn bè
 あらゆる 友人

(106)=既出(76) * mọi người bạn
 あらゆる 人 友人

(107) * mọi người bạn bè
 あらゆる 人 友人

また、tất cả、mọi、hầu hết<ほとんど>の組み合わせとの共起については、つぎの(108)～(123)が示すように bạn はこれらの組み合わせとの共起には制限があり người を介せば共起するものがある。一方 bạn bè は(110)、(114)、(118)、(122)のように tất cả mọi、hầu hết tất cả、hầu hết mọi、hầu hết tất cả mọi のいずれとも共起する¹⁵。

(108) ? tất cả mọi bạn

(109) tất cả mọi người bạn

- (110) tất cả mọi bạn bè
 (111) * tất cả mọi người bạn bè
- (112) ? hầu hết tất cả bạn
 (113) * hầu hết tất cả người bạn
 (114) hầu hết tất cả bạn bè
 (115) * hầu hết tất cả người bạn bè
- (116) * hầu hết mọi bạn
 (117) hầu hết mọi người bạn
 (118) hầu hết mọi bạn bè
 (119) * hầu hết mọi người bạn bè
 (120) ? hầu hết tất cả mọi bạn
 (121) hầu hết tất cả mọi người bạn
 (122) hầu hết tất cả mọi bạn bè
 (123) * hầu hết tất cả mọi người bạn bè

4.2.2.5 名詞の意味範疇（集合体／構成員）と量化表現

名詞の中には gia đình<家族>、nhà<家>、công ty<会社>、lớp<クラス>、nước<国>のように、1つの集合体を意味する場合とそれを構成する成員（全員）を意味する場合とがあるものがある。このような名詞はこの2つの意味範疇（使用上の意味）の相違に応じて量化表現との共起に違いが生じる。例えば gia đình<家族>には、(124)～(126)のように1つの集合体としての「家族」を意味する場合と、(127)のようにその構成員（全員）を意味する場合とがある。nhà<家>という語を(128)のように1軒の「家」として用いる場合と、(129)のように「家」を構成する構成員（全員）として用いる場合も同様である。

gia đình が1つの集合体としての「家族」を意味する場合：

- (124) tất cả các gia đình
 すべての 家族
 すべての家族
- (125) mọi gia đình
 あらゆる 家族
 すべての家族
- (126) tất cả mọi gia đình

すべての あらゆる 家族
 すべての家族

gia đình が「家族」の構成員（全員）を意味する場合：

- (127) **tất cả** gia đình
 すべての 家族
 家族全員

nhà が 1 軒の「家」を意味する場合：

- (128) Sau trận động đất tất cả các nhà đều có
 後 [類別詞] 地震 すべての 家 どれも ある
 vào bảo hiểm.
 入る 保険
 地震の後すべての家が保険に入った。

nhà が「家」を構成する家族の成員（全員）を意味する場合：

- (129) **Tất cả** nhà đi vắng.
 すべての 家 行く いない
 家族全員外出している。

4.2.3 焦点標識

名詞句の中心となる名詞で表されるものに対して話し手がなんらかの評価を下しその名詞に焦点が当たる場合、焦点標識としての **cái** が現れることがある。この焦点標識は **cái** というただ 1 つの形で現れ、他に同じ機能を担う語はない。この **cái** はつぎの(130)~(132)のように焦点の当たっている名詞の前に現れ、類別詞、複数表現、量化表現と共起する場合は類別詞の前、複数表現や量化表現の後に現れる¹⁶。

- (130) **tất cả** những **cái** con người bạc ác ấy
 すべての [焦点標識] 人間 ずる賢い その
 そのずる賢い人たちすべて (N.T.Cần(1975)中の例)

- (131) **tất cả** ba **cái** con mèo đen ấy
 すべての 3 [焦点標識] 類別詞 猫 黒い その
 その黒い3匹の猫すべて (H.Dũng, N.T.Ly Kha(2004)中の例)

- (132) **Cái** thàng này mà làm gì thế ?

[焦点標識]坊主 この お前 する 何 そう
こいついったい何をするのだ。

4.2.4 類別詞

ベトナム語の類別詞は、すでに 4.2.2.1 節で見たように数詞+類別詞の組み合わせで現れるとき、名詞の数を数える助数詞として働く。下の(133)、(134)でも同様である。

(133) ba con bò
3 [類別詞] 牛
3頭の牛

(134) ba con này
3 [類別詞] この
この3頭

(135)~(137)のように数詞、複数表現、量化表現とともに現れるのではない場合も、数の点では名詞で表されるものが1つ（場合によっては1対、1組）あることを表していると考えられる。

(135) con bò này
[類別詞]牛 この
この牛

(136) Con này là con bò.
[類別詞] この [繫詞] [類別詞] 牛
これは牛だ。

(137) quyển sách này
[類別詞]本 この
この本

量化表現や複数表現との共起では、名詞の意味範疇によって現れ方が異なる。〈無生物〉を表す名詞の場合は(138)、(139)のように類別詞を介するのが基本的な用法である。

(138) tất cả các quyển sách
すべての [類別詞] 本

すべての本

- (139) tất cả những quyển sách này
 すべての [類別詞] 本 この
 これらすべての本

すでに 4.2.2.1 節で見たように一般に<無生物>または<ヒト以外の生物>を表す名詞の場合には類別詞が現れ、<ヒト>を表す名詞の中 bạn<友人>のような語の場合には người<人>や anh<兄>など親族名称由来の語が名詞の前に現れる場合とまたはそれらも現れず量化表現が名詞に直接前置する場合とがあるが、sinh viên<学生>、bác sĩ<医者>、nhà khoa học<科学者>のような語¹⁷には量化表現が直接前置する。

4.2.5 2つ以上の要素の共起

以下名詞に前置する要素が2つ以上共起する場合について検討する。

<ヒト>を表す名詞の中 bạn<友人>と量化表現との共起については、すでに 4.2.2.4 節で hầu hết<ほとんどの>、tất cả<すべての>、mọi<あらゆる>の組み合わせとの共起を検討した。

ここでは量化表現と複数表現が共起する場合について見ておく。

つぎの共起がいずれも可能である。

- (140) tất cả các bạn
(141) tất cả những bạn này
(142) hầu hết các bạn
(143) hầu hết các người bạn
(144) hầu hết những bạn này
(145) hầu hết những người bạn này
(146) hầu hết tất cả các bạn
(147) hầu hết tất cả các người bạn
(148) hầu hết tất cả những bạn này
(149) hầu hết tất cả những người bạn này

sinh viên<学生>などの語には、すでに 4.2.2.2 節の(69)、(73)、(77)で見たように、量化表現の中 hầu hết<ほとんどの>、tất cả<すべての>、mọi<あらゆる>は直接前置する。この中、hầu hết と tất cả は、同種の名詞に前置する場合(150)~(153)のように複数表現の các や những を伴う場合もある。

- (150) hầu hết các sinh viên
ほとんどの 学生
ほとんどの学生
- (151) hầu hết những sinh viên này
ほとんどの 学生 この
これらのほとんどの学生
- (152) tất cả các sinh viên
すべての 学生
すべての学生
- (153) tất cả những sinh viên này
すべての 学生 この
これらすべての学生

つぎのような共起も可能である。

- (154) hầu hết tất cả sinh viên
- (155) hầu hết tất cả các sinh viên
- (156) hầu hết tất cả những sinh viên này
- (157) hầu hết mọi sinh viên
- (158) hầu hết tất cả mọi sinh viên

<無生物>を表す名詞ではすでに 4.2.4 節の(138)、(139)で見たように複数表現+類別詞の組み合わせと共起する。また、つぎの(159)、(160)のような共起も可能である。

- (159) hầu hết tất cả các quyển sách
ほとんど すべて [類別詞] 本
ほとんどすべての本
- (160) hầu hết tất cả những quyển sách này
ほとんど すべての [類別詞] 本 この
これらほとんどすべての本

これまで既に見てきたように、名詞に前置する要素の中、複数の要素の共起を許すもの

は、一部の量化表現同士(hầu hết tất cả, hầu hết mọi, hầu hết tất cả mọi)、量化表現と複数表現(tất cả các, tất cả những)、複数表現と類別詞(các quyển, những quyển など)、量化表現と類別詞(một quyển, mấy quyển など)の組み合わせがそれぞれ起こる。以下に、要素 1 つの場合と複数の要素の共起する場合を名詞 bạn<友人>、sách<本>を例にまとめておく。

	các		bạn	
	[複数]			
	những	(người)	bạn	限定句
	[複数]	人		
	một	(người)	bạn	
	1	人		
	mấy	(người)	bạn	
	いくつかの	人		
	một số	(người)	bạn	
	若干の	人		
	ít	(người)	bạn	
	わずかな	人		
	nhều	(người)	bạn	
	たくさんの	人		
	tất cả	các	bạn	
	すべての	[複数]		
	tất cả	những	(người) bạn	限定句
	すべての	[複数]	人	
	tất cả	mọi	người bạn	
	すべての	あらゆる	人	
hầu hết	các	(người)	bạn	
ほとんど	[複数]	人		
hầu hết	tất cả	các	(người) bạn	
ほとんど	すべての	[複数]	人	
hầu hết	những	(người)	bạn	限定句
ほとんど	[複数]	人	友人	
hầu hết	tất cả	những	(người) bạn	限定句
ほとんど	すべての	[複数]		
hầu hết	mọi	người	bạn	
ほとんど	あらゆる	人		
hầu hết	tất cả	mọi	người bạn	

ほとんど すべての あらゆる 人

	các	quyển	sách		
	[複数]	[類別詞]			
	những	quyển	sách	限定句	
	[複数]	[類別詞]			
	một	quyển	sách		
	1	[類別詞]			
	mấy	quyển	sách		
	いくつかの	[類別詞]			
	một số		sách		
	若干の				
	(một số	quyển	sách	限定句)	
	若干の	[類別詞]			
	ít		sách		
	わずかな				
	nhều		sách		
	たくさんの				
tất cả	các	quyển	sách		
すべての	[複数]	[類別詞]			
tất cả	những	quyển	sách	限定句	
すべての	[複数]	[類別詞]			
hầu hết	tất cả	các	quyển	sách	
ほとんど	すべての	[複数]	[類別詞]		
hầu hết	tất cả	những	quyển	sách	限定句
ほとんど	すべての	[複数]	[類別詞]		

4.3 名詞に後置する要素

4.3.1 名詞的修飾表現

被修飾語となる名詞には<生物>を表す名詞の中<ヒト>を表す名詞として bạn<友人>、<ヒト以外の生物>を表す名詞として bò<牛>、<無生物>を表す名詞として sách<本>を例に、他の名詞がこれらを修飾した具体例を以下に示す。

bạn を bác sĩ<医者>が修飾して<医者である友人>の意味の名詞句となる場合、(161)のように bác sĩを直接後置させた形と(162)のように繋詞の làを介した形とがある。

(161) bạn bác sĩ
友人 医者
医者の友人、医者である友人

(162) bạn là bác sĩ
友人 [繫詞] 医者
医者の友人、医者である友人

nước ngoài<外国>、người nước ngoài<外国人>、Pháp<フランス>、 người Pháp<フランス人>などの語によって修飾される場合は直接後置する。

(163) bạn nước ngoài
友人 外国
外国の友人

(164) bạn người nước ngoài
友人 人 外国
外国人の友人

(165) bạn Pháp
友人 フランス
フランスの友人

(166) bạn người Pháp
友人 人 フランス
フランス人の友人

<ヒト以外の生物>または<無生物>を Việt Nam<ベトナム>などの語が修飾する場合も被修飾語に直接後置する。

(167) bò Việt Nam
牛 ベトナム
ベトナムの牛

(168) sách Việt Nam
ベトナムの本

つぎの(169)と(170)のように被修飾語と修飾語の間に修飾関係を説明する語 ((170)の về) の有無があり得る場合、これのない(169)の表現の方が被修飾語の名詞と修飾語の間の意味的な結合の度合いが強いと考えられる。

(169) sách ngôn ngữ học
本 言語学
言語学の本

(170) sách về ngôn ngữ học
本 ~について 言語学
言語学についての本

4.3.2 動詞的修飾表現

4.3.2.1 修飾節以外の動詞的修飾表現

この範疇に属する例としては、<生物>を表す名詞の中<ヒト>を表す名詞の bạn<友人>を修飾するものとして cao<(背が)高い>、giàu có<裕福な>、thân<親しい>、cũ<古い>を用いる。また、<無生物>を表す名詞の sách<本>を修飾するものとして dày<厚い>、cũ<古い>を例にとる。

(171) bạn cao
友人 高い
背の高い友人

(172) bạn giàu có
友人 裕福な
裕福な友人

(173) bạn thân
友人 親しい
親しい友人、親友

(174) bạn cũ
友人 古い
古い友人、旧友

(175) sá ch dày
 本 厚い
 厚い本

(176) sá ch cũ
 本 古い
 古い本、古本

上の(171)～(176)の例では形式上修飾表現の部分が名詞に後置しそれぞれの意味を付加しているという点で同等な資格で現れている。

この中(176)では、名詞に後置される修飾表現 *cũ*が<古い>という意味を単に名詞に付加して<古くなった本>という意味の名詞句を構成している場合と *sá ch cũ*が一つのよりまとまった意味をもった名詞句としてつぎの(177)と(178)の例のように日本語の<古本>の意味にもなっている場合とがある。

(177) hiệu sá ch cũ
 店 本 古い
 古本屋

(178) Hiệu sá ch này bán cả sá ch mới lần sá ch
 店 本 この 売る ～も 本 新しい ～も 本
 cũ.
 古い
 この本屋は新刊書も古本も売っている。

4.3.2.2 修飾節

修飾節が名詞に後置する場合に問題となるのは、関係詞 *mà*の介在である。つぎの(179)～(192)の例では関係詞のある／なしどちらも可能で、句の意味に差はない。ただし *mà*が現れる句は、現れない句に比べると修飾節が担う名詞への意味の付加がより随意的であり、名詞についての説明を求められそれに対して明示的な答えとして言われたときには現れる傾向がある。

(179) bạn hôm qua tôi gặp
 友人 昨日 私 会う
 昨日私が出会った友人

- (180) bạn mà hôm qua tôi gặp
友人 [関係詞] 昨日 私 会う
昨日私が会った友人
- (181) người bạn lâu lắm tôi không gặp
人 友人 久しい とても 私 [否定] 会う
長い間会っていない友人
- (182) người bạn mà lâu lắm tôi không gặp
人 友人 [関係詞] 久しい とても 私 [否定] 会う
長い間会っていない友人
- (183) bạn cùng sống với tôi
友人 一緒に 住む ～と 私
私と一緒に住んでいる友人
- (184) bạn mà cùng sống với tôi
友人 [関係詞] 一緒に 住む ～と 私
私と一緒に住んでいる友人
- (185) quyển sách hôm qua tôi mua
[類別詞] 本 昨日 私 買う
昨日買った本
- (186) quyển sách mà hôm qua tôi mua
[類別詞] 本 [関係詞] 昨日 私 買う
昨日買った本
- (187) quyển sách bố tôi cho tôi
[類別詞] 本 私の父 与える 私
父が私にくれた本
- (188) quyển sách mà bố tôi cho tôi
[類別詞] 本 [関係詞] 私の父 与える 私
父が私にくれた本

(189) quyển sách để ở trên bàn
 [類別詞] 本 置く ～に 上 机
 机の上に置いてある本

(190) quyển sách mà (tôi) để ở trên bàn
 [類別詞]本 [関係詞]私 置く ～に 上 机
 (私が)机の上に置いた本

(191) quyển sách tôi chưa đọc
 [類別詞]本 私 [未然]読む
 まだ読んでいない本

(192) quyển sách mà tôi chưa đọc
 [類別詞]本 [関係詞]私 [未然]読む
 まだ読んでいない本

4.3.3 名詞的修飾表現と動詞的修飾表現の共起

名詞的修飾表現と動詞的修飾表現が共起するとき、その語順は名詞的修飾表現+動詞的修飾表現が基本的なものである。以下では *bạn*<友人>¹⁸と *sách*<本>への修飾を例に検討する。

つぎの(193)、(194)のように名詞的修飾表現+動詞的修飾表現の語順で名詞を修飾する場合は、名詞にそれぞれの要素が繋詞などを介することなく連続する。ただし(193)の表現はこのままでは何を表しているかが明確ではない。(194)のように文の中に入ればその意味は明らかとなる。

(193) bạn bác sĩ cao cao
 友人 医者 高い
 背の高い医者である友人

(194) Cái anh bạn bác sĩ cao cao kia nổi tiếng lắm
 [焦点標識]兄 あの 有名な とても
 đấy.
 [文末詞]
 あの背の高いお医者さんはとても有名なのですよ。

名詞的修飾表現の *bác sĩ* <医者> が動詞的修飾表現の *cao cao* <(背が)高い> に後置される場合は、(195)や(196)のように繫詞 *là* を介する必要がある。

(195) *bạn cao cao là bác sĩ*
 友人 高い [繫詞] 医者
 医者である背の高い友人

(196) *Cái anh bạn cao cao là bác sĩ kia nổi tiếng lắm*
 [焦点標識]兄 あの 有名な とても
đấy.
 [文末詞]
 あの背の高いお医者さんはとても有名なのですよ。

名詞的修飾表現と動詞的修飾表現の可能な組み合わせという点からは、それぞれ1つの語からなる単純な組み合わせについても、どのような組み合わせであっても共起できるわけではなく、以下の(197)~(200)の例のようにその共起を許さないものも多い。

(197) * *bạn bác sĩ giàu có*
 友人 医者 裕福な

(198) * *bạn bác sĩ thân*
 友人 医者 親しい

(199) * *bạn bác sĩ cũ*
 友人 医者 古い

(200) * *bạn bác sĩ xấu*
 友人 医者 悪い

これらは、名詞的修飾表現と動詞的修飾表現がそれぞれ一つの語からなっていて連続する場合、4.3.2.2 節で見た関係詞の *mà* を介することはできないという構造上の制約とともに修飾語同士の意味的な結合の概念あるいは被修飾語となる名詞と修飾語との間の意味的な関係の概念をネイティブスピーカーが認めるかどうかということが働いていると考えられる。つまり(197)~(199)が言えないのは * *bác sĩ giàu có* <裕福な医者、裕福で医者である>、* *bác sĩ thân* <親しい医者、親しくて医者である>、* *bác sĩ cũ* <古い医者、古くて医者である> という概念がないからであり、(200)が言えないのは * *bạn xấu* <悪い友人> という概念

がないからであると考えられるのである¹⁹。

4.3.4 所有者表現

所有者表現には、所有の標識語となる *của*〈～の〉を介する場合と介さない場合とが起こる。その中にはつぎの(201)～(203)のように *của* を介さない形が普通の表現もある。

(201) *nhà* *tôi*
 家 私
 私の家、私の夫／妻

(202) *bố* *tôi*
 父 私
 私の父

(203) *quê* *tôi*
 故郷 私
 私の故郷

つぎの(204)～(207)の例では所有の標識語の *của* を介しても介さなくても後の語が所有者を示すという点で大きな差はない。

(204) *bạn* *tôi*
 友人 私
 私の友人

(205) *bạn* *của* *tôi*
 友人 ～の 私
 私の友人

(206) *bạn* *ai*
 友人 だれ
 だれの友人

(207) *bạn* *của* *ai*
 友人 ～の だれ
 だれの友人

tôi<私>が所有者となつて<私の本>を表す(208)と(209)では(209)のように của を介した方が自然な表現である。

(208) sách tôi
本 私
私の本

(209) sách của tôi
本 ~の 私
私の本 ((208)よりも自然な表現)

所有者が単純な1語からなる tôi<私>ではなくそれ自体修飾関係をもつた bố tôi<父+私(私の父)>である場合は(210)のように của のない形は許されず、(211)のように của を介さなくてはならない。

(210) * sách bố tôi
本 父 私

(211) sách của bố tôi
本 ~の 父 私
私の父の本

4.3.5 指示表現

ベトナム語において này<この>、ấy<その>、đó<その>、kia<あの>などの指示表現は名詞句の最後尾に位置するのが基本的な語順である。

(212) bạn này
友人 この
この友人

(213) bạn giàu có này
友人 裕福な この
この裕福な友人

(214) bạn cao của tôi này
友人 高い ~の 私 この

この背の高い私の友人

- (215) bạn của tôi người cao cao kia
友人 ~の 私 背の高い あの
あの背の高い私の友人

ただし、所有者表現と共起し、名詞に後置する他の修飾表現が共起しない場合に(216)、(217)のように指示表現+所有者表現の語順をとる²⁰。

- (216) bạn này của tôi
友人 この ~の 私
私のこの友人

- (217) quyển sách này của tôi
[類別詞] 本 この ~の 私
私のこの本

nào<どの>は不定の<どれか>の意味で動詞的修飾表現と共起するとき(218)のように nào+動詞的修飾表現の語順をとる。これは gì<何>が(219)のように不定の<何か>の意味で動詞的修飾表現に先行するのと同様の語順である。

- (218) Có sách nào hay không ?
ある 本 どれか おもしろい [否定]
何かおもしろい本がありますか。

- (219) Có chuyện gì mới không ?
ある 話 何か 新しい [否定]
何か新しいことがありましたか。

4.3.6 複数の要素の共起

以下、名詞に後置される複数の要素の共起の仕方についていくつかの例で検討する。

(220)は名詞+名詞的修飾表現+動詞的修飾表現+所有者表現というもっとも基本的な修飾構造をもった句である。

さらに要素の数の増した(221)と(222)では、同じ<父がくれた私のこの言語学の本>という意味の名詞句が異なった2つの語順をとっている。(221)では指示表現が句の末尾であるのに対し、(222)では所有者表現の前に位置している。これらのことは、一般的に指示表現

は句末、ただし所有者表現と共起するとき所有者表現の前に現れることがあるという原則に合致するものである。また、どちらの場合も動詞的修飾表現が修飾節であり、所有者表現とともに現れるとき所有者表現＋修飾節の語順をとっているが、これも基本的な語順である。

(223)は所有者表現が名詞的修飾表現や動詞的修飾表現よりも前に位置する例である²¹。

- (220) quyển sách ngôn ngữ học dày cộm của tôi
 [類別詞] 本 言語学 分厚い ～の 私
 私の分厚い言語学の本
- (221) quyển sách ngôn ngữ học của tôi mà bố tôi cho
 [類別詞]本 言語学 ～の 私 [関係詞]私の父 与える
 tôi này
 わたし この
 父がくれた私のこの言語学の本
- (222) quyển sách ngôn ngữ học này của tôi mà bố tôi
 [類別詞]本 言語学 この ～の 私 [関係] 私の父
 cho tôi
 与える 私
 父がくれた私のこの言語学の本
- (223) cái ông bạn của tôi người cao cao
 [焦点標識] 祖父 友人 ～の 私 背の高い
 giàu có mà anh gặp hôm qua
 裕福な [関係詞] あなた 会う 昨日
 あなたが昨日会った背の高い裕福な私の友人

5 まとめ

ベトナム語の名詞句は基本的につぎのような構造をもつ。

量化表現／複数表現＋（焦点標識）＋（類別詞）＋名詞＋名詞的修飾表現＋動詞的修飾表現＋所有者表現＋指示表現

名詞に前置される要素のうち量化表現は一部を除いて複数表現とは共起しない。量化表現内では2つ以上の要素が連続して現れることもある。複数表現のうち *những* は名詞に後置される限定句とともに現れるのが一般的である。類別詞は量化表現や複数表現を伴わずに表れることもある。類別詞が量化表現や複数表現と共起する場合は、類別詞は名詞を数

えるための単位となっている。

名詞に後置される要素のうち基本的に最も末尾（名詞句末）に位置するのが指示表現である。ただし、所有者表現との共起の際、指示表現が所有者表現の前に現れることがある。名詞的修飾表現と動詞的修飾表現とが共起する際、この順序に現れるのが一般的である。動詞的修飾表現のうち修飾節は所有者表現の後ろに現れるのが基本的な語順である。所有者表現には所有者の標識語 *của* が介在する場合と介在しない場合とが起こる。

なお、焦点標識(*cái*)が起こるのは名詞に何らかの評価が加わり焦点が当たっている場合である。

名詞に前置される要素の語順が固定的であるのに対し、名詞に後置される要素の語順については上で述べたように共起する要素によって基本的な語順と異なったり、いくつかの語順を許したりするものがあり、さらに検討を要する。

6 おわりに

本稿では、インフォーマントの聴き取り調査から得られた結果から、ベトナム語の名詞句の基本的な構造を記述した。名詞に前置する複数の要素の共起を決定する条件、名詞に後置する要素の語順を決定する条件、所有者表現の所有者の標識語の有無とそれによる意味的な相違、修飾節の関係詞 *mà* の有無とそれによる意味的な相違など、より細かい問題については、稿を改めて論じてみたい。

注

¹ 「焦点標識」とは N.T.Cần(1975)で名詞句中の構成要素として指摘された (pp.235-250) ものことで、N.T.Hung(2004)では *focus marker* と呼ばれているものことである (pp.43-50 および pp.112-114)。具体的には、話し手が名詞句中の中心となる名詞に焦点を当てている場合に、強勢を伴って発音される *cái* という語のことであるが、これは形式上は<無生物>を表す名詞に前置する類別詞と同じ形をしている。しかし機能の面からは別のものであり、<無生物>の類別詞の *cái* とは共起しないが、<生物>の類別詞 *con* などとは共起する。ただし、これは焦点標識としての機能のみを担う要素で、名詞句中の他の要素と同列に扱うことには疑問も残る。この *cái* が用いられるのは、多くの場合、話し手が焦点を当てている名詞で表されるものに「軽視」の心理が働いているという複数のネイティブスピーカーの指摘もある。本稿ではこの要素の名詞句中の存在を認めるにとどめ、その機能の分析や他の要素との共起の問題を詳しく扱うことはしない。

² 動詞的修飾表現には修飾節が含まれる。

³ 複数表現にはこれらのほかに、名詞に前置しく<ヒト>や動物の集合体を表す *bọn*、*chúng*、*lũ* などの語 (*bọn mình*<*bọn*+自分(私たち)>、*chúng tôi*<*chúng*+私(私たち)>、*lũ trẻ*<*lũ*+若い(若者たち)>、*lũ chuột*<*lũ*+ネズミ(ネズミたち)>もある。また、ベトナム語においては語の重複形が複数の意味をもつことは極めて少なく、*người người*<人+人(だれも(が))>、*ngày ngày*<日+日(来る日も)>などの重複形は、その意味・用法からは複数を表すとは言いがたい。

⁴ *bạn* という語自体が単独で二人称の呼称<あなた>の意味をもつ。

⁵ 量化表現には4.2.2節の中で取り上げたもののほかに、名詞に直接前置する mỗi<毎、～ごと> (mỗi người<mỗi+人(一人ひとり)>、mỗi năm<mỗi+年(毎年)>) や từng<～ごと> (từng người một<từng+人+1(一人ずつ)>) などもあるが、本稿では扱わない。

⁶ máy とよく似た現れ方をする量化表現に một vài<二三の>がある。

⁷ 例の前に付された記号 ? は、その例をインフォーマント自身は言わないが「言う人もいる」とインフォーマントが判断したことを示す。

⁸ (65)の表現はこのままでは完全に許容できるとは言い切れず、về kinh tế<経済についての>などによって限定を受けた một số quyển sách về kinh tế<経済についての何冊かの本>というような表現ならば問題なく言える。

⁹ これらの名詞は N.V.Huệ(2003)では「単位名詞」(英訳 countable noun)と呼ばれるもので、類別詞や一部の名詞などの助数詞としての用法をもつ語を介さずに数詞が直接前置して数えられるものである。<ヒト>を表す名詞の中では主に職業名を表す名詞がこれに当たる。

¹⁰ tất cả はつぎのように単独で主語にも補語にもなる(いずれも N.V.Huệ.2003 中の例)。Tất cả đi. <すべて+行く(すべて(の人)が行く)> Tôi mua tất cả. <私+買う+すべて(私はすべてを買う)>。

¹¹ mọi<あらゆる>と người<人>の直接結合した mọi người は全称的なく皆>という意味になり、つぎのように単独で主語にも補語にもなることができる。Mọi người đều biết. <皆+だれも+知っている(皆が知っている)>、Tôi đã báo cho mọi người biết. <私+[已然]+知らせる+～に+皆+知る(私はすでに皆に知らせた)>。

¹² mọi は khi<(～する)時>、lúc<(～する)時>、ngày<日>、nơi<場所>、điều<事>などの語にも直接前置する。

¹³ ただし Tất cả bạn bè. <すべて+友人(すべての友人たち)>は言えて *Hầu hết bạn bè. <ほとんど+友人(ほとんどの友人たち)>は言えないなど異なる点もある。

¹⁴ người<人>が何の限定も受けない(70)は言えないのに対し người Nhật<日本人>の場合は tất cả người Nhật<すべての日本人>と言えること、bạn<友人>が何の限定も受けない(71)が許容されにくいのに対し、bạn の範囲を限定した bạn tôi<私の友人>の場合は tất cả bạn tôi<すべての私の友人>と言えることなどもこれを裏付ける。

¹⁵ * người bạn bè の形を含むものはいずれも言えないが、これはそもそも「集合名詞」である bạn bè と「単位名詞」としての người が意味的に矛盾する* người bạn bè という連続を許さないためだと考えられる。

¹⁶ cái が用いられるときは、(130)や(132)のように焦点が当たっている名詞で表されるものに話し手がネガティブな評価を下していることが多い。

¹⁷ 注9でも触れたように、これらの語は N.V.Huệ(2003)の中で「単位名詞」と呼ばれるものである。

¹⁸ bạn<友人>という語には文字通り話し手の<友人>を意味する用法の他、言及している<ヒト>である対象に親しみを込めて用いる用法がある。(194)および(196)ではこの用法である。

¹⁹ これらに対し、名詞的修飾表現が bác sĩ<医者>で動詞的修飾表現が身体の特徴を表す béo<太っている>、gầy<やせている>などの場合は、被修飾語+名詞的修飾表現+動詞的修飾表現の間の結合に意味的な問題は生じず bạn bác sĩ béo kia<あの太った医者 of 友人>、bạn bác sĩ gầy kia<あのやせた医者 of 友人>のように言える。

²⁰ この語順では意味的に名詞句と文が区別されない。(216)は<この友人は私の友人だ>という文にもなり、(217)は<この本は私のだ>という文にもなる。ただし、文の場合は発音上 của の前に短いポーズが観察される。

²¹ (223)の中の修飾表現 người cao cao<背の高い>は người<からだ>+cao cao<高い>という構造をもつもので、他の動詞的修飾表現とは異なる形式である。

参考文献

- Cao Xuân Hạo (1982) Hai loại danh từ của tiếng Việt. *Tiếng Việt mấy vấn đề ngữ âm, ngữ pháp, ngữ nghĩa* 265-304. Ho Chi Minh City : Nhà Xuất Bản Giáo Dục 1998.
- _____ (1994) Về cấu trúc của danh ngữ trong tiếng Việt. Văn Lăng (ed.) *Những vấn đề ngữ pháp tiếng Việt hiện đại*. Hanoi : Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội. 154-175. *Tiếng Việt mấy vấn đề ngữ âm, ngữ pháp, ngữ nghĩa* (1998) 329-346.
- Hoàng Dũng, Nguyễn Thị Ly Kha (2004) Về các thành tố phụ sau trung tâm trong danh ngữ tiếng Việt. *Ngôn Ngữ* 4-2004 (176) 24-34.
- Nguyễn Tài Cẩn (1975) *Từ Loại Danh Từ Trong Tiếng Việt Hiện Đại*. Hanoi : Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội.
- (1977) *Ngữ Pháp Tiếng Việt Tiếng – Từ Ghép – Đoàn Ngữ*. Nanoi : Nhà Xuất Bản Đại Học Và Trung Học Chuyên Nghiệp.
- Nguyen Tuong Hung (2004) *The Structure of the Vietnamese Noun Phrase* : doctoral dissertation, Boston University
- Nguyễn Văn Huệ (ed.)(2003) *Từ Điển Ngữ Pháp Tiếng Việt Cơ Bản* (Dictionary of Basic Vietnamese Grammar). Nhà Xuất Bản Đại Học Quốc Gia TP Hồ Chí Minh (In Vietnamse and English)
- 澤田英夫 (2003) 「名詞句構造調査の手引き」 (暫定版)
- Thompson, Laurence C (1987) *A Vietnamese Reference Grammar*. Hawaii : University of Hawaii Press (originally published as *A Vietnamese Grammar* (1965). Washington : University of Washington Press
- Trần Đại Nghĩa (2005) Về hai cách phân tích cú pháp đối với các tổ hợp kiểu tất cả những cái con người bạc ác ấy. *Ngôn Ngữ* 1-2005 (188) 72-77.

付記

本稿の執筆の過程で、三上直光教授にはベトナム語の名詞句の分析について貴重なご意見をいただいた。記して心より感謝申し上げたい。

クメール語の名詞句構造

上田 広美 岡田 知子

目次

はじめに

- 1 クメール語概要
- 2 インフォーマント、資料
- 3 先行研究
 3. 1 Jacob
 3. 2 Khin
- 4 修飾要素
 4. 1 複数表現
 4. 2 量化表現
 4. 3 所有者表現
 4. 4 指示表現
 4. 5 名詞的修飾表現
 4. 6 動詞的修飾表現
- 5 名詞句構成要素間の共起関係と語順
 5. 1 修飾要素が二つの場合
 5. 2 修飾要素が三つの場合
 5. 3 語順による意味の違い
- 6 文法的要素の生起による意味の違い
- 7 まとめ

おわりに

注

参考文献

はじめに

クメール語¹の名詞句は、[被修飾要素+修飾要素] という語順で構成される。修飾要素の前に修飾節が始まることを表す /dael/²や、所有を表す /rə̀ɔ̀bɔh/ などの語が付加されることもあるが、いずれも必須の要素ではない。以下に名詞句の例を示す。

- (1) siə̀vphə̀v (rə̀ɔ̀bɔh) kɔm
本 の物 私
 <私の本>

- (2) siəvphəv (dael) kɲom tɛŋ
 本 私 買う
 <私買った本>

本稿では、まず先行研究を概観した後、被修飾語である名詞がモノを表わす場合とヒトを表わす場合に分け、更に「名詞句構造調査の手引き 修飾要素のグループ分け」(澤田2005)に従い、名詞句の構造について詳細に検討する。次章以下、クメール語の名詞句中の修飾要素の語順とその用法について、基本的に下記のことを明らかにする。

- ① 指示表現は、常に名詞句末に位置する。
- ② 複数の修飾要素が共起する場合、指示表現以外の修飾要素の語順の入れ替えは可能である。常にすべての修飾要素が現れるわけではない。原則として、名詞的要素、所有表現、動詞的要素、量化表現、指示表現という語順が好まれる。
- ③ 上述の原則から語順を入れ替える場合には、下記に示すような、修飾要素の役割を明確にするような語を前置する。
 - ・ 修飾要素が所有者を表す名詞である場合には、/rəɔbɔh/を前置する。
 - ・ 修飾節頭には/dael/を付加する。
 - ・ 名詞的修飾要素には、/pnaek/<分野>等の語を前置する。
 - ・ 動詞的修飾要素には、/dɔɔ/ [形容詞の強調]、/jaaŋ/<~のように>等の語を前置する。
- ④ モノを表す名詞よりヒトを表す名詞の方が、その名詞の修飾要素の語順の入れ替えに制限が少ない。
- ⑤ 修飾要素の語順を入れ替える場合には、その文脈で最も強調される要素が名詞句末に位置する。しかし指示詞が共起する場合には、指示詞が名詞句末に位置する。
- ⑥ ③に示した/rəɔbɔh/や/dael/等の文法的要素の生起は随意ではなく、修飾関係に影響を与え、名詞句の意味に差異を生じさせる。

なお、本稿は、1章を岡田が、その他の部分を上田が担当した。

1 クメール語概要

クメール語は、系統としてはオーストロアジア語族のモン・クメール語族に属す。現在の正確な使用人口は不明であるが、カンボジア王国の公用語であり、同国の推定人口1,300万人の9割以上の他、タイ、ベトナム、ラオス国内に合わせて約200万人、また米、仏、豪、加、日本等への定住者が約23万人と推定されている。

以下に音素一覧を示す。

母音音素

	緊喉母音			弛喉母音		
短母音	i	ɯ	u			
	e	ə	o	è	à	ò
	ɛ	a	ɔ	è		ò
長母音	ii	ɯɯ	uu			
	ee	əə	oo	èe	àə	òo
		aa	ɔɔ	èe		òo
二重母音	iə	ɯə	uo	èə		
		ae	ɔə	èə		
		aə				
		ao				

子音音素

	唇歯音	両唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
無声閉鎖音		p	t	c	k	ʔ
有声閉鎖音		b	d			
鼻音		m	n	ɲ	ŋ	
弱摩擦音	v		j			
ふるえ音				r		
両側音			l			
摩擦音			s			h

クメール語には活用や曲用等の語形変化が存在せず、類型論的には孤立語に分類される。基本語順は、[主語＋述語＋補語] (例 3)、[被修飾語＋修飾語] (例 4)、[付属語＋自立語] (例 5) である。以下に例を示す。

(3) kɲom ɲam baaj

私 食べる ご飯

<私はご飯を食べる>

(4) baaj cɲaɲ

ご飯 おいしい

<おいしい食事>

(5) muɲ ɲam

[否定] 食べる

<食べない>

2 インフォーマント、資料

本稿の用例は、先行研究中から引用したもの以外は、直接インフォーマントから得たものである。インフォーマントとして、ウンサー・マロム氏にご協力いただいた。本研究のために多くの貴重な時間を割いていただき、忍耐強く質問に答えていただいたことに、この場を借りて心からの感謝を捧げたい。

ウンサー・マロム氏は、1964年2月15日、カンボジアのタケオ州生まれの男性で、両親もタケオ州出身である。ウンサー・マロム氏は、首都プノンペンで育ち、家族構成は、姉2人、弟1人である。初等教育からプノンペンで教育を受け、その後キューバ国立ピナルデナリオ大学大学院で、農芸学を専攻した。キューバから帰国した後、カンボジア農業省技官を勤めている。1996年に、千葉大学大学院自然科学研究科への留学のため来日した。既習言語は、英語、スペイン語である。キューバでの7年間、日本での9年間を除き、プノンペンに在住していた。

3 先行研究

本章では、先行研究におけるクメール語の名詞句構造に関する記述を紹介する。名詞句を主たる分析対象として論じた研究としてはSak-Humphry (1996)があるが、Lexicase 理論を用いて名詞句中の要素を分類し、その依存関係を分析、記述したもので、本稿で扱う修飾要素の語順についての言及はない。他には、下記に挙げる文法書、入門書中に若干の記述があるのみである。

先行研究中の例には、それぞれの著者による独自の表記方法が採用されていたが、煩雑さを避けるため、以下、すべて坂本 (1988) の音韻表記に統一した。また、逐語訳、全文訳ともに、日本語訳は本稿のために新たに付加したものである。先行研究中の訳に誤りがあると思われるそれを訂正した場合には注を付けた。

3.1 Jacob

クメール語の入門書である、Jacob (1968: 64) は、名詞句の構造について、修飾要素として動詞、名詞、数詞、数詞+単位が後置され得ること (例 6-9)、それらの修飾要素の語順は定められていないこと (例 10-14) を述べ、下記の例³を挙げている。

(6) ptèəh thom
 家 大きい
 <大きな家> [名詞+動詞⁴] の例

(7) ptèəh taa
 家 祖父
 <祖父の家> [名詞+名詞] の例

- (8) ptəəh bəj
 家 3
 <3軒の家> [名詞+数詞] の例
- (9) mɔ̌ɔnuh buon nɛək
 人間 4 人
 <4人の人間> [名詞+数詞+単位] の例
- (10) mɔ̌ɔnuh thom bəj nɛək
 人間 大きい 3 人
 <3人の大人>⁵ [名詞+動詞+数詞+単位] の例
- (11) cav kɾom pram nɛək
 孫 私 5 人
 <5人の孫> [名詞+名詞+数詞+単位] の例
- (12) ptəəh thom tməj
 家 大きい 新しい
 <新しい大きな家> [名詞+動詞+動詞] の例
- (13) bɔ̌ntɔ̌p tooc muɔj
 部屋 小さい 1
 <ある小さな部屋>⁶ [名詞+動詞+数詞] の例
- (14) bɔ̌ɔŋ pii nɛək kɾom
 兄 2 人 私
 <2人の兄>⁷ [名詞+数詞+単位+名詞] の例

Jacob (1968: 64) は、修飾要素の語順は自由であり、数詞であれ名詞であれ、属性を表す動詞の前にも後にも位置し得るとしているが、同書中には、修飾要素の語順を入れ替えた例は示されていない。本研究で調査した結果、語順は自由ではなく、入れ替え可能なものであっても名詞句の表す意味が変わることがわかった。以下に例を示す。

(例 10) は、[名詞+動詞+数詞+単位] の例であり、Jacob (1968) の述べたように修飾要素の語順が自由なのであれば、[名詞+数詞+単位+動詞] と入れ替えた(例 15)が同じ<3人の大人>という意味の名詞句と解釈されるはずであるが、実際には、/thom/ <大きい>が述語である<3人は大柄だ>という文であると解釈される⁸。

(例 10) の再掲

mɔ̌ɔnuh thom bəj nɛək
 人間 大きい 3 人
 <3人の大人>

(15) mɔ̀ɔ̀nuh bəj nəək thom
 人間 3 人 大きい
 <3人は、大柄だ>

(例11)は、[名詞+名詞+数詞+単位]の例であり、Jacob (1968)の述べたように修飾要素の語順が自由なのであれば、[名詞+数詞+単位+名詞]と入れ替えた(例16)が可能なのはであるが、実際には不自然な句であると受け取られる⁹。また、Jacobの挙げた(例14)も(例16)と同様の例であり、Jacobは可能としているが、本研究の調査では不可能な例である。

(例11)の再掲

cav kɔ̀nom pram nəək
 孫 私 5 人
 <5人の孫>

(16)* cav pram nəək kɔ̀nom
 孫 5 人 私¹⁰

以上のことから、修飾要素の語順は完全に入れ替え可能なのではなく、何らかの制限があると考えられる。

また、(例12)¹¹のような名詞句は、次の(例17)のような文中に現れる場合、二つの解釈が可能である。一つは、文末の修飾要素 /tməj/ <新しい> が名詞を修飾している、「新築の大きな家」という意味、もう一つは、述語部分の動詞 /təp/ <買う> を修飾している、「(中古かもしれないが) 大きな家を新しく買った」という意味である。どちらの意味であるかは文脈によって決定される¹²が、このような文中での意味の多様性について、Jacob (1968) 中では説明されていない。

(例12)の再掲

ptəəh thom tməj
 家 大きい 新しい
 <新しい大きな家>

(17) təp ptəəh thom tməj
 買う 家 大きい 新しい
 <新築の大きな家を買った / 大きな(中古の)家を新たに買った>

一方、指示を表わす修飾要素については、Jacob (1968: 64) では、/nih/ <これ>、/nuh/ <それ、あれ>、/?ae tiət/ <その他の>¹³の三語を挙げ、いずれも名詞句末に現れるとして、下記の例を挙げている。

- (18) mðɔnuh thom nuh
 人 大きい あれ
 <あの太柄な人> [名詞+動詞+指示詞] の例
- (19) mðɔnuh thom bəj nɛək nih
 人 大きな 3 人 これ
 <この3人の太柄な人> [名詞+動詞+数詞+単位+指示詞] の例
- (20) bɔntɔp nih
 部屋 これ
 <この部屋> [名詞+指示詞] の例
- (21) bɔntɔp kɔm muoj nih
 部屋 私 1 これ
 <私のこの部屋> [名詞+名詞+数詞+指示詞] の例
- (22) ptɛəh tooc ʔae tiət
 家 小さい 他の
 <他の小さい家>¹⁴ [名詞+動詞+指示詞] の例
- (23) ptɛəh tməj kɔm nuh
 家 小さい 私 それ
 <私の小さいその家> [名詞+動詞+名詞+指示詞] の例

Jacob (1968 : 64-65) は、上述の名詞とその修飾要素について、文中では、全体として名詞として機能すると述べている。

3. 2 Khin

フランス語話者向けのクメール語文法書である Khin (1999 : 518) は、名詞句中の修飾要素の順番について、(例 24-26) を挙げつつ、下記のように述べている。

- ① 被修飾語は修飾語に先行する。
- ② 修飾語は、一般に [材質/種類+性+所有者+大きさ+色/状態+数+類別/単位+指示] の語順となる。

- (24) kòo jii kɔm thom kmav muoj kbaal nuh
 牛 雌 私 大きい 黒い 1 頭 それ
 <その1頭の黒い大きな私の雌牛>¹⁵
- (25) ptɛəh tmɔɔ kðət tooc (pəə) luəŋ muoj knɔɔŋ nuh
 家 石 彼 小さい 色 黄色い 1 軒 それ
 <その1軒の黄色い小さな彼の鉄筋の家>

(26) sraa tòmpèəŋbaajcuu viə muoj kaev nih
 酒 葡萄 彼 1 杯 これ
 <この一杯の彼のワイン>

(例 24) について、Khin (1999) は、[大きさ]を表す修飾要素は、[色/状態]を表す修飾要素に先行するとしているが、本研究のインフォーマントは、牛を識別する要素として、1) 性、2) 色、3) 大きさが一般的であるとして、[色/状態]を表す修飾要素が[大きさ]を表す修飾要素に先行しないと、不自然な文であるとした。

(例 24) から修飾要素の語順を入れ替えた例

kòo jii kŋom kmav thom muoj kbaal nuh
 牛 雌 私 黒い 大きい 1 頭 それ
 <その1頭の大きな黒い私の雌牛>¹⁶

また、本研究の調査では、(例 25) の「家」に関しても、材質（鉄筋か木造か）によって分類するか、形態（集合住宅か一戸建てか）によって分類するかで修飾要素の語順が異なる。即ち、被修飾要素である名詞の意味するものに対して、その文脈で最も一般的な分類方法にあたる修飾要素が名詞の直後に位置するのだと考えられる。同じく(例 26)の「酒」に関しては、一般に種類（米酒かワインか）で分類されることが多いため、それを示す修飾要素が名詞の直後に位置する。また、「服」に関しては、[材質（綿か絹か）+形態（長袖か半袖か）+色]の順に修飾要素が配列される¹⁷。以上のことから、[材質/種類]、[大きさ]、[色/状態]を表す修飾要素の語順については、被修飾要素である名詞との意味的なつながりが深いため、固定された語順の規則に従うのではなく、その名詞の表すものに関して文脈上一般的だと考えられる分類方法を表す修飾要素が先行するのだと考えられる。

その他の修飾要素の語順に関して、Khin (1999: 518) は、次の(例 27-28)も挙げ、

- ① [大きさ]、[色/状態]を表す修飾要素は入れ替え可能である。
 - ② [所有]を表す修飾要素は、名詞の直後、もしくは材質、種類を表す修飾要素の直後に位置し、/ròobəh/を前置することもある。
 - ③ [所有]を表す修飾要素が指示詞の直前にある場合には、その指示詞は名詞ではなく所有を表す修飾要素を限定している。
 - ④ [性]を表す修飾要素/srəj/<女>、/proh/<男>、/jii/<雌>、/cmòol/<雄>は、大きさ、色を表す修飾要素に先行する。
 - ⑤ 数詞は、類別詞または単位を表す修飾要素に先行する。
- と述べている。

(27) koon srəj ròobəh kəət pii nèək nuh
 子 女 の物 彼 2 人 それ
 <彼のその2人の娘>

(28) koon srəj pii nèək rə̀bɔ̀bɔ̀h kɔət nuh
 子 女 2 人 の物 彼 それ
 <彼のその2人の娘>¹⁸

このKhinの語順の規則のうち、⑤については名詞句中の修飾要素間の語順というより、数詞とそれに付加する類別詞もしくは単位の中の語順を示しており、妥当なものだと考えられる。しかし、名詞句中の修飾要素間の語順を詳細に決めた①、②、③、④については、他の先行研究、本研究で収集した例と一致せず、十分な説明とは言いがたい。

まず、修飾要素の語順の入れ替え可能性を示した①に関しては、(例 24-26) に関して述べた通り、[材質／種類＋性＋所有者＋大きさ＋色／状態＋数＋類別／単位＋指示] という一定の語順があって、その一部が入れ替え可能であるとは考えにくい。そもそも修飾要素の分類方法にも疑問が生じる。

次に、[所有]を表す修飾要素について示した②に関しては、「／rə̀bɔ̀bɔ̀h／を前置することもある」ことは疑う余地がないが、どのような場合に／rə̀bɔ̀bɔ̀h／が前置されるかについての説明がない。

また、③については、(例 27-28)の差異として、(例 27)は<彼のあの2人の娘>、(例 28)は<あそこにいる彼の、2人の娘>となり、指示詞／nuh／<それ>という指示詞が修飾する名詞が異なるとしている。しかし、本研究の調査では、(例 27-28)のいずれも指示詞／nuh／<それ>は名詞句頭の名詞／koon srəj／<娘>を修飾していると解釈された。従ってこの例からは、「[所有]を表す修飾要素が指示詞の直前にある場合には、その指示詞は名詞ではなく所有を表す修飾要素を限定している」という説明は受け入れがたい¹⁹。ただし、6章で後述するように、修飾要素が代名詞ではなく名詞の場合には、その名詞に／rə̀bɔ̀bɔ̀h／を前置することで指示詞との修飾関係が変わることもある。

[性]を表す修飾要素の位置について示した④については、／koon srəj／<子+女>が<娘>という複合名詞であるとも考えられる。

以上、先行研究を紹介しその説明に関して検討したが、先行研究中では、名詞の修飾要素の語順について定まった語順がある(Khin)か、自由である(Jacob)か、二つの考え方があり。本稿では、修飾要素の語順は完全に自由ではなく一定の制限があり、望ましい語順は存在するが、文脈によって語順は入れ替わり、その語順によって異なる意味を表わすこと、また語順が入れ替わる場合には文法的要素が用いられることが多いと考える。

次章以降は、本研究のために収集した例のうち、名詞がモノを表す場合とヒトを表す場合に分け、更に、修飾要素を複数表示、量化表現、所有表現、指示表現、名詞的修飾、動詞的修飾の6種類に分けて、それぞれの特徴(4章)と複数の修飾要素の語順がどのように決定されるのか(5章)、また、文法的要素の生起について(6章)検討する。

4 修飾要素

前述のように、クメール語の名詞句は、[被修飾要素+修飾要素]の語順をとる。本章では、被修飾要素である名詞がモノを表す場合とヒトを表す場合に分けて、それぞれにどのような修飾要素が現れ得るのか、またそれぞれの修飾要素にどのような特徴があるのかを考察する。

4. 1 複数表現

クメール語では、形式的に名詞の単数、複数の区別をすることはなく、単独の名詞が文脈によって単数にも複数にも解釈されるが、「単数ではない」ことを特に示すいくつかの要素がある。本節では、このような、複数を表示する修飾要素とみなされるものについて、名詞の前に付加される形式、名詞の後ろに付加される形式、名詞の反復形式の順に考察する。

4. 1. 1 名詞の前に付加される形式

複数であることを表示する形式として、/kòmndɔ/〈山〉、/voon/〈群〉、/puok/〈集団〉等の語を、(例 29-32)に示すように名詞の前に付加することができる。これらの語は、「複数」というよりは「集団」であることを示すもので、単独でも名詞として用いることができる。(例 33)のように、ヒトを表す名詞の一部は、4. 1. 3で述べる名詞の反復形としても使うこともできる。

(29) kòmndɔ siəvphəv

山 本

〈本の山〉

(30) dom tmɔɔ

塊 石

〈石がたくさんかたまっただもの〉

(31) voon trəj

群 魚

〈(水の中で泳いでいる)魚の群〉

(32) puok kruu

集団 先生

〈先生の集団〉

(33) puok kruu kruu

集団 先生

〈先生たちの集団〉

しかし、いかなる名詞にも前置できる複数表示形式は存在せず、名詞との結合には意味的な制限がある。一般には、次の(例 34-37)に示すように、/puok/はモノには前置で

きず、／kòmndò／〈山〉や／dom／〈塊〉はヒトに前置できない。

(34) *puok tmoo

集団 石

(35) *puok nòm

集団 菓子

(36) *kòmndò mðonuh

山 人間

(37) *dom srəj

塊 女

特殊な文脈がある場合には、次の(例 38-40)に示すように、ヒトであっても動かない死体であれば／kòmndò／〈山〉を前置させることができたり、／trəj／〈魚〉も動物に前置する／voon／〈群〉以外にも、食物として／dom／〈塊〉を、擬人化して／puok／〈集団〉を前置することもできる。

(38) kòmndò kmaoc

山 死体

〈死体の山〉

(39) dom trəj

塊 魚²⁰

〈(スープの中に) 魚の塊 (が入っている) 〉

(40) puok trəj

集団 魚

〈魚たち (擬人化した場合のみ可能) 〉

更に、ヒトに関しては、(例 41-42)に示すように／kruu／〈先生〉や／tajkonlaan／〈運転手〉と異なり、／puokmaak／〈友人〉に／puok／〈集団〉を前置することができない。これは、／puokmaak／〈友人〉という語の中に既に／puok／〈集団〉という語が含まれているためであると考えられる。

(41) puok tajkonlaan

集団 運転手

〈運転手たち〉

(42) *puok puokmaak

集団 友人

以上のように、名詞の前に付加する複数表示形式は、単に「複数」を表わすものではなく、同じ種類のモノ・ヒトが集団として存在することを表すもので、一般的な形式は存在せず、名詞との意味的制約が強いものである。また、ある名詞に対して常に同じ複数表示形式が用いられるのではなく、文脈によってさまざまな形式を使い分けるものだと考えら

れる。

4. 1. 2 名詞の後ろに付加される形式

単に複数であるというより「多くの種類がある」ことを示したい場合には、/niə niə/ <いろいろな>、/pseɛŋ pseɛŋ/ <いろいろな>、/klah/ <いくつかの>等の語を名詞の後ろに付加することが可能である。

まず、モノを表す名詞として/siəvphəv/ <本>と/nòm/ <菓子>の例を挙げる。(例 43)と(例 45)、(例 44)と(例 46)は同じ意味であるが、(例 43-44)は文語的、(例 45-46)は口語的表現である。どちらの例も「いろいろ」とは、いろいろな分野の本であっても、いろいろな形状、大きさの本や菓子であっても使用可能である。

(43) siəvphəv niə niə
本 いろいろな
<いろいろな本>

(44) nòm niə niə
菓子 いろいろな
<いろいろな菓子>

(45) siəvphəv pseɛŋ pseɛŋ
本 いろいろな
<いろいろな本>

(46) nòm pseɛŋ pseɛŋ
菓子 いろいろな
<いろいろな菓子>

次の(例 47-50)も、本や菓子が複数存在することを示すものであるが、前述の通り、/siəvphəv/ <本>、/nòm/ <菓子>などの名詞単独でも文脈によって複数の本、複数の菓子を表すことが可能である。

(47) siəvphəv klah²¹
本 いくつかの
<数冊の本 (本のうちのあるものは) >

(48) nòm klah
菓子 いくつかの
<数個の菓子 (菓子のうちのあるものは) >

(49) siəvphəv tɛəŋ laaj
本 いろいろな
<いろいろな本>

(50) nòm tɛəŋ laaj
菓子 いろいろな
〈いろいろな菓子〉

(例 51) のように、4. 2 で後述する量化表現を使って複数であることを示すこともできる。

(51) siəvphəv muoj dom
本 1 塊
〈一山の本〉

また、/nòm/〈菓子〉については、(例 52) に示すように随伴語/nèek/をつけることで複数であることを表すこともできる。クメール語の名詞は随伴語をつけることで、名詞の総称を表すことができるが、全ての名詞に随伴語が存在するわけではない²²。

(52) nòm nèek
菓子 (随伴語)
〈いろいろな菓子〉

次に、ヒトではない生物を表す名詞/trəj/〈魚〉について示す。/trəj/〈魚〉は食物を表す場合もあり、(例 53-56) に示すように、/siəvphəv/〈本〉と同じ結果が得られた。

(53) trəj niə niə
魚 いろいろな
〈いろいろな魚〉

(54) trəj pseen pseen
魚 いろいろな
〈いろいろな魚〉

(55) trəj klah
魚 いくつかの
〈数匹の魚〉

(56) trəj tɛəŋ laaj
魚 いろいろな
〈いろいろな魚〉

次にヒトを表す名詞として/kruu/〈先生〉の例を挙げる。モノを表す名詞の場合と同じく、(例 57-58) は同じ意味であるが、(例 57) は文語的、(例 58) は口語的表現である。

(57) kruu niə niə
先生 いろいろな
〈いろいろな先生〉

(58) kruu pseeŋ pseeŋ

先生 いろいろな

<いろいろな先生>

(59) kruu klah

先生 いくつかの

<数名の先生たち (何かの特徴をもった先生は指さない)>

(60) kruu tɛəŋ laaj

先生 いろいろな

<いろいろな先生たち (先生の一人だが、一人一人の担当教科は異なる)>

同じくヒトを表す名詞として /puokmaak/ <友人>、 /tajkoŋlaan/ <運転手> の例を挙げる。 /kruu/ <先生> の場合とほぼ同じ結果が得られた。

(61) puokmaak niə niə

友人 いろいろな

<いろいろな友人>

(62) tajkoŋlaan niə niə

運転手 いろいろな

<いろいろな運転手>

(63) puokmaak pseeŋ pseeŋ

友人 いろいろな

<いろいろな友人>

(64) puokmaak klah

友人 いくつかの

<二人以上の友人>

(65) tajkoŋlaan klah

運転手 いくつかの

<二人以上の運転手>

(66) puokmaak tɛəŋ laaj

友人 いろいろな

<いろいろな友人たち>

以上のような、名詞に後置させる形の要素は、単に複数であることを表すというより、多くの種類のものがあることを示していると考えられる。

4. 1. 3 名詞を反復する形式

(例 67-68) に示すように、モノを表す名詞を反復させることはできない²³。(例 69-70) のような、ヒト以外の生物を表す名詞も反復できない。

(67) *siəvphəv siəvphəv

本

(68) *nòm nòm

菓子

(69) *trəj trəj

魚

(70) *ckae ckae

犬

しかし、(例 71-73) に示すように、モノを表す名詞であっても、それに後置する形容詞を反復させて複数であることを表現することはできる²⁴⁾。ただし、(例 74-75) のように、形容詞の反復が複数を表わすのではなく、形容詞の強意を表し、名詞は単数と解釈されることもある。[名詞+形容詞の反復] という同じ連続が複数の名詞を表わすか、形容詞の強意と解釈されるかは、名詞と形容詞の意味的な関連と文脈によるものと考えられる。

(71) siəvphəv krah krah

本 厚い

<分厚い本 (がたくさん) >

(72) ckae kmav kmav

犬 黒い

<黒い犬 (がたくさん) >

(73) kafee cɲap cɲap

コーヒー おいしい

< (いろいろな味の) コーヒー (がたくさん) >

(74) kafee kdav kdav

コーヒー 熱い

<あつあつのコーヒー (が一杯) >

(75) mhoop prai praj

料理 塩辛い

<とても塩辛い料理 (が一種類) >

一方 (例 76-77) に示すように、ヒトを表わす名詞は反復することで複数を表すことが可能である。しかし、名詞によっては反復できないものもある。(例 78-79) が不可能であるのは、多音節であり反復しづらいためとも考えられるが、同じように多音節の (例 80) は反復可能であるため、使用頻度によるのかもしれない、更に調査が必要な点である。

(76) kruu kruu

先生

<先生たち>

- (77) koon koon
 子ども
 <子どもたち>
- (78) * puokmaak puokmaak
 友人
- (79) * m̀̀̀nuh m̀̀̀nuh
 人間
- (80) tajkoŋlaan tajkoŋlaan
 運転手
 <運転手たち>

以上のことから、名詞の反復による複数表現は、ヒトを表す名詞の一部について可能であることがわかる。

4. 2. 量化表現

本節では、量化表現として、1冊の・2冊の・何冊の、ある・全ての・ほとんどの、数冊の・わずかな・たくさんの等の修飾要素について考察する。

まず、モノを表す名詞についての(例 81-83)を下記に挙げる。[被修飾要素+修飾要素]の語順はかわらない。クメール語に類別詞は存在するが、名詞句にとって必須の要素ではなく、使用頻度は高くない。類別詞を用いる場合には、[数詞+類別詞]が修飾要素となつて、[名詞+数詞+類別詞]という語順になる。また、指示詞を付ける場合には、量化表現に後続する。

- (81) siə̀̀phə̀̀v muoj (kbaal)
 本 1 (冊)
 <1冊の本(ある本)>
- (82) siə̀̀phə̀̀v muoj nuh
 本 1 それ
 <その1冊の本>
- (83) siə̀̀phə̀̀v ponmaan kbaal
 本 いくつ 冊
 <何冊の本>

(例 47) の再掲

- siə̀̀phə̀̀v klah
 本 いくつかの
 <数冊の本(本のうちのあるものは)>

次にヒトを表す名詞についての(例 84-86)を下記に挙げる。モノを表す名詞の場合と

同じく類別詞を用いる場合には、[数詞+類別詞]が修飾要素となって、[名詞+数詞+類別詞]という語順になり、指示詞を付ける場合には、量化表現に後続する。

(84) kruu muoj nɛ̀ək
 先生 1 人
 <1人の先生(ある先生)>

(85) kruu muoj nɛ̀ək nuh
 先生 1 人 それ
 <その1人の先生>

(86) kruu ponmaan nɛ̀ək
 先生 いくつ 人
 <何人の先生>

(例 59) の再掲

kruu klah
 先生 いくつかの

<数名の先生たち(何かの特徴をもった先生は指さない)>

前述のように類別詞は必須の要素ではない。(例 87)では、類別詞によって、「1人」であることが明示されているが、(例 88)のように、類別詞を使わずに数詞だけ用いる場合には、単位が示されていないのであるから、示された数量が「1」であっても「1人」とは限らず、複数名の先生を指すこともある。(例 89)では、複数名の先生を一つの集合ととらえている。

(87) kruu mnɛ̀ək naa
 先生 1人 どれ
 <どの(1人の)先生?>²⁵

(88) kruu muoj naa
 先生 1 どれ
 <どの(1人の/1団の)先生?>

(89) kruu klah naa muoj
 先生 いくつ どれ 1
 <どの先生たち?>

一方、数詞を用いず類別詞のみを使う場合を(例 91)に示す。4. 4で後述する指示詞とともに、数詞を用いず類別詞のみを用いることがある。類別詞のみを用いた(例 91)は数量ではなく、他の本との対比をする場合に用いられると考えられる。モノではなくヒトを表わす名詞を用いた(例 93)は許されない。

(90) siəvphə̀v muoj kbaal nih
 本 1 冊 これ
 <この1冊の本>

- (91) siəvphəv kbaal nih
 本 冊 これ
 <この本>
- (92) kruu muoi nək nih
 先生 1 人 これ
 <この一人の先生>
- (93) *kruu nək nih
 先生 人 これ
 <この先生>

「たくさん、わずかな」等の数の多少を表わす修飾要素も、名詞に後続する。ヒトを表わす名詞の例を（例 94-99）に挙げる。

- (94) kruu craən
 先生 多い
 <多数の先生>
- (95) kruu craən nək
 先生 多い 人
 <多数の先生>
- (96) kruu cəmnun craən
 先生 数 多い
 <多数の先生>
- (97) kruu təc
 先生 少ない
 <少数の先生>
- (98) kruu təc nək
 先生 少ない 人
 <少数の先生>
- (99) kruu cəmnun təc
 先生 数 少ない
 <少数の先生>

以上のように、量化表現は名詞に後続するが、類別詞を用いる場合には、[名詞+数詞+類別詞] という語順となる。類別詞は必須のものではなく、類別詞を用いずに数詞だけ用いる場合には、基本的に固体の数を表わす。しかし、文脈によっては、集合を表わすこともある。

4. 3. 所有者表現

本節では、所有者を表す修飾要素である、私の・あなたの・彼の・彼女の・母の・その金持ちの、誰のについて考察する。

まず、モノを表す名詞についての（例 100-101）を下記に挙げる。所有者を表す修飾要素は名詞に直接後続している。また、名詞との間に、所有関係を明示する／ròbòh／が介在することもある²⁶。更に（例 101）のように所有者を表す修飾要素が、[母+私]という二つの名詞の連続となることもある。

- (100) siəvphəv (ròbòh) kɲom
 本 (の物) 私
 <私の本（私が所有する／書いた本）>²⁷
- (101) siəvphəv (ròbòh) mdaaj kɲom
 本 (の物) 母 私
 <私の母の本>

（例 100）は、私が所有する本のみを表わすわけではなく、「私が書いた本」も表わす²⁸。

次に、ヒトを表す名詞について検討する。モノを表す名詞についての場合と同じく、所有者を表す修飾要素は名詞に後続している。また、名詞との間に、所有関係を明示する／ròbòh／が介在することもある。ヒトの場合には、所有関係というよりは、続柄や、「教わっている」「付き合っている」「雇っている」等の人間関係を表わすことが多いが、／ròbòh／を介在させることも可能である。

- (102) kruu (ròbòh) kɲom
 先生 (の物) 私
 <私の先生：私が教わっている先生>
- (103) kruu (ròbòh) mdaaj kɲom
 先生 (の物) 母 私
 <私の母の先生：母が教わっている先生>
- (104) puokmaak (ròbòh) kɲom
 友人 (の物) 私
 <私の友人>
- (105) puokmaak (ròbòh) mdaaj kɲom
 友人 (の物) 母 私
 <私の母の友人>
- (106) tajkoŋlaan (ròbòh) kɲom
 運転手 (の物) 私
 <私の運転手：常時雇っている運転手²⁹>

(107) tajkoŋlaan (ròobòh) mdaaj kɲom
 運転手 (の物) 母 私
 <私の母の運転手：常時雇っている運転手>

(108) kruu nɛ̀ək naa tɔ̀v srok kmae
 先生 誰 行く 国 カンボジア
 <誰の先生がカンボジアに行くのですか？>

以上のように所有者表現は名詞がモノを表わす場合もヒトを表わす場合も、/ròobòh/を介在させる表現とさせない表現があり、どちらも、所有関係だけではなく続柄などを示すこともある。

4. 4. 指示表現

本節では、指示表現、この・その・あの・どの、これらの・それらの・あれらのについて検討する³⁰。

まず、モノを表す名詞についての例を下記に挙げる。指示を表す修飾要素は、名詞に後続する。次章で示すように、他の修飾要素に先行することはなく、常に名詞句末に現れる。

(109) siə̀vphə̀v nih
 本 これ
 <この本>

(110) siə̀vphə̀v tɛ̀əŋ ʔə̀h nih
 本 全て これ
 <この全ての本>

(111) siə̀vphə̀v naa
 本 どれ
 <どの本>

ヒトを表す名詞についても同様で、指示表現の修飾要素は常に名詞句末に位置する。

(112) kruu nih
 先生 これ
 <この先生>

(113) kruu tɛ̀əŋ ʔə̀h nih
 先生 全て これ
 <この全ての先生>

(114) kruu naa
 先生 どれ
 <どの先生>

- (115) puokmaak nih
友人 これ
＜この友人＞
- (116) puokmaak tɛəŋ ʔəh nih
友人 全て これ
＜この全ての友人＞
- (117) puokmaak naa
友人 どれ
＜どの友人＞

4. 5. 名詞的修飾表現

本節では、名詞的修飾表現、外国の・タイ語の・言語学の・子供向けの（本）、日本人の・医者 of ・裕福な（友人）について考察する。

まず、モノを表す名詞についての（例 118-121）を下記に挙げる。名詞的修飾表現は名詞に直接後続させることもできるが、（例 120-121）のように、修飾関係を明示する名詞や前置詞を介在させることもできる。

- (118) siəvphəv bɔɔrɔtɛh
本 外国
＜外国の本＞
- (119) siəvphəv pɛəsaa thai
本 タイ語
＜タイ語の本＞
- (120) siəvphəv (pnaek) pɛəsaa saah
本 (分野) 言語学
＜言語学の本＞
- (121) siəvphəv (səmrap) koʔmaa
本 (ための) 子ども
＜子ども向けの本＞

次に、ヒトを表す名詞についての例を下記に挙げる。モノを表す名詞の場合と同様に、名詞的修飾表現は名詞に後続している。（例 122-124）の / cən cət capon / <人+民族+日本> のように修飾要素が二語以上の連続となることもある。

- (122) kruu cən cət capon
先生 日本人
＜日本人の先生：日本人である先生³¹>

(123) puokmaak cɔ̃n cɛ̃ət capon
 友人 日本人
 <日本人の友人：日本人である友人>

(124) tajkoŋlaan cɔ̃n cɛ̃ət capon
 運転手 日本人
 <日本人の運転手：日本人である運転手>

(例 122-124) のような名詞的修飾表現は、一般に、「日本人である先生／友人／運転手」のような属性を表すと解釈され、「日本人を教える先生」、「日本人に仕える運転手」などの意味には解釈されない。(例 125) も同様であり、言い換えるとすれば、(例 126) の意味となる。

(125) puokmaak kruu pɛ̃ət
 友人 医者
 <医者 of 友人：医者である友人>

(126) puokmaak (dael) tvəə kruu pɛ̃ət
 友人 する 医者
 <医者をしている友人>

しかし、(例 127-128) ³² のような名詞的修飾表現は、文脈によって、「裕福な先生／友人」を表す場合と、「裕福な人を教える先生」、「裕福な人のもつ友人」を表す場合がある。(例 129) が「裕福な運転手」と解釈されないのも、現在のカンボジア社会では、「運転手」が裕福であるとは想像しにくい³³ という言語外の常識のみによるものである。

(127) kruu nɛ̃ək mɛ̃ən
 先生 裕福な
 <裕福な先生：裕福である先生／裕福な人を教える先生>

(128) puokmaak nɛ̃ək mɛ̃ən
 友人 裕福な
 <裕福な友人：裕福である友人／裕福な人のもつ友人>

(129) tajkoŋlaan nɛ̃ək mɛ̃ən
 運転手 裕福な
 <裕福な人に仕える運転手>

以上のように、名詞的修飾要素は、名詞に直接後続することもできるが、修飾要素と名詞との意味的な関係は文脈によって解釈されると考えられる。

4. 6. 動詞的修飾表現

本節では、動詞的修飾表現、分厚い・大きい・高価な・古い・ぼろぼろの・難しい・昨

日買った・父がくれた・机の上にある・まだ読んでいない（本）、背の高い・古い・親しい・親切な・良い・悪い・昨日会った・一緒に住んでいる・しばらく会っていない（友人）について考察する。

まず、モノを表す名詞についての（例 130-131）を下記に挙げる。動詞的修飾表現は名詞に後続している。修飾要素を名詞に直結させる場合と、修飾節が始まることを明示する /dael/ を介在させる場合がある。6章で後述するように、この /dael/ の有無によって意味の差異が生じることもある。

- (130) siəvphəv (dael) krah
 本 厚い
 <分厚い本>
- (131) siəvphəv (dael) tɛŋ msəl məŋ
 本 買う 昨日
 <昨日買った本>

次に、ヒトを表す名詞についての（例 132-155）を下記に挙げる。モノを表す名詞の場合と同様に、動詞的修飾表現は名詞に後続している。（例 132-134）のように、文脈によって意味が異なるものもある。

- (132) kruu cah
 先生 古い
 <古い先生：経験のある／年老いた先生>
- (133) puokmaak cah
 友人 古い
 <古い友人：長年の／年老いた友人>
- (134) tajkoŋlaan cah
 運転手 古い
 <古い運転手：経験のある／年老いた運転手>
- (135) kruu cuət snət
 先生 親しい
 <親しい先生>
- (136) puokmaak cuət snət
 友人 親しい
 <親しい友人>
- (137) tajkoŋlaan cuət snət
 運転手 親しい
 <親しい運転手>

- (138) kruu cət lʔɔɔ
先生 親切的な
＜親切的な先生＞
- (139) puokmaak cət lʔɔɔ
友人 親切的な
＜親切的な友人＞
- (140) tajkoŋlaan cət lʔɔɔ
運転手 親切的な
＜親切的な運転手＞
- (141) kruu lʔɔɔ
先生 良い
＜良い先生＞
- (142) puokmaak lʔɔɔ
友人 良い
＜良い友人＞
- (143) tajkoŋlaan lʔɔɔ
運転手 良い
＜良い運転手＞
- (144) kruu ʔaakrək
先生 悪い
＜悪い先生：心の曲がった³⁴＞
- (145) puokmaak ʔaakrək
友人 悪い
＜悪い友人＞
- (146) tajkoŋlaan ʔaakrək
運転手 悪い
＜悪い運転手：心の曲がった＞
- (147) kruu (dael) cuop msəl mən
先生 会う 昨日
＜昨日会った先生＞
- (148) puokmaak cuop msəl mən
友人 会う 昨日
＜昨日会った友人＞
- (149) tajkoŋlaan cuop msəl mən
運転手 会う 昨日
＜昨日会った運転手＞

- (150) kruu (dael) ròh nàv cèə muoj
先生 住む 一緒に
〈一緒に住んでいる先生〉
- (151) puokmaak ròh nàv cèə muoj
友人 住む 一緒に
〈一緒に住んでいる友人〉
- (152) tajkoŋlaan ròh nàv cèə muoj
運転手 住む 一緒に
〈一緒に住んでいる運転手〉
- (153) kruu khaan cuop muoj ròjèə? pèel
先生 損なう 会う しばらく
〈久しぶりに会った先生〉
- (154) puokmaak khaan cuop muoj ròjèə? pèel
友人 損なう 会う しばらく
〈久しぶりに会った友人〉
- (155) tajkoŋlaan (dael) khaan cuop muoj ròjèə? pèel
運転手 損なう 会う しばらく
〈久しぶりに会った運転手〉

以上のように、動詞的修飾要素は、名詞に直接後続することも／dael／を介在させることもあり、修飾要素と名詞との意味的關係は文脈によって解釈されると考えられる。

5 名詞句構成要素間の共起関係と語順

本章では、複数の修飾要素の共起関係と語順による意味の違いについて、修飾要素が二つの場合、三つの場合に分けて検討する。

5.1 修飾要素が二つの場合

本節では、二つの修飾要素が共起する場合の制限と語順について検討する。

まず、モノを表す名詞について、前章で述べた6種類の修飾要素が共起する組み合わせと入れ替え可能性を下記に示す。

〈私のこの本〉

- (156) siəvphəv kɲom nih
本 私 これ

<私の3冊の本>

(157) siəvphəv kɾom bəj kbaal
本 私 3 冊

(158) siəvphəv bəj kbaal rəbɔh kɾom
本 3 冊 の物 私

<この3冊の本>

(159) siəvphəv bəj kbaal nih
本 3 冊 これ

指示詞は、修飾要素の末尾に位置する。(例 160) は、指示詞/naa/<どれ>によって名詞句が終わったことが示されるため、<彼のどの3冊の本>という意味にはならない。

(160) siəvphəv bəj kbaal naa rəbɔh kɔt
本 3 冊 どれ の物 彼

<どの3冊の本が彼のですか>

<私の分厚い本>

(161) siəvphəv krah kɾom
本 厚い 私

(162) siəvphəv kɾom krah
本 私 厚い

<この分厚い本>

(163) siəvphəv krah nih
本 厚い これ

(例 160) と同じく、(例 164) でも、指示詞/naa/<どれ>によって名詞句が終わったことが示されるため、<彼のどの分厚い本>という意味にはならない。また、(例 165) の場合にも、<彼の分厚いどれかの本>という意味にはならない。

(164) siəvphəv krah naa rəbɔh kɔt
本 厚い どれ の物 彼

<どの分厚い本が彼のですか>

(165) siəvphəv naa krah rəbɔh kɔt
本 どれ 厚い の物 彼

<どの本であれ、分厚ければ、彼のですよ>

< 3冊の分厚い本 >

- | | | | | |
|-------|----------|------|-------|-------|
| (166) | siəvphəv | bəj | kbaal | krah |
| | 本 | 3 | 冊 | 厚い |
| (167) | siəvphəv | krah | bəj | kbaal |
| | 本 | 厚い | 3 | 冊 |

< 私の言語学の本 >

- | | | | | |
|-------|------------|-------------|-------------|-------------|
| (168) | siəvphəv | phèəsaasaah | kɾom | |
| | 本 | 言語学 | 私 | |
| (169) | * siəvphəv | kɾom | phèəsaasaah | |
| | 本 | 私 | 言語学 | |
| (170) | siəvphəv | kɾom | pnaek | phèəsaasaah |
| | 本 | 私 | 分野 | 言語学 |

< この言語学の本 >

- | | | | |
|-------|----------|-------------|-----|
| (171) | siəvphəv | phèəsaasaah | nih |
| | 本 | 言語学 | これ |

< 3冊の言語学の本 >

- | | | | | | |
|-------|----------|-------------|-------|-------|-------------|
| (172) | siəvphəv | phèəsaasaah | bəj | kbaal | |
| | 本 | 言語学 | 3 | 冊 | |
| (173) | siəvphəv | bəj | kbaal | pnaek | phèəsaasaah |
| | 本 | 3 | 冊 | 分野 | 言語学 |

< 分厚い言語学の本 >

- | | | | | |
|-------|----------|-------------|-------|-------------|
| (174) | siəvphəv | phèəsaasaah | krah | |
| | 本 | 言語学 | 厚い | |
| (175) | siəvphəv | krah | pnaek | phèəsaasaah |
| | 本 | 厚い | 分野 | 言語学 |

< 父がくれた私の本 >

- | | | | | | | | |
|-------|------------|------|--------|--------|------|--------|------|
| (176) | siəvphəv | kɾom | dael | ʔəvpòk | kɾom | ʔaoj | |
| | 本 | 私 | | 父 | 私 | 与える | |
| (177) | * siəvphəv | dael | ʔəvpòk | kɾom | ʔaoj | ròəbòh | kɾom |
| | 本 | | 父 | 私 | 与える | の物 | 私 |

<父がくれたこの本>

(178)	siəvphəv	dael	ʔəvpək	kɲom	ʔaoj	nih
	本		父	私	与える	これ

<父がくれた3冊の本>

(179)	siəvphəv	dael	ʔəvpək	kɲom	ʔaoj	bəj	kbaal
	本		父	私	与える	3	冊
(180)	siəvphəv	bəj	kbaal	dael	ʔəvpək	kɲom	ʔaoj
	本	3	冊		父	私	与える

<父がくれた分厚い本>

(181)	siəvphəv	krah	dael	ʔəvpək	kɲom	ʔaoj	
	本	厚い		父	私	与える	
(182)	siəvphəv	dael	ʔəvpək	kɲom	ʔaoj	doo	krah
	本		父	私	与える	[強調]	³⁵ 厚い

<父がくれた言語学の本>

(183)	siəvphəv	pnaek	phəsaasaah	dael	ʔəvpək	kɲom	ʔaoj
	本	分野	言語学		父	私	与える
(184)	siəvphəv	dael	ʔəvpək	kɲom	ʔaoj	pnaek	phəsaasaah
	本		父	私	与える	分野	言語学

モノを表す名詞の修飾要素の語順の入れ替え可能性をまとめると下記の通りとなる。○は入れ替え可能、×は入れ替え不可能、△は制限付きの入れ替え可能を表す。複数表現については、4. 1に述べた通り、複数を表わすというよりは、集団や種類を表わすものと考え、入れ替え可能性の調査対象からはずした。

	1	2	3	4	5	6
1 複数						
2 量化						
3 所有		△				
4 指示	×	×	×			
5 名詞的		△	△	×		
6 動詞的		○	○	×	△	

モノを表す名詞の修飾要素の語順は、原則として、[名詞的要素+所有表現+動詞的要素+量化表現+指示表現]が好まれると考えられる。しかし、3. 2で既述し、5. 3でも後

述するように、この語順の原則は絶対的なものではなく、名詞と修飾要素との意味的な関係によって、またその文脈によって、異なる語順が選択されることもある。指示表現以外の修飾要素が共起する場合の語順は、入れ替えが可能であるが、名詞的修飾要素には /pnaek/ <分野>等の語を、動詞的修飾要素には /dɔɔ/ [形容詞の強調]、/jaanj/ <~のように>等の語を、また修飾節頭には /dael/ をというように、それぞれの要素の役割を明らかにする何らかの語を前置させるという制限が付くこともある。

次に、ヒトを表す名詞について、前章で述べた6種類の修飾要素が共起する組み合わせと入れ替え可能性を下記に示す。

<私のこの友人>

(185)	puokmaak	kɲom	nih
	友人	私	これ

<私の3人の友人>

(186)	puokmaak	kɲom	bəj	nɛək	
	友人	私	3	人	
(187)	puokmaak	bəj	nɛək	rɔɔbɔh	kɲom
	友人	3	人	の物	私 ³⁶

<この3人の友人>

(188)	puokmaak	bəj	nɛək	nih
	友人	3	人	これ

<私の古い友人>

(189)	puokmaak	cah	(rɔɔbɔh)	kɲom
	友人	古い	(の物)	私
(190)	puokmaak	kɲom	cah	
	友人	私	古い	

「私の古い友人」という意味では、(例 189)の方が好まれ、更に所有表現を明示する /rɔɔbɔh/ を付加した方が自然な表現と感じられる。

<この古い友人>

(191)	puokmaak	cah	nih
	友人	古い	これ

<3人の古い友人>

- (192) puokmaak bəj nɛək cah
友人 3 人 古い
- (193) puokmaak cah bəj nɛək
友人 古い 3 人

(例 192) では、3人は老人であり、(例 193) では、昔からの友人と解釈される。

<私の金持ちの友人>

- (194) puokmaak nɛək mɛən kɾom
友人 金持ちの 私
- (195) puokmaak kɾom nɛək mɛən
友人 私 金持ちの

(例 195) は、「何人が友人がいるうちの金持ちの方 (が車を買った)」と解釈される。

<この金持ちの友人>

- (196) puokmaak nɛək mɛən nih
友人 金持ちの これ

<3人の金持ちの友人>

- (197) puokmaak nɛək mɛən bəj nɛək
友人 金持ちの 3 人
- (198) puokmaak bəj nɛək nɛək mɛən
友人 3 人 金持ちの

<古い金持ちの友人>

- (199) puokmaak nɛək mɛən cah
友人 金持ちの 古い
- (200) puokmaak cah nɛək mɛən
友人 古い 金持ちの

(例 199) は、「金持ちの友人で前から親しくしている人」と解釈され、(例 200) は、「旧友たちのうち金持ちになった方 (が家を買った)」と解釈される。

<昨日会った私の友人>

- (201) puokmaak kɾom dael cuop msəl mɛɾ
友人 私 会う 昨日

(202) puokmaak dael cuop msəl məŋ rəɔbɔh kɲom
 友人 会う 昨日 の物 私

<昨日会ったこの友人>

(203) puokmaak dael cuop msəl məŋ nih
 友人 会う 昨日 これ

<昨日会った3人の友人>

(204) puokmaak dael cuop msəl məŋ bəj nəək
 友人 会う 昨日 3 人

(205) puokmaak bəj nəək dael cuop msəl məŋ
 友人 3 人 会う 昨日

<昨日会った古い友人>

(206) puokmaak cah dael cuop msəl məŋ
 友人 古い 会う 昨日

(207) * puokmaak dael cuop msəl məŋ dɔɔ cah
 友人 会う 昨日 [強調] 古い

<昨日会った金持ちの友人>

(208) puokmaak nəək mɛən dael cuop msəl məŋ
 友人 金持ちの 会う 昨日

(209) puokmaak dael cuop msəl məŋ nəək mɛən
 友人 会う 昨日 金持ちの

ヒトを表す名詞の修飾要素の語順の入れ替え可能性をまとめると下記の通りとなる。○は入れ替え可能、×は入れ替え不可能、△は制限付きの入れ替え可能を表す。複数表現については、4. 1に述べた通り、複数を表わずというよりは、集団や種類を表わずものと考え、入れ替え可能性の調査対象からはずした。

	1	2	3	4	5	6
1 複数						
2 量化						
3 所有		△				
4 指示	×	×	×			
5 名詞的		○	○	×		
6 動詞的		○	○	×	○	

ヒトを表す名詞の修飾要素の語順の原則も、[名詞的要素+所有表現+動詞的要素+量化表現+指示表現]であると考えられる。モノを表す名詞の場合と同様に、この語順の原則は絶対的なものではなく、名詞と修飾要素との意味的な関係によって、またその文脈によって、異なる語順が選択されることもある。指示表現以外の修飾要素が共起する場合の語順は、モノを表す名詞の場合よりも入れ替えが自由である。しかし、修飾節頭には /dael/ というように、修飾要素の役割を明らかにする何らかの語を前置させた方が好まれる。

5. 2 修飾要素が三つの場合

本節では、3つの修飾要素が共起する場合の制限と語順について検討する。

まず、モノを表す名詞について、前章で述べた6種類の修飾要素が共起する組み合わせと入れ替え可能性を下記に示す。

<私のこの3冊の本>

(210)	siəvphəv	bəj	kbaal	rəʔbɔh	kɲom	nih
	本	3	冊	の物	私	これ

<私のこの分厚い本>

(211)	siəvphəv	krah	rəʔbɔh	kɲom	nih
	本	厚い	の物	私	これ

<私の3冊の分厚い本>

(212)	siəvphəv	krah	bəj	kbaal	(rəʔbɔh)	kɲom
	本	厚い	3	冊	の物	私

(213)	siəvphəv	krah	rəʔbɔh	kɲom	bəj	kbaal
	本	厚い	の物	私	3	冊

(214)	siəvphəv	rəʔbɔh	kɲom	dɔɔ	krah	bəj	kbaal
	本	の物	私	[強調]	厚い	3	冊

<この3冊の分厚い本>

(215)	siəvphəv	bəj	kbaal	dɔɔ	krah	nih
	本	3	冊	[強調]	厚い	これ

(216)	siəvphəv	krah	bəj	kbaal	nih
	本	厚い	3	冊	これ

(例 215) では、動詞的修飾要素を強調する /dɔɔ/ が付加される。(例 215) よりも (例 216) の方が一般的な表現と受け取られる。

<私のこの言語学の本>

<私の3冊の言語学の本>

所有+動詞的+量化	○
所有+量化+動詞的	○
動詞的+量化+所有	×
動詞的+所有+量化	×

<この3冊の言語学の本>

<私の分厚い言語学の本>

所有+動詞的+名詞的	○
動詞的+名詞的+所有	×
動詞的+所有+名詞的	○

<この分厚い言語学の本>

<3冊の分厚い言語学の本>

<父がくれた私のこの本>

<父がくれた私の3冊の本>

<父がくれたこの3冊の本>

<父がくれた私の分厚い本>

<父がくれたこの分厚い本>

<父がくれた3冊の分厚い本>

修飾節+名詞的+量化	○
修飾節+量化+名詞的	○
名詞的+修飾節+量化	○
名詞的+量化+修飾節	○
量化+修飾節+名詞的	×
量化+名詞的+修飾節	○

<父がくれた私の言語学の本>

<父がくれたこの言語学の本>

<父がくれた3冊の言語学の本>

<父がくれた分厚い言語学の本>

修飾節+動詞的+名詞的	○
修飾節+名詞的+動詞的	○
名詞的+動詞的+修飾節	○

動詞的+修飾節+名詞的	○
動詞的+名詞的+修飾節	○

修飾要素が二つの場合と次の点では同じであると考えられる。まず、指示表現は、常に名詞句末に位置する。指示表現以外の三つの修飾要素が共起する場合の語順は、①入れ替えが可能な場合と、②制限を受ける場合がある。後者②の場合には、名詞的修飾要素には /pnaek/ <分野>、動詞的修飾要素には /doo/ [形容詞の強調]、/jaan/ <~のように>等の語を前置させたり、修飾節頭には /dael/ が必要となることもある。

修飾要素が二つの場合と異なる点としては、所有者を表す名詞に、/ròobòh/ の前置が必要となることが多い。また、量化表現と共起する場合には語順の入れ替えが許されないことが多い。

次に、ヒトを表す名詞について、前章で述べた6種類の修飾要素が共起する組み合わせと入れ替え可能性を下記に示す。

<私のこの3人の友人>

(217)	puokmaak	bəj	nèək	ròobòh	kɲom	nih
	友人	3	人	の物	私	これ

<私のこの古い友人>

(218)	puokmaak	cah	ròobòh	kɲom	nih
	友人	古い	の物	私	これ

<私の3人の古い友人>

(219)	puokmaak	cah	bəj	nèək	ròobòh	kɲom	
	友人	古い	3	人	の物	私	
(220)	puokmaak	cah	bəj	nèək	kɲom		
	友人	古い	3	人	私	<私を含む3人の旧友>	
(221)	puokmaak	cah	ròobòh	kɲom	bəj	nèək	
	友人	古い	の物	私	3	人	
(222)	puokmaak	ròobòh	kɲom	doo	cah	bəj	nèək
	友人	の物	私	[強調]	古い	3	人

(例 220) は、「私も含んで3人」と解釈される。また、(例 222) では友人は老人と解釈される³⁷。

<この3人の古い友人>

(223) puokmaak bəj nɛək dɔɔ cah nih
友人 3 人 [強調] 古い これ

(224) puokmaak cah bəj nɛək nih
友人 古い 3 人 これ

(例 223) では、動詞的修飾要素を強調する /dɔɔ/ が付加される。(例 223) よりも (例 224) の方が一般的な表現と受け取られる。

以上のことから、修飾要素が三つの場合にも、修飾要素が二つの場合とほぼ同じ結果であると考えられる。

5. 3 語順による意味の違い

本節では、修飾要素の語順による意味の違いについて述べる。

複数の修飾要素が共起する場合、前節までに示したように、[名詞的要素+所有表現+動詞的要素+量化表現+指示表現] という語順が好まれるが、この語順の原則は絶対的なものではなく、名詞と修飾要素との意味的な関係によって、またその文脈によって、異なる語順が選択されることもある。実際の発話では、各種の要素が一つずつ現れるわけではない。また、複数の動詞的要素が現れることも多く、指示表現が名詞句末に位置することだけは確定しているが、それ以外の修飾要素については、語順の可能性が複数存在する。語順の違いによって、どのような意味の違いがあるかについて、下記の例をもとに考察する。

まず、前節でヒトを表す名詞の例として挙げた名詞句について、修飾要素の語順を入れ替えたものを (例 225-226) に示す。ある旧友を別の人に紹介する場合に、最もふさわしい語順は (例 225) である。(例 226) でも同じ意味を表せないことはないが、/cah/ が <古い (友人)> ではなく、<年寄り> であるとも解釈され得るため、紹介の場にはふさわしくないと感じられる。これについては、(例 225) のように /puokmaak cah/ <友人+古い: 旧友/年寄りの友人> が「旧友」を表す場合には2語が直結している方が好まれ、(例 226) のように、別の修飾要素 /rɔɔbɔh kɲom/ <私の> が介在してしまうと、「年寄りの友人」という別の意味にも解釈されるのだと考えられる。

(225) kɔət puokmaak cah rɔɔbɔh kɲom nɛək mɛən
彼 友人 古い の物 私 金持ちの
<彼は、金持ちの旧友だ>

(226) kɔət puokmaak rɔɔbɔh kɲom cah nɛək mɛən
彼 友人 の物 私 古い 金持ちの
<彼は、年寄りで金持ちの親友だ/彼は、金持ちの旧友だ>

自分の姪について説明する名詞句は、(例 227-228) のどちらの語順も可能である。本研究の調査によれば、名詞句末の修飾要素となったもの、即ち、(例 227) では「私の姪であること」、(例 228) では「髪が長い姪であること」が、話者が最も強調したい部分である。

(227) kmuoj srəj kpəh sək vèeŋ kɲom
 甥姪 女 高い 髪 長い 私
 <背が高くて髪が長い私の姪>

(228) kmuoj srəj kpəh kɲom sək vèeŋ
 甥姪 女 高い 私 髪 長い
 <背が高くて髪が長い姪>

また、聞き手の教え子について説明する名詞句でも、(例 229-230) のどちらの語順も可能である。同じく本研究の調査によれば、名詞句末の修飾要素となったもの、即ち、(例 229) では「クメール語が上手に話せること」、(例 230) では「あなたの教え子であること」が、話者にとって最も印象深く、強調したい部分である。

(229) kɲom cuop koon səh nèək kruu kpəh sʔaat niijəəj
 私 会う 生徒 あなた (先生) 高い 美しい 話す
 kmae cbah tiət
 クメール (語) はっきり 更に
 <あなたの教え子で、背が高くて、美しく、おまけにクメール語の上手な生徒
 さんに会いましたよ>

(230) kɲom cuop koon səh kpəh sʔaat niijəəj kmae
 私 会う 生徒 高い 美しい 話す クメール (語)
 cbah rəəbəh nèək kruu
 はっきり の あなた (先生)
 <背が高くて、美しく、クメール語が上手で、あなたの (教え子である) 生徒
 さんに会いましたよ>

3. 2では、被修飾要素である名詞にとって、その文脈で最も一般的な分類基準と思われる要素が名詞の直後に位置することを述べた。このこととあわせて考えれば、名詞句末にある修飾要素が、話者にとって最も印象が深く、強調したい要素であると考えられる。

6 文法的要素の生起による意味の違い

本章では、文法的要素 /rəəbəh/ や /dael/ 等の生起による意味の違いについて、また、複合語について述べる。

文法的要素である／ròbòh／（4. 3）や／dael／（4. 6）は、上述の修飾要素の語順の原則から語順を入れ替える場合に多く用いられることを5章で述べた。原則として望ましい語順は、（例 231）のように、[名詞的要素＋所有表現＋動詞的要素＋量化表現]である。

(231) kòo jii kpom kmav thom muoj kbaal
 牛 雌 私 黒い 大きい 1 頭
 <1頭の黒い大きな私の雌牛>

（例 232）のように、量化表現を先行させて [名詞的要素＋量化表現＋所有表現＋動詞的要素] という語順にしたい場合には、／ròbòh／と／dael／が用いられる。

(232) kòo jii muoj kbaal ròbòh kpom dael kmav thom
 牛 雌 1 頭 の物 私 黒い 大きい
 <1頭の黒い大きな私の雌牛>

このように、／ròbòh／や／dael／といった要素を付加することで、その修飾要素の語順が比較的自由になると考えられる。

一方、これらの要素が生起するかどうかで、意味が異なるものもある。

4. 3で前述のように、／ròbòh／は必ずしも所有関係のみを表わすわけではない。（例 233-234）は、「子どもが所有する本」と「子ども向けの本」の両方を意味し得る。（例 121）のように「子ども向け」であることを強調することもできる。

(233) siəvphəv koʔmaa
 本 子ども
 <子どもの本>

(234) siəvphəv ròbòh koʔmaa
 本 の物 子ども
 <子どもの本>

（例 121）の再掲 siəvphəv sɔmrap koʔmaa
 本 ための 子ども
 <子ども向けの本>

（例 235）のように、所有関係を明示するために、／ròbòh／が用いられることもある。

(235) siəvphəv ròbòh ʔap kom pah
 本 の物 俺 （禁止）さわる
 <俺の本だ、触るな>

また、次の（例 236-238）でも、／ròbòh／の有無によって名詞句の意味が異なる。名詞句末の指示詞は、原則として被修飾語である名詞を修飾する要素であるが、／ròbòh／を介在させた（例 237）、（例 239）では、指示詞が／ròbòh／を前置させた名詞を修飾する。

これらの例については、/koon proh/<息子>、/koon cmaa/<子猫>という複合語が、/ròobòh/の介在によって、それぞれ/koon/<子>と/proh/<男>、/koon/<子>と/cmaa/<猫>という二つの名詞に分かれ、指示詞はより近い位置にある名詞を修飾する要素となったと考えられる。しかし、既出の(例 28)では、/ròobòh/を前置させたものが代名詞/kəət/<彼>だったために、名詞句が二つに分かれることがなく、指示詞/nuh/<それ>は被修飾語である名詞/koon srəj/<娘>を修飾したと考えられる。

(236) koon proh nih
 子ども 男 これ
 <この息子>

(237) koon ròobòh proh nih
 子ども の物 男 これ
 <「この男」の子ども(男と、その子どもと二人いる)>

(238) koon cmaa
 子ども 猫
 <子猫>

(239) koon ròobòh cmaa nih sʔaat tɛəŋ ʔoh
 子ども の物 猫 これ 美しい 全部
 pontae koon ròobòh cmaa nuh muun sʔaat soh
 しかし 子ども の物 猫 それ [否定] 美しい 全く
 <「この猫」の生んだ子猫はかわいいが、「その猫」の生んだ子猫は全く
 かわいくない>

(例 28) の再掲

koon srəj pii nèək ròobòh kəət nuh
 子 女 2 人 の物 彼 それ
 <彼のその二人の娘>

次に/dael/に関しては、修飾節頭に/dael/が生起することによって対比的になると考えられる。(例 240)は一般に「淡水」を表わす表現であるが、(例 241)は、必ず2種類の水があり、それを対比して述べようとしている場合に用いられる。

(240) tuuk saap
 水 味の薄い
 <淡水>

(241) tuuk dael saap
 水 味の薄い
 <淡水(の方は～、塩水の方は～)>

また、/dael/の有無のみが異なる（例 242-243）に関しては、名詞/koon/<子ども>は、（例 242）では動詞/cepcəm/<養う>の表わす動作をうけるものであるが、/dael/を用いた（例 243）では動作主であると解釈される。

(242) koon cəpcəm
 子ども 養う
 <養子>

(243) koon dael cəpcəm
 子ども 養う
 <（誰かを）養っている子ども>

同様に、（例 244-245）でも、名詞/maasiin/<機械>は、（例 244）では動詞/baoh səmʔaat/<掃除する>の表わす動作を行うものであるが、/dael/を用いた（例 245）では動作をうけるものだと解釈される。

(244) maasiin baoh səmʔaat
 機械 掃除する
 <掃除機>

(245) maasiin dael baoh səmʔaat
 機械 掃除する
 <（私が）きれいに掃除した機械>

更に、これらの要素の生起が許されない場合があり、その場合には名詞句ではなく複合語であると考えられる。（例 247）のように/rəɔbɔh/を用いた言い方はできず、<足の皮膚>を意味する場合には、（例 248）のように、足の部位を明示しなくてはならない。

(246) sbaek cəəŋ
 皮 足
 <靴>

(247) * sbaek rəɔbɔh cəəŋ
 皮 足

(248) sbaek baat cəəŋ
 皮 底 養う
 <足の裏の皮膚>

(249) saalaa riən
 建物 学ぶ
 <学校>

(250) * saalaa dael riən
 建物 学ぶ

以上のように、／ròoboh／や／dael／等の文法的要素の生起は随意ではなく、修飾関係に影響を与え、名詞句の意味に差異を生じさせるものと考えられる。

7 まとめ

以上、クメール語の名詞句構造について、名詞がモノを表わす場合とヒトを表わす場合に分け、名詞句中の修飾要素の語順とその用法について検討した。その結果、下記のこと
が明らかになった。

- ① 指示表現は、常に名詞句末に位置する。
- ② 複数の修飾要素が共起する場合、指示表現以外の修飾要素の語順の入れ替えは可能である。常にすべての修飾要素が現れるわけではない。原則として、名詞的要素、所有表現、動詞的要素、量化表現、指示表現という語順が好まれる。
- ③ 上述の原則から語順を入れ替える場合には、下記に示すような、修飾要素の役割を明確にするような語を前置する。
 - ・修飾要素が所有者を表す名詞である場合には／ròoboh／を前置する。
 - ・修飾節頭には／dael／を付加する。
 - ・名詞的修飾要素には／pnaek／〈分野〉等の語を前置する。
 - ・動詞的修飾要素には／doo／ [形容詞の強調]、／jaan／〈～のように〉等の語を前置する。
- ④ モノを表す名詞よりヒトを表す名詞の方が、その名詞の修飾要素の語順の入れ替えに制限が少ない。
- ⑤ 修飾要素の語順を入れ替える場合には、その文脈で最も強調される要素が名詞句末に位置する。しかし指示詞が共起する場合には、指示詞が名詞句末に位置する。
- ⑥ ③に示した／ròoboh／や／dael／等の文法的要素の生起は随意ではなく、修飾関係に影響を与え、名詞句の意味に差異を生じさせる。

おわりに

本研究では、名詞句構造について考察し、修飾要素の語順に関する規則を検討した。本稿では、主に単独の名詞句のみを調査の対象としたが、問題となっている名詞句が主題の位置にあるのか補語の位置にあるのかという文中の位置によって、何らかの違いがあるかもしれない。また、／ròoboh／や／dael／などの文法的要素の生起について、生起が許されない複合語と名詞句の境界について、また生起が随意である場合の意味の違いの有無についても更に考察を深めることを今後の課題としたい。

注

1 クメール語は、カンボジア語とも呼ばれる。原語では、/kmae/と/kampu?cəə/の2語が存在し、民族名、言語名等には前者を、正式国名等には後者を使用する。本稿では、クメール語に統一した。カンボジア王国の公用語であり、1993年制定のカンボジア王国憲法には、「公用言語及び文字は、クメール語及びクメール文字とする」(第5条)「王国は、必要に応じクメール語を擁護し、発展させる義務を有する」(第69条)と記されている。

2 クメール文字は、南インドから伝えられた文字を独自に発展させた表音文字であるが、本稿では、坂本(1988:1479-1505)に従った音韻表記を用いる。先行研究中の例は、それぞれの著者により異なる方法で表記されていたが、本稿中に引用するにあたり、すべて坂本(1988)の表記方法に統一した。

3 先行研究中でそれぞれの例文番号が付されているものもあつたが、本稿に引用するにあたり、すべて例文番号を付け替えた。

4 「動詞」は「形容詞」とすべきかもしれないが、クメール語では、動詞と形容詞を統語的な用法上区別する必要がないので、本稿では Jacob にならい「動詞」とする。

5 Jacob(1968)では、/mònuh thom/を「背の高い人」と訳しているが、実際には「大人、道理のわかった人」の意味である。/mònuh thom thom/と修飾要素が反復されていれば、「大柄な人」と解釈される。他に/mònuh thom/を「地位の高い人」という意味で使うこともあるが、最も頻度の高い用法は、「大人」である。

6 (例13)は、「他は大きい部屋ばかりなのに、この部屋だけが小さくて変わっている」という意味で使われる。修飾要素の語順を入れ替えた/bontòp muoj tooc/も可能であるが、上述のような意味はなくなる。

7 (例14)は本研究の調査では不可能とすべき例である。句末の修飾要素/kpnom/<私>に所有を明示する/ròoboh/<のもの>を前置させれば可能である。(例14)のままでは、一般に、所有表現ではなく<あなたと私の2人>と解釈される。同様に量化表現と代名詞が直接結合される例としては、名詞句以外にも、/təv pii nèək kpnom/<行く+2人+私>では、「私と2人で行く」などもある。注36も参照。

8 (例15)の末に指示詞の/nih/<これ>を付けると、全体が名詞句と解釈されるが、<この3名の大人柄な人>と解釈するには不自然な言い方である。多人数の集団の中から、「体の大きい人は～、体の小さい人は～」などと指定する場合には、名詞/mònuh/<人間>ではなく、名詞の代用である/?aa/<の>を用いて、/?aa thom/<の+大きい:大きいのは～>とする。

9 (例16)は、句末の修飾要素/kpnom/<私>に所有を明示する/ròoboh/<のもの>を前置させれば可能である。

10 特殊な文脈がないと受け入れがたいとインフォーマントによって判断された文には、例文番号に*を付加した。句末の修飾要素/kpnom/<私>に所有を明示する/ròoboh/<の物>を前置させた/cav pram nèək ròoboh kpnom/<孫+5人+の物+私>は可能である。

11 特定の文脈がない限り、(例12)は名詞句ではなく、/tməj/<新しい>が述語である「大きな家は新しい」という文であると解釈されやすい。(例12)の修飾要素の語順を入れ替えた/ptəh tməj thom/<大きくて新しい家>は可能であるが、語順はどうあれ、二つの修飾要素の間に/haəj/<そして>が付加された方が自然だと受け取られる。

12 (例17)の二つの修飾要素の間に/haəj/<そして>を入れるか、もしくは、二つの修飾要素のそれぞれに/phoəj/<も>を後置させることも多い。また、/ptəh tməj caeh/<とすれば、必ず<新築の家>と解釈される。

13 この/?ae tiət/を指示詞と分類すべきかどうかは検討の余地があるが、ここでは先行研

究に従った。

14 本研究の調査では、文脈がないとこの名詞句の意味は断定しがたい。

15 (例 24) は本件研究の調査では不可能な文である。修飾要素のうち、[色]と[大きさ]の語順を入れ替えば可能となる。

16 また、/ròbòh/を使うことで、量化表現を所有表現に先行させることもできる。

kòo	jii	muoj	kbaal	ròbòh	kjom	kmav	thom	nuh
牛	雌	1	頭	の物	私	黒い	大きい	それ

<その大きな黒い私の1頭の雌牛>

17 衣服に関する例を挙げる。

?aav	soot	kjom	sdaej	kròhòom	muoj	nuh
シャツ	絹	私	薄い	赤い	1	それ

<その1着の赤い薄い私の絹のシャツ>

18 Khin (1999) は<その彼の、2人の娘>と訳しているが、本研究の調査では、この句はそのような意味をもたなかった。仮に、(例 27) から/kəət/<彼>を/proh/<男>に代えて、

koon	srəj	ròbòh	proh	pii	nèək	nuh
子	女	の物	男	2	人	それ

という文であれば、/pii nèək/<2人>が/proh/<男>を修飾しており、「2人の男のそれぞれの娘」と解釈される。

19 (例 27-28)の差異として、本研究の調査では、(例 27) では娘は3人以上いて、その中の2人かもしれないが、(例 28) では、娘は2人のみと解釈される。

20 食物としての魚の集合を表わしたい場合には、/trəj muoj cənlìəh/<魚+1+串:1串の魚>なども用いられる。

21 この/klah/<いくつかの>については、他の名詞と対比する場合に用いられることが多く、/təp trəj klah/<買う+魚+いくつかの>というと、単に複数の魚を買ったのではなく、他にも野菜や果物を買ったという、対比的な意味になる。また、この/klah/を重複させた方が対比的な意味ではなく単に複数であることを表す次のような例もある。

jòk	siənp'həv	klah	mòk
持つ	本	いくつかの	来る

<本を2、3冊(必ず)持って来い>

jòk	siənp'həv	klah	klah	mòk
持つ	本	いくつかの	来る	来る

<本を数冊は持って来い>

22 他に、/caan kbaan/<食器の総称>、/kaev kəəj/<装身具の総称>、/ptèəh sɔmbaəj/<家財道具の総称>などがある。

23 モノを表わす名詞であっても、/thòm klən tnam tnam/<におう+におい+薬+薬:薬くさい>のように形容詞的に用いる場合には反復可能である。

しかし、同じ語/tnam/<薬>を補語の位置で、名詞として反復させた/leep tnam tnam/<のむ+薬+薬>は不可能である。

24 名詞と形容詞の双方を反復させる用法もある。例を挙げると、可能なものは、

srəj srəj s?aat s?aat <女+女+美しい+美しい>

?aav?aav kròhòom kròhòom <シャツ+シャツ+赤い+赤い>

不可能なものは、

səmnuo səmnuo piʔbaak piʔbaak <質問+質問+難しい+難しい>

mhoop mhoop cɲaɲ cɲaɲ <料理+料理+おいしい+おいしい>

がある。<シャツ>はモノであるので単独では反復が不可能なのであるが、形容詞とともに反復できる理由については、今後の研究が必要である。

²⁵ /mnɛək/ <1人>は、/muoj nɛək/ <1+人>が1語になったもの。

²⁶ 本研究のインフォーマントによれば、本節中の(例 100-107)については、/rəbɔh/の有無による意味の違いは感じられないとのことであった。

²⁷ /siənpħəv/ <本>という名詞に言及する必要のない文脈であれば、/rəbɔh kɲom/ <の物+私>ということができる。

²⁸ 「私が書いた本」であれば、/siənpħəv rəbɔh kɲom sɔɔsee/ <本+の物+私+書く>とする方が誤解がないと考えられる。

²⁹ タクシーのように一時的に雇っている運転手は指さない。

³⁰ 今回の調査では、「例の」を省略した。

³¹ 「日本人を教える先生」の意味にはならない。/kruu capon/ <先生+日本>も、「日本人である先生」の意味となる。「日本人を教える先生」は、/kruu puok capon/ <先生+集団+日本>もしくは、/kruu rəbɔh capon/ <先生+の+日本>となる。

³² 「裕福な」を表す /nɛək mɛən/ <人+持つ>は「もてる者」であるため、名詞的修飾要素に分類した。

³³ この例で使用した /tajkɔŋlaan/ <運転手>は、雇われている運転手を指し、自家用車の運転手は指さない。

³⁴ 「能力のない先生」は、/kruu ʔɔn/ <先生+弱い>となる。

³⁵ /dɔɔ/は、形容詞に前置され、形容詞の意味を強める。例を挙げれば、/srəj sʔaat/ <女+美しい>は一般的な美人だが、/srəj dɔɔ sʔaat/ <女+[強調]+美しい>は、並々ならぬ美人を意味する。

³⁶ 注7でも既述の通り、/təv bəj nɛək kɲom/ <行く+3+人+私>のように、[量化(3人)+所有(私)]が続いているように見える表現があるが、これは所有表現ではなく、「私と3人で行く」の意味になる。

³⁷ 5. 3に後述。

参考文献

- Huffman, Franklin Eugene. (1967) *An outline of cambodian grammar*. Ann Arbor:University Microfilms.
- Jacob, Judith M. (1968) *Introduction to cambodian*. London:Oxford University Press.
- Khin, Sok (1999) *La grammaire du khmer moderne*. Paris:Éditions You-Feng.
- Sak-Humphry, Chhany. (1996) *Khmer nouns and noun phrases: a dependency grammar analysis*. Ann Arbor:UMI Dissertation Services.
- 坂本恭章 (1988) 「クメール語」 亀井孝、河野六郎、千野栄一 (編) 『言語学大辞典第1巻世界言語編 (上)』: 1479-1505 東京:三省堂.
- 澤田英夫 (2005) 「名詞句構造調査の手引き 修飾要素のグループ分け」本書中.

タイ語の名詞句構造

峰岸 真琴

- 0 はじめに
- 1 グループ1：複数表現
- 2 グループ2：量化表現
 - 2.1 量化表現の基本語順
 - 2.2 数詞を含まない量化表現
 - 2.3 「数詞＋類別詞」の語順の例外
- 3 グループ3：所有者表現
 - 3.1 指示対象が物の場合
 - 3.2 指示対象が人の場合
 - 3.3 khǎwŋ の有無と所有関係
- 4 グループ4：指示表現
 - 4.1 3種の指示詞
 - 4.2 指示詞が類別詞をとまなう場合
- 5 グループ5：名詞的修飾表現
 - 5.1 指示対象が物の場合
 - 5.2 指示対象が人の場合
- 6 グループ6：動詞的修飾表現
 - 6.1 指示対象が物の場合
 - 6.2 指示対象が人の場合
 - 6.3 名詞修飾節
- 7 2つの修飾要素の共起
 - 7.1 複数とその他の共起制限
 - 7.2 量化とその他の共起制限
 - 7.3 所有者とその他の共起制限
 - 7.4 指示とその他の共起制限
 - 7.5 名詞的修飾とその他の共起制限
 - 7.6 修飾節同士の順序
- 8 類別詞について
 - 8.1 類別詞の有無
 - 8.2 数量詞の出現位置について
- 9 まとめ

注

0 はじめに

一般にタイ語の名詞は単独で総称的 (generic) に用いられる。具体的な指示物について、修飾語をおき、あるいは数を特定する場合には、「名詞+名詞性修飾句」、「名詞+状態表現」、「名詞+動詞性修飾句」、「名詞+量化表現」(量化表現は数詞および類別詞からなる)あるいは「名詞(+修飾節)+指示詞」の語順をとる。これらの要素のうち、名詞以外は必須の成分ではなく、随意的に現れる。

三谷 (1998:538-539) は、タイ語の本来の名詞類として、名詞、代名詞、類別詞を挙げ、便宜上これに指示詞と数詞を含めている。類別詞 (classifier) は、名詞の転用か、名詞に起源をもつ準名詞であるが、数詞+類別詞の形の数量詞における単位詞 (助数詞) として用いられるほか、類別詞+修飾語 (複数なら、数詞+類別詞+修飾語) の形の名詞句において、名詞代用語 (noun substitute) として用いられる。本来の類別詞は個体類別詞で、ものやことがらの具体の一個や一件を表す。名詞が特定の類別詞をとる場合以外として、名詞自体を類別詞として用いるもの、一群や一種として表すもの、度量衡単位、金額や時間の単位なども広義の類別詞に数えられる、とする。本稿で後に検討する一群 (phûak) や一種 (chanít) がこれに該当する。また、三谷は指示詞を用いた名詞句として、「類別詞+指示詞」、「名詞+類別詞+指示詞」、「名詞+指示詞」、「指示詞強調形」、「名詞+指示詞強調形」の5つのタイプを挙げている。

本稿の目的は、「名詞句構造調査の手引き 修飾要素のグループ分け」(澤田 2003) に基づき、これらの名詞句それぞれについて検討することである。

以下は、澤田 (2003) に従った名詞句構成要素の分類と、それぞれの例である。

グループ1: 複数表現 例: 達, 等

グループ2: 量化表現 例: 1冊の・2冊の・何冊の, ある・全ての・ほとんどの, 数冊の・わずかな・たくさんの (本)

グループ3: 所有者表現 例: 私の・あなたの・彼の・彼女の・母の・その金持ちの・だれの (本)

グループ4: 指示表現 例: この・その・あの・どの, これらの・それらの・あれらの・例の (本)

グループ5: 名詞的修飾表現 例: 外国の・タイ語の・言語学の・子供向けの (本)・ラオス人の【・医者】(友人)

グループ6: 動詞的修飾表現 例: 【分厚い・大きい・高価な・古い・ぼろぼろ】・難しい, 昨日買った・父がくれた・机の上にある・まだ読んでいない (本)

グループ6の拡張として、複数の語からなる以下のような修飾節を含める。

・背の高い・裕福な【・親しい】・親切な【・良い・悪い】・昨日会った・一緒に住んでいる・しばらく会っていない (友人)

なお、上記の例のうち、【 】に入れたものは、タイ語においては別グループに属すると考えられるものである。例えば【・医者】は、グループ5の名詞的修飾表現ではなく、グループ6の動詞的修飾表現に、グループ6の【分厚い・大きい・高価な・古い・ぼろぼろ】は、グループ5の名詞的修飾表現に含めるべきであろうが、他の言語との参照の都合上、手引きのグループ分けに従って記述し、その都度他グループに属することを明示することにする。

タイ語のインフォーマントは、太田ワランヤさん (タイ国スリン県生まれ)。ただしワランヤさんの母語はモン・クメール系のクエイ語 (Kui, Suay とも呼ばれる) で、タイ語を母語とするといって良いかは簡単に判断できない。小学校から高等学校まではタイ語で教育を受け、タイ語とクエイ語の相違は十分自覚している。以下の調査内容についても、厳密には純粋なタイ語母語話者の語感と比較する必要

があるが、今後の課題としたい。

タイ語概要

タイ語 (Thai language) あるいはシャム語 (Siamese language) はタイ国の公用語で、言語系統はタイ・カダイ (Tai-Kadai) 語族のタイ (Tai) 諸語のうち、南西タイ語群に属するとされる。北タイ方言、東北タイ方言 (ラオ語)、中央タイ方言、南タイ方言の4つの方言に大別され、バンコク (現地名クルンテープ, Krungthep) を中心として用いられる方言が標準タイ語とされる。標準タイ語は全国で通用し、6千万人余りの国民のほとんどが標準語を理解すると思われる。

本稿では以下のような音韻表記を用いてタイ語を表す。

タイ語の声調表記

aa 付加記号無し (中平調) àa (低平調) âa (下降調) áa (高平調) äa (上昇調)

タイ語の母音

	前舌	中舌	後舌	二重母音
狭母音	i, ii	u, uu	u, uu	ia, ua, ua
半狭母音	e, ee	ə, əə	o, oo	
広母音	ɛ, ɛɛ	a, aa	ɔ, ɔɔ	

タイ語の子音

調音法/調音位置	唇	歯	硬口蓋	軟口蓋	声門
無気閉鎖音	p	t	c	k	ʔ
帯気閉鎖音	ph	th	ch	kh	
有声閉鎖音	b	d			
鼻音	m	n		ŋ	
摩擦音	f	s			h
流音		r, l			
接近音	w	y			

タイ語の文法はいわゆる孤立語的であり、基本語順は主語+動詞+目的語のSVO型、被修飾語+修飾語のNA型である。

主語+動詞+目的語

chán kin khâaw
私 食べる ご飯
私のご飯を食べる。

被修飾語+修飾語

prathêet thay
国 タイ
タイ国

1 グループ1：複数表現

タイ語の名詞には形態上の単数・複数の区別はない。複数に関連する意味を表す要素であって、名詞に前置されるものとして、phûak [隊, 類, 連中, 仲間]があるが、この語自体もまた名詞であり、「phûak + 名詞」は、一般的な名詞同士の形成する複合名詞の一種と考えられる¹。phûak は、名詞の複数の指示対象が同類のまとまりとして認識される場合に用いられる。従って、phûak 'aacaan は「先生の一団」を指し、「先生とそれ以外の人たち」は指さない。phûak は名詞であるが、類別詞としても機能する。この場合、名詞の指示対象は人間でも動物、物でもよい。

- (1) phûak { 'aacaan /mɛɛw /náŋsǔu }
複数 先生 猫 本
先生方, 猫たち, 本 [複数]

ただし、phûak のついた名詞は、後ろになんらかの修飾的な限定表現がないと、表現として落ち着かない。

- (2) phûak mɛɛw tua phǎm phǎm phûak nán chǎp khamooy plaa
複数 猫 体 痩せた 複数 あの よく~する 盗む 魚
あの体がやせている猫たちは、よく魚を盗む。

上記は「あの体がやせている」という状態の形容が名詞を限定している例である。

- (3) phûak náŋsǔu kàw kàw
複数 本 古い
古い複数の本

上記は「古い」という状態の形容が名詞を限定している例である。これらのように、指示対象に対する限定修飾要素が加われば、phûak を用いることができる。

また、phûak は人称詞とともに使える。

- (4) phûak chán (聞き手以外の私達), phûak raw (聞き手を含む私達), phûak kháw (彼ら),
phûak man (それら), phûak thán (あなた達の尊敬形), phûak khun (あなた達), phûak
thəə (君たち),

phûak は、グループ4 (指示表現) で見るように、類別詞としても機能するが、この場合限定表現としての指示詞が必須となる。

- (5) náŋsǔu phûak nǔ
本 複数 この
これらの本 (ただし, × náŋsǔu phûak)

2 グループ2：量化表現

2.1 量化表現の基本語順

タイ語では、名詞の指示対象が個別的で、その具体的な個数を特定して言及する量化表現においては、「名詞+数詞+類別詞」が基本語順である。数量を表現する場合には、原則的に類別詞が必要である。

以下で見るように、「名詞+数詞+類別詞」の量化表現では、指示対象が物でも人でも基本的な意味および構造は変わらない。

2.1.1 指示対象が物の場合

- (6) *náŋsǔu nùŋ lêm*
本 1 類別詞
一冊の本
- (7) *náŋsǔu sǔŋ lêm*
本 2 類別詞
2冊の本
- (8) *náŋsǔu sǔŋ sǎam lêm*
本 2 3 類別詞
2, 3冊の本
- (9) *náŋsǔu kii lêm*
本 いくつ 類別詞
何冊の本（を買いましたか？）

2.1.2 指示対象が人の場合

- (10) *phǔan nùŋ khon*
友人 1 類別詞
1人の友人
- (11) *phǔan sǔŋ khon*
友人 2 類別詞
2人の友人
- (12) *phǔan sǔŋ sǎam khon*
友人 2 3 類別詞
2, 3人の友人
- (13) *phǔan kii khon*
友人 疑問詞 類別詞
何人の友人（がいますか？）

2.2 数詞を含まない量化表現

量化表現であっても、個数を特定しない「ある・全ての・ほとんどの」などの場合は、数詞に代わってこれらの量化表現が用いられる。この場合も原則的に類別詞を用いる。

2.2.1 指示対象が物の場合

- (14) *náŋsũu baaj lêm*
本 ある 類別詞
何冊かの本
- (15) *náŋsũu tháj lêm*
本 全て 類別詞
本一冊全部（を読んだ。）
- (16) *náŋsũu khriáj lêm*
本 半分 類別詞
本一冊の半分
- (17) *náŋsũu (kũap) thák lêm*
本 (ほとんど) 全ての 類別詞
(ほとんど) 全ての本
- (18) *náŋsũu láaj lêm*
本 たくさんの 類別詞
たくさんの本, 何冊もの本
- (19) *náŋsũu tɛɛ lá? lêm*
本 それぞれ 類別詞
それぞれの本

ただし、以下のような「全ての・ほとんどの・たくさんの」を含む量化表現の場合、類別詞を用いない。

- (20) *náŋsũu (kũap) tháj mòt*
本 (ほとんど) 全て 尽きる
(ほとんど) 全ての本

以下のような数を特定しない量化表現では、数量、部分を表す名詞あるいは名詞代用語が類別詞として機能し、それに量化を示す修飾語が後置されている。

- (21) *náŋsũu camnuan mâak*
本 数量 沢山
沢山の本
- (22) *náŋsũu sũan {yáy/mâak/nóy/*lék}*
本 部分 {大きい/多い/少ない/*小さい}
大部分/小部分の本（この図書館の大部分は寄贈だが、一部は購入した。）

2.2.2 指示対象が人の場合

指示対象が物か人か、という区別だけでなく、指示対象の持つ個別の属性により、量化表現になじむもの、なじまないものがある。例えば本は個別に数えられるだけでなく、読む対象として「半分読む」といった部分の表現が可能であるが、人に関しては、「人半分」というのはふつう使いづらい。また、人であっても個人の場合と、「友人」のように、一般に複数存在すると考えられる対象では、違ったとらえ方をされることがある。

(23) *phúan baay khon*
友人 ある 類別詞
何人かの友人

(24) *mii phúan yùu dūay tháy khon*
ある 友人 いる 一緒 全て 類別詞
(1人の) 友人が一緒にいる (から怖がらないで)。

**phúan khrúŋ khon* (半分の友達) という表現は使わないが、慣用的に、以下のような表現は可能である。

(25) *khrúŋ phǐ khrúŋ khon*
半分 幽霊 半分 類別詞
重篤で、半分お化け、半分人の「半死半生」

一般に指示対象が「人」であれば、数詞を伴わない量化表現は、以下のような人の集合としての「全て」や、個々の集合の成員「それぞれ」に関する表現である。

(26) *phúan (kùap) thúk khon*
友人 (ほとんど) 全ての 類別詞
(ほとんど) 全ての友人

(27) *phúan lāay khon*
友人 たくさんの 類別詞
たくさんの友人, 何人もの友人

(28) *phúan tèt lá? khon*
友人 それぞれ 類別詞
それぞれの友人

上記のように、「友人」の場合は、(20)の「本」の場合と違って、類別詞を伴って現れるのが普通である。特に「ほとんど」という表現がある場合は？ *phúan kùap tháy mòt* 「ほとんど全ての友人」とは言わないで、*phúan kùap thúk khon* 「ほとんど全員の友人」と表現するのが普通である²。

ただし、以下のような「全ての・ほとんどの・たくさんの」を含む量化表現の場合、類別詞を用いないのが普通である。

(29) (*mii*) *phúan tháy mòt (kìi khon)*
(いる) 友人 全て 尽きる (疑問詞 類別詞)

全ての友人（は何人いますか。）

- (30) *phûan phûan tháy lăay*
友人 友人 全体・全部の
全ての友人（友人諸君）

上記は *tháy lăay* という表現を伴うためか、「友人」ということばが反復され、呼びかけを表すことになっている。

- (31) *thân tháy lăay*
方（かた） 全体・全部の
全ての皆様方

上記は、集会場などでの「（ご出席の）全ての皆様」のような表現に用いる。

- (32) *bandaa manút*
全て 人類
全人類

- (33) *phûan sùn yáy/mâak/nóy/*lêk*
友人 部分 大きい/多い/少ない/*小さい
大半/少数の友人

2.3 「数詞＋類別詞」の語順の例外

「名詞＋数詞＋類別詞」の基本語順に従わない例外として、第一に、数が1の場合に限り、「名詞＋類別詞＋数詞（一）」の語順も可能であることがある。

- (34) *nágsúur lêm nùuŋ*
本 類別詞 1
一冊の本、あるいは「ある本」

第二に、類別詞単独で、数詞を伴わない場合は「ひとつ、ひとり」などを意味する。

- (35) *ʔaw kháy háy mēε fɔŋ síʔ*
取る 卵 与える 母 類別詞 [卵] [終助詞]
卵を [ひとつ] お母さん [私] にちょうだい

- (36) *khɔɔ pay dúay khon*
頼む 行く 共に 類別詞 [人]
私にも一緒に行かせてください。

これは後述するように、「類別詞＋指示詞」のみで、数詞を伴わない表現が、単数の対象を指すことと平行する現象である。一方、一人でなく、二人の場合の言い方であれば、「数詞＋類別詞」の基本語順に従う。

(37) *(khɔ̌ɔ) hây raw sɔ̌ɔŋ khon pay dɔ̌ay*
 (頼む) [使役] 私達 2 類別詞 [人] 行く 共に
 私達二人も一緒に行かせてください。

(38) *khɔ̌ɔ pay dɔ̌ay ?ik sɔ̌ɔŋ khon dây máy*
 頼む 行く 共に さらに 2 類別詞 [人] 許可 [疑問]
 私達二人も一緒に行かせてください。

上記は、例えば満員の乗り合いバスに、さらにあと二人乗せてほしい場合に用いる。

3 グループ3：所有者表現

「所有」という概念は、典型的には有生物（特に人間）が何らかの具体物（普通は物体）を所有する場合を指すと考えて良いのだろうが、現実の社会においては、「図書館の（図書館が所有する）本」のように、人間の運営する組織に物体が納められている場合や、「机の脚」のように、物体において本体部分および周辺部分を構成すると見なされるものの間の関係も、広い意味での所有と捉えられる。さらには「自然の美」のような、非具象物の備える抽象的的属性も、言語によっては所有関係であるかのように表現される。日本語では上記全ての場合で「の」という助詞が使用できるだけでなく、「友達の田中さん」のような同格関係においても「の」が使われる。

以下に見るように、タイ語においては、同格関係を除く上記のそれぞれの場合において、*khɔ̌ɔŋ* [～の、あるいは「品物」] を用いることができる。*khɔ̌ɔŋ* を用いなくとも、普通意味は変わらないが、後述するように必須の場合もある。

3.1 指示対象が物の場合

所有者が人で、指示対象が物の場合、所有者を示す人称詞を後置するか、*khɔ̌ɔŋ* を用いる。

(39) *náŋsǔu (khɔ̌ɔŋ) chán*
 本 の 私
 私の本 (具象名詞+人間の所有者)

náŋsǔukhɔ̌ɔŋ chán あるいは *náŋsǔu chán* のどちらを用いても、その意味は変わらない。

(40) *náŋsǔu (khɔ̌ɔŋ) mɛ (khɔ̌ɔŋ) chán*
 本 の 母 の 私
 私の母の本

(41) *náŋsǔu khɔ̌ɔŋ khon ruay khon nán*
 本 の 金持ち 類別 その
 その金持ちの本

(42) *náŋsǔu (khɔ̌ɔŋ) khray*
 本 ～の 誰
 誰の本か？

- (43) *náŋsũũu (khǝǝŋ) mɛɛ (khǝǝŋ) khɾay*
 本 ~の 母 ~の 誰
 誰の母の本か？

以下のように、所有物が抽象的な「気持ち」であっても、*khǝǝŋ* を使うことができる。

- (44) *khwaam rúustúk (khǝǝŋ) khɾay*
 気持ち (~の) 誰
 誰の気持ちか？

以下は所有者が人間以外の「組織」の場合である。

- (45) *náŋsũũu (khǝǝŋ) boɾisàt nāy*
 本 ~の 会社 どの
 どの会社の本か？

- (46) *náŋsũũu (khǝǝŋ) hǝŋ samùt nāy*
 本 ~の 図書館 どの
 どの図書館の本か？

以下は所有者が人間ではなく無生物の「机」で、それを構成する部分と見なされる「脚」が指示対象の場合である。

- (47) *khāa tóʔ tua nāy sīa yùu*
 脚 机 類別詞 どの 壊れる いる
 どの机の脚が壊れているか？

以下の場合、*khǝǝŋ* は必須である。

- (48) *khāa nāy khǝǝŋ tóʔ sīa yùu*
 脚 どの ~の 机 壊れる いる
 机のどの脚が壊れているか？

以下は、非具象物の備える属性に言及する場合である。

- (49) *khwaam ŋaam khǝǝŋ ʔaray*
 美しさ ~の 何
 何の美しさか？

上記に対する答えとしては、たとえば「*khwaam ŋaam khǝǝŋ thammachâat* 自然の美しさ」といったものが想定できる。

khǝǝŋ は、本来の名詞としての意味「品物」から離れて、所有や属性の関係を表す文法機能辞として用いられていると言うことができよう。

3.2 指示対象が人の場合

所有者が人で、指示対象も人の場合、所有者を示す人称詞を後置するか、*khǝǝŋ* を用いる。

(50) *phûtan (khǝǝŋ) chán*
友人 (～の) 私
私の友人

(51) *phûtan (khǝǝŋ) m̄ε (khǝǝŋ) chán*
友人 (～の) 母 (～の) 私
私の母の友人

上記は *khǝǝŋ* を2箇所とも省略できる。なお、前だけ省略した *phûtan m̄ε khǝǝŋ chán* よりも、後ろだけ省略した *phûtan khǝǝŋ m̄ε chán* の方がよく使われる³。

(52) *phûtan khǝǝŋ khon ruay khon nán*
友人 ～の 金持ち 類別 その
その金持ちの友人

(53) *phûtan (khǝǝŋ) khray*
友人 (～の) 誰
誰の友人か？

(54) *phûtan (khǝǝŋ) m̄ε (khǝǝŋ) khray*
友人 (～の) 母 (～の) 誰
誰の母の友人か？

3.3 *khǝǝŋ* の有無と所有関係

普通、*khǝǝŋ* があってもなくても意味は変わらないと述べたが、以下のような場合、ニュアンスの違いが出ることもある。

(55) *nápsũtu (khǝǝŋ) h̄ŋ samùt*
本 の 図書館
図書館（所蔵）の本

この場合、*khǝǝŋ* がないのが普通で、つけると「図書館所蔵の本」と強調することになる。（図書館には当然本があるからか？）

(48) で見たように、「机のどの足が壊れているか」と尋ねる場合には *khǝǝŋ* が必要だが、以下のように「机の脚」のみでは *khǝǝŋ* があると不自然になる。

(56) *?khāa khǝǝŋ tó?*
脚 の 机
机の脚

(57) *khāa tó?*
脚 机
机の脚 （具象名詞+無生物所有者）

khǝŋ がある表現では、明言化することによって所有関係を強調しているのに対し、khǝŋ がいない表現は、「名詞+名詞」という「被修飾語+修飾語」の一般的修飾関係、さらには複合名詞句に近い表現となっている。

4 グループ4：指示表現

4.1 3種の指示詞

タイ語には、níi [この] nán [その・あの] nóon [あっちの] の3種の指示詞がある。これらは名詞あるいは類別詞に後置され、これら共起する名詞類を修飾する形で用いられるが、これらと声調が異なる指示詞強調形 níi [これ] nân [それ・あれ] は、単独でも用いることができる。

4.1.1 指示対象が物の場合

- (58) náŋsǔu { (lēm) níi /lēm nán /lēm nóon /lēm nây}
 本 (冊) この 冊 その・あの 冊 あっちの 冊 どの
 {この/その・あの/あっちの/どの} 本

níi は単独で名詞を修飾できるが、nán, nóon, 疑問詞nây の場合は、類別詞や名詞代用語が必要になる。nóon (遠称) は、視野にある場合に使い、視野にない場合は使えないが、nán は先行指示で、その場になくとも「あの本、例の本」のような「照応」の意味で使える。

- (59) náŋsǔu níi (dii ná?)
 本 この 良い [終助詞]
 この本はいいね (現物を指して)。

- (60) náŋsǔu lēm níi dii ná?
 本 類別詞 この 良い [終助詞]
 この本はいいね。

上記に対応する疑問文は、以下ようになる。

- (61) náŋsǔu lēm nây?
 本 類別詞 どの
 どの本ですか？

4.1.2 指示対象が人の場合

- (62) phǔan {khon níi /khon nán /khon nóon /khon nây}
 友人 { 類別 この /類別 その・あの /類別 あっちの /類別 どの }
 { この/その・あの/あっちの/どの } 友人

phǔan 「友人」の場合は náŋsǔu 「本」の場合と違って、類別詞がないと不自然になる。

- (63) *phǔan níi (dii ná?)
 友人 この (良い 終助詞)

この友人はいいね。

4.2 指示詞が類別詞をともなう場合

類別詞は指示詞あるいは数量表現をともなって、名詞の指示対象を限定する。個体類別詞のみを用い、複数を明示する表現が含まれない場合、指示対象は一般に単数である。

4.2.1 指示対象が物の場合

以下は、「類別詞+指示詞」の例である。

- (64) *nápsǔtu lêm* {*nú /nán /nóon*} (*dii ná?*)
本 類別詞 {この その・あの あっちの} (いいね)
{この・その・あっちの} 本 (単数) はいいね。

上記の場合は、単数の本を指す。あるいは、同種の本がたくさん山積みになっている場合も指すことができる。

以下は、「複数を示す類別詞+指示詞」の例である。

- (65) *nápsǔtu làw* {*nú /nán*}
本 群・類 この その・あの
{これらの/それらの・あれらの} 本 (*làw nóon* とは言えない。)
- (66) *nápsǔtu phúak* {*nú /nán /nóon*}
本 類 この その・あの あっちの
{これらの/それらの・あれらの/あっちの} 本。

以下のように、「類別詞+状態動詞」に「類別詞+指示詞」を組み合わせてもできる。

- (67) *nápsǔtu lêm kàw kàw* {*phúak* {*nú /nán/ nóon*} /*làw* {*nú /nán*}}
本 類別 古い 類 この/その・あの/あっちの /これら この/その・あの
{これらの/あれらの/あっちの} 古い本

また、「類別詞+状態動詞」に「数詞+類別詞」を、さらには「類別詞+指示詞」を組み合わせてもできる。

- (68) *nápsǔtu lêm kàw kàw sǎm lêm* {*phúak* {*nú /nán/ nóon*} /*làw*
本 類別 古い 三冊 類 この/その・あの/あっちの /これら
{*nú /nán*}}
この/その・あの
{これらの/それらの・あれらの/あっちの} 三冊の古い本

下記は、ある花の現物を指して、「この現物の特定の花は」という場合と、「この種類の花は一般に」という場合との両方に使える。

- (69) *dòk máay nú hǝm dii ná?*
花 この 香り 良い [終助詞]

この花は香りがいいね。

より明示的に現物指示と類指示とを言い分けるには、以下のように表現する。

(70) *dòkmáay dɔ̀k nú hɔ̀m dii náʔ*

花 類別 この 香り 良い [終助詞]

この花は香りがいいね (現物を指して「この一つの花」の意味)。

(71) *dòkmáay chanít nú hɔ̀m dii náʔ*

花 種類 この 香り 良い [終助詞]

この花は香りがいいね (現物を指しながら「この種類の花は一般に」という場合)。

4.2.2 指示対象が人の場合

(72) *phûan khon {nú /nán /nóon} (dii náʔ)*

友人 類別詞 {この その・あの あっちの} (良いね)

{この/その・あの/あっちの} 友人 [単数] はいいね。

? *phûan làw {nú /nán}* は普通あまり言わないが、*phûan* を繰り返すと自然になる。

(73) ? *phûan làw {nú /nán}*

友人 群・類 {この その・あの}

これらの/あれらの友人

(74) *phûan phûan làw {nú /nán}*

友人 [複数] 群・類 {この その・あの}

これらの/あれらの友人

(75) *phûan phûak {nú /nán /nóon}*

友人 類 {この その・あの あっちの}

{これらの/あれらの/あれらの} 友人達

(63) で示したように「この友人」を表現するときには類別詞がないと不自然になるが、特定したいときは以下のような言い方をする。

(76) *phûan khon nú sũtusàt dii náʔ*

友人 類別 この 誠実 良い [終助詞]

この友人は誠実だね。

(77) *phûan phûak nú wáy cay (mây) dáy*

友人 類 この 信用する [否定] 可能

この類の友人は信用できる (できない)。

5 グループ5：名詞的修飾表現

・ タイ語では、一般に名詞的修飾語は被修飾語に後置される。グループ5のうち「医者友人」は、タイ語ではグループ6の動詞的修飾表現(名詞修飾節)となる。

グループ6の動詞的修飾表現として分類されているものであっても、動詞あるいは状態動詞（形容詞）が直接に被修飾語である名詞を修飾せずに、類別詞を介することで、間接的に被修飾語を修飾するものは、実はグループ5の名詞的修飾表現に分類すべきであろう。

5.1 指示対象が物の場合

(78) *náŋsǔu taaŋ-prathêet*

本 外国

外国の本

(79) *náŋsǔu phaasǎa thay*

本 言語 タイ

タイ語の本

(80) *náŋsǔu (wíchaa) phaasǎasàt*

本 分野 言語学

言語学の本

以下のように、被修飾名詞と修飾名詞との意味関係を明示するために、前置詞を用いることがある。

(81) *náŋsǔu (sǎmràp) dèk*

本 のための 子供

子供のための本

5.2 指示対象が人の場合

(82) *kháw mii phǔan khon laaw*

彼 いる 友人 人 ラオ

彼はラオス人の友人がいる。

なお、上記と関係して、以下のように、動詞を含む名詞的修飾表現（あるいは関係節）で表現することもできる。

(83) *kháw mii phǔan (thii) pen khon laaw*

彼 いる 友人 (関係詞) である 人 ラオ

彼はラオス人の友人がいる。

ただし、関係詞はあってもなくてもよい。

以下のように「医者 of 友人」のような同格的な表現は、タイ語では「医者である友人」のように、関係詞と状態動詞「である」を用いた、グループ6の動詞を含む修飾表現にする必要がある。

(84) *kháw mii phǔan (thii) pen mǎo*

彼 いる 友人 (関係詞) である 医者

彼は医者をしている友人がいる。

6 グループ6：動詞的修飾表現

タイ語の動詞は、*nák rian*（者+学ぶ=学生）、*khon khàp rôt*（人+運転する+車=運転手）のように、動詞単独または「動詞+補語」の形で名詞を直接修飾し、動詞的修飾表現を形成することが可能であるが、これらは「名詞+動詞（+補語）」の複合名詞と考えることができる。タイ語のいわゆる「形容詞」は、状態動詞という動詞の下位区分と考えられるので、上記と同様 *khon dii*（人+良い=善人）もまた、「名詞+状態動詞」の複合名詞と考えられる。

このように考えると、以下の例のように、動詞的表現が類別詞を伴って現れる場合、類別詞は名詞類に準じた機能を持つため、「名詞+類別詞+動詞」からなる句は、複合名詞よりも組み合わせの自由度の高い名詞的修飾表現（つまりグループ5）と考えることができそうである。

6.1 指示対象が物の場合

6.1.1 類別詞を介した表現

動詞（状態動詞を含む）が名詞を修飾する場合、直接「名詞+動詞」の構造をとるよりも、以下ののように「名詞+類別詞+動詞」という構造をとるのが普通である。

(85) *náŋsǔu lēm nǎa*
本 類別詞 厚い
厚い本

(86) *náŋsǔu lēm yàŋ*
本 類別詞 大きい
大きい本

(87) *náŋsǔu raakhaa phεεŋ*
本 価格 高い
高価な本

raakhaa（価格）は名詞であるが、*raakhaa phεεŋ*で「高価である」という述語となる。これは「高い価値」が「本」を修飾する名詞的修飾表現の一種と考えられる。

(88) *náŋsǔu lēm kàw*
本 類別詞 古い
新しく買った本と対比して、以前に買った本（中古ではない）一冊を示す。

このように、類別詞が使われると、対比的な意味を持つことが多い。

(89) *náŋsǔu lēm kàw kàw*
本 類別詞 古い 古い
ぼろぼろになった本（一冊を示す。）

(90) *náŋsǔu lēm (thǐi) {kàw kàw /soom soom}*
本 類別詞 関係詞 古い ぼろぼろ
古い（ぼろぼろの）本（一冊を示す。）

上記のように類別詞が数詞を伴わずに用いられる場合は、単数を表す。

しかし、以下の (91), (92) のように、複数性を明示する表現、例えば *phûak* (類) を付ければ、複数を表わす。

(91) *náŋsǔur lêm kàw phûak ní*

本 類別詞 古い 類 この

これらの前に買った本 (古い本ではなく、新しく買った本と対比して、以前に買った本)

(92) *náŋsǔur (lêm) (thǔi) {kàw kàw /soom soom} phûak ní*

本 類別詞 関係詞 古い ぼろぼろ 類 これらの

古い (ぼろぼろの) 本

6.1.2 類別詞を介さない直接的な修飾表現

上記の類別詞を介した「名詞的修飾表現」の他に、以下のように、動詞が直接名詞を修飾する表現もある。

以下の例では、動詞一語が名詞との複合名詞を形成しているため、「中古本 (≠古い本)」という、文字道理の意義を超えた指示対象を意味すると考えられる。

(93) *náŋsǔur kàw*

本 古い

古い本 (中古本) (一冊でも何冊かでも良い。)

動詞一語が名詞と複合する上記に対し、動詞の繰り返しが名詞を修飾する場合、複合名詞とは考えられない。

(94) *náŋsǔur kàw kàw*

本 古い 古い

ぼろぼろになった本 (一冊でも何冊かでも良い。)

この場合、個別化を表す類別詞を伴わないので、一冊以上の不定数、一般的な指示対象を示す。

なお、以下の「難しい本」は、タイ語ではグループ6の動詞的修飾表現である。

(95) *náŋsǔur ?àan yâak*

本 読む 難しい

読むのが難しい本

タイ語では「難しい本」のように、「容易だ、難しい」といった状態動詞を用いた評価判断の表現は、行為を示す動詞が先行する動詞連続となるため、「難しい」という状態動詞一語だけを用いた動詞的修飾ではなく、「行為動詞+判断の状態動詞」という二語による名詞修飾節となるのである。

6.2 指示対象が人の場合

6.2.1 類別詞を介した表現

類別詞を介した形 ? *phûan khon kàw* 「古い友人」は普通言わない。

しかし、以下のように類別詞機能を持つ khon（人）を入れると、単に個別化だけでなく、対比的な意味をもつ。

- (96) *phûan khon mày khōŋ thəə chûu aray?*
友人 人 新しい 所有 君 名前 何
今度の新しい（一人の）友人は何という名前ですか？

上記は、例えば「私という古くからの友人（この場合、個別化された khon と対比される）がありながら、なぜ」という皮肉なニュアンスが生じる場合もある。

同様に、以下のような表現が可能である。

- (97) *phûan khon {kōn /lāŋ}*
友人 類別詞 { 前 /後 }
{ 前/後 } の友人

上記は、例えば列に並んでいる場合や、時間的に前後している場合に、対比的に使う。

- (98) *fɛn khon {kàw /kōn}*
恋人 類別詞 { 昔 /前 }
{ 昔/前 } の恋人

fɛn khon kàw 「昔の恋人」は、*fɛn khon mày* 「今の（新しい）恋人」と対比し、特定する場合に用いる表現である。一方、*fɛn mày* 「新しい恋人」は、以前別の恋人がいたかどうかを問題にしない場合の表現である。

6.2.2 類別詞を介さない直接的な修飾表現

- (99) *yàak cəə phûan kàw*
～したい 会う 友人 古い
昔からの友人 [1人] に会いたい。

上記の *phûan kàw* は普通特定していない一人の昔からの友人を指すが、複数の一般的な指示対象を示す場合は、下記のように動詞を繰り返す。

- (100) *yàak cəə phûan kàw kàw*
～したい 会う 友人 古い 古い
昔からの友人 [複数] に会いたい。

- (101) *phûan mày*
友人 新しい
新しい友人

上記はむしろ複合語的かもしれない。

6.3 名詞修飾節

関係詞 *thii* (「所、場所」という意味の名詞でもある) を用いる関係節は、タイ語では名詞的修飾表現の拡張として捉えることができる。

6.3.1 指示対象が物の場合

以下は、名詞「本」を修飾する名詞修飾節の例である。

(102) *náŋsǔu thii sǔu mǔawaan*

本 関係詞 買う 昨日

昨日買った本

(103) *náŋsǔu thii [?]aacaan khian*

本 関係詞 先生 書く

先生が書いた本

以下では、*thii* の他に、類別詞 *lēm* を使用してもよい。使用した場合は、本は単数になり、対比的な意味を持つことになる。

(104) *náŋsǔu (lēm) thii phǎo háy yùu thii nǐi*

本 類別詞 関係詞 父 与えた ある ここ

父がくれた本はここにある。

類別詞を用いれば、修飾関係が明らかになり、*thii* を使わなくともよくなる。

(105) *náŋsǔu lēm phǎo háy yùu thii nǐi*

本 類別詞 父 与えた ある ここ

父がくれた本はここにある。

上記の場合も、類別詞があるので単数を表し、対比の意味を持つ。

関係詞 *thii* は、以下のような場合あってもなくても良い場合が多いが、場合によっては文と名詞句との境界がはっきりしなくなる。

(106) *náŋsǔu (thii yùu) bon tó?*

本 関係詞 在る 上 机

机の上にある本

náŋsǔu yùu bon tó? だと、「本は机の上にある」という文になってしまう。

(107) *náŋsǔu thii yaŋ mây dâŋ [?]aan*

本 関係詞 まだ 否定辞 得る 読む

まだ読んでいない本

上記に対し、*thii* のない下記では、修飾節ではなく、文になってしまう。逆に言えば、文あるいは複合語として解釈されるおそれがなければ *thii* がなくともよい。

- (108) *náp̄sũũ yag máy dáy ʔàan*
 本 まだ 否定時 得る 読む
 本はまだ読んでいない。

6.3.2 指示対象が人の場合

「良い友人」を表現したいときは、*phũan thũ dii (dii)* や *phũan khon thũ dii (dii)* と言うが、*phũan khon dii* は普通言わない。これは、数詞を伴わない類別詞が個別性、特定の「友人一人」を表してしまい、一般に複数を前提とする「友人」の含意と合致しなくなるためかもしれない。

- (109) ? *phũan khon dii*
 友人 類別 良い
 良い友人

- (110) *phũan thũ dii (dii)*
 友人 関係詞 良い
 良い友人

- (111) *phũan khon thũ dii (dii)*
 友人 類別 関係詞 良い
 良い友人

しかし、以下のように自分の息子に愛情を表す表現として *liuk chaay khon dii* は言える。

- (112) *liuk chaay khon dii khõõg m̄e*
 息子 類別 良い の 母
 お母さん [私] の愛する息子

以下の「医者友人」のような同格的な表現は、タイ語では「医者である友人」のように、関係詞と状態動詞「である」を用いた名詞修飾節にする必要がある。

- (113) *kháw mi phũan (thũ) pen m̄õ ... (84)* の再掲
 彼 いる 友人 (関係詞) である 医者
 彼は医者をしている友人がいる。

以下は、名詞「友人」を修飾する名詞修飾節の例である。

- (114) *kháw mi phũan (thũ) pen khon ruay*
 彼 いる 友人 (関係詞) である 人 金持ち
 彼は金持ちの友人がいる。

- (115) *phũan thũ ruay*
 友達 関係詞 金持ち
 金持ちの友達

以下のように、関係詞を用いないと、「文」として解釈される⁴。

(116) *phûan ruay*
友達 金持ち
友達が金持ちだ。

(117) *kháw mii phûan sanit*
彼 いる 友人 親しい
彼は親しい友人がいる。

(118) *kháw mii phûan (thîi) cay dii*
彼 いる 友人 (関係詞) 親切な
彼は親切な友人がいる。

(119) *kháw mii phûan dii (dii)*
彼 いる 友人 良い (良い)
彼は良い友人がいる。

ただし、*dii* がひとつだと、「良い友人を持っている」、*dii dii* だと、「いい友人が複数いる」という含意がある。

(120) ○ *raw pen phûan thîi dii tō kan*
私達 である 友人 関係詞 良い 互いに
私達は良い友人同士だ。(良い友人=互いに助けあう。)

以下の場合、上記の場合と同様に、*thîi* が必要である。

(121) × *raw pen phûan dii tō kan*
私達 である 友人 良い 互いに
×私達は良い友人同士だ。

(122) *kháw mii phûan leew (leew)*
彼 いる 友人 悪い (悪い)
彼は悪い友人を持っている。

この場合、*leew* は一つでも二つでもいい。(ただし、二つだと、複数の悪い友人がいて、彼もその影響を受けやすい、かも。)

(123) *phûan khon thîi phâŋ cəə mîa waan*
友人 人 関係詞 ~したばかり 会う 昨日
昨日会った友人

(124) *phûan (khon) thîi chán cəə mîa waan*
友人 (人) 関係詞 私 会う 昨日
昨日私が会った友人

上記の場合、*khon* がないといけない。*khon* は、「数人の友人がいるうちで、昨日会った特定の誰か」という特定化に必要である。

従って、類別詞のない以下はあまり良くない表現となる。

(125) *△ phūan thii cəə mūa waan*

友人 関係詞 会う 昨日

△昨日会った友人

(126) *kháw khít thūŋ nɔŋ khon thii taay pay léew*

彼 想う ~について 妹 人 関係詞 死ぬ 行く 完了

弟妹が2人以上いて、そのうち死んだ方を想っている。

上記のように、khon がある場合は個体化されており、弟妹が2人以上いなくてはいけない。(死んだのは普通そのうち一人だけ。)

以下のように khon がないと、弟妹が何人いるか不明となり、また死んだ人も何人か不明となる。

(127) *kháw khít thūŋ nɔŋ thii taay pay léew*

彼 想う ~について 妹 関係詞 死ぬ 行く 完了

弟妹が1人(か2人以上いて)そのうち死んだ方を想っている。

二人いて二人とも死んだ場合ならば、以下のようにいう。

(128) *kháw khít thūŋ nɔŋ thii taay pay léew tháy sɔŋ khon*

彼 想う ~について 妹 関係詞 死ぬ 行く 完了 とともに 二人

死んでしまった2人の弟妹を想っている。

(129) *phūan (khon) thii yùu dūay kan*

友人 (人) 関係詞 いる 一緒

一緒に住んでいる友人

上記では、khon があれば、友人は一人であり、khon がなければ、「いろんな友人がいて、そのうち一緒に住んでいる友人(普通は一人)」というように特定化される。

(130) *phūan (khon) thii mây dâŋ cəə naan léew*

友人 (人) 関係詞 否定 得る 会う 長い 完了

しばらく会っていない友人

この場合、khon はあってもなくても良いが、khon があると、「一人」を指す。

以下は、関係節であるが、関係詞 thii がなくともよい。関係詞がなくとも tua sūŋ 「高い身体」が名詞に相当し、「名詞+名詞」の修飾関係が成り立つためと考えられよう。

(131) *kháw mii phūan (thii) tua sūŋ sūŋ*

彼 いる 友人 (関係詞) 身体 高い 高い

彼は背の高い友人がいる。

この場合、友人は一人を指す。また、sūŋ はこの場合、二つあった方がいい。

(132) *kháw mii phūan (thii) tua sūŋ sūŋ lāy khon*

彼 いる 友人 (関係詞) 身体 高い 高い 沢山人

背の高い友人が何人もいる。

7 2つの修飾要素の共起

タイ語の場合、以下のような修飾要素の共起が可能である。

第1要素\第2要素	ア複数	イ量化	ウ所有者	エ指示	オ名詞的修飾	カ動詞的修飾
ア 複数	—	○	○	×	○	○
イ 量化		—	○	○	○	○
ウ 所有者		○	—	○	○	○
エ 指示		○	○	—	○	×
オ 名詞的修飾		○	○	○	—	○
カ 動詞的修飾		○	○	○	○	—

7.1 複数とその他の共起制限

(ア) 複数、他の修飾要素 (イ) 量化、(ウ) 所有者、(エ) 指示、(オ) 名詞的修飾、(カ) 動詞的修飾と、次のような共起関係にある。

(133) *phûak nápsǔw sām lêm*

類 本 3 類別詞
3冊の本 [類] (ア-イ)

(134) (*phûak*) *nápsǔw (khǒŋ) chán*

類 本 の 私
私の本 [類] (ア-ウ)

(135) × *phûak nápsǔw (lêm) nǐ*

類 本 類別詞 この
私の本 [類] (ア-エ)

(ア) と (エ) は共起できない。これは、(64) で見たように、*lêm nǐ* は単数を含意するため、複数を示す *phûak* との共起は矛盾すること、また (67) で見たように、数詞を伴わない *lêm* を複数を示す場合に使うには、*phûak* 自体を類別詞として用いて後置するべきであるためであろう。

上記でなく、以下のように *phûak* を類別詞として用いるべきである。

(136) *nápsǔw phûak nǐ*

本 類 この
これらの本

(137) *phûak nápsǔw (wícha) phaasāsàat*

類 本 分野 言語学
言語学の本 [類] (ア-オ)

(138) *phûak nápsǔw lêm nǎa-nǎa*

類 本 類別詞 厚い
厚い本 [類] (ア-カ)

- (139) *phûak nâḡsũu thũi ʔaacaan khian*
 類 本 関係詞 先生 書く
 先生が書いた本 [類] (ア-カ)

7.2 量化とその他の共起制限

(イ) 量化が、他の修飾要素 (ウ) 所有者、(エ) 指示、(オ) 名詞的修飾、(カ) 動詞的修飾と共起する場合、相互の順序は入れ替えが可能である。

以下の「私の3冊の本」のような場合、(イ) 量化と (ウ) 所有者は順序の入れ替えが可能である。

- (140) *nâḡsũu sãam lêm khõḡḡ chán*
 本 3 類別詞 の 私
 私の3冊の本 (イ-ウ)

- (141) *nâḡsũu (khõḡḡ) chán sãam lêm*
 本 の 私 3 類別詞
 3冊の私の本 (ウ-イ)

以下の「この3冊の本」のような場合、(イ) 量化と (エ) 指示は順序の入れ替えが可能である。

- (142) *nâḡsũu sãam lêm (phûak) nũi*
 本 3 類別詞 類 この
 この(これら)3冊の本 (イ-エ)

- (143) *nâḡsũu phûak nũi sãam lêm*
 本 類別 この 3 類別詞
 3冊のこれらの本 (エ-イ)

以下の「3冊の言語学の本」の場合、(イ) 量化と (オ) 名詞的修飾は順序の入れ替えが可能である。

- (144) *nâḡsũu (wíchaa) phaasãasàat sãam lêm*
 本 分野 言語学 3 類別詞
 3冊の言語学の本 (オ-イ)

- (145) *nâḡsũu sãam lêm wíchaa phaasãasàat*
 本 3 類別詞 分野 言語学
 言語学の3冊の本 (イ-オ)

以下の「3冊の分厚い本」の場合、(イ) 量化と (カ) 動詞的修飾は順序の入れ替えが可能である。

- (146) *nâḡsũu sãam lêm thũi nãa nãa*
 本 3 類別詞 関係詞 厚い
 厚い3冊の本 (イ-カ)

- (147) *nâḡsũu lêm nãa (nãa) sãam lêm*
 本 厚い 3 類別詞
 3冊の厚い本 (カ-イ)

以下の「先生が書いた3冊の本」の場合、(イ) 量化と(カ) 動詞的修飾は順序の入れ替えが可能である。

(148) *náŋsǔ̄w sǎam lēm thîi ʔaacaan khīan*
 本 3 類別詞 関係詞 先生 書く
 先生が書いた3冊の本(イ-カ)

(149) *náŋsǔ̄w thîi ʔaacaan khīan sǎam lēm*
 本 関係詞 先生 書く 3 類別詞
 3冊の先生が書いた本(カ-イ)

7.3 所有者とその他の共起制限

(ウ) 所有者が、他の修飾要素、(イ) 量化、(エ) 指示、(オ) 名詞的修飾、(カ) 動詞的修飾と共起する場合、相互の順序は入れ替えが可能である。

前節 §7.2 で見たように、(イ) 量化と(ウ) 所有者とは順序の入れ替えが可能であった。

以下の「これらの私の本」の場合、(ウ) 所有者と(エ) 指示は順序の入れ替えが可能である。

(150) *náŋsǔ̄w (khǔ̄ŋ) chán phûak nîi*
 本 の 私 類別 この
 これらの私の本(ウ-エ)

(151) *náŋsǔ̄w phûak nîi khǔ̄ŋ chán*
 本 類別 この の 私
 私のこれらの本(エ-ウ)

以下の「私の言語学の本」の場合、(ウ) 所有者と(オ) 名詞的修飾は順序の入れ替えが可能である。

(152) *náŋsǔ̄w (khǔ̄ŋ) chán wíchaa phaasāasàat*
 本 の 私 分野 言語学
 言語学の私の本(ウ-オ)

(153) *náŋsǔ̄w (wíchaa) phaasāasàat (khǔ̄ŋ) chán*
 本 分野 言語学 の 私
 私の言語学の本(オ-ウ)

ただし、(154) のように、分野という語がない場合には非文となる。

(154) × *náŋsǔ̄w (khǔ̄ŋ) chán phaasāasàat*
 本 の 私 言語学
 言語学の私の本(ウ-オ)

以下の「私の分厚い本」の場合、(ウ) 所有者と(カ) 動詞的修飾とは順序の入れ替えが可能である。

(155) *náŋsǔ̄w khǔ̄ŋ chán lēm thîi nāa-nāa*
 本 の 私 類別詞 関係詞 厚い
 厚い私の本 [単数] (ウ-カ)

- (156) *náŋsũtu lêm nãa khɔŋ chán*
 本 類別詞 厚い の 私
 私の厚い本 [単数] (カ-ウ)

7.4 指示とその他の共起制限

(エ) 指示が、他の修飾要素、(イ) 量化、(ウ) 所有者、(オ) 名詞的修飾、(カ) 動詞的修飾と共起する場合、動詞的修飾の場合を除いて、相互の順序は入れ替えが可能である。

§7.2 で見たように、(イ) 量化と(エ) 指示とは順序の入れ替えが可能であった。また、§7.3 で見たように、(ウ) 所有者と(エ) 指示とは順序の入れ替えが可能であった。

以下の「これらの言語学の本」の場合、(エ) 指示と(オ) 名詞的修飾とは順序の入れ替えが可能である。

- (157) *náŋsũtu phũak ní wíchaa phaasãasàat*
 本 類別 この 分野 言語学
 これらの言語学の本 (エ-オ)

上記はまた、「これらの本は言語学分野のもので。」という文とも解釈される。

- (158) *náŋsũtu (wíchaa) phaasãasàat phũak ní*
 本 分野 言語学 類別 この
 これらの言語学の本 (オ-エ)

- (159) *náŋsũtu (wíchaa) phaasãasàat ní*
 本 分野 言語学 この
 言語学の本というのは、...

上記の場合、*phũak* がないと、*ní* は、指示ではなく、主題化されたように感じられる。

以下の「これらの厚い本」の場合、(エ) 指示と(カ) 動詞的修飾とは(カ-エ)の順序でしか現れない。

- (160) × *?náŋsũtu phũak ní lêm thũ nãa nãa*
 本 類別 この 類別詞 関係詞 厚い
 これらの本のうち、分厚い本 (エ-カ)

上記のように、指示(エ)の後に動詞的修飾(カ)が来るとおかしい。これは、(67) で見たように、数詞を伴わないために、単数を含意する類別詞 *lêm* を用いつつ、複数を指示するためには、*phũak ní* を後置させなければならないためと考えられる。

- (161) *náŋsũtu lêm nãa nãa phũak ní*
 本 類別詞 厚い 類別 この
 これらの厚い本 (カ-エ)

- (162) *náŋsũtu thũ ʔaacaan khian phũak ní*
 本 関係詞 先生 書く 複数 この
 これらの先生が書いた本 (カ-エ)

- (163) *náŋsũtu phúak nú thũ ʔaacaan khĩan*
 本 複数 この 関係詞 先生 書く
 先生が書いたこれらの本 (エ-カ)

7.5 名詞的修飾とその他の共起制限

(オ) 名詞的修飾が、他の修飾要素、(イ) 量化、(ウ) 所有者、(エ) 指示、(カ) 動詞的修飾と共起する場合、相互の順序は入れ替えが可能である。

§7.2 で見たように、(イ) 量化と(オ) 名詞的修飾とは順序の入れ替えが可能であった。また、§7.3 で見たように、(ウ) 所有者と(オ) 名詞的修飾とは順序の入れ替えが可能であった。さらに、§7.4 で見たように、(エ) 指示と(オ) 名詞的修飾とは順序の入れ替えが可能であった。

以下の「先生が書いた言語学の本」の場合、(オ) 名詞的修飾と(カ) 動詞的修飾とは順序の入れ替えが可能である。

- (164) *náŋsũtu (wĩchaa) phaasāsàat thũ ʔaacaan khĩan*
 本 分野 言語学 関係詞 先生 書く
 先生が書いた言語学の本 (オ-カ)

- (165) *náŋsũtu thũ ʔaacaan khĩan wĩchaa phaasāsàat*
 本 関係詞 先生 書く 分野 言語学
 言語学の、先生が書いた本 (カ-オ)

7.6 修飾節同士の順序

以下の「先生が書いた分厚い本」の場合、(カ) 動詞的修飾の拡張である修飾節同士は順序の入れ替えが可能である。

- (166) *phúak náŋsũtu lêm nãa nãa thũ ʔaacaan khĩan*
 複数 本 類別詞 厚い 関係詞 先生 書く
 先生が書いた厚い本 [複数] (カ-カ)

- (167) *phúak náŋsũtu thũ ʔaacaan khĩan lêm nãa nãa*
 複数 本 関係詞 先生 書く 類別詞 厚い
 厚い先生が書いた本 [複数] (カ-カ)

8 類別詞について

ここでタイ語の類別詞使用の特徴に関して簡単に触れておくことにする。それぞれの問題についてなお十分な検討を行うべきであるが、今後の課題としたい。

8.1 類別詞の有無

類別詞は、それぞれの名詞について、必須の要素ではない。以下のように、名詞が類別詞をとまなわない場合もある。

(168) *bāan nūi*
「この家族」

上記では、家から、その内部の「家族」へと意味の拡張があるため、適当な類別詞がないのかもしれない。建物を指す場合には、*bāan lǎŋ nūi*（この家 [一軒]）という。

(169) *khŕōp khrua nūi*
家族 この
この家族

khŕōp khrua 「家族」という場合、類別詞は *khŕōp khrua* である。

(170) *mùubāan nūi mii khŕōp khrua ʔaasāy yùu sip khŕōp khrua*
集落 この 在る 家族 住む いる 10 家族
この集落には10家族が住んでいる。

ただし、*khŕōp khrua khŕōp khrua nūi* と繰り返しては、普通言わない。抽象名詞の場合も、類別詞（というより一般名詞）を使うこともできる。

(171) *khwaam ríusùk (bèep) nūi*
気持ち 様式 この
このような気持ち

「類別詞+数詞」の位置に現れる名詞は、一種類とは限らない。

(172) *khày nùŋ {fɔŋ/lúuk/bay}*
卵 1 類別詞 {あぶく/丸いもの/葉・平たいもの}
ひとつの卵（どの類別詞でもいい）

8.2 数量詞の出現位置について

以下のように、数量表現は、名詞直後ではなく、動詞句末の位置に置かれることもある。数量表現がある場合、数量に情報の焦点がある場合が多いが、句末がその位置にあたるためかもしれない。

(173) *mii khèek maa khêε sāam khon*
いる 客 来る ~だけ 3 人
お客さんは三人しか来なかった。

(174) *mii khèek (× thii) maa hāa khun sāam khon*
いる 客 (関係詞) 来る 訪ねる あなた 3 人
三人のお客さんがあなたを訪ねて来た。

上記では、*thii* は使ってはいけない。「過去の留守中に来客が3人あった」という意味である。

- (175) *mii khèek hāa khon maa thii boorisàt, tèe thii tâncay*
 いる 客 5 人 来る [関係詞] 来る しかし [関係詞] わざわざ
maa hāa khun mii sām khon
 来る 訪ねる あなた いる 3 人
 五人のお客さんが来たが、あなたを訪ねて来たのは三人だ。

次例では *thii* があってもよい。

- (176) *mii khèek (thii) yàak ca maa hāa khun sām khon*
 いる 客 (関係詞) ~したい 来る 訪ねる あなた 3 人
 これからあなたを訪ねたい客が3人いる。

- (177) *mii khèek maa hāa khun sām khon*
 いる 客 来る 訪ねる あなた 3 人
 あなたを訪ねて来たお客さんが3人いた。

- (178) *mii khèek thii maa hāa khun khêe sām khon*
 いる 客 関係詞 来る 訪ねる あなた ~だけ 3 人
 あなたを訪ねて来たお客さんが3人だけいた。

上記では、(例えば会社への来客が全部で十人いたとして、そのうち)「あなたを訪ねてきたのが」という意味である。このように、一部を取り出して特定化するのに *thii* を用いると、*khêe* もまた必要になるといえるかもしれない。

9 まとめ

本稿では、タイ語の名詞句の構成要素について、複数表現、量化表現、所有者表現、指示表現、名詞的修飾表現、動詞的修飾表現の場合を検討してきた。

タイ語の名詞句構成においては、類別詞の使用が特徴的である。類別詞が名詞類の一つであるために、類別詞を伴うことによって、量化表現、指示表現、名詞的修飾表現、動詞的修飾表現が用いられる際の独立性を高めることができる。結果として、「名詞+類別詞+その他の表現」は、「名詞+名詞」と同等に近い出現の自由度を得ることになる。

類別詞は他に数量に関する表現を伴わずに用いられる場合、その指示対象が単数であり、個別の存在であることを含意する。この個性性から、類別詞を伴わない表現と対比した場合における「対比・対照」のニュアンスを獲得することになる。

また、所有者表現も本来純粋な機能語ではなく、「品物」という一般名詞であるため、高い独立性を持つ。

結果として、タイ語名詞句内部のそれぞれの出現要素の共起関係や出現位置は、「単数性、複数性」のような意味的な矛盾を生じない限りにおいて、かなり自由であるといえそうである。

注

1 phûak に類似する語として, camphûak (類, 種類) があり, 以下のような例で使われる。
sàt camphûak kháaŋkhaaw (動物+類+コウモリ) = 「コウモリの類の動物」。

2 náŋsũuu camnuan mâak 「多数の本」が言えるのに対し, ?phûan camnuan mâak 「多数の友人」は普通言わない。

3 前だけ省略したものは終助詞, 例えば ?eeŋ をつけるとより落ち着く。

phûan m̄e khǝŋ chán ?eeŋ

友人 母 ~の 私 [終助詞] (私の母の友人よ)

4 「金持ちの友人」の場合には, 「文」と解釈されるのに対し, phûan dii 「良い友人」の場合は, 文ではなく名詞修飾と解釈される。どちらも名詞を状態動詞が修飾する構造であるので, 両者の違いは語の意味結合に起因すると考えざるを得ない。

参考文献

松山納. 1994. 『タイ語辞典』. 大学書林.

三上直光. 2002. 『タイ語の基礎』. 白水社.

三谷恭之. 1998. 「タイ語」. 『言語学大辞典』第2巻, pp.529-545. 三省堂.

富田竹二郎. 1997. 『タイ日大辞典』. めこん.

ラオ語の名詞句構造

鈴木 玲子

目次

はじめに

1. ラオ語概要

- 1. 1 系統・分布・話者数
- 1. 2 音韻
- 1. 3 文法

2. インフォーマント・資料

- 2. 1 インフォーマント
- 2. 2 資料・使用語彙

3. 先行研究

4. 修飾要素が一つの場合

- 4. 1 複数表現
- 4. 2 量化表現
- 4. 3 所有表現
- 4. 4 指示表現
- 4. 5 名詞的修飾表現
- 4. 6 動詞的修飾表現
- 4. 7 名詞句と複合語

5. 修飾要素が複数個の場合

- 5. 1 修飾要素が二つの場合
- 5. 2 修飾要素が三つの場合
- 5. 3 修飾要素が四つ以上の場合
- 5. 4 修飾要素が複数個ある場合のまとめ

6. まとめ

おわりに

注

参考文献

はじめに

本稿は、ラオ語における名詞句の構造について検討することを目的とする。具体的には、名詞にさまざまな修飾要素を付加した場合の形式とその形式が示す意味を検討する。

1. ラオ語概要

1. 1 系統・分布・話者数

「ラオ語」はラオス人民民主共和国（以下「ラオス」と呼ぶ）の公用語であり、同国の使用においては独自の文字を持つ。現地語に従って「ラーオ語」、あるいは国名をとって「ラオス語」ともいう。系統は現在のところ、タイ・カダイ語族タイ (Tai) 諸語の南西タイ語群に属するということまで認められている。

分布域は主にラオス国内と東北タイである。話し手は、ラオス国内に約 521 万人¹と言われているが、この中には日常会話は他の固有の言語を話し、ラオ語を母語としない民族も含む。また、東北タイで話されているタイ語東北タイ方言「イサーン方言」は、文字を持つラオス国内のラオ語とは若干の違いはあるものの、同じ言語の方言であり、その話し手は約 1800 万人と言われる。

1. 2 音韻

ラオ語は単音節声調言語で、音韻体系、語彙ともに地域差が著しい。本稿のラオ語は、ラオス国内でもっとも標準的な発音であるとみなされている首都ヴィエンチャン方言のことをさす。音韻表記は上田 (1995) と鈴木 (1999) に従う。以下に音韻体系の概略を述べる。

1. 2. 1 音節構造

音節は、頭子音を C1、母音を短母音は V、長母音あるいは二重母音は VV、末子音を C2、声調を T とすると、一般に次のように書き表せる。「/T」は音節全体に声調がかかるという意味である。

C1VC2/T

または

C1VV(C2)/T

母音が短母音であるときは末子音を必ず伴うが、母音が長母音あるいは二重母音であるときは末子音は任意である。

1. 2. 2 子音音素

子音は20である。以下に音素一覧を示す。

	両唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
無声無気閉鎖音	p	t	c	k	ʔ
無声有気閉鎖音	ph	th		kh	
有声閉鎖音	b	d			
鼻音	m	n	ɲ	ŋ	
摩擦音	f	s			h
両側音		l			
弱摩擦音	w	y			

これらの子音は、全て頭子音としてたちうるが、末子音は/p,t,k,ʔ,m,n,ŋ,w,y/の9つである。

1. 2. 3 母音音素

母音は基本母音は9つで、各々長短の別がある。他に二重母音が3つある。

(1) 短母音

i	ɯ	u
e	ə	o
ɛ	a	ɔ

(2) 長母音

ii	ɯɯ	uu
ee	əə	oo
ɛɛ	aa	ɔɔ

(3) 二重母音

ia	ɯa	ua
----	----	----

1. 2. 4 声調

声調は次の5つである。ただし全昇調の音節に後続音節がある場合は、実際は上がりきらないで、低いままであるという特徴がある。

(1) /˨˨˨/ 全昇調：全昇型で、次低域²に始まり、次高域あたりまでゆるやかに上昇する。5段階表記で概略[25]と表記できる。ただし切れ目なしに後続音節が続く位置では低平型[22]と低昇型[23]が自由変異的に現れ、低平型[22]であることが多い。

例) /khǎaŋ/ [khaaŋ 25] 「火にあぶる」

/lǎŋkháa/ [laŋ 22 khaa 34] 「屋根」

(2) / ˊ / 高昇調：あまり高くない高昇型で、次の(3)の / / と同じ中域に始まり、次高域までわずかに上昇する。[34]。

例) /kháaŋ/ [khaaŋ 34] 「あご」

(3) / / 中平調：中平型で、やや高めの中域に始まり、そのまま平らに持続する。

例) /khaaŋ/ [khaaŋ 33] 「オナガザル」

(4) / ˋ / 低降調：低降型で、やや低めの中域ないし次低域に始まり、低域までゆるやかに下降する。付随的特徴として、休止の前では、音節の末尾に喉頭の緊張を伴う。

例) /khàaŋ/ [khaaŋ 21] 「傍ら・面」

(5) / ˆ / 全降調：全降型で高域から次低域あたりまで一気に下降する。休止の前での音節末尾の緊喉は、あまり顕著ではない。

例) /khâaŋ/ [khaaŋ 52] 「泊まる・突き刺す」

1. 3 文法

1. 3. 1 基本的語順

ラオ語は形態論的には孤立語である。文の語順は、基本的にはいわゆる「主語＋動詞＋目的語」の語順をとる。例えば「私はご飯を食べる」という文は、語形変化もしなければ、日本語の助詞「は」「を」に相当する語もないので、次のように「私＋食べる＋ご飯」という語順に語を置く。

「私はご飯を食べる」：「私＋食べる＋ご飯」
khòy kǐn khàw

また句は「被修飾語＋修飾語」の順である。例えば「赤い花」は「花＋赤い」という語順をとる。

「赤い花」：「花＋赤い」
dòokmây dǎeŋ

付属語は自立語の前に置く。例えば「家には」は「～から＋家」という語順をとる。

「家から」：「から＋家」
càak húan

1. 3. 2 名詞句について

前節で示したように、ラオ語の修飾関係は、「被修飾語＋修飾語」の語順をとる。した

がって名詞句は「名詞＋修飾要素」と表せる。例えば、次の例(1)に示すように「大きいネコ」は、被修飾語である名詞「ネコ」の後ろに修飾語である修飾要素「大きい」を置く。

(1) 「名詞＋修飾要素」

méew jay

ネコ 大きい

「大きいネコ」

このように修飾要素を名詞の後ろに直接置く場合もあれば、名詞と修飾要素との間に類別詞(例2)や関係代名詞(例3)などの連結要素を介在させる場合もある。

(2) 「名詞＋類別詞＋修飾要素」

méew tōo jay

ネコ(類別詞) 大きい

「大きいネコ」

(3) 「名詞＋関係代名詞＋修飾要素」

méew thii jay

ネコ(関係代名詞) 大きい

「大きいネコ」

名詞句において、どのようなときに類別詞や関係代名詞などの連結要素を必要とし、どのようなときに必要としないか、またその際、両者の間に意味の違いはあるのか、ということについては後で詳しく検討する(第6章)。

2 インフォーマント・資料

2.1 インフォーマント

インフォーマントとしてアルン・シーラタナクン氏にご協力いただいた。氏はラオス人民民主共和国ヴィエンチャン特別区郊外の南ホム村生まれ、同村育ちで、現在48歳、男性である。母親も南ホム村出身で、父親は北ホム村出身である。氏は16歳までを同村で過ごし、17歳よりラオス国立大学があるヴィエンチャン特別区ドンドーク村で暮らす。2003年4月よりラオス国立大学文学部副学部長を退職し、東京外国語大学外国語学部客員助教授として2年間東京に在住した。現在はラオスに帰国し、ラオス国立大学学務部部长である。氏には、インフォーマントとしてご協力いただくと共に、貴重なアドバイスもいただいた。長時間にわたるご協力に心よりお礼申し上げる。

2. 2 資料・使用語彙

本稿における用例のほとんどは、インフォーマントの作例によるものである。その際、無生物である「モノ」の名詞として「pûm (本)」を、生物である「ヒト」の名詞として「ʔăacăan (先生)」³を主に使用した。「ヒト」以外の生物の名詞として「méew (ネコ)」を用いるなど、他の名詞の場合についても必要に応じて適宜言及することにする。

修飾要素については、「名詞句構造調査の手引き：修飾要素のグループ分け（暫定版）」（澤田 2003）をもとに、下記の7つの項目に分けて検討した。

- 1) 複数表現
- 2) 量化表現
- 3) 所有者表現
- 4) 指示表現
- 5) 名詞的修飾表現
- 6) 動詞的修飾表現

これらのうち、所有者表現の所有者は、名詞的成分であるので（3）は（5）に含まれると考えられる。しかしながら（3）の所有者、即ち修飾要素は、所有もしくは所属を表す「khǎɔŋ」という語を名詞と修飾要素の間に連結要素として使用する場合があるので、特に別の項目をたてることにする。

3. 先行研究

ラオ語の名詞句の構造について論じた論文はない。文法書や学習書に若干の記述があるが、名詞句について詳しく記述されているものはない。

4. 修飾要素が一つの場合

本章では、先の2. 2で示した修飾要素が、一つのみ使用される場合の名詞句について検討していく。主として名詞は「モノ」の名詞「pûm (本)」を使用し、「ヒト」の名詞「ʔăacăan (先生)」や他の名詞については、「pûm (本)」の場合と異なる結果がある場合にのみ、言及する。

4. 1 複数表現

名詞に直接付加される複数表現については、次の例(4)に見るように、単数の場合も複数の場合も同じ語を使用することができるので、ラオ語の名詞は一般には原則として単数と複数の区別をしないとよい。

(4) kùap thuk ?ăacăan náy pathêet lúantee míi băy pakàat

殆ど 全～ 先生 ～の中 国 全て ある 免許状

「国中の殆ど全ての先生は皆、免許状を持っている」

例(4)は「殆ど全ての先生」とあることから「先生」は複数であり、また「全ての先生にある免許状」も、先生が複数であることから複数枚であることは明らかである。しかしながら、「先生」に当たる「?ăacăan」も「免許状」に当たる「băy pakàat」も、複数を表す特別な語を付加したりすることなく、単数の場合と同じ形である。

ただし、複数のとき、「cămphûak, phûak, sùm」を名詞の前に置くこともある。いずれも複数あるものをひとまとめに分類する場合に使用するようである。これらは次のような違いがある。

「cămphûak」は構成員全員が同じカテゴリーに属することを前提とするが、「phûak」は同じカテゴリーに必ずしも属さなくてもよい。例えば、次の(5a)は、フォーを食べに行くのは全員「先生」であるが、(5b)はフォーを食べに行くのは全員「先生」とは限らない。

(5a) cămphûak ?ăacăan pây kîn fǎo námkăn

(5b) phûak ?ăacăan pây kîn fǎo námkăn

先生 行く 食べる フォー 一緒に

「先生達は一緒にフォーを食べに行く」

「先生」を個人名である「オレー」にすると、より明確で、(6a)が非文なのは、全員がオレーにはなり得ないからである。一方の(6b)は「オレーと他の人々」がフォーを食べに行くということであるから、事実として成立し、非文とはならない。

(6a)*cămphûak ?oolêe pây kîn fǎo námkăn

(6b) phûak ?oolêe pây kîn fǎo námkăn

オレー 行く 食べる フォー 一緒に

「オレー達は一緒にフォーを食べに行く」

また一般に「cămphûak」は原則としてヒト以外の名詞に使用し、「phûak」はヒトを表す名詞に使用するという傾向がある。

(7a) cămphûak pŭm

本

(7b) cǎmphûak méew

ネコ

(7c) cǎmphûak ʔăcǎan . . . あまり言わない

先生

(7d)*cǎmphûak câw

あなた

(8a)*phûak pûm

本

(8b)*phûak méew

ネコ

(8c) phûak ʔăcǎan

先生

(8d) phûak câw

あなた

「súm」は暫定的ではあるが、「～団」というような特定集団をさす場面でよく使用する傾向がある。例えば、次の例(9)は、先生の集合写真を見てその中の一部のグループを指す場合に使用する。

(9) súm ʔăcǎan nîi mii tee hây

先生 この ある ～のみ 怒る

「この先生達は怒ってばかりいる」

また「súm」はヒトを表す名詞にのみに使用できる。

(10a)*súm pûm

本

(10b)*súm méew

ネコ

(10c) súm ʔăcǎan

先生

(10d) súm câw

あなた

上述の複数表示「*cămphûak, phûak, sùm*」は名詞の前に位置する。これらは名詞を修飾する修飾要素ではなく、実は「*cămphûak, phûak, sùm*」が「名詞+修飾要素」の「名詞」部分であると考えられる。なぜならば、次の例(11a~c)で示すように「名詞(複数表示)+修飾要素(名詞)+類別詞(複数表示と同じ語)+指示詞」という形が可能であるからである。

(11) 「名詞(複数表示)+修飾要素(名詞)+類別詞(複数表示と同じ語)+指示詞」

(11a) *cămphûak pûm cămphûak nîi*

本 この

(11b) *phûak ?ăacăan phûak nîi*

先生 この

(11c) *sùm ?ăacăan sùm nîi*

先生 この

上述の指示詞「*nîi*(この)」は、必ず名詞あるいは類別詞の後ろに位置するものである。例(11a)(11b)(11c)の場合、指示詞の直前の複数表示は、句頭に同じ複数表示の語があるので、名詞ではなく、類別詞であり、句頭の語が名詞であると考えられる。従って先に挙げた複数表示は実は名詞であるといえることができる。

従って名詞の前に位置する複数表示は、一見、ラオ語の名詞句構造「名詞+修飾要素」とは矛盾する構造をとるように見えるが、実は、名詞句頭に位置する複数表示が名詞で、用例で挙げた「*pûm*(本)」や「*?ăacăan*(先生)」などは、複数表示を修飾している要素であり、句構造の例外ではないといえることができる。ただし、これら複数表示は単独では使用することはなく、後ろになんらかの限定表現を必要とするという特徴がある。これは何が複数なのか、後続要素で言及しないと内容が空虚であるからである。

4. 2 量化表現

量化表現は、具体的な個数を言及する場合は、原則として「名詞+数詞+類別詞」の語順をとる。ただし「1」のときは類別詞と数詞を入れ替えて「名詞+類別詞+数詞」としてもよい。名詞がヒトを表す場合も同様である。

(12a) *pûm nuŋ hũa*

本 1 clf.⁵

(12b) *pûm hũa nuŋ*

本 clf. 1

「一冊の本」

(13) pŭm sǎŋ hŭa

本 2 clf.

「二冊の本」

(14) pŭm cāk hŭa

本 いくつ clf.

「何冊の本」

特に「唯一」と言うときは数詞は「1」ではなく、「名詞+類別詞+điaw」を使用する。

(15) pŭm hŭa đĭaw,

本 clf. 唯一

「たった一冊の本」

一方、具体的な数量ではなく、概数を表す場合は「名詞+概数表示+類別詞」もしくは「概数表示+名詞」の語順をとる。ただし「概数表示+名詞」はあまり使用しない。

(16a) pŭm bǎŋ hŭa

本 ある clf.

「ある本」「数冊の本」

(16b) bǎŋ pŭm . . .あまり使用しない

ある 本

「ある本」「数冊の本」

(17a) pŭm kùap (mót) thuk hŭa ⁶

本 殆どの (尽きる) 全て clf.

「殆どの本」

(17b) kùap (mót) thuk pŭm . . .あまり使用しない

殆どの (尽きる) 全て 本

「殆どの本」

(18a) pŭm (mót) thuk hŭa

本 (尽きる) 全て clf.

「全ての本」

(18b) (mót) thuk pûm . . . あまり使用しない

(尽きる) 全て 本

「全ての本」

名詞がヒトの場合も「概数表示+名詞」はあまり使用しない。特に、ヒト以外の生物の場合は殆ど使用しない。

(19a) bǎaŋ ʔăacǎan . . . あまり使用しない

ある 先生

「ある先生」「数人の先生」

(19b) *bǎaŋ méeew

ある ネコ

「あるネコ」「数匹のネコ」

(19c) *bǎaŋ pǎa

ある 魚

「ある魚」「数匹の魚」

(20a) kùap (mót) thuk ʔăacǎan . . . あまり使用しない

殆どの (尽きる) 全て 先生

「殆どの先生」

(20b) *kùap (mót) thuk méeew

殆どの (尽きる) 全て ネコ

「殆どのネコ」

(20c) *kùap (mót) thuk pǎa

殆どの (尽きる) 全て 魚

「殆どの魚」

(21a) (mót) thuk ʔăacǎan . . . あまり使用しない

(尽きる) 全て 先生

「全ての先生」

(21b) *(mót) thuk méεw
(尽きる) 全て ネコ
「全てのネコ」

(21c) *(mót) thuk pǎa
(尽きる) 全て 魚
「全ての魚」

概数表示の一つである「bǎndǎa」は「概数表示+名詞」の形のみを使用する。次の例(22a)(22b)(22c)(22d)に見るように、「bǎndǎa」は(22b)「(mót) thuk (全て)」と共起できるが、(22c)「kùap (mót) thuk (殆ど)」や具体的な数詞(22d)「sǒɔŋ (2)」を使用した表現と共起できないことから、「bǎndǎa」は「全ての～類」といった、「名詞」で表している共通の特徴によって、一つのカテゴリーにまとめ、それらに含まれる要素全てを表す場合に使用すると考えられる。

- (22a) bǎndǎa pǔm
本
- (22b) bǎndǎa (mót) thuk pǔm
(尽きる) 全て 本
- (22c) *bǎndǎa kùap (mót) thuk pǔm
殆どの (尽きる) 全て 本
- (22d) *bǎndǎa pǔm sǒɔŋ hǔa
本 2 clf.

また「bǎndǎa」は原則として人称代名詞には使用しないが、例外的に二人称代名詞「thaan」(丁寧体)と使用でき、「皆々様」という演説などの呼びかけに使用する場合はある。

- (23a) bǎndǎa *cǎw
あなた
- (23b) bǎndǎa thaan
あなた(丁寧)
「皆々様(呼びかけ)」

一方の「lǎay」は「名詞+概数表示+類別詞」の形のみを使用する。

(24a) pŭm lăay hŭa
本 沢山の clf.
「沢山の本」

(24b) *lăay pŭm
沢山の 本
「沢山の本」

これは、日本語でも「沢山の本があります」と言うよりも、「本が沢山あります」と、動詞を修飾する形の表現をよく使用するが、ラオス語でも同様のことが考えられる。

次の例も名詞を直接修飾する表現 (25a) (26a) もあるが、動詞を修飾する動詞句的表現 (25b) (26b) の方を使用する方がよいとされる。

(25a) khăay pŭm thánj mót . . . あまり使わない
売る 本 全て
「全ての本を売る」

(25b) khăay pŭm mót
売る 本 尽きる
「本を売り尽くす」

(26a) khăay pŭm thánj lăay . . . あまり使わない
売る 本 沢山
「沢山の本を売る」

(26b) khăay pŭm lăay
売る 本 多い
「本を沢山売る」

次の例の名詞を直接修飾する表現 (27a) (28a) (29a) はほとんど使用せず、実際には動詞を修飾する動詞句的表現 (27b) (28b) (29b) の方をよく使用する。

(27a) mii pŭm cămnúan nuŋ . . . ほとんど使わない
ある 本 数 1
「数冊の本があります。」

(27b) míi pūm dēe

ある 本 ある程度
「本が数冊あります。」

(28a) míi pūm cǎmnúan nòoy . . . ほとんど使わない

ある 本 数 少し
「わずかな本があります。」

(28b) míi pūm nòynun

ある 本 少し
「本が少しあります。」

(29a) míi pūm cǎmnúan lǎay . . . ほとんど使わない

ある 本 数 多い
「多くの本があります。」

(29b) míi pūm lǎay

ある 本 多い
「本が沢山あります。」

名詞がヒトを表す「?ǎacǎan (先生)」の場合も同様で、名詞を直接修飾する表現よりも動詞を修飾する動詞句的表現の方をよく使用する。⁷

以上のことから、ラオ語では、名詞を直接修飾する概数表現はあるにはあるが、実際にはあまり使用せず、動詞を修飾する動詞句的表現を好んで使用するということができる。換言すれば、ラオ語では、数量を表す語句は一般には名詞ではなく、動詞を修飾する形を使用すると言うことができる。

4. 3 所有者表現

所有者表現は「名詞+khǒŋ+所有者」または「名詞+所有者」の語順をとる。「khǒŋ」は「～のもの」「～に属する」という所有、あるいは属性を表す語である。例えば、

(30) pūm khǒŋ khòy

本 ～の 私
「私の本」

(31) ?áacǎan khǒŋ khòy

先生 ～の 私

「私の先生」

どのようなときに「khǒŋ」を必要とするかを以下に述べる。

名詞が具象名詞で、所有者が有生物であるときは一般には「名詞+所有者」を使用する。

(32) pǔm khòy

本 私

「私の本」

名詞が具象名詞で、所有者が無生物であるときは、「khǒŋ」がある方がよい。

(33) pǔm khǒŋ bǒolisát

本 ～のもの 会社

「会社の本」

ただし次の(34)(35)は例外で、「khǒŋ」を入れてはいけない。これらは修飾要素が名詞と意味上切り離して存在すると考えられにくいという特徴を持っている。

(34) khǎa tó?

脚 机

「机の脚」

(35) thúŋ sǎat láaw

旗 国家 ラオス

「ラオスの国旗」

名詞が「感情」や「美しさ」というような抽象名詞であるときは、所有者が有生物であっても無生物であっても「khǒŋ」がある方がよい。

(36) khwáam hūusúik khǒŋ khòy

感情 ～のもの 私

「私の気持ち」

(37) khwáam ŋáam khǒŋ sǎaw láaw

美しさ ～のもの 娘 ラオス

「ラオス女性の美しさ」

(38) khwáam ɲáam khǒɔŋ bāan kəət

美しさ ～のもの ふるさと

「ふるさとの美しさ」

このように名詞によって多少、khǒɔŋ の必要性が異なるが、khǒɔŋ ある方がよい場合でも、特に所有者を述べたい場合は、「名詞+khǒɔŋ+所有者」の形を使用する。

例えば、誰の本か所有者を捜している場合、例(39a)のように khǒɔŋ のある形を使用する。

(39a) pŭm khǒɔŋ pǎy

本 ～の 誰

「誰の本ですか？」

また、(39a)の回答文(39b)も所有者を述べたい文であるはずである。したがって khǒɔŋ のある形を使用する。しかもこのとき、「何についての所有者」か、文脈から明白であるので、「何」の部分述べる必要はなく、「何」に当たる「名詞」を省略して「khǒɔŋ+所有者」の形を使用する。

(39b) khǒɔŋ láaw

～の 彼女

「彼女のです。」

また先の例(35)で例外とした「ラオスの国旗」も「旗を持ってどの国の旗を表しているのか、国名を尋ねる場合には、「名詞+khǒɔŋ+所有者」を使用する。

(40) thúŋ khǒɔŋ sāt dǎy

旗 国家 どの

「どの国の旗ですか？」

以上のことから、所有者を特に言いたい場合には「名詞+khǒɔŋ+所有者」を使用することができる。

4. 4 指示表現

ラオ語の指示詞は近称(話し手から物理的・心理的に近いもの)は「nīi」(この)、遠称(話し手から物理的・心理的に遠いもの)は「nân」(その・あの)、不定称は「dǎj」(どの)

の語を使用する。また、目に見えるもので、遠称「nân」よりもさらに遠くに存在する場合は「(yuu) phûn」、「(yuu) phûn」よりもさらに遠い場合は「(yuu) phûun」を使用する。

名詞によって次のような形をとる。

可算名詞の場合は「名詞＋類別詞＋指示詞」または「名詞＋指示詞」の語順をとる。特に一つのもの限定して指し示したい場合には、「名詞＋類別詞＋指示詞」を使用する。また、何を指しているか明らかな場合は「名詞」を省略して「類別詞＋指示詞」を使用する。例えば、

(41) pûm (hǔa) níi

本 clf. この

「この本」

(42) pûm (hǔa) nân

本 clf. その・あの

「その・あの本」

(43) pûm (hǔa) dǎj

本 clf. どの

「どの本」

(44) pûm (hǔa) yuū phûn

本 clf. むこうの

「むこうの本」

(45) pûm (hǔa) (yuu) phûun

本 clf. ずっとむこうの

「ずっとむこうの本」

抽象名詞・物質名詞・集合名詞・固有名詞のような不可算名詞の場合は、「名詞＋指示詞」の形を使用する。これらはもともと一つのものとして捉えているものであるか、数える必要がない、数えられない、分割できない、という名詞の意味上の性質に拠る。例えば、

(46) khwáam hûusúik níi

感情 この

「この気持ち」

複数指示表現は一般には「名詞+指示詞」の形を使用するが、先の4. 1節で示した「複数」のものを表す類別詞+指示詞(この/その)」、即ち「cǎmnúan níi/nân, cǎmphûak níi/nân, phûak níi/nân, súm níi/nân」や「law níi/nân」⁸を名詞の後に置くこともある。ただし、一般に「cǎmphûak」はモノの名詞に使用することが多く、逆に「phûak」はヒトを表す名詞に使用することが多い。また、「súm」はヒトを表す名詞にのみに使用するという、4. 1節と同様の傾向がある。

(47a) pûm cǎmnúan níi/nân

本 これらの/それらの

(47b) ʔăcǎan cǎmnúan níi/nân

先生 これらの/それらの

(48a) pûm cǎmphûak níi/nân

本 これらの/それらの

(48b) (?)ʔăcǎan cǎmphûak níi/nân . . . あまり使わない

先生 これらの/それらの

(49a) *pûm phûak níi/nân

本 これらの/それらの

(49b) ʔăcǎan phûak níi/nân

先生 これらの/それらの

(50a) *pûm súm níi/nân

本 これらの/それらの

(50b) ʔăcǎan súm níi/nân

先生 これらの/それらの

(51a) pûm law níi/nân

本 これらの/それらの

(51b) ʔăcǎan law níi/nân

先生 これらの/それらの

4. 5 名詞的修飾表現

修飾語が名詞的成分である場合、原則として名詞がモノの場合もヒトの場合も「名詞+修飾語」の形を使用する。

(52) pŭm taan pathêet

本 外国

「外国の本」

(53) pŭm pháasăa láaw

本 言語 ラオス

「ラオス語の本」

(54) pŭm pháasăa sàat

本 言語学

「言語学の本」

ただし、(55)のように「名詞＋修飾語」では、「子どもが所有している本」か、もしくは「子供向けの本」という、複数の意味にとれる場合は、修飾の意味が分かるような適切な前置詞を修飾語の前に入れる方がよい。

(55) pŭm dék nŏy

本 子供

「子供向けの本」または「子供が持っている本」

(55a) pŭm sǎmláp dék nŏy

本 ～向けの 子供

「子供向けの本」

(55b) pŭm khŏy dék nŏy

本 ～の 子供

「子供が持っている本」(所有)

(55a)の「sǎmláp」は用途を表す前置詞で、(55b)の「khŏy」は所有を表す前置詞である。

名詞がヒトの場合も同様で、「名詞＋修飾語」という形では複数の意味にとれる場合、修飾の意味が分かるような適切な前置詞を入れたり、節にして表現する。名詞がモノの場合と若干異なり、節にして動詞的成分として修飾する方がよく使われる。特に名詞と修飾要素が意味上、同格であるような場合には、節にして名詞を修飾する形を用いる。

(56) ?ăacăan khón wíat

先生 人 ベトナム

「ベトナム人である先生」

または「ベトナム人のための (=ベトナム人に教える) 先生」

(56a) ?ăacăan phùu thii pen khón wíat

先生 clf. 関代 である 人 ベトナム

「ベトナム人である先生」

(56b) ?ăacăan sǎmláp khón wíat . . . あまり使わない

先生 ~向けの 人 ベトナム

「ベトナム人のための先生」

(56c) ?ăacăan phùu thii sǎon hày khón wíat

先生 ~向けの 人 ベトナム

「ベトナム人に教える先生」

(57) ?ăacăan thaamǎo . . . あまり使わない

先生 医者

「医者先生 (=ある医者に教えている先生)」

(57a) ?ăacăan phùu thii pen thaamǎo

先生 clf. 関代 である 医者

「医者である先生」

(57b) ?ăacăan sǎon hày thaamǎo

先生 教える あげる 医者

「医者に教えている先生」

4. 6 動詞的修飾表現

修飾語が動詞的成分の場合、「名詞+修飾語」の他に「名詞+類別詞+修飾語」、「名詞+類別詞+関係代名詞+修飾語」、「名詞+関係代名詞+修飾語」や「名詞+修飾語+修飾語」という、修飾語部分を「2回繰り返す」形を使用する。例えば、例(58)と(59)では(58)の方が「名詞+修飾語」の形を使用し、(59)の方が「名詞+類別詞+修飾語」の形を使用する方が自然だというインフォーマントの答えを得た。これは、(58)の「本」と「古い」

は、(59)の「本」と「破れる」より事象として発生、あるいは存在しやすい、もしくは常識的に現象として捉えやすいので「名詞＋修飾語」の形を使用する。一種の複合名詞的なものであると考えられる。

(58) pŭm kaw

本 古い

「古い本」

(59) pŭm hŭa khàat

本 clf. 破れる

「ぼろぼろの本」

例(58)のような、事象として発生、あるいは存在しやすい、もしくは常識的に現象として捉えやすいことを「関連度が高い」と言うことにし、一方の例(59)のような、事象として発生、あるいは存在しにくい、もしくは常識的に現象として捉えにくいことは「関連度が低い」と言うことにする。

換言すれば、先の述べた形のうち、関連度が高い場合は、「名詞＋修飾語」の形を使用し、関連度が低い場合は、両者の間に「類別詞」や「関係代名詞」を連結要素として入れる。「名詞＋類別詞＋修飾語」、「名詞＋類別詞＋関係代名詞＋修飾語」、「名詞＋関係代名詞＋修飾語」の順でよく使用するようである。また、「名詞＋修飾語＋修飾語」という、修飾語部分を「2回繰り返す」形は、修飾語の表す意味の度合いが強くなることもあるが、「類別詞」や「関係代名詞」を連結要素として介在させる形(60b)よりもより自然だ(60a)という場合が多かった。これは、修飾要素が動詞的成分であるために、「名詞＋動詞」という文ではなく、修飾句であるという、表示のような役割を果たすためであると思われる。

(60a) pŭm năa năa

(60b) pŭm hŭa năa

本 clf. 分厚い

「分厚い本」

また、「名詞＋修飾語」のとき、何の誤解もなく理解できる場合は一種の複合名詞であると考えられるが、名詞や修飾語によっては別の意味に解釈できる場合や修飾語が何を持ってそのような状態、あるいは結果となるのか明らかではない場合は、適切な類別詞や関係代名詞を修飾語の前に入れて関係節にし、「何(名詞)がどう(修飾語)なのか」を明らかにするように述べる。例えば例(61)の「本＋難しい」の場合のように「名詞＋修飾語」では、「内容が難しい本」と「手に入れることが難しい本」という複数の意味にとれる場

合は(61a)あるいは(61b)のような形の方がよいとされる。

(61) pŭm jâak

本 難しい

「難しい本」

(61a) pŭm thii ?aan jâak

本 関代 読む 難しい

「(内容が) 難しい本」

(61b) pŭm thii hăa jâak

本 関代 探す 難しい

「(手に入れるのが) 難しい本」

例(61a)は「jâak (難しい)」の前に「?aan (読む)」を、また例(61b)は「jâak (難しい)」の前に「hăa (探す)」を入れることによって、前者は「内容が難しい」、後者は「手に入れるの難しい」という意味であることが明らかになる。

名詞がヒトの場合も同様である。例えば、「友人+古い」は関連度が高く、いわば「旧友」という複合語のように捉えられるので「名詞+修飾語」の形をよく使用するが、「友人+高い」は関連度が低いため、「名詞+修飾語」の形(63e)よりも名詞と修飾語の間に連結要素を介した形(63a)(63c)(63d)や「名詞+修飾語+修飾語」という修飾語を二回繰り返す(63b)の方を使用する。どの表現も背の高さは同じであり、(63a)から(63e)の順によく使用するようである。

(62) khòy míi muu kaw

私 いる 友達 古い

「私には古い友人がいる」

(63a) khòy míi muu phòu sŭuŋ

「名詞+clf. +修飾語」

(63b) khòy míi muu sŭuŋ sŭuŋ

「名詞+修飾語+修飾語」

(63c) khòy míi muu phòu thii sŭuŋ

「名詞+clf. +関係代名詞+修飾語」

(63d) khòy míi muu thii sŭuŋ

「名詞+関係代名詞+修飾語」

(63e) khòy míi muu sŭuŋ

「名詞+修飾語」

「私には背の高い友達がいる」

次の例は、修飾要素と被修飾部分である名詞との関連度が明白ではない場合、どの部分を修飾しているのかが明らかにする必要がある例である。この場合、被修飾要素と修飾要素との間に連結要素などを入れて関係節にし、修飾関係を明らかにする必要がある。

(64) khòy mii soofǽlot dǎm

私 いる 運転手 黒い

「私には肌の黒い運転手がいる」または「私には黒い車の運転手がいる」

上例(64)では、「soofǽlot(運転手)」の後ろに「dǎm(黒い)」をそのまま置くと、「soofǽlot(運転手)」全体を修飾して「黒い肌の運転手」なのか、直前の「lot(車)」を修飾して「黒い車の運転手」なのかかわからない。ところが次のように、それぞれ適切な語(64a)や類別詞を入れる(64b)ことによって、何が黒いか明らかになるのである。

(64a) khòy mii soofǽlot phǐw dǎm

私 いる 運転手 肌 黒い

「私には肌の黒い運転手がいる」

(64b) khòy mii soofǽlot khán dǎm

私 いる 運転手 車の c1f. 黒い

「私には黒い車の運転手がいる」

修飾要素が節の場合になると、「名詞+修飾節」のような、何も介さず名詞の後ろに直接置く形はあまり使わない。これは、修飾要素が長くなると、文中においてどこからどこまでが修飾要素であるか理解しにくい、もしくは誤解が生じやすいためであると考えられる。一般に両者の間に「類別詞」や「関係代名詞」を連結要素として入れる。「名詞+類別詞+修飾節」、「名詞+類別詞+関係代名詞+修飾節」、「名詞+関係代名詞+修飾節」の順でよく使用する。類別詞を使用する形の方が使用度が高いのは、どの名詞にどの類別詞を使用するか、決まっているので、類別詞を述べることによって修飾する名詞がわかるからであると考えられる。また修飾節の最後にポーズをとることもある。

(65) pũm (hũa) (thii) sũu mũuwáannĩ

本 c1f. 関係代名詞 買う 昨日

「昨日買った本」

(66) pŭm (hŭa) (thii) phoo ?ăw hày

本 clf. 関係代名詞 父 くれる

「父がくれた本」

(67) pŭm (hŭa) (thii) yuu thóng tó?

本 clf. 関係代名詞 ある ~の上 机

「机の上にある本」

(68) pŭm (hŭa) (thii) boo thán dŭy ?aan

本 clf. 関係代名詞 否定辞 間に合う 得る 読む

「まだ読んでいない本」

4. 7 名詞句と複合語

ラオ語では統語レベルにおいても語レベルにおいても「被修飾語＋修飾語」の語順をとる。従って、「名詞＋名詞的成分」あるいは「名詞＋動詞的成分」の場合、名詞句であるのか、複合語一語であるのかわからないことがある。

本節では名詞に修飾要素が一つある場合、名詞句と複合語の違いの判断基準はどこにあるのか、ということについて検討したい。具体的には、名詞と修飾要素との間に置くことのできる連結要素の必要性について検討する。なぜならば、名詞句ならば連結要素を置くことができ、反対にいかなる場面でも連結要素を必要としないものは、複合語という一語であると捉えることができるからである。

まず、名詞と修飾要素との間に連結要素を入れてはいけない例には、次のようなものがある。

(69) pǎa tǎay

魚 死ぬ

「死んでいる魚」

(70) khuang kaw

もの 古い

「古いもの」

(71) sǎo khǎaw

鉛筆 白い

「チョーク」

- (72) khǒn tǎa
毛 眼
「眉毛」
- (73) sǒŋ yǎa
封筒 葉
「葉袋」
- (74) khèew màakŋéé
齒 (果実の一種)
「八重齒」
- (75) tǔu pǔm
棚 本
「本棚」
- (76) ŋón sót
お金 なまである
「現金」
- (77) móŋ kǎan
時計 仕事
「勤務時間」
- (78) nâm kǒn
水 凍る
「氷」
- (79) khám nám
言葉 導く
「巻頭挨拶」
- (80) phâak núǎ
部分 北
「北部地方」

(81) thǒŋ múu

袋 手
「手袋」

(82) kǎan múaŋ

～すること 国
「政治」

(83) withíi khǎan

方法 書く
「書き方」

これらは、修飾要素が物理的にも心理的にも名詞に必ずといっていいほど付随する特徴で、名詞と分離することができなかつたり、修飾要素が名詞が表すものの下位分類であったりするものである。前の名詞だけでは、「何のコト」あるいは「何のモノ」なのか、意味が不明で、後続要素があつて初めて意味が完結する場合である。換言すれば、これらは名詞と非常に関連度が高い語であると言うことができる。即ち、関連度が非常に高い語は、いかなる場合でも連結要素を両者の間に入れてはならず、これらは複合語一語として捉えられるのである。

実は関連度が「高い」「低い」の価値判断は曖昧である。例えば次の(84)(85)における名詞と修飾語の関連度と(86)(87)における名詞と修飾語の関連度の差異を論理的に説明するのは極めて難しい。前者は、修飾語と被修飾語は包含関係にあり、いかなる場合でも連結要素を両者の間に入れてはいけないものである。極めて強い凝固性を備えた結合であると捉えられるが、その根拠は事象として発生、あるいは存在しやすい、もしくは常識的に現象として認識しやすいということ以外に説明がつかない。即ち、名詞と修飾要素との関連度については文法外の「事実」として認識しやすいか否か、といった、常識や慣習に依拠するところが大きいということできる。

(84) púŋm ʔaan

本 読む
「(読)本」

(85) púŋm khǎan

本 書く
「ノート」

(86) *pŭm sŭu

本 買う
「買った本」

(87) *pŭm khăay

本 売る
「売り本」

次の3つの例の差異にいたっては、論理的に説明するのは非常に困難であり、常識や慣習に依拠するとも言い難い。

(88) phùu ɲám

人 美しい
「美人」

(89a) phùu sŭuŋ . . . あまり使わない

(89b) phùu sŭuŋ sŭuŋ

人 高い
「背の高い人」

(90a) *phùu tŭy

(90b) phùu tŭy tŭy

(90c) phùu thii tŭy

人 (関係代名詞) 太っている
「太っている人」

また一般には「名詞＋修飾要素」の形を使用し、間に連結要素を入れることができないため、一語と見なされているものでも、修飾要素を特に言いたい場面では、連結要素を入れた「名詞＋連結要素＋修飾要素」の形を使用する場合がある。例えば、

(91) tóʔ món

机 丸い
「円卓」

使用場面： pəət kəŋ pasúm tóʔ món

開ける 会議 机 丸い

「円卓会議を開催する」

(92) tó? thii món món

机 関係代名詞 丸い

「丸い形をした机」

使用場面 : a:tó? dǎy

机 関係代名詞 丸い

「どの机ですか？」

b:tó? thii món món hàn

机 関係代名詞 丸い あの

「あの丸い形をした机です。」

(93) khón khǎay pǐi

人 売る 切符

「切符売り場の人」

(94) khón thii khǎay pǐi

人 関係代名詞 売る 切符

「切符を売っている人」

(91)や(93)は「円卓」あるいは「切符売り場の人」といった既成の存在として承認済みのものであるのに対し、(92)と(94)は「机」あるいは「人」の状態や様相を描写し、その存在を明言化している。このことから、連結要素は後続の修飾要素を特に言いたい場合に使用するものであるとすることができる。そしてこの場合は、複合語一語ではなく、名詞句なのである。

一方、名詞と修飾要素の関連度が非常に高い複合語、即ち、二つの成分から成る複合語一語であるならば、後述する修飾要素が複数個ある場合の規範的語順の「名詞+名詞的成分+動詞的成分+所有+修飾節+数量+指示」に一見、反するような語順でも、なんら矛盾がないわけである。例えば、下記の例(95)は「名詞+動詞的成分+名詞的成分」から成り、上述の名詞句の規範的語順に反するように見えるが、実際は自然な表現とされる。

(95) púim khǎan pháasǎaláaw

本 書く ラオス語

「ラオス語のノート」

これは、実は「名詞+動詞的成分+名詞的成分」ではなく、「名詞+動詞的成分」部分

は複合語一語で、全体は「名詞（複合語）＋名詞的成分」であるからである。

複合語か否かということは、常識に依存することが極めて高いわけであるが、少なくともいかなる場合においても、名詞と修飾要素との間に連結要素を介在させることができない語は複合語であるということができる。このことは即ち、二つ以上の成分から成る強い凝固性をもった一語であるということを示すことに他ならないと考えられるのである。

5. 修飾要素が複数の場合

5. 1 修飾要素が2つの場合

「父がくれた・この・3冊の・私の・分厚い・言語学」のうちの2つの要素が「本」を修飾する場合、原則として「本＋言語学＋分厚い＋私の＋父がくれた＋3冊の＋この」の順のうちから2つの要素を並べる。即ち名詞句は「名詞＋名詞的成分＋動詞的成分＋所有＋修飾節＋数量＋指示」の順に並ぶ。

「名詞＋名詞的成分＋動詞的成分＋所有＋修飾節＋数量＋指示」

「本＋言語学＋分厚い＋私の＋父がくれた＋3冊の＋この」

pŭm + pháasǎasàat + nǎa + (khǒŋ) khòy + (hǔa) (thii) phoo ʔǎw hǎy + sǎam hǔa + nŭi

本 言語学 分厚い 所有 私 clf. 関係代名詞 父 くれる 3 clf. この

属性を表す名詞的成分の修飾語は常に名詞の直後である。指示表現は常に最後で、量化表現も指示表現をのぞいた最後の位置に置くのが普通である。また、修飾関係を示す連結表示がいずれの修飾要素にも付かない修飾要素のみの形を2つ並べる形はあまり使わない。また、同じ要素に属する語彙を2つそのまま並べる形もあまり使わない。

以下に上に挙げた要素の中から二つ修飾要素がある名詞句の語順をそれぞれ挙げる。

(96) 「私のこの本」

(a) pŭm khòy (hǔa) nŭi

(b) *pŭm (hǔa) nŭi khòy

(97) 「私の3冊の本」

(a) pŭm khòy sǎam hǔa

(b) pŭm sǎam hǔa khǒŋ khòy . . . 「私の」を特に言いたい場合

(98) 「この3冊の本」

(a) pŭm sǎam hǔa nŭi

(b) *pŭm nŭi sǎam hǔa

2つの要素の入れ替えについては、所有表現と修飾節同士の入れ替えは不可能である。他の要素同士は一応入れ替え可能であるが、入れ替えて、本来前に置くべき要素を後ろの位置に置く場合、

- 1) 「名詞的成分」の前には適切な類別詞あるいは適切な前置詞を
- 2) 「動詞的成分」前には適切な類別詞あるいは関係代名詞を
- 3) 「所有者」の前には必ず「khǒŋ」を
- 4) 「修飾節」の前には必ず関係代名詞を必ず伴って後ろに置く。

本来の語順ではなく、語順を入れ替えた形を使用する場面は、敢えてつけたすなど、後ろに位置させた修飾要素を特に言いたい場合に限るようである。

(99) 「私の分厚い本」

- (a) pŭm nǎa (khǒŋ) khỳ · · · khǒŋ ある方がよい
- (b) pŭm (khǒŋ) khỳ hŭa nǎa

(100) 「この分厚い本」

- (a) pŭm nǎa (hŭa) nŭi
- (b) *pŭm (hŭa) nŭi nǎa

(101) 「3冊の分厚い本」

- (a) pŭm nǎa sǎam hŭa
- (b) *pŭm sǎam hŭa nǎa

(102) 「私の言語学の本」

- (a) pŭm pháasǎasàat (khǒŋ) khỳ · · · khǒŋ ある方がよい
- (b) pŭm (khǒŋ) khỳ kiawkáp pháasǎasàat · · · kiawkáp は「～について」。
あまり言わない。

(103) 「この言語学の本」

- (a) pŭm pháasǎasàat (hŭa) nŭi
- (b) *pŭm (hŭa) nŭi pháasǎasàat

(104) 「3冊の言語学の本」

- (a) pŭm pháasǎasàat sǎam hŭa
- (b) pŭm sǎam hŭa kiawkáp pháasǎasàat · · · あまり言わない。

(105) 「分厚い言語学の本」

- (a) púm phásāsàat (hũa) nũa . . . hũa ある方がよい
- (b) púm (hũa) nũa kiawkáp phásāsàat . . . あまり言わない。

(106) 「分厚い難しい本」

- (a) púm nũa hũa nũa . . . nũa を言いたい。
- (b) púm nũa hũa nũa . . . nũa を言いたい。
- (c) púm nũa hũa nũa . . . nũa と nũa の両方を言いたい。
- (d) púm nũa nũa nũa . . . nũa を言いたい。
- (e) púm nũa nũa nũa . . . nũa を言いたい。

(106)より修飾語が同じ動詞的要素の場合、「動詞1 + 類別詞 + (関係代名詞 +) 動詞2」という形にして片方を節にするか、または「動詞1 + 接続詞 + 動詞2」という形にして一つの修飾要素として修飾する。あるいはまた、「動詞1 + 動詞2を2回繰り返す」の形にし、ここまでは修飾要素であるということを明らかにする。

(107) 「父がくれた私の本」

- (a) púm khỏj thii phỏ ẵw hậ
- (b) *púm thii phỏ ẵw hậ khỏj khậ

(108) 「父がくれたこの本」

- (a) púm thii phỏ ẵw hậ (hũa) nũa
- (b) * púm (hũa) nũa thii phỏ ẵw hậ

(109) 「父がくれた3冊の本」

- (a) púm thii phỏ ẵw hậ sẵm hũa
- (b) púm sẵm hũa thii phỏ ẵw hậ . . . あまり言わない。付け足し。

(110) 「父がくれた分厚い本」

- (a) púm (hũa) nũa thii phỏ ẵw hậ
- (b) púm thii phỏ ẵw hậ hũa nũa

(110b)において動詞的要素である修飾語を修飾節の後ろに置く場合、「類別詞」を必要とするということは、言い換えれば「名詞 + 修飾節1 + 修飾節2」の形にしていると言える。このとき、同じ連結要素の使用は避ける。修飾節の場合も2つまで名詞

を修飾できるようであるがあまり言わない。

(111) 「父がくれた言語学の本」

(a) pūm pháasāsàat thii phoo ?ǎw hày

(b) pūm thii phoo ?ǎw hày kiawkáp pháasāsàat . . . あまり言わない。

5. 2 修飾要素が3つの場合

修飾要素が3つの場合、原則として修飾要素が2つの場合と同じ語順をとるが、何をどこからどこまでが修飾しているのかわかりにくいようで、あまり言わないようである。ただし、指示表現が最後に来る「名詞+修飾要素1+修飾要素2+指示詞」の形の場合はよく使用する。これは「私の3冊の本、これは～」のような「名詞(本)+修飾要素1(私)+修飾要素2(3冊)」を「指示詞(これ)」で言い換えた形かもしれない。

(112) 「私のこの3冊の本」

pūm khòy sǎam hǔa nǐ

(113) 「私のこの分厚い本」

pūm nǎa (khǒŋ) khòy (hǔa) nǐ . . . khǒŋ ある方がよい

(114) 「この3冊の分厚い本」

pūm nǎa sǎam hǔa nǐ

(115) 「私のこの言語学の本」

pūm pháasāsàat (khǒŋ) khòy (hǔa) nǐ . . . khǒŋ ある方がよい

(116) 「この3冊の言語学の本」

pūm pháasāsàat sǎam hǔa nǐ

(117) 「この分厚い言語学の本」

pūm pháasāsàat nǎa (hǔa) nǐ . . . あまり言わない。

pūm pháasāsàat nǎa nǎa (hǔa) nǐ . . . 動詞的成分を2回繰り返せばよい。

(118) 「父がくれた私のこの本」

pūm khòy thii phoo ?ǎw hày nǐ

(119) 「父がくれたこの3冊の本」

pũm thii phoo ?aw hày sãam hĩa nĩ

(120) 「父がくれたこの分厚い本」

(a) pũm nãa thii phoo ?aw hày nĩ

(b) pũm nãa nĩ thii phoo ?aw hày . . . あまり言わない。付け足し。

(121) 「父がくれたこの言語学の本」

(a) pũm pháasãasàat thii phoo ?aw hày nĩ

(b) pũm pháasãasàat nĩ thii phoo ?aw hày . . . あまり言わない。付け足し。

5. 3 修飾要素が4つ以上の場合

修飾要素が3つの場合と同様に、何をどこからどこまでが修飾しているのかわかりにくいようで、あまり言わないようである。また、もし言うとしても、連結要素を入れずに修飾要素のみをそのまま並べる形は避ける。しかしながら、例えば、(122)のように名詞と修飾要素の関連度が高い場合は連結要素がなくてもよい、というインフォーマントの作例を得た。

(122) 「名詞+名詞的成分+動詞的成分+所有+指示」

lot thiip sii dẽɛŋ kaw ɲihhò peesòo nĩ ⁹

自転車 赤色 古い メーカー プジョー この

「このプジョー製の古い赤色の自転車」

5. 4 修飾要素が複数個ある場合のまとめ

修飾要素が複数個ある名詞句について次のようにまとめることができる。

修飾要素が複数個ある場合、

- 1) 原則として「名詞+名詞的成分+動詞的成分+所有+修飾節+数量+指示」の語順をとる。
- 2) 1)のうち、属性を表す名詞的成分の修飾語は常に名詞の直後である。指示表現は常に最後で、量化表現も指示表現をのぞいた最後の位置に置くのが普通である。
- 3) 修飾関係を示す連結要素がいずれの修飾要素にも付かない修飾要素のみの形を並べる形はあまり使わない。
- 4) 2つの要素の語順入れ替えについては、所有表現と修飾節の入れ替えは不可能である。他の要素は一応入れ替え可能であるが、本来、前に置くべきものを入れ替えて後ろの位置に置く場合、次のような形をとる。また、下記のいずれの場合も、敢えて付け足すな

ど、後ろに位置させた修飾要素を特に言いたい場合に限るようである。

4. 1) 「名詞的成分」の前には適切な類別詞あるいは適切な前置詞を
4. 2) 「動詞的成分」の前には適切な類別詞あるいは関係代名詞を
4. 3) 「所有者」の前には「khǎoŋ」を
4. 4) 「修飾節」の前には関係代名詞を必ず伴って後ろに置く。

6. まとめ

本稿で明らかになったラオ語の名詞句の特徴は以下のとおりである。

- 1) 名詞句の語順は、「名詞＋修飾要素」である。ただし修飾要素を特に言いたい場面では、連結要素を修飾要素の前に置く形を用いる。
- 2) 修飾要素が複数個ある場合は、「名詞＋名詞的成分＋動詞的成分＋所有＋修飾節＋数量＋指示」である。ただし、修飾関係を示す連結要素がいずれの修飾要素にも付かない修飾要素のみの形を複数個並べる形はあまり使わない。また、ある修飾要素を特に言いたい場面では、連結要素を伴って名詞句の最後に位置させることが多い。
- 3) また、2)のうち、同じ種類の修飾要素が複数個になる場合、どちらかを節にするなどして、同じ形を複数個並べる形は避ける。
- 4) 2つの要素の語順入れ替えについては、所有表現と修飾節の入れ替えは不可能である。他の要素は一応入れ替え可能であるが、本来前に置くべきものを入れ替えて後ろの位置に置く場合、
 4. 1) 「名詞的成分」の前には適切な類別詞あるいは適切な前置詞を
 4. 2) 「動詞的成分」の前には適切な類別詞あるいは関係代名詞を
 4. 3) 「所有者」の前には「khǎoŋ」を
 4. 4) 「修飾節」の前には関係代名詞を必ず伴って後ろに置く。

おわりに

以上、ラオ語における名詞句の構造について検討した。

しかしながら、本稿で用いた名詞句のほとんどは、名詞が「本」か「先生」の場合に限られているということ、さらにはほとんどの場合がこれらを用いた名詞句単独の形での検討であり、文中の位置（文頭か文中か文末か）における差異については全く検討しなかった。これらの点や名詞句と複合語との境界については今後の課題としたい。

注

- ¹ 国立統計局 (National Statistical Centre)、2000 年の資料に拠る
² []内の数字は音域を表す。1 が低域、2 が次低域、3 が中域、4 が次高域、5 が高域を表す。
³ 「友人」の意味である[muu]は、「群・類」という類別詞の意味もあり、名詞句全体の意味をとらえにくいため、ヒトの名詞として「先生」の意味の[?äcãan]を使用する。
⁴ * は非文を表す。
⁵ 「clf.」は「類別詞」のこと。
⁶ この場合、thuk を省略して môt のみを残しても可能であるが、下記のように意味が異なってしまう。

pūm môt hũa	pūm kũap môt hũa
本 尽きる clf.	本 殆どの 尽きる clf.
「一冊の最初から最後まで」	「一冊の本の殆ど」

⁷ ただし、数量を表す語句が補語を修飾する場合も動詞を修飾する場合もいずれの場合にも補語の後にくるわけであるから、数量を表す語句は動詞を修飾すると考えても補語を修飾すると考えてもかまわないのかもしれない。

⁸ 「law」も名詞で「群」という意味を持つが、4. 1 節のような複数表示としての使い方はない。

⁹ この場合も動詞的成分の前に類別詞(khán)を入れるか、動詞的成分を 2 回繰り返す形の方がよい。

lot thĩp sĩi dẽeŋ khán kaw ñĩihòo pẽesòo nũ
lot thĩp sĩi dẽeŋ kaw kaw ñĩihòo pẽesòo nũ
自転車 赤色 古い メーカー プジョー この
「このペソー製の古い赤色の自転車」

ラオスでプジョー製の赤い自転車といえば、約 50 年前からあるヒット商品で、誰もが知っているそうである。

参考文献

上田玲子 1995 「現代ラオス語のヴィエンチャン方言の音韻体系」『言語研究』106 : 95-115, 日本言語学会
鈴木玲子 1999 「ラオ語の声調に関する一考察」平成 11 年度第 3 回『音韻に関する通言語学的研究会』口頭発表資料, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
三上直光 1999 「タイ語における連結形式と意味の関係について」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』31 : 209-223, 慶応義塾大学言語文化研究所
三上直光 2002 「タイ語の基礎」白水社
Paphaphanh, Boualy 2000 " *Waynyakoon laaw, Vol. 3, waakanyasamphan* " Kasuang Suksaathikaan(Ministry of Education), National Printing House, Vientiane

現代口語ビルマ語の名詞句の構造

岡野 賢二

1 はじめに

- 1.1 ビルマ語概要
- 1.2 インフォーマント・書記資料
- 1.3 先行研究

2 修飾要素が一つの場合

- 2.1 グループ1 複数表現
- 2.2 グループ2 量化表現
- 2.3 グループ3 所有者表現
- 2.4 グループ4 指示表現
- 2.5 グループ5 名詞的修飾表現
- 2.6 グループ6 動詞的修飾表現
- 2.7 まとめと補足

3 複数の名詞修飾要素が共起する場合

- 3.1 グループ3（所有者表現）とグループ4（指示表現）
- 3.2 グループ3（所有者表現）とグループ5（名詞的修飾表現）
- 3.3 グループ4（指示表現）とグループ5（名詞的修飾表現）
- 3.4 グループ6（動詞的修飾要素）とその他の被修飾名詞の前に現れる要素
- 3.5 グループ2（量化要素）とグループ6（動詞的修飾要素）の動名詞、複数表示
- 3.6 基本的な名詞修飾構造と三つ以上の修飾要素が現れる場合

注

参考文献

1 はじめに

本稿は現代口語ビルマ語（colloquial Burmese；以下特に断らない限り「ビルマ語」とのみ記す）の名詞句構造についての観察ならびに考察である。東南アジア諸言語研究会共通の<調査票>に基づいてインフォーマント調査をし、その結果をまとめた上でビルマ語の名詞句構造についての一般化を試みる。

1.1 ビルマ語概要

1.1.1 音声表記

筆者の音韻解釈の概略は拙稿『現代口語ビルマ語の「行く・来る」』(2002)に示してある。本稿における音声表記は基本的にそれに従っているが、歯間閉鎖音を“T- (D-)”から“t̥- (d̥-)”へ、また有気音の出気の表記を“Ch-”から“C^h-”へと、一部変更してある。概略は以下の通りである。

頭子音 (1) : 阻害音

	両唇	歯間	歯茎	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
無声無気	p-	t̥-	t-	s-	c-	k-	'-
無声有気	p ^h -		t̥ ^h -	s ^h -	c ^h -	k ^h -	h-
有 声	b-	(d̥)-	d-	z-	j-	g-	

頭子音 (2) : 共鳴音

	両唇	歯間	歯茎	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
鼻 音	m-		n-	-	ny-	ŋ-	
無声化	hm-		hn-		hny-	hŋ-	
その他	w-		l-	y- (r-)			
無声化	hw-		hl-	ʃ-			

単母音

	前舌	中舌	後舌
狭口	-i		-u
半狭口	-e		-o
半広口		-ɛ	-ɔ
広口		-a	

二重母音

	前	後
広～狭	-ai	-au
半狭～狭	-ei	-ou

末子音

	声門閉鎖	鼻母音化
	-'	-N

声調

	低平調	高平調	下降調	無声調
	-a _~	-a [~]	-a _~	-ä

1.1.2 文法概略

ビルマ語の語は自立語(内容語)である名詞(N)・動詞(V)と、付属語(機能語)である助詞(P)の三種に大別される。付属語は自立語の前に現れるものと後ろに現れるものがあるが、おおむね前に現れるのは限定的、後ろに現れるのは関係・機能の表示の働きをすといつてよかろう。ごくわずかなケースを除いて活用、曲用といった語形変化はなく、膠着的な言語だといえる。

文の必須要素は述語のみで、これは常に文末に現れる。述部には動詞(句)が述語となる動詞文と、それ以外の語や句が述語となる非動詞文とがある。それ以外の句や節は標識(marker)を伴って現れる。

動詞文 動詞文の述部は動詞に動詞文であることを表す助詞、動詞文標識 (VERB SENTENCE MARKER; VSM) が付くことによって作られる。動詞文標識は文の種類(非要求文(declarative)、要求文(imperative))を表すとともに話し手の態度を表す法助詞としての役割を併せ持つ。主な動詞文標識に以下のようなものがある(括弧内に示した形式は弱化形)。

表 1: 口語ビルマ語の動詞文標識

	非 要 求			要 求
	確 定	未確定	生 起	
肯 定	-te_ (-tǎ)	-me_ (-mä)	-pi_ (-pä)	-#
否 定	-p ^h u:		—	-ne_

それぞれの動詞文標識の表すところを簡単に述べておく。-te_ (-tǎ)(VSMrls) は「話し手が事実だと信じている」こと(《確定》realis)、-me_ (-mä)(VSMirls) は「話し手が事実かどうか確信がない」こと(《未確定》irrdās)を表す。

- (1) pyɔ:-te_
 言う-VSMrls
 言った《過去における1回の事態》／言う《現在繰り返し起こっている事態》

- (2) pyɔ:-me_
 言う-VSMirls
 言う《近未来》／言うだろう《推量》／言っただろう《過去の推量》

非要求文の否定は動詞に否定を表す接頭辞 mǎ-が前接し、動詞文標識が-p^hu:となる。肯定文における「話者が事実であることを信じている」かどうか、という対立は、否定文では中和されてなくなってしまう。言い換えると-te_も-me_も、その対応する否定の形式は-p^hu:である。

- (3) mǎ-pyɔ:-p^hu:
 NEG-言う-VSMneg
 言わなかった《過去における1回の事態》／言わない《現在繰り返し起こっている事態》

- (4) mǎ-pyɔ:-p^hu:
 NEG-言う-VSMneg
 言わない《近未来》／言わないだろう《推量》／言わなかっただろう《過去の推量》

-pi_は「発話時点において、動詞の表す事態が生起する(ことに話し手が気付く)」こと(《生起》inch oative)を表す。

- (5) la_ -p i_
 来る-VSMinch
 来た。《接近するのに気付いた時の発話》

この-pi_には対応する否定がない。以上が非要求文をマークする動詞文標識である。

次に要求文であるが、これをマークする動詞文標識は-# (ゼロ形態) と-ne_ で、-# (ゼロ形態) が肯定、-ne_ が否定の形式である。要求文には大きく分けて命令、勧誘、許可求めの3種類が含まれる。

- (6) pyo:-#
言う-VSMimpA
言え。
- (7) mǎ-pyo:-ne.
NEG-言う-VSMimpN
言うな。
- (8) t̃wa:(-ca.)-so.-#
行く (-《相互》) -《勧誘》-VSMimpA
行こう。〈勧誘〉
- (9) mǎ-t̃wa:(-ca.)-so.-ne.
NEG-行く (-《相互》) -《勧誘》-VSMimpN
行かないことにしよう。〈勧誘〉
- (10) t̃wa:-pǎya.ze.-#
行く -《許可求め》-VSMimpA
(私に) 行かせて下さい。
- (11) mǎ-t̃wa:-pǎya.ze.-ne.
NEG-行く -《許可求め》-VSMimpN
(私に) 行かせないで下さい。

非動詞文 上述の通り、ビルマ語には「動詞+動詞文標識」が述語となる動詞文の他に、それ以外の要素が述語となる非動詞文がある。非動詞文の述語になり得るのは名詞、名詞句 (noun phrase) ¹、名詞節 (nominal clause)、従属節 (dependent clause)、引用節 (quotation) などである。

- (12) cǎno_ caun:-shǎya_
[1m] 学校-先生
私は学校の先生だ。〈名詞〉
- (13) cǎno_ yan_goun_-ka.
[1m] ヤンゴン-ABL
私はヤンゴンからだ/ヤンゴン出身だ。〈名詞句〉
- (14) maun_maun_-ko_ pyo:-ta_
[pn]-ACC 言う-NCMrls
マウンマウンに言ったのだ。〈名詞節〉
- (15) shǎya_-ka_ 'e:-di_-lo_ pyo:-lo_
先生-NOM その〜よう 言う-《理由》
先生がそのようにいったからだ。〈従属節〉
- (16) ze: t̃wa:-mǎ-lo_
市場 行く-VSMirls-《引用》
市場に行こうと(思っ)て。〈引用節〉

動詞文の述語の拡張 最小限の動詞述部は動詞と動詞文標識によって成り立つが、この動詞述部は他の要素と結びついて、意味的により多様な拡張をすることができる。藪 (1992:570-1) によれば、この拡張された動詞述部の構造を図式化すると次のようになる。

(17) Iv · V-Vaux-Vpp-vsm-Vpf

Iv ; 挿入動詞、V ; 主動詞、Vaux ; 助動詞、Vpp ; 終助詞 (vsm に先行)、vsm ; 動詞文標識、Vpf ; 終助詞 (vsm に後続) : 「・」は開いた連結、「-」は閉じた連結を表す

(18) s^hε'^htin-k^hain:-se.chin-pa.te:-te-le-

～続ける-学ぶ～させる-《使役》-《願望》-《丁寧》-まだ-vsmrls-《高圧的》
引き続きまだ学ようにさせたい。

名詞の分類と格 さて述部以外の文の要素は格助詞・接続助詞などの助辞類が後接して他の要素との関係を表す。場所や時間の句を除いて、主語は一般にそれ以外の要素に先行する。主な口語の格助詞は以下の通り。

表 2: ビルマ語の格助詞

形式	ヒト	モノ	位置
-ka.	主格 NOMinative	主格 NOMinative	奪格・過去の時 ABLative · PAST time
-#	主格 NOMinative	対格 ACCusative	(向格) ALLative
-ko-	対格 ACCusative	対格 ACCusative	向格 ALLative
-hma-	(於格) ²	—	於格 LOCative
-ye.	属格 GENitive	属格 GENitive	—
-ne.	共格 COMitative	共格・具格 COMitative · INSTRumental	共格 COMitative

ヒト名詞の場合、主格は#と-ka. によって標示される。一般に#がノーマルであり、-ka. は対比的な文脈において出現する。

(19) a. ŋa-# pyo:-te-

[1]-NOM 言う-vsmrls
私が／は言った。

b. ŋa-ka. pyo:-te-

[1]-NOM 言う-vsmrls
(他の人ではなく) 私が言った。

主格の#と-ka. はともに非動詞文の主語となる。

(20) a. da-# cāno.-nyi-le:

これ-NOM [1']-弟-dmn
これは／が私の弟だ。

b. da_-ka. cãno_-nyi_-le:

これ-NOM [1']-弟-dmn

(他ではなく)これが私の弟だ。

対格に-#と-ko_の二種類があるが、一般にモノ([-animate])が-#で、人([+human])が-ko_で標示されると考えてよい。モノが-ko_で標示される場合は、対比的である。

移動の着点を現す向格助詞は-ko_で、これは対格助詞-ko_と同形である。しかしこれは名詞の意味素性により厳密に区別される。-ko_がマークする名詞が「場所」であれば向格すなわち着点であり、「モノ」あるいは「人」であれば対格すなわち対象である。なお場所であれモノや人であれ、指示性(referentiality)が低いと-ko_が現れないことがある。

(21) lu_-ko. ta' -te_

人-ACC 殺す-VSMrls

人を殺す。

(22) lu_-# ta' -te_

人-# 殺す-VSMrls

人殺しする。

(23) caun:-ko. te' -te_

学校-ALL 上る-VSMrls

学校へ通う。

(24) caun:-# te' -te_

学校-# 上る-VSMrls

通学する。

なお、以下では主格や対格を表している-#については、音声形式が存在しない理論的な形式であること、そしてそれをすべて表記すると例が繁雑で読みにくくなるため、原則これを表記しないことにする。動詞文標識の-#は表記する。

1.1.3 名詞の分類

本稿で用いる語彙の具体例は、関連の箇所適宜例示されことになるが、論を進める前に若干の語彙についての説明をしておこう。

ビルマ語の名詞は、その意味や文法的な振る舞いから大きく三種類に分類できる。ここではヒト名詞、モノ名詞、位置名詞と呼ぶことにする。

ヒト名詞は主語や対象の語になることのできる名詞で、他動詞文において格助詞-#（ゼロ形態）で標示されると主語となる。典型的には人物を指示する名詞がこれに当たる。このヒト名詞はさらに人称名詞、人物指示名詞、それ以外の三種類に下位分類できるであろう。

モノ名詞は主語や対象の語になることの名詞である点でヒト名詞と同じだが、他動詞文において格助詞-#で標示されると対象の語となる。なおこのヒト名詞、モノ名詞という分類は、名詞が備えている素性によって一義的に決まるものではない。たとえ有生物、有情物であってもモノ名詞であることはありうる。

位置名詞は主語や対象の語になることができない名詞で、文内では常に空間的・時間的な位置を示す語として現れる。

(25) cǎno_-# di_gǎne_-# you'jin_-# ci-mɛ_

[1m]_-# 今日_-# 映画_-# 見る-VSMirls

私は今日映画を見る。

(26) mǎne_-ka. tu_-ka. sʰǎya_ma_-sʰi_-ka. pai'sʰan_-# 'cʰi_-tɛ_

昨日-PAST [3]-NOM 先生-ところ-ABL お金_-# 借りる-VSMirls

昨日彼/彼女は先生(のところ)からお金を借りた。

この名詞の素性に基づく下位分類は、本稿のテーマである名詞句の構造にも多少なりとも関係する。下にこの名詞の下位分類と主な格助詞との分布について概略を示す。

表 3: 名詞の下位分類と格助詞の分布関係

	ヒト名詞	モノ名詞	位置名詞
-ka.	主語	主語	起点
-#	主語	対象	着点
-ko_	対象	対象	着点
-hma_	(所有者)	×	位置

1.1.4 略号等

以下に本稿で用いた略号を挙げる。

動詞文標識 (verb sentence marker)

- VSMrls 動詞文標識・陳述/確定; verb sentence marker, realis
- VSMirls 動詞文標識・陳述/未確定; verb sentence marker, irrealis
- VSMneg 動詞文標識・陳述/否定; verb sentence marker, negtive
- VSMinch 動詞文標識・陳述/生起; verb sentence marker, inchoative
- VSMsspc 動詞文標識・陳述/疑念; verb sentence marker, suspicious
- VSMimpA 動詞文標識・要求/肯定; verb sentence marker, affirmative-imperative
- VSMimpN 動詞文標識・要求/否定; verb sentence marker, negative-imperative

限定節標識 (attributive clause marker)

- ACMrls 限定節標識・確定; attributive clause marker, realis
- ACMirls 限定節標識・未確定; attributive clause marker, irrealis

名詞節標識 (nominal clause marker)

- NCMrls 名詞節標識/確定; nominal clause marekr, realis
- NCMirls 名詞節標識/未確定; nominal clause marekr, irrealis

格助詞 (case marker)

- ACC 対格; accusative
- ABL 向格; allative
- COM 共格; comitative
- GEN 属格; genitive
- INSTR 具格; instrumental

- LOC 於格 ; locative
- NOM 主格 ; nominative
- PAST 過去の時 ; past time
- # ゼロ格 ; zero case

助動詞類 (auxiliaries) ※主なものを挙げた

- 《勧誘》 聞き手に話し手とともに行動をすることを求める
- 《許可求め》 聞き手に対して話し手もしくは第三者の行為実行の許可を求める
- 《相互》 相互動作 ; mutual
- 《丁寧》 丁寧さ ; politeness
- 《移動》 現在位置への移動
- 《無意識》

指示名詞類

- [1] 話し手
- [2] 聞き手
- [3] 第三者
- [-f] 女性用語
- [-m] 男性用語
- [-'] 下降調化した形式 ([-] は下降調化していない形式を表す)

接辞類 (affix)

- NEG 否定 (前接) 辞 ; negative (affix)
- *dmn* 指小辞 ; diminutive
- *augm* 増大辞 ; augmentative
- *plrl* 複数接尾辞 ; plural
- *plrlAPPRNT* 擬似的複数 ; apparent plural
- *NMLZ* 名詞化接辞 ; nominalizer

その他

- *clsfr* 助数詞 ; classifier
- *cntrst* 対比
- 《理由》 理由を表す従属節標識
- 《引用》 引用節標識
- 《疑問》 疑問文を表す文末助詞

1.2 インフォーマント・書記資料

本稿を執筆するにあたり、東京外国語大学ビルマ語専攻非常勤講師の Daw Yin Yin May 氏 (女性・40歳代) にご協力をいただいた。氏はビルマ (Burmese、Bamar) 族ではなくパラウン (Palaung) 族で、パラウン語ナムサン (Nam Hsan) 方言が母語である。しかしながら幼い頃からミャンマー第二の都市マンダレーに住み、基礎教育から大学まで一貫してビルマ語による教育を受けただけでなく、氏自身がミャンマーの大学の教員として長くビルマ人に対する日本語教育に携わっておられ、ほとんど母語同様の言語的な能力を有していると考えられるため、ビルマ語のインフォーマントとして協力をお願いした次第である。ただし例文についての本稿における責任の一切は筆者自身にある。

また書記資料については、特に積極的な利用はしていないが、いくつかの用例は筆者のコーパスから引かれている。筆者のコーパスについても岡野 (2002) をご覧頂きたい。

1.3 先行研究

名詞句の構造についてのまとまった先行研究は、拙論『現代口語ビルマ語における名詞限定構造の記述(1)』(2000年)を除けばほとんどなく、あるとしても辞書類や総合的な文法研究論文、文法書等にごくわずかに触れられている程度である。

拙論の内容はほぼ本稿に踏襲されているため、ここに詳しくは述べない。またその他の文献に散見される記述についても、関連する箇所ですべて言及することにする。

2 修飾要素が一つの場合

ビルマ語の名詞を限定する要素については、とりあえずチェック表に従って次の6種類に分類しておく。

- グループ1 複数表現
- グループ2 量化表現
- グループ3 所有者表現
- グループ4 指示表現
- グループ5 名詞的修飾表現
- グループ6 動詞的修飾表現

上の分類はあくまでも暫定的なものであり、本章でビルマ語の名詞限定要素を観察した後、本章第7節で分類を見直すことにする。

2.1 グループ1 複数表現

このグループに属する形式は以下の二つである。いずれも名詞主要部に後接する接尾辞である。

- -twe_ 《複数》 *plrl*
- -to_ 《擬似的複数》 *apparent plural*

(27) sa.'ou'-twe_

本-*plrl*

本(複数)

(28) ɟa_-to_

[1]-*plrl*APPRNT

オレたち

-twe_³はいわゆる純粋なる複数を表す名詞接尾辞で、指示する名詞の数が2つ以上の場合に義務的に現れる(グループ2「量化表現」との共起関係については後述)。指示されるのは-twe_が後接する名詞Nが二つ以上含まれる集合である。言い換えると表現“N-twe_”が表す集合を構成する要素はすべてNである。

一方-to_は純粋な意味での複数ではなく、Nを代表とする漠然とした多数(《擬似的複数》*apparent plural*)を表すと考えられる。言い換えると表現“N-to_”が表す集合は、集合を構成する二つ以上の要素のうちひとつ以上のNを含むことになる。

よって-twe₁はもちろんのこと、-to₁も論理的にNのみの集合であることも許す。そのため表現“N-twe₁”と“N-to₁”の両方も、その表す集合がNのみからなる、ということはある。

- (29) a. s^häya-twe₁ = {s^häya₁, s^häya₂, ..., s^häya_n}
 b. s^häya-to₁ = {s^häya₁, s^häya₂, ..., s^häya_n}

上の例のように a. と b. とが同一の集合を表すとしても、やはりそれぞれの「意味」が若干異なる。a. は“s^häya₁という属性を持つ entry の集合”であるのに対し、b. は“s^häya₁と話し手が呼ぶ人物を代表とする集合”である。つまり b. の方がより個性が高いといえる。

また-twe₁はその付く名詞が複数であることを表すので、特定の人物を指示する人称名詞に付くことはできない。人称名詞の複数には必ず-to₁が使われることになる。

- (30) * ŋa-twe₁
 [1]-plrl

逆に-to₁は指示性や個性の低いものには用いることができないようである。

- (31) * sa.'ou'-to.
 本-plrlAPRNT

なお“do.”「我々」という名詞は接尾辞-to。《擬似的複数》から派生されたもの、あるいは少なくとも同一語源であると考えられる。この点も興味深い。

後述するが、グループ2の量化表現のうち、数名詞を伴う数表現との共起関係において-to₁と-twe₁に違いが見られる。-to₁は数名詞を伴う数表現と共起するが、-twe₁は共起しない。

上記の形式の他に-my₁:というものがあるが、これは主に文語において用いられるものである。-my₁:は口語体の-twe₁の同等物と考えられる。よって本稿では特に取り扱わない。

- (32) sa.'ou'-twe₁「本（複数、口語的）」 = sa.'ou'-my₁:「本（複数、文語的）」

2.2 グループ2 量化表現

<調査票>でグループ2に分類されているのは以下の表現である。

- a. 1冊の、2冊の、何冊の（本） / 1人の、2人の、何人の（友人）
 b. ある、全ての、ほとんどの（本） / （友人）
 c. 数冊の、わずかな、たくさんの（本） / 数人の（友人）

まずは a. の表現をみてみよう。

- (33) sa.'ou' tä.'ou' / hnä.'ou' / be.hnä.'ou'
 本 1-clsf / 2-clsf / いく〜-clsf
 本1冊、1冊の本 / 本2冊、2冊の本 / 本何冊、何冊の本

- (34) ʔänjɛ.jin: tä.'yau' / hnä.'yau' / be.hnä.'yau'
 友人 1-clsf / 2-clsf / いく〜-clsf
 友人1人、1人の友人 / 友人2人、2人の友人 / 友人何人、何人の友人

いずれの場合も「名詞+数詞+助数詞」の順となる。ただし1の位が0の場合(10を除く)は「(名詞+) 助数詞+数詞」または「名詞+(助数詞+) 数詞」となる。

- (35) sa.'ou' (('ä-)'ou') hnä-s^h-ε- / (sa.'ou') ('ä-)'ou' hnä-s^h-ε-
 本 (冊) 2-十 / (本) 冊 2-十
 本 20冊、20冊の本 / (本) 20冊、20冊 (の本)
- (36) tǎŋε-jin: (('ä-)yau') hnä-s^h-ε- / (tǎŋε-jin:) ('ä-)yau' hnä-s^h-ε-
 友人 (人) 2-十 / (友人) 人 2-十
 友人 20人、20人の友人 / (友人) 20人、20人 (の友人)

次に b. の表現を見てみよう。

- (37) sa.'ou' tǎ-'ou'-'ou'
 本 1-clsf-clsfr
 ある (ひとつの) 本
- (38) tǎc^ho. sa.'ou' / sa.'ou' tǎc^ho.
 一部 本 / 本 一部
 ある (一部の) 本
- (39) tǎŋε-jin: tǎ-yau'-yau'
 友人 1-clsf-clsfr
 ある友人
- (40) tǎc^ho. tǎŋε-jin: / tǎŋε-jin: tǎc^ho.
 一部 友人 / 友人 一部
 ある (一部の) 友人
- (41) sa.'ou' 'a:loun: / sa.'ou' 'ämya:zu.
 本 全て / 本 ほとんど
 全ての本 / ほとんどの本
- (42) sa.'ou'tǎŋε-jin: 'a:loun: / 'a:loun: 'ämya:zu.
 友人 全て / 友人 ほとんど
 全ての友人 / ほとんどの友人

「ある N」には二つの意味が考えられる。まず不定の「ある～」の場合は、「1+助数詞+助数詞」という形式をとり、それが N に後続して現れる。もうひとつは不特定多数の部分集合の場合で、これは“tǎc^ho.”「一部」という形式をとる。“tǎc^ho.”は通常 N の前に現れるが、後ろに現れる場合もある。「全ての N」「ほとんどの N」は“'a:loun:”「全ての～」“'ämya:zu.”「ほとんどの～」にあたる形式が N に後続する。

最後に c. について見てみよう。

- (43) a. sa.'ou' toun:-le:-ŋa:-'ou'(-lau')
 本 3-4-5-clsf(-about)
 数冊の本 (3～5冊の本)

- b. sa.'ou' toun:-'ou' ŋa:-'ou'(-lau')
 本 3-clsf 5-clsf(-about)
 数冊の本 (3~5 冊の本)
- (44) a. t̃əŋe.jin: t̃oun:-le-ŋa:-yau'(-lau')
 友人 3-4-5-clsf(-about)
 数人の友人 (3~5 人の友人)
- b. t̃əŋe.jin: t̃oun:-yau' ŋa:-yau'(-lau')
 友人 3-clsf 5-clsf(-about)
 数人の友人 (3~5 人の友人)
- (45) sa.'ou' ne:ne:(le:) / sa.'ou' to.do.mya:mya:
 本 わずか / 本 たくさん
 わずかの本/たくさんの本
- (46) sa.'ou't̃əŋe.jin: ne:ne:(le:) / sa.'ou't̃əŋe.jin: to.do.mya:mya:
 友人 わずか / 友人 たくさん
 わずかの友人/たくさんの友人

「数冊のN」「数人のN」にあたる表現は、厳密に言うとはビルマ語にはない。日本語の「数冊/数人」に相当するものを敢えて挙げるなら、上記の表現 a. や b. となるであろう。ただしこれらの表現は a. 「3~5 冊/人」、b. 「3、5 冊/人」という数を明示したものであるから、厳密には「数冊/数人」ではない。これらの表現における数の組合せは自由であるが、a. では「3、4、5」や「4、5、6」などというように三つの数を並べ、b. では「3、5」や「4、6」などのように偶数、奇数で揃えるのが一般的である。もちろん「3、4」という二つの並んだ数でも構わない。なお数表現の後ろに現れる-lau'「約～、おおよそ」は随意的である。

“ne:ne:(le:)”「わずかの～」、「to.do.mya:mya:”「たくさんの～」は b. でみた「全ての～」「ほとんどの～」と同様にNに後続する。

以上の観察から、ビルマ語の量化表現は“tä^ho.”「一部」を除き、その内部構造の如何に関わらず名詞の後ろに現れる、と言える。

さらに量化表現は統語的に独立性が高いという特徴がある。ここに挙げた全ての量化表現は、それが修飾する名詞を「省略することが可能」である。

- (47) (sa.'ou') t̃ä.'ou' we.-k^hε.-te.
 (本) 1-冊 買う-《移動》-VSMrls
 (本) 一冊買った。
- (48) (sa.'ou') bε.hna-'o u' t̃ou'-t̃ä-le: — ('ou') t̃ä-^haun.
 (本) 幾冊 発行する-VSMrls-q.s. (冊) 1-千
 t̃^hou'-pa.-te.
 発行する-《丁寧》-VSMrls
 何部発行しましたか? - 千部発行しました。

- (49) (caun:da:) 'a:loun:-ko_ p^hye_-k^hain:-te_
 (学生) 全て-ACC 答える-《使役》-vsmrls
 (学生) 全てに解答させた。

なお文語特有の表現として量化表現が名詞の前に現れるパターンが存在する。文語の名詞修飾節標識 -to: を介して前から後ろの名詞を修飾する。

- (50) toun:-yau'-to:-tãŋe_jin:
 3-clsf-ACMrls-友人
 三人の友人
- (51) 'a:loun:-to:-tãŋe_jin:
 全て-ACMrls-友人
 全ての友人
- (52) 'ächo:-to:-tãŋe_jin: / 'ächo_-tãŋe_jin:
 一部-ACMrls-友人 一部-友人
 一部の友人

このような表現は文語にのみ見られるものであるため、本稿では扱わないことにする。

2.3 グループ3 所有者表現

<調査票>でグループ3に分類されているのは以下の表現である。

- 私の、あなたの、彼の、彼女の、母の、その金持ちの、誰の (本)

ビルマ語には「私」「あなた」に相当する語彙が複数存在し、話し手の性別や聞き手との親密度などにより使い分けされる。ここでは性別の如何に関わらず用いられる ŋa_ 「私、オレ」と min: 「あなた、お前」を用いることにする。

- (53) ŋa_-ye_-sa_'ou' / ŋa_-ye_-sa_'ou' / * ŋa_-sa_'ou' / ŋa_-sa_'ou'
 [1]-GEN-本 [1']-GEN-本 [1]-本 [1']-本
 私の本
- (54) ŋa_-ye_-tãŋe_jin: / ŋa_-ye_-tãŋe_jin: / * ŋa_-tãŋe_jin: / ŋa_-tãŋe_jin:
 [1]-GEN-友人 [1']-GEN-友人 [1]-友人 [1']-友人
 私の友人
- (55) min:-ye_-sa_'ou' / min:-ye_-sa_'ou' / min:-sa_'ou' / min:-sa_'ou'
 [2]-GEN-本 [2']-GEN-本 [2]-本 [2']-本
 あなたの本
- (56) min:-ye_-tãŋe_jin: / ? min:-ye_-tãŋe_jin: / min:-tãŋe_jin: / ? min:-tãŋe_jin:
 [2]-GEN-友人 [2']-GEN-友人 [2]-友人 [2']-友人
 あなたの友人

ŋa_「私」の所有者表現には3種のタイプが観察される。属格助詞-ye_を用いるタイプ、所有者名詞の声調が変化するタイプ、そしてこの二つが同時に現れるタイプである。声調変化は低平調から下降調へ変化する。声調変化が起きず、かつ属格助詞が現れないものは構成素をなさず、所有者表現とは解釈できない。これに対して min_「あなた」の場合、声調変化のあるなしに関わらず、後ろに現れる名詞を修飾する解釈が可能である。ただし声調変化が起きるパターンはあまり多くなく、「あなたの」を特に強調する場合に限られるようである。

- (57) ʈu_-ye_-sa_-'ou' / ʈu_-ye_-sa_-'ou' / * ʈu_-sa_-'ou' / ʈu_-sa_-'ou'
 [3]-GEN-本 [3']-GEN-本 [3]-本 [3']-本
 彼／彼女の本

- (58) ʈu_-ye_-t͡ʃɛ_·jin: / ʈu_-ye_-t͡ʃɛ_·jin: / * ʈu_-t͡ʃɛ_·jin: / ʈu_-t͡ʃɛ_·jin:
 [3]-GEN-友人 [3']-GEN-友人 [3]-友人 [3']-友人
 彼／彼女の友人

ビルマ語には「彼」「彼女」の区別はなく、いずれも ʈu_を用いる。所有者表現のパターンとしては上を見た ŋa_「私」とまったく同じで、属格助詞タイプ、声調変化タイプ、属格助詞＋声調変化タイプがある。

次に「母のN」を見てみよう。

- (59) 'äme_-ye_-sa_-'ou' / 'äme_-ye_-sa_-'ou' / * 'äme_-sa_-'ou' / 'äme_-sa_-'ou'
 母-GEN-本 [母']-GEN-本 母-本 [母']-本
 母の本

- (60) 'äme_-ye_-t͡ʃɛ_·jin: / 'äme_-ye_-t͡ʃɛ_·jin: / * 'äme_-t͡ʃɛ_·jin: / 'äme_-t͡ʃɛ_·jin:
 母-GEN-友人 [母']-GEN-友人 母-友人 [母']-友人
 母の友人

やはり ŋa_「私」や ʈu_「彼／彼女」のパターンと同じになる。

ただし「母のN」の場合、それぞれの形式が表す意味は微妙に異なっているようだ。インフォーマントによると声調変化を伴うタイプ、すなわち声調変化タイプと属格助詞＋声調変化タイプの場合、どちらかといえば「目の前にいる自分の母親」を指している気がする、という。これに対し声調変化を伴わないタイプ、つまり属格助詞のみのタイプの場合は「誰か他人の母親」だと感じるということである。

ビルマ語は日本語などと同様に親族名称を人物を指示する語として用いる。ここで挙げた 'äme_「母」は、「母親」という属性を持つ人間を総称する語であるとともに、「母親」の属性を持つ特定の人物を指示する語でもある。言い替えると 'äme_「母」は話し手が『お母さん』と呼ぶ人物を指す。

ということは、声調変化を伴うタイプは、その指示内容からしてむしろ「あなたのN」に近いと言えるだろう。とはいえ声調変化のあるなしに関わらず、総称的である場合と指示的である場合とがありうる。

次に「その金持ちの～」を見てみよう。ビルマ語には名詞の形式として定、不定の区別が明示されない。ヒト名詞であればほとんどの場合、そのまま人物指示的 (person-referencial) に用いることが可能である。ゆえに下に挙げる t͡ʃä^he_「金持ち」は一般名詞であるとともに人物指示的でもあることに注意されたい。

- (61) ʈäʰe:-ye.-sa.'ou' / * ʈäʰe:-ye.-sa.'ou' / ?* ʈäʰe:-sa.'ou' / * ʈäʰe:-sa.'ou'
 金持ち-GEN-本 [金持ち']-GEN-本 金持ち-本 [金持ち']-本
 (その) 金持ちの本

- (62) ʈäʰe:-ye.-täŋe.jin: / * ʈäʰe:-ye.-täŋe.jin: / * ʈäʰe:-täŋe.jin: / * ʈäʰe:-täŋe.jin:
 金持ち-GEN-友人 [金持ち']-GEN-友人 金持ち-友人 [金持ち']-友人
 (その) 金持ちの友人

ただしʈäʰe:「金持ち」が人物指示的に用いられるといっても、その下降調形ʈäʰe:「[金持ち]」が許されない点が'äme_「母」などとは異なっている。'äme_「母」が聞き手に対する呼びかけ語 (address word) としての機能を持っているのに対し、ʈäʰe:「金持ち」にはそのような使い方ができないことと、下降調に変化した形式の有無とは関連しているであろう。

なお下降調にならない形式の (62) ʈäʰe:-täŋe.jin: は「金持ちである友人」の意味になるが、(60) 'äme:-täŋe.jin: は「母である友人」の意味にはならない。

最後は「誰の～」である。

- (63) bǎḍu.-ye.-sa.'ou' / bǎḍu.-ye.-sa.'ou' / * bǎḍu.-sa.'ou' / bǎḍu.-sa.'ou'
 [誰]-GEN-本 [誰']-GEN-本 [誰]-本 [誰']-本
 誰の本

- (64) bǎḍu.-ye.-täŋe.jin: / bǎḍu.-ye.-täŋe.jin: / * bǎḍu.-täŋe.jin: / bǎḍu.-täŋe.jin:
 [誰]-GEN-友人 [誰']-GEN-友人 [誰]-友人 [誰']-友人
 誰の友人

bǎḍu_「誰」は不定の指示詞 be_「どの」と名詞tu_「ひと」からできている複合的な名詞である。上で見たtu_「彼/彼女」はもともとこのtu_「ひと」である。よってこの二つの表現は全く同じ形式的な分布をする。

以上が本節の観察だが、ここで所有者表現のタイプをその形式からまとめてみよう。

2.3.1 下降調化

上で見たように所有者表現では一部の名詞がその末尾音節が下降調に変化することにより所有者であること、言い換えると後続の名詞を修飾していることを表す。下降調化は全ての名詞で可能なのではなく、音声的、意味的に条件づけられている。

まずは音声環境について観察しよう。ビルマ語にある三つの声調の例を見てみる。

- (65) ŋa.-sa.'ou'
 [1']-本
 私の本

- (66) miN:-sa.'ou' / miN:-sa.'ou'
 [2]-本 [2']-本
 あなたの本

(67) 'äma.-sa.'ou'

[姉]-本

姉の本

低平調は義務的に下降調になるが、高平調は下降調に変化する場合と、変化せずに高平調のままの場合とがある。下降調のものは表面的に音声的な変化はない。'äma.「姉」はそれ自体の末尾音節の声調が下降調であり、下降調が別の声調に変化することはない。潜在的に下降調に変化しているのであろう。

高平調の場合、下降調に変化してもしなくても、それが後続する名詞を修飾している。換言すると高平調は下降調への変化が随意的である。

次に、下降調化する名詞的素性について考える。下降調化する名詞はいわゆるヒト名詞相当語である。とはいえ、たとえヒト名詞であっても、指示性 (referentiality) が低いもの場合は下降調になりにくいようである。

下降調への変化は基本的にヒト名詞にのみ見られる現象であるが、ヒト名詞でなくともこの変化が観察されることがある。ヒト名詞相当と見なされているのかもしれない。もちろん lu-「人間」はここでは典型的なヒト名詞とは見なされない。

(68) myäma.-yin.ce:hmu. cf. myäma.-「ミャンマーの」 < myäma.「ミャンマー」

ミャンマーの-文化

ミャンマーの文化

(69) lu-'äk^hwin.äye: cf. lu.-「人間の」 < lu.-「人間」

人間の-権利

人権

下降調への声調変化という現象について二点ほど補足しておきたい。ひとつは声調変化した形式はいわば斜格とも言うべきもので、下降調化した形式そのものは属格と言うべきものではない、ということである。対格を表す助詞-ko_や於格の助詞-hma_と結びつく場合にもこの声調変化が起きる。

(70) cǎnɔ.-ko_ < cǎnɔ_ + -ko_

[1m']-ACC [1m] ACC

(71) tu.-hma_ < tu_ + -hma_

[3']-LOC [3] LOC

ふたつめはこの声調変化という現象は助辞にも見られるという点である。動詞文であること標示する -te_や-me_は、名詞を限定する修飾節となると、下降調に変化する。

(72) cǎnɔ.-# sa.'ou'-# p^ha'-te_

[1m]-# 本-# 読む_P-VSMrls

私は本を読んだ。

(73) cǎnɔ.-# p^ha'-te.-sa.'ou'

[1m]-# 読む_P-ACMrls-本

私が読んだ本

(74) mǎnɛʔpʰan- tǎŋɛ.jin:-nɛ. twe.-mɛ-
明日 友人-COM 会う-VSMirls
明日友人に会う。

(75) mǎnɛʔpʰan- twe.-mɛ.-tǎŋɛ.jin:
明日 会う-ACMirls-友人
明日会う友人

名詞修飾節についてはグループ7「名詞修飾節」で扱う。

2.3.2 属格助詞-ye.

属格助詞-ye.⁴は基本的にヒト名詞とモノ名詞につくが、位置名詞とは共起しない。

(76) ŋa.-ye.-pyi'si:
[1]-GEN-物
私のもの

(77) di.-sʰain.-ye.-pyi'si:
この-店-GEN-物
このお店の(所有する)もの

(78) sʰe:-ye.-'ānan.
薬-GEN-臭い
薬の臭い

ŋa_はヒト名詞、sʰe_はモノ名詞である。ここでのsʰain_「店」は位置名詞ではなくヒト名詞相当と言えるであろう。というのは次のような表現とは異なり、文字どおり「店」が「所有者」だからである。

(79) di.-sʰain.-ka.-pyi'si:
この-店-ABL-物
このお店(から)のもの

この表現では奪格助詞-ka_が用いられている。「この店に由来する～」という意味であり、“N1-ka.-N2”という形式はそれ全体でひとつの大きな名詞句を構成する。このような用法は主格助詞の-ka_にはない。

(80) * ŋa.-ka.-pyi'si:
[1]-NOM-物
(私のもの)

よって“N1-ka.-N2”のN1はヒト名詞やモノ名詞ではあり得ず、位置名詞である。

2.3.3 下降調化+属格助詞

末尾音節が低平調であるヒト名詞の場合、下降調化と属格助詞を用いる二つの形式の他に、この二種類のタイプが同時に現れる場合もあった。

(81) 'äp^he.-ye.-'ein₋ = 'äp^he.-ye.-'ein₋ = 'äp^he.-'ein₋

[父]-GEN-家 [父']-GEN-家 [父']-家

父の家

(Allott and Okell, 2001, pp.188)

Allott and Okell によれば、この三つの表現に違いはない、ということだが、上で見たように下降調化をする場合は会話参加者もしくは by-stander であることを強く示唆する。これに対して下降調化が起らずに属格助詞のみを用いた場合はそうではない含みがあると考えられる。

2.4 グループ4 指示表現

<調査票>でグループ4に分類されているのは以下の表現である。

- この、その、あの、どの (本)
- これらの、それらの、あれらの (本)

指示表現は名詞の前に現れる。指示表現は直示用法と照応用法とがあり、直示の場合は基本的に近称と遠称の二項対立となる。照応の場合、文脈において活性化されたものと活性化されていないものという対立となる。また不定の形式も指示表現に含めてよいであろう。

- di₋ 《近称》《前方照応 (既活性) / 後方照応》「この」
e.g. di₋sa₋'ou' この本 < di₋ この + sa₋'ou' 本
- ho₋ 《遠称》《前方照応 (未活性)》「あの、その」
e.g. ho₋sa₋'ou' あの本 < ho₋ あの + sa₋'ou' 本
- be₋ 《不定》「どの」
e.g. be₋sa₋'ou' どの本 < be₋ どの + sa₋'ou' 本

di₋は直示用法としては《近称》「この」を表す。照応用法としては《前方照応》と《後方照応》とがある。前方照応として用いられる場合、発話時点の文脈において既に話題として了解されているもの (= 活性化されている)「この」を表す。これに対し ho₋は直示用法としては《遠称》「あの、その」を表す。照応用法としては《前方照応》のみを表す。ただし di₋の前方照応とは異なり、会話参加者の間に過去において既出のものであっても、発話時点での文脈においてまだ話題となっていないもの (= 活性化されていない)「あの」を表す。この二つの形式が指示表現の基本形である。

(82) ho₋'ou'sa₋le:

ho₋もの-dim

えーと… (言いよどむ時の表現)

この二つの基本形に前接して意味を補足する形式が二つある。一つは直示の意味を、もう一つは照応の意味を付け加える。

- ho₋: 《視界内》
 - ・ ho₋:di₋ 《近称 (視界内)》「この」 < ho₋: 《視界内》 + di₋ 《近称》
e.g. ho₋:di₋sa₋'ou' この本
 - ・ ho₋:ho₋ 《遠称 (視界内)》「あの」 < ho₋: 《視界内》 + ho₋ 《遠称》
e.g. ho₋:ho₋sa₋'ou' あの本

• 'e:- 《前方照応》

- 'e:-di- 《前方照応》「その」 < 'e:- 《?》 + di- 《近称》

e.g. 'e:di-sa.'ou' その本

- 'e:-ho- 《?》「その」 < 'e:- 《?》 + ho- 《遠称》

e.g. 'e:ho-sa.'ou' あの本

ho:-は直示的な意味を拡張する。di-、ho-ともに話者からの心理的な遠近を表すが、ho:-が前接することで、視界内にあることを明示する。特に ho:-di-は、話し手の手の届く範囲にある場合に用いられる。また ho:ho-は話し手からかなり離れた位置にあるけれども、「それが見える」場合に用いられる。

一方'e:-は照応であることを明示する機能があると考えられる。'e:-di-は直前に活性化されたものに照応することはほぼ間違いないであろう。とはいえ前方照応は di-のみで表しうるので、実質的に'e:-di-と di-とが同じであることもある。ただ'e:-di-となると前方照応であることが明示的となる、といえる。

もう一つの組み合わせである'e:-ho-についてはその詳細はわからなかった。インフォーマントに尋ねると、確かに'e:-ho-という形式はあるということであったが、どのような状況で用いられるのかは特定できなかった。筆者が収集することのできた用例は以下の三例のみである。

- (83) 'e:-ho--hná-yau'-ka.-tə. cu.ʃin.-le: yu.-te.
'e:-ho- 2-clsf-NOM-《対比》 塾-~も 取る-VSMrls
その二人はというと、塾にも通っている。 (岡野 2000 : pp.6)

- (84) 'e:-ho--ha. bə.-lo. ne.-le: nin.-nə. lai'-mɛ. tʰin.-te.
'e:-ho-もの どの-~よう 居る-《疑問》 [2]-COM 似合う-VSMrls 思う-VSMrls
あれはどう?あなたに似合うと思う。 (同上)

- (85) kälə:ma.-ka. di.-lu.ji.-ko.-hma. mǎ-cai'-ta. 'e:ho.-yau'ca.-nə.
女の子-NOM この-大人-ACC-さえ NEG-好きだ-NCMrls 'e:ho-男-COM
lai'-twa:-ta. sʰɛ.-ye'-lau' ca.-pʰo.-te.
従う-行く-NCMrls 十日-ほど 経つ-ため-伝聞
女の子はこの大人を好きではないのだ、十日ほど前にあの男について行ってしまったそうだ。
(Allott and Okell 2001 : pp.264)

上で見たように ho-は活性化されていないものを指示する機能を持つのにに対し、'e:-は直前に活性化されているものを指示する機能を持つのであるから、この観察が正しいのなら'e:-ho-はその機能において矛盾する。今後の課題としたい。

ho:-と'e:-について補足しておく。“Myanmar-English Dictionary”では、この二つの形式をいずれも間投詞 (interjection) と分類している⁵。また Allott and Okell (2001) にも、ho:-は “evidently from [ho:-]“hey!”” (同書 pp.252) とあり、また'e:-についても “perhaps originally from ['e:-]“er”” (同書 pp.264) とされている。筆者が以前調査したときのインフォーマントも ho:-については間投詞であるという回答を得ている。di-や ho-と結合した形ではもはや間投詞と考えることはできないが、語源としてそうであることは十分にありえよう。

もう一点だけ付け加えておく。上で挙げたものの他に指示表現的なものに ho:ga.-という形式がある。これは「ずっと向こうの~」といった意味で、ho-よりはるかに遠いものを指示する。ho:ga.-という形式は先行文献の記述の中には一切見られないもので、極めて口語的な表現である。

- (86) ho:ga.-mein:gälə: 「ずっと向こうの女の子」

ho:ga.-は“ho:+ka.”と分解できるのであろう。-ka. は恐らく奪格助詞の-ka. である。ho:が何かはわからないが、ho_-と関係があると思われる。実際インフォーマントによれば、ho:ga.-は指示詞 ho_-の強調のような感じを受けるという。“ho: [e:fe:douN:-ka.”「むかしむかし」(昔話の導入の言葉) や次の例も同じものかもしれない。

- (87) ho:-fe.-ka. yei'-yei'-yei'-yei'-ne. lu_-pe: tʰiN_-pa_-ye.
 ho:-前-ABL 影-影-影-影-COM 人間〜のみ 思う《丁寧》-VSMssp
 ずっと先には影がたくさんある、人間だと思っただが。 (Allott and Okell : 2001, pp.253)

ho:ga.-の ga. が奪格助詞-ka. であるなら、この場合の ho:は指示名詞の ho_-から変化したものではなく、指示詞の ho_-と同形の場所指示名詞 ho_「あそこ」から変化したものと考えなければならない。そうであるなら ho:ga.-は純粋な指示表現ではなく、「位置名詞+奪格助詞」という、グループ2の所有者表現でみたタイプと同じということである。

以上をまとめると次の表のようになるであろう。

表 4: 名詞の下位分類と格助詞の分布関係

基本形式	di_-		ho_-	
	直示	照応	直示	照応
基本的な意味	話し手から近い	前方(既活性) 後方	話し手から遠い	前方(未活性)
+ ho:	+ 視界内	×	+ 視界内	×
+ 'e:	×	前方(既活性)	×	?

2.5 グループ5 名詞的修飾表現

グループ5の名詞的修飾表現として挙げられるのは次のようなものである。

- 外国の・タイ語の・言語学の・子供向けの(本)
- タイ人の・医者 of (＝医者である)(友人)

- (88) naiN_gaN_ja:-sa.'ou'

外国-本
 外国の本

- (89) naiN_gaN_ja:-ka.-sa.'ou'

外国-ABL-本
 外国の本

- (90) 'in:gālei'-sa.'ou'

イギリス人-本
 英語の本

- (91) ba_ḍa_be_da.-sa.'ou'

言語学-本
 言語学の本

- (92) k^hälē:-sa.'ou'
 子供-本
 子供のための本、子供向けの本
- (93) k^hälē:-'ätwe'-sa.'ou'
 子供-~ため-本
 子供のための本、子供向けの本
- (94) t^hain:-tǎŋe.jin:
 タイ (人) -友人
 タイ人の友人
- (95) s^häya.wun. lou'-te.-tǎŋe.jin:
 医者 する-ACMrls-友人
 医者 of 友人
- (96) * s^häya.wun. p^hyi'-te.-tǎŋe.jin:
 医者 ~である-ACMrls-友人
 (医者 of 友人)

<調査票>で名詞的修飾表現とされたもののうち、まず「医者 of 友人」は名詞修飾節構造をなしており、次節で扱う動詞的修飾表現に含まれるものである。

上記「医者 of 友人」を除いた例を見ると、修飾要素と非修飾要素との間に A. マーカーがあるもの（外国の、子供向けの）と、B. マーカーが現れないもの（英語の、言語学の、タイ人の）との2種類があることがわかる。言い換えると「マーカーを伴う名詞」が修飾要素である場合と、「マーカーを伴わない名詞」が修飾要素である場合とがある。

2.5.1 マーカーを伴う名詞

「マーカーを伴う名詞」にどのようなものがあるのか、例を見てみよう。

- (97) 'ein.-ka.-sa.
 家-ABL-手紙
 家からの手紙、個人的手紙
- (98) mye'hman.-ne.-mein.ma.
 メガネ-COM-女性
 メガネ of 女性
- (99) tu.-lo.-lu.(-myo:)
 [3']-~ような-人間 (-種類)
 彼/彼女のような (類 of) 人

上に挙げた例はいずれも (1) 「名詞+マーカー」の形式を取り、(2) 「名詞+マーカー」部分が節の直接構成要素ともなりうるもの、という特徴を持っている。マーカーは格助詞もしくは格関係相当の機能を持つ名詞である。

- (100) a. 'ein_-ka. sa_-ko. mā-yu_-khe_-mi_-p^hu:
 家-ABL 手紙-ACC NEG-取る-《移動》-《無意識》-VSMneg
 手紙を家からうっかり持って来なかった。
- b. 'ein_-ka_-sa_-ko. p^ha¹-ne_-ta_-pa_
 家-ABL-手紙-ACC 読む-〜ている-NCMrls-《丁寧》
 家からの手紙を読んでいました。
- (101) a. k^häle:-'ätwe' sa-'ou' we_-pe_-me_
 子供-〜ため 本 買う-与える-VSMrls
 子供のために本を買ってあげる。
- b. k^häle:-'ätwe'-sa-'ou'-ko. ye:-ne_-te_
 子供-〜ため-本-ACC 書く-〜ている-VSMrls
 子供のための本を書いている。

マーカーを伴う名詞と、それに続く名詞が大きな要素を構成しているかどうかは、その意味するところからしか決定できない。言えるのは、二つの要素がより大きいひとつの構成素を成す場合には、換言すればその二つが「限定-被限定」の関係にあるのなら、音声的に明らかなポーズを置くことができ、ということである。ただしポーズがないからといって「限定-被限定」の構造であると断言することはできない。

2.5.2 マーカーを伴わない名詞

マーカーを伴わない名詞とはいわば裸の名詞である。二つの名詞が何のマーキングも持たずに、単に線状に出現する。これについても、他の例を見てみよう。

- (102) a. pe.za_ 貝葉 < pe_ 「多羅椰子」 + sa_ 「手紙、文書」
 b. cau'sa_ 「碑」 < cau' 「石、岩」 + sa_ 「手紙、文書」
- (103) a. jāpan_-sa_'ou' 日本（語）の本 < jāpan_ 「日本人」 + sa_'ou' 「本」
 b. 'in:gālei'-sa_'ou' 英語の本 < 'in:gālei' 「イギリス人」 + sa_'ou' 「本」

このマーカーを伴わない名詞と、それに続く名詞が果たして語彙的に複合しているのか、それとも結合は統語的（臨時的）なものであってその度合いが緩やかなものであるのか、といった判断は非常に難しい。

結合の強さを判断する基準として、後続する要素の頭子音が有声化するかどうか、という特徴を上例で言うと(102)aでは“pe.za_”「貝葉」の後ろの名詞“sa_”「手紙、文書」が有声化していることから、結合の度合いはかなり高いと考えられる。(102)b.“cau'sa_”「碑」では前の名詞が声門閉鎖音“'”で終わっているため、結合の強さいかににかかわらず、後ろの名詞の初頭子音は有声化を起こさない。しかしaと同じ複合であると予想できるので、強い結合であると考えてよかろう。(103)の場合であるが、a.“jāpan_-sa_'ou'”「日本（語）の本」では有声化が起こる可能性のある環境であるにもかかわらず、有声化が起こっていない。よって(103)よりは結合の度合いが低いといえるかもしれない。b.“'in:gālei'-sa_'ou'”「英語の本」はやはりa.“jāpan_-sa_'ou'”と並行的であると考えられる。

いずれにしてもこれらの名詞限定の機能は二つの名詞が隣接していることのみによって保証されると考えられる。特に後ろの要素の頭子音が有声化する場合は前の要素との間にポーズ等の音声的な切れ目はない。

2.6 グループ6 動詞的修飾表現

グループ6の動詞的修飾表現として<調査票>に挙げられているのは、以下のものである。

- 分厚い・大きい・高価な・古い・ぼろぼろの・難しい・昨日買った・父がくれた・机の上にある・まだ読んでいない (本)
- 背の高い・古い・裕福な・親しい・親切な・良い・悪い・昨日会った・一緒に住んでいる・しばらく会っていない (友人)

動詞的修飾表現は基本的に a. 名詞化接頭辞 (nominalizer ; NMLZ) 'ǎ+動詞が被修飾名詞の後ろに現れるタイプ ('ǎ-V タイプ)、b. 動詞の繰り返しによって形成される動名詞が被修飾名詞の後ろに現れるタイプ (疊語タイプ)、c. 名詞の後ろに動詞が結合するタイプ (複合タイプ)、d. 名詞修飾節標識 (attributive clause marker ; ACM) により前から後ろの名詞を修飾するタイプの4種類に分類できるであろう。ここではその分類にしたがって例を挙げる。まずは「(分厚い・大きい・高価な・古い・ぼろぼろの・難しい) 本」の例である。

- (104) a. sa.'ou' 'ǎ-tʰu.
 本 NMLZ-厚い
 分厚い本
- b. sa.'ou' tʰu.-du.
 本 厚いの (疊語)
 分厚い本
- c. sa.'ou'-tʰu.
 本-厚い
 分厚い本
- d. tʰu.-tɛ.-sa.'ou'
 厚い-ACMrls-本
 分厚い本
- (105) a. sa.'ou' 'ǎ-ci:
 本 NMLZ-大きい
 大きい本
- b. sa.'ou' ci:-ji:
 本 大きい (疊語)
 大きい本
- c. sa.'ou'-ci:
 本-大きい
 大きい本

- d. ci:-te.-sa.'ou'
 大きい-ACMrIs-本
 大きい本
- (106) a. sa.'ou' ze: 'ä-ci:
 本 値段 NMLZ-大きい
 高価な本
- b. * sa.'ou' ze: ci:-ji:
 本 値段 大きい (疊語)
 (高価な本)
- c. * sa.'ou'-ze:-ci:
 本-値段- 大きい
 (高価な本)
- d. ze: ci:-te.-sa.'ou'
 値段 大きい-ACMrIs-本
 高価な本
- (107) a. sa.'ou' 'ä-haun:
 本 NMLZ-古い
 古い本
- b. sa.'ou' haun:-haun:
 本 古い (疊語)
 古い本
- c. sa.'ou'-haun:
 本-古い
 古い本
- d. haun:-te.-sa.'ou'
 厚い-ACMrIs-本
 古い本
- (108) a. sa.'ou' 'ä-sou'
 本 NMLZ-破れる
 ぼろぼろの本
- b. sa.'ou' sou'-sou'
 本 破れた (疊語)
 ぼろぼろの本
- c. sa.'ou'-sou'
 本-破れる
 ぼろぼろの本

d. sou'-te.-sa.'ou'
 破れる-ACMrls-本
 ぼろぼろの本

(109) a. ?* sa.'ou' 'ã-k^hɛ'
 本 NMLZ-難しい
 (難しい本)

b. ?* sa.'ou' k^hɛ'-k^hɛ'
 本 難しいの (疊語)
 (難しい本)

c. ?* sa.'ou'-k^hɛ'
 本-難しい
 (難しい本)

d. k^hɛ'-te.-sa.'ou'
 難しい-ACMrls-本
 難しい本

まず「分厚い」「大きい」「古い」「ぼろぼろの」は a~d のいずれも可能である。d は一般には言わない。次のように動詞的要素以外の何らかの要素がある場合でないと不自然である。

(110) di_-t^hɛ' t^hu_-te.-sa.'ou'
 この-より 厚い-ACMrls-本
 これより分厚い本

また a~c の意味は微妙に異なっているようだ。a は、それが指示する対象物のほかに、それとは異なる性質を持つ同種のもの存在が暗示される。つまり sa.'ou' 'ã-t^hu_ 「分厚い本」という表現には、例えば sa.'ou' 'ã-pa: 「薄い本」の存在を暗示させ、それと対比的に 'ã-t^hu_ 「分厚い (方の) もの」と限定しているニュアンスを持つのである。b は a と同じような場合もあるが、特に対比的でない場合にも用いられる。あるいは目の前にあるものを見たときの印象や感想を述べる場合に用いられる。c の場合は b と同様に対比的でない場合、印象や感想を述べる場合に用いられる。ただ、「古い」のように、カテゴリー化をする場合もある。これは全てのケースでそうなるわけではないが、これは a や b には見られない機能といえるであろう。次に「高価な」の場合だが、ビルマ語の「高価だ」は名詞 ze: 「値段」と動詞 ci: 「大きい」とからなる成句動詞である。「名詞+動詞」型の動詞は a~c の形式は取ることができない。ゆえに d だけが可能である。「難しい」の場合、構造的に a~d のいずれも可能であるが、a~c は使われない。理由はよくわからないが、「分厚い」「大きい」「古い」「ぼろぼろの」が外見的にすぐに分かる特徴であるのに対し、「難しい」が瞬時に把握することができない特徴だと考えられる。つまり外見的特徴を現す場合、他のものとの区別が容易であるのに対し、一見してわからない特徴を現す場合、他のものとの違いが捉えにくいと、カテゴリー化、差別化の表現となじまないのかもしれない。

次に「(昨日買った・父がくれた・机の上にある・まだ読んでいない) 本」を見よう。これらは動詞要素のみで成り立つものでない(「まだ読んでいない」を除く)ため、上で挙げた a~c の形式は取りえない。ゆえに下には d のタイプだけを挙げる。

- (111) mǎne .ga we -te .-sa 'o u'
 昨日 買う-ACMrls-本
 昨日買った本
- (112) 'ǎp^he _ pe :-te .-sa 'o u'
 父 与える-ACMrls-本
 父がくれた本
- (113) zǎbwe :-po-hma _ fi .-te .-sa 'o u'
 机-~上-LOC ある-ACMrls-本
 まだ読んでいない本
- (114) mǎ-p^ha 'te :-tesa 'o u'
 NEG-読む-まだ-ACMrls-本
 昨日買った本

名詞修飾節標識を用いる場合、動詞や節の内容と被修飾名詞との間にほとんど制限らしい制限はないと言えるであろう。

次に「友人」を被修飾名詞とする場合について見る。まずは「(背の高い・古い・裕福な・親しい・親切な・良い・悪い) 友人」である。

- (115) a. * tǎŋe .ji :N 'ǎya ' 'ǎ-myi N.
 友人 身長 NMLZ-高い
 (背の高い友人)
- b. ? tǎŋe .ji N: 'ǎya ' myi N.-myi N.
 友人 身長 NMLZ-高いの (疊語)
 背の高い友人
- c. * tǎŋe .jin: 'ǎya 'myin.
 友人 身長-高い
 (背の高い友人)
- (116) a. tǎŋe .ji N: 'ǎ-ha un:
 友人 NMLZ-古い
 古い友人
- b. tǎŋe jin: ha un:ha un:
 友人 古い (疊語)
 古い友人
- c. tǎŋe .ji N:-ha un:
 友人-古い
 古い友人
- d. ha un:te .-tǎŋe .jin:
 古い-ACMrls-友人
 古い友人

(117) a. (該当する形式なし)

b. * təŋe_jin: c^han:jan:ta_ɖa_
友人 裕福だ (畳語)
裕福な友人

c. * təŋe_jin:-c^han:ɖa_
友人-裕福だ
裕福な友人

d. c^han:ɖa_-te_-təŋe_jin:
裕福だ-ACMrls-友人
裕福な友人

(118) a. təŋe_jin: 'ä-yin:-ä-hni:
友人 NMLZ-親しい
親しい友人

b. təŋe_jin: yin:yin:hni:hni:
友人 親しい (畳語)
親しい友人

c. (なし)

d. yin:hni:-te_-təŋe_jin:
親しい-ACMrls-友人
親しい友人

(119) a. təŋe_jin: ɖäbo: 'ä-kaun:
友人 性格 NMLZ-良い
親切な友人

b. təŋe_jin: ɖäbo:-kaun:gaun:
友人 性格-良い (畳語)
親切な友人

c. təŋe_jin: ɖäbo:-kaun:
友人 性格-良い
親切な友人

d. ɖäbo: kaun:-te_-təŋe_jin:
性格 良い-ACMrls-友人
親切な友人

(120) a. təŋe_jin: 'ä-kaun:
友人 NMLZ-良い
良い友人

- b. ʈǎŋɛ-ʝin: kaun:gaun:
友人 良い (疊語)
良い友人
- c. ʈǎŋɛ-ʝin:-kaun:
友人-良い
良い友人
- d. kaun:-te.-ʈǎŋɛ-ʝin:
良い-ACMrls-友人
良い友人
- (121) a. ʈǎŋɛ-ʝin: 'ǎ-sʰo:
友人 NMLZ-悪い
悪い友人
- b. ʈǎŋɛ-ʝin: sʰo:zo:
友人 悪い (疊語)
悪い友人
- c. ʈǎŋɛ-ʝin:-sʰo:
友人-悪い
悪い友人
- d. sʰo:-te.-ʈǎŋɛ-ʝin:
悪い-ACMrls-友人
悪い友人

ここで分かるのは、2音節動詞の場合には a. 名詞化接頭辞や b. 疊語が修飾要素になりにくい、ということであろう。

- (122) mǎne-ka twe-te.-ʈǎŋɛ-ʝin:
昨日-PAST 会う-ACMrls-友人
昨日会った友人
- (123) 'ǎtu-(du-) ne-te.-ʈǎŋɛ-ʝin:
一緒 住む-ACMrls-友人
一緒に住んでいる友人
- (124) 'ǎtan_ŋɛ- mǎ-twe-ya-te.-ʈǎŋɛ-ʝin:
暫くの間 NEG-会う-《不可避》-ACMrls-友人
しばらく会っていない友人

この場合、名詞修飾節を用いるので、「本」が被修飾要素の場合とほとんど同じである。
名詞限定節について若干の補足しておく。名詞限定節を形成する名詞限定節標識 (attributive clause marker ; ACM) は非要求の動詞文標識に由来すると考えられる。意味的に対応する2種類の動詞文標識 (低平調) の声調が下降調に変化した形式が名詞限定節標識である。ちょうど所有者表現における声調変化と現象的に一致している点は興味深い。

- (125) V- te.- N[V した／する N] cf. V-te. 「V する／した。」
- (126) V- me.- N[V する (であろう) N] cf. V- me. 「V する (だろう)。」
- (127) māne.- ka. twe.- te.- lu.
 昨日- PAST 会う-ACMrls-人
 昨日会った人
- (128) māne'p^han. twe.- me.- lu.
 明日 会う-ACMirls-人
 明日会う人

また、名詞限定節は関係節ではない。限定節内にギャップがあろうとなかろうと、全く同じ形式を取る。

- (129) cāno. māne.- ka. p^ha'- te.- sa.'o u'
 私 昨日 読む-ACMrls-本
 私が昨日読んだ本
- (130) cāno. māne.- ka. sa.'o u' p^ha'- te'āk^ha.
 私 昨日 本 読む-ACMrls-とき
 私が昨日本を読んだとき

動詞的修飾要素についても補足しておこう。「マーカ-を伴う名詞」の場合と同じように「マーカ-を伴う動詞」が動詞的修飾素として現れることがある。ここで「マーカ-を伴う動詞」と呼ぶものは、(1)「動詞+マーカ-」の形式を取り、(2)「動詞+マーカ-」部分が節の直接構成素となりうるものとする。名詞限定節標識はこれに含まれない。具体的にマーカ-とは名詞化節 (nominal clause) を形成するものである。したがって「マーカ-を伴う動詞」というよりは「マーカ-に導かれる節」と言うほうがよいかもしいない。ここでは代表的な2種のマーカ-を挙げる。

- (131) a. p^ha'- pi:ḡa:- s̄o u'
 読む- NCM本
 読み終えた本
- b. di.- sa.'o u'cāno. p^ha'- pḡa:- p-
 この-本 [1m] 読む- NCM-《丁寧》
 この本は私はすでに読み終えたものです。
- (132) a. p^ha'- ḡo- sa'o u'
 読む- NCM本
 読むための本
- b. di.- hma. k^hāle: p^ha'- ḡo. ba.- hma. mā-ji.- ḡu:
 ここ- LOC 子供 読む-NCM 何-〜も NEG-ある-VSMneg
 には子供が読むためのものは何もない。

このタイプは a. のように直後の名詞を限定する場合と、b. のように単独で節の直接構成素となる場合とがある点で前節の「マーカを伴う名詞」の場合と非常によく似ている。ただし「動詞+マーカ」の場合はそれ自体が名詞相当語句である点に注意したい。(131)の“V-pi:da:”が単独で現れる場合、「～し終えたもの」という、具体的な指示物が存在しうる場合に限られるのに対し、(132)の“V-p^ho.”は「～する(ための)もの」という、指示物が存在しうる場合と、「～するために」という指示物がない場合とがある。具体的な指示物がありうる場合は前節の「マーカを伴わない名詞」相当であり、具体的な指示物がない場合は「マーカを伴う名詞」と並行的だと考えるのがよいかもかもしれない。

2.7 まとめと補足

2.7.1 動名詞と複合

本稿で動名詞 (deverbal noun) と呼ぶものは次の2種類である。上で見たように、いずれの動名詞も被限定要素である名詞の後ろに現れる。

- 名詞化接頭辞'ä-を用いるタイプ
- 動詞の繰り返し(畳語 reduplication タイプ)

(133) sa.'ou' 'ä-t^hu- 分厚い本 < 名詞化接頭辞'ä- + t^hu- 「分厚い」

(134) sa.'ou' t^hu-t^hu- 分厚い本 < t^hu- 「分厚い」 + t^hu- 「分厚い」

被修飾要素の名詞の後ろに現れる動名詞は、そのままの形式で単独では現れにくいなど、統語的な自立性は若干低いけれども、単独の名詞である⁶と考えられる。

(135) (sa.'ou') 'ä-t^hu-ci:-ko- yu.-mä-la.-c^hiN.-p^hu:
 (本) NMLZ-分厚い-augm-ACC 取る-NEG-来る-《願望》-VSMneg
 (本の) 分厚いのを持って来たくない。

(136) (sa.'ou') pa:ba:-le:-ko:-pe: twe.-te-
 (本) 薄い(畳語) -dim-ACC-~のみ 見つける-VSMrls
 (本の) 薄いのしか見つからなかった。

二つの自立性の高い名詞が並立し、かつ一方が他方を修飾しているとするならば、この二つの要素は同格構造を持っていると考えるのが相応しいであろう。

2.7.2 マーカを伴わない動詞

さらにマーカを伴わない動詞が名詞を直接修飾しているとみなされる例がある。動詞が名詞の後ろに現れるものと、前に現れるものがある。

(137) sa.'ou'-t^hu-
 本-分厚い
 分厚い本

(138) p^ha'-sa-

読む-文書
読み物、読本

動詞が名詞の後ろに現れるタイプ まず動詞が名詞の後ろに現れる (137) の例であるが、これは前節で扱った名詞化接頭辞による動名詞とが複合してしまったものであると考えられる。というのは、上の例でははっきりしないが、後ろの要素の初頭子音が条件が揃っていればほとんどの場合有声化するからである。

(139) lu-gaun: 善人 < lu-「人」+ kaun:-「よい」

(140) ye-tan. ミネラルウォーター < ye-「水」+ tan.-「清潔だ」

また、名詞化接頭辞'a-によって派生された名詞が他の要素と複合する場合、やはり'a-が脱落する現象が多々見られる。

(141) lu-hmu.-ye: 社会 < lu-「人」+ 'ä-hmu.「問題、件」+ 'ä-ye:「問題、課題」

(142) yin.ce:-hmu. 文化 < yin.ce:-「上品だ」+ 'ä-hmu.「問題、件」

「名詞+動名詞」とこの複合の形式とでどのような違いがあるかといえば、「名詞+動名詞」タイプは、ある文脈の中で対比されカテゴリー化されているのに対し、複合タイプは文脈のいかんにかかわらず既にカテゴリーとして確立したものを示すのだと考えられる。例えば“lu-'ä-kaun:”「よい人」は「人」の集合の中から「よい種類のもの」を他とは差別化して取り出そうとする表現であるのに対し、“lu-gaun:”「善人」はそのような臨時的なカテゴリーではなく、説明不要のカテゴリーとして社会的に認知されているものである。

動詞が名詞の前に現れるタイプ 動詞が名詞の前に現れるタイプの例は非常に限られており、生産的なものであるとは考えづらい。複合と考えるのがよいだろう。ただしなぜ名詞の前に動詞要素が現れるのかは問題である。カテゴリー化しているという点で、「名詞+動詞」タイプの複合と代わりはないからである。

また面白いことにこのタイプでは動詞要素の前に更に名詞が現れるものもある。

(143) caun:-qoun:-sa.'ou' 教科書 < caun:「学校」+ qoun:-「使う」+ sa.'ou'「本」

(144) nain.gan-gu:-le'hma' パスポート < nain.gan-「国」+ ku:-「渡る」+ le'hma'「証明書」

ただやはりこのタイプはいずれも語彙的な複合であるとみなす方がよいであろう。

3 複数の名詞修飾要素が共起する場合

本章では名詞を修飾する要素が複数現れた場合について、その現象を観察することにする。このうちグループ1の複数表現は（一部の名詞修飾要素との共起制限を除いて）他の要素との共起関係に影響を与えず、指示対象の名詞の「数」に応じて表れると考えられるため、特に項目を立てて検討することはない。ただし関連する箇所においてその都度言及をする。

共起という現象を考えると、その構造的な制約、言い換えると位置あるいは順序の問題と、意味的な制約、すなわち意味的選択制限の問題があるといえよう。まずは構造的な制約から観察することにする。

構造的共起制限は、すなわち被修飾名詞の前に出る要素同士、あるいは後ろに現れる要素同士に生じる可能性がある。まずは被修飾名詞の前に出る要素であるグループ3（所有者表現）、グループ4（指示表現）、グループ5（名詞的修飾表現）のうちのマーカーを伴う名詞、グループ6（動詞的修飾表現）の名詞修飾節タイプの共起関係について、その次に被修飾名詞の後ろに現れる要素であるグループ2（量化表現）、グループ6（動詞的修飾表現）の同格タイプの共起関係について見よう。

なお前章で述べた語彙的複合と見なされる修飾表現（マーカーを伴わない名詞、マーカーを伴わない動詞）は扱わない。

3.1 グループ3（所有者表現）とグループ4（指示表現）

「グループ3（所有者表現）-グループ4（指示表現）-被修飾名詞」という順序が一般的である。

- (145) a. $\eta a\text{-}di\text{-}sa\text{'ou}'$
 [1']-この-本
 オレのこの本
- b. $\eta a\text{-}ye\text{-}di\text{-}sa\text{'ou}'$
 [1']-GEN-この-本
 オレのこの本
- (146) a. * $min\text{-}di\text{-}sa\text{'ou}'$
 [2]-この-本
 (おまえのこの本)
- b. $min\text{-}ye\text{-}di\text{-}sa\text{'ou}'$
 [2]-GEN-この-本
 おまえのこの本

属格が現れる場合と現れない場合があり、どちらも同じ意味である。ただ所有者の名詞の声調が変わらないタイプの場合、属格の現れないものは非文法的となる。

「グループ4（指示表現）-グループ3（所有者表現）-名詞」の順序も可能であるが、グループ4とグループ3との間にポーズが入るようだ。自然さ（well-formedness）も「グループ3-グループ4-名詞」よりも低いものと思われる。

- (147) a. $di\text{-}\eta a\text{-}sa\text{'ou}'$
 この-[1']-本
 オレのこの本
- b. $di\text{-}\eta a\text{-}ye\text{-}sa\text{'ou}'$
 この-[1']-GEN-本
 オレのこの本

なお声調の変化しない所有者名詞の場合、この順序では属格助詞が現れなくても容認可能である。

- (148) a. $di\text{-}min\text{-}sa\text{'ou}'$
 この-[2]-本
 おまえのこの本

- b. di_-min:-yε.-sa.'ou'
 この-[2]-GEN-本
 おまえのこの本

'äme_「母」のような名詞は、指示対象が話し手との関係において「母」と呼ばれる人物である場合と、一般に「母」という属性を持つ人物である場合とでは、振る舞いが異なっている。

- (149) a. 'äme.-di.-sa.'ou'
 [母']-この-本
 母のこの本
- b. 'äme.-yε.-di.-sa.'ou'
 [母']-GEN-この-本
 母のこの本

- (150) a. * 'äme.-di.-sa.'ou'
 [母']-この-本
 母のこの本
- b. 'äme.-yε.-di.-sa.'ou'
 [母']-GEN-この-本
 母のこの本

'äme_「母」のような特徴を持つ名詞が「グループ3-グループ2-名詞」の順序で現れる場合、グループ3（指示詞）のスコープに違いが現れる。

- (151) a. di_-'äme.-sa.'ou'
 この-[母']-本
 この {母の本}
- b. di_-'äme.-yε.-sa.'ou'
 この-[母']-GEN-本
 この {母の本}

- (152) a. ? di_-'äme.-sa.'ou'
 この-[母]-本
 この {母の本}
- b. di_-'äme.-yε.-sa.'ou'
 この-[母]-GEN-本
 この {母の本}

以上から、基本的な順序は「グループ3（所有者表現）-グループ4（指示表現）-非修飾名詞」がもっとも自然な順序であると考えられる。またグループ3（所有者表現）は修飾する名詞句に隣接していない場合、声調変化もしくは属格助詞の生起という明示的な標示がほぼ必須であるという現象も観察された。

3.2 グループ3（所有者表現）とグループ5（名詞的修飾表現）

この章の初めに述べたように、ここでのグループ5（名詞的修飾表現）とは、マーカーを伴う名詞を指す。「グループ3（所有者表現）-グループ5（名詞的修飾表現）-被修飾名詞」という順序が一般的である。

- (153) a. $\eta a\text{-}y\epsilon\text{-}nain_gan_ja\text{-}ka\text{-}sa\text{'ou}'$
 [1']-GEN-外国-ABL-本
 オレの外国の本
- b. $nain_gan_ja\text{-}ka\text{-}\eta a\text{-}y\epsilon\text{-}sa\text{'ou}'$
 外国-ABL-[1']-GEN-本
 外国のオレの（執筆した？）本
- (154) a. $\eta a\text{-}y\epsilon\text{-}my\epsilon'hman\text{-}n\epsilon\text{-}\check{\imath}\check{\imath}\eta\epsilon\text{'jin}$
 [1']-GEN-メガネ-COM-友人
 オレのメガネをかけた友人
- b. * $my\epsilon'hman\text{-}n\epsilon\text{-}\eta a\text{-}y\epsilon\text{-}\check{\imath}\check{\imath}\eta\epsilon\text{'jin}$
 メガネ-COM-[1']-GEN-友人
 （メガネをかけたオレの友人）
- (155) a. $\eta a\text{-}y\epsilon\text{-}k^h\check{\imath}le\text{-}'\check{\imath}twe'\text{-}sa\text{'ou}'$
 [1']-GEN-子供-～ため-本
 オレの子供のための本
- b. $k^h\check{\imath}le\text{-}'\check{\imath}twe'\text{-}\eta a\text{-}y\epsilon\text{-}sa\text{'ou}'$
 子供-～ため-[1']-GEN-本
 子供のためのオレの本
- (156) a. ? $\eta a\text{-}y\epsilon\text{-}\check{\imath}u\text{-}lo\text{-}\check{\imath}\check{\imath}\eta\epsilon\text{'jin}$
 [1']-GEN-[3']-～ような-友人
 オレの彼／彼女のような友人
- b. ? $\check{\imath}u\text{-}lo\text{-}\eta a\text{-}y\epsilon\text{-}\check{\imath}\check{\imath}\eta\epsilon\text{'jin}$
 [3']-～ような-COM-[1']-GEN-友人
 彼／彼女のようなオレの友人

いずれの場合もあまり自然な表現とは言いかねる。これは構造的な問題というよりも意味的な問題かもしれない。被修飾名詞が「本」の場合、所有者表現を名詞修飾節「～が所有する」にするほうが自然である。

- (157) $\eta a\text{-}s^hi\text{-}hma\text{-}\quad \check{\imath}i\text{-}te\text{-}nain_gan_ja\text{-}ka\text{-}sa\text{'ou}'$
 オレの～ところ-LOC ある-ACM r/s -外国-ABL-本
 オレの外国の本

3.3 グループ4（指示表現）とグループ5（名詞的修飾表現）

やはりここでのグループ5（名詞的修飾表現）とは、マーカを伴う名詞を指す。「グループ4（指示表現）-グループ5（名詞的修飾表現）-被修飾名詞」という順序は可能だが、その逆の順序では容認されないようだ。

(158) a. di-nain-gan-ja-ka-sa-'ou'

この-外国-ABL-本

この外国の本

b. ?* nain-gan-ja-ka-di-sa-'ou'

外国-ABL-この-本

この外国の本

(159) a. di-mye'hman-ne-t̚äŋe-jin:

この-メガネ-COM-友人

このメガネをかけた友人

b. * mye'hman-ne-di-t̚äŋe-jin:

メガネ-COM-この-友人

(メガネをかけたこの友人)

(160) a. di-k^häle-'ätwe'-sa-'ou'

この-子供-〜ため-本

この子供のための本

b. ?* k^häle-'ätwe'-di-sa-'ou'

子供-〜ため-この-本

(子供のためのこの本)

(161) a. di-tu-lo-t̚äŋe-jin:

この-[3']-〜ような-友人

この彼のような友人

b. tu-lo-di-t̚äŋe-jin:

[3']-〜ような-この-友人

彼のようなこの友人

(161)を除いて「グループ5（名詞的修飾表現）-グループ4（指示表現）-被修飾名詞」は許されない。ただし、たとえ「グループ4（指示表現）-グループ5（名詞的修飾表現）-被修飾名詞」であっても、指示表現の後ろには若干の音声的な切れ目、ポーズがあるようだ。これはグループ5が「名詞+マーカ」という構成であるため、ポーズがないと「{指示表現+名詞}+マーカ」の解釈の可能性を生むからであろう。これは指示表現と所有者表現の場合と同じである。「グループ5（名詞的修飾表現）-グループ4（指示表現）-被修飾名詞」の場合、グループ5（名詞的修飾表現）がもはや被修飾名詞を修飾しているとは見なせないであろう。というのも、そもそもマーカを伴う名詞は、単独で文の構成素となり

うるのであり、被修飾名詞句と隣接していないと、後続する名詞句との修飾-被修飾という関係を持つことが不可能なのであろう。この点でマーカを伴う名詞も、より語彙的な複合に近い修飾要素であると考えられる。

3.4 グループ6（動詞的修飾要素）とその他の被修飾名詞の前に現れる要素

グループ6（動詞的修飾要素）は名詞修飾節タイプと、マーカを伴う動詞の2種類があり、それぞれ分けて検討するのがよいであろう。

3.4.1 マーカを伴う動詞とその他の被修飾名詞の前に現れる要素

マーカを伴う動詞は前章でも見たとおり、マーカを伴う名詞と非常に近い性質を持っているので、その分布がそれと類似することが予測される。まずはグループ3（所有者表現）との組み合わせについて観察する。マーカを伴う名詞との組み合わせでは「グループ3（所有者表現）-グループ5（名詞的修飾表現）-被修飾名詞」であった。

(162) a. $\eta a\text{-}y\epsilon\text{-} k^h\ddot{a}l\epsilon\text{: } p^h a'\text{-}p^h o\text{-}s a\text{'ou}'$
 [1']-GEN 子供 読む-~ため-本
 私の、子供が読むための本

b. $k^h\ddot{a}l\epsilon\text{: } p^h a'\text{-}p^h o\text{-} \eta a\text{-}y\epsilon\text{-}s a\text{'ou}'$
 子供 読む-~ため- [1']-GEN-本
 子供が読むための私の本

(163) a. $\eta a\text{-}y\epsilon\text{-} p^h a'\text{-}p i\text{:}d a\text{-}s a\text{'ou}'$
 [1']-GEN 読む-NCM-本
 私の、すでに読み終えた本

b. * $p^h a'\text{-}p i\text{:}d a\text{-} \eta a\text{-}y\epsilon\text{-}s a\text{'ou}'$
 読む-NCM- [1']-GEN-本
 (すでに読み終えた私の本)

次にグループ4（指示表現）との組み合わせについて観察する。マーカを伴う名詞との組み合わせでは「グループ4（指示表現）-グループ5（名詞的修飾表現）-被修飾名詞」であった。

(164) a. $d i\text{-} k^h\ddot{a}l\epsilon\text{: } p^h a'\text{-}p^h o\text{-}s a\text{'ou}'$
 この- 子供 読む-~ため-本
 この、子供が読むための本

b. $k^h\ddot{a}l\epsilon\text{: } p^h a'\text{-}p^h o\text{-} d i\text{-}s a\text{'ou}'$
 子供 読む-~ため- この-本
 子供が読むためのこの本

(165) a. $d i\text{-} p^h a'\text{-}p i\text{:}d a\text{-}s a\text{'ou}'$
 この- 読む-NCM-本
 このすでに読み終えた本

- b. p^ha'-pi:q̄a:- di-sa.'ou'
 読む-NCM- この-本
 すでに読み終えたこの本

最後にグループ5(名詞的修飾表現)との組み合わせである。マーカーを伴う名詞とマーカーを伴う動詞との組み合わせになる。

- (166) a. * 'ein_-ka. k^häle: p^ha'-p^ho.-sa_
 家-ABL- 子供 読む-〜ため-手紙
 (家からの/個人的子供が読むための手紙)

- b. k^häle: p^ha'-p^ho.- 'ein_-ka.-sa_
 子供 読む-〜ため- 家-ABL-手紙
 子供が読むための個人的手紙

これは3.2、3.3で見たようにマーカーを伴う名詞は、それが修飾する名詞の直前に現れる強い傾向がある。これはマーカーを伴う動詞との関係においても、その強い傾向が維持されている。

ここまですととりあえず纏めると

- (167) (指示表現+) 所有者表現+指示表現+動詞的修飾表現-marker +名詞的修飾表現-marker +名詞
 という順序が妥当なところであろう。

3.4.2 名詞修飾節とその他の被修飾名詞の前に現れる要素

名詞修飾節は、最も生産性の高い修飾形式であると考えられる。意味的、あるいは形式的な制限がほとんどない。これまでに検討した、被修飾名詞の前に現れる修飾要素が何らかの位置的制限があるのに対し、名詞修飾節はそのようなものがない。位置的制限とは隣接する位置に生起するかどうかであり、被修飾要素より前に現れる要素にあつては、それは被修飾要素の直前ということになる。よって名詞修飾節がそれよりも位置的に自由であるということは、すなわち他の修飾要素より前に現れることができる、ということ他ならない。結論から言えば果たしてその通りである。

- (168) 'äp^he_ pe:-t̄e. ŋa.-(ȳe.-)sa.'ou'
 父 与える-ACMrls [1']-(GEN-) 本
 父がくれた私の本 (グループ3と)

- (169) 'äp^he_ pe:-t̄e. di-sa.'ou'
 父 与える-ACMrls この-本
 父がくれたこの本 (グループ4と)

- (170) 'äp^he_ pe:-t̄e. nain_gan_ja.-ka.-sa.'ou'
 父 与える-ACMrls 外国-ABL-本
 父がくれた外国の本 (グループ5と)

- (171) 'äp^he_ pe:-t̄e. k^häle: p^ha'-p^ho.-ka.-sa.'ou'
 父 与える-ACMrls 子供 読む-〜ため-本
 父がくれた子供が読むための本 (グループ6と)

ただし指示表現は基本的には所有者表現の後ろでマーカーを伴う動詞も前の位置に現れるが、上で見たように、所有者表現より前に現れることもある。また名詞修飾節の前に現れることがある。このような表現は自然な会話においてしばしば見られる。

- (172) di. 'äp^he. pe:-te.-sa.'ou'
 この 父 与える-ACMrls-本
 この父がくれた本

これはいわゆる「言い直し」（あるいは別の限定要素の「言い直し」）のようである。本来は所有者表現の直前が指示詞の基本的な位置といえるが、先に指示表現を言ってしまった後で、所有者表現や名詞修飾節を言い足している、ということではないかと思われる。このことについての確定的な証拠はないが、傍証として、前に現れる指示詞の後にほぼ必ずポーズが置かれることや、本来の位置に指示表現が言い直しとして繰り返されるのが挙げられよう。

- (173) di. 'äp^he. pe:-te. di.-sa.'ou'
 この 父 与える-ACMrls この-本
 この父がくれた本

さて、では二つ（以上）の名詞修飾節が現れる場合はどうか。これについては未だ十分な調査はできておらず、結論を出す段階に至ってはいないが、次のような事情が仮説として考えられるであろう。ひとつには意味的な関連性である。名詞修飾節以外の名詞修飾要素の中では物の形状などのように、修飾される名詞との関連が強い概念ほど、修飾される名詞に近い位置に現れる傾向が強い。ということは同じ名詞修飾節であっても、修飾される名詞の属性などの方が、それ以外よりも名詞に近くなる。

- (174) a. mäne.-ka. twe.-te. 'äyan: c^ho:-te. mein:gäle:
 昨日 会う-ACMrls やたら すべすべだ-ACMrls 女の子
 昨日会った、とても綺麗な女の子
- b. 'äyan: c^ho:-te. mäne.-ka. twe.-te. mein:gäle:
 やたら すべすべだ-ACMrls 昨日 会う-ACMrls 女の子
 とても綺麗な昨日会った女の子

もうひとつは修飾をする要素の中に情報量が多ければ多いほど、修飾される名詞より遠い位置に現れやすい、という傾向である。これは上の点と裏表の関係にあるともいえるが、付加する情報が多いということは、それだけ修飾される名詞の周辺の情報である傾向が強いのではないかと考えられる。

- (175) a. mähni'-ka. yan_goun-te'gäḍo.-ka. cāno.-to.-te'gäḍo.-ko. pyaun:-la.-k^he.-te.
 昨年-PAST ヤンゴン大学-ABL [1m]-plrlAPPRNT-大学-ALL 移る-来る-《移動》-ACMrls
 myäma-tāmain: 'ädi.ka. le.la.-ne.-te. sh'äya.-ci:
 ミャンマー-歴史 主要 学ぶ-~ている-ACMrls 先生-augm
 昨年ヤンゴン大学から我々の大学へ移ってきた、ミャンマー史を専門に研究している大先生
- b. myäma-tāmain: 'ädi.ka. le.la.-ne.-te. mähni'-ka. yan_goun-te'gäḍo.-ka.
 ミャンマー-歴史 主要 学ぶ-~ている-ACMrls 昨年 ヤンゴン大学-ABL

căno-to.-te'găđo.-ko. pyaun:-la.-k^hε.-te. s^hăya.-ci:
私-plrlapprnt-大学-ALL 移る-来る-《移動》-ACMrls 先生-augm

ミャンマー史を専門に研究している、昨年ヤンゴン大学から我々の大学へ移ってきた大先生

上の例はいずれも不自然である、という程度で、完全に容認不可能というものではない。いずれにしても修飾要素が複数現れた場合のその順序を決定するものは、構造的な要因だけにとどまらず、意味的な関連性も考慮に入れざるを得ないと思われる。この点は今後の課題としたい。

3.5 グループ2（量化要素）とグループ6（動詞的修飾要素）の動名詞、複数表示

グループ2（動詞的修飾要素）は動名詞はいずれも名詞の後ろに現れる点で、他の修飾要素と著しく異なっている、といえるだろう。いずれもが「被修飾要素である」はずの名詞、言い換えれば構造的に主要部であるはずの名詞を欠いても文法的であることから、同格構造をとっていると考えるのが妥当であろう。この二つの後置要素は必ず「名詞+動名詞+量化表現」の順になる。逆の順番になることは決してない。

(176) a. sa.'ou' 'ă-t^hu. toun:-'ou'
本 NMLZ-厚い 3-clsf
分厚い本3冊

b. * sa.'ou' toun:-'ou' 'ă-t^hu.
本 3-clsf NMLZ-厚い
(分厚い3冊の本)

なお量化表現と複数表示-twe.は決して共起しない。擬似的複数を表す-to.は量化表現と共起する。

(177) a. * sa.'ou'-twe. toun:-'ou'
本-plrl 3-clsf
(本3冊)

b. s^hăya.-to. toun:-'yau'
先生-plrlAPPRNT 3-clsf
先生たち3人

3.6 基本的な名詞修飾構造と三つ以上の修飾要素が現れる場合

以上をまとめるとビルマ語の名詞修飾構造は次のようになっていると考えられる。

(178) ビルマ語の名詞修飾構造

Vacm-Ngen-dnstr-Vmk-Nmk-N Ndvrb Nqntfr

- Vacm : 名詞修飾
- Ngen : 所有者表現
- dnstr : 指示表現
- Vmk : マーカーを伴う動詞
- Nmk : マーカーを伴う名詞
- N : 名詞主要部（被修飾名詞）
- Ndvrb : 動名詞
- Nqntfr : 量化表現

同じグループに属する要素で二つ以上同時に現れる可能性について考えよう。まず被修飾名詞より前に出る要素だが、所有者表現や指示詞が同時に二つ以上現れることは意味的にありえない。マーカを伴う名詞は二つ以上現れる可能性があるが、その例は今のところ見出せていない。マーカを伴う動詞は、構造的に二つ以上現れることを制約するものではないであろうが、実際のところ意味的に共起することはないであろう。動名詞も二つ以上現れる例があるが、それら全てが名詞を限定しているかどうかは疑問である。やはり名詞修飾節がもっとも自由に同じ名詞を同時に修飾することが可能であると考えられる。ただし、一つの名詞句内に現れる名詞限定節のは最大数は二つのようである。三つ以上になると構造が複雑になりすぎて理解が困難になるためか、非常に容認しづらい表現になるということである。

注

- 1 ここでは格助詞のついた名詞句のこと。
- 2 -hma₁は、いわゆる存在文においてのみ、ヒト名詞に付いて於格を標示する。
- 3 いわゆる rapid speech で介子音-w-が脱落して-te₁となる場合がある。
- 4 -ye₁は、先行する形態素の末尾が声門閉鎖音 [-ʔ] ([ʔ]) で終わっているとき、必ずしも義務的ではないが、-ke₁となることがある。頭子音 y-が声門閉鎖音の直後で k-に変化するというこの現象はビルマ語には広く観察されるものであるが、この点に関して筆者が質問するとインフォーマントの Daw Yin Yin May 氏は「絶対に変化しないし、聞いたこともない。恐らくよく知られていない小さな方言ではないか。」と否定した。筆者の観察では Daw Yin Yin May 氏にこの現象は確かめられなかったが、他のネイティブ・スピーカーではしばしば耳にしている。また Allott and Okell (2001) にもこの変化についての言及がある。ただこの変化は完全に義務的というわけではなく、音声環境が整っていても変化しないこともあることから、本稿では -ye₁ とのみ表記することにする。
- 5 'e₁-は助辞 particle となっている (pp.615) が、記述の内容 “[colloq] word interposed when groping for words (equivalent to ‘er’, ‘um’, etc.)” からして間投詞の誤りであろう。
- 6 これらの動名詞形が単独で現れる場合、接尾辞の -ci: 《増大辞》(augmentative) や -k^hāle: ~-le: 《指小辞》(diminutive) が付加されるのが普通である。これは動名詞のみではやや具体性に欠けるためではないかと考えられる。なお親族名称を表す名詞のうち、nyi₁-「弟」や hnāma₁-「妹」などが人物指示名詞として用いられる場合に指小辞が必ず付加されると並行的な現象であるのかも知れない。

参考文献

Allott, Anna & Okell, John

2001 *Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forms*. Curson Press, Richmond, Surrey.

Myanmar Language Commission

1990 *Myanmar-English Dictionary*, Yangon.

大野 徹

1983 『現代ビルマ語入門』 泰流社、東京

2000 『ビルマ (ミャンマー) 語辞典』 大学書林、東京

岡野 賢二

1998 「現代口語ビルマ語の動詞の項構造と名詞句標識」 東京外国語大学大学院修士論文

2000 「現代口語ビルマ語における名詞限定構造の記述 (1)」 『東南アジア学』第6巻、東京外国語大学東南アジア課程

2003 「現代口語ビルマ語の『行く・来る』」 慶應義塾大学言語文化研究所 東南アジア諸言語研究会編

Okell, John

1969 *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. London: Oxford University Press.

澤田 英夫

1998 『ビルマ語文法 (2 年次)』 (1999 年補訂)

(<http://www3.aa.tufs.ac.jp/sawadah/burtexts/burgram2.pdf>)

1999 『ビルマ語文法 (1 年次)』

(<http://www3.aa.tufs.ac.jp/sawadah/burtexts/burgram1.pdf>)

Wheatley, Julian K.

1982 'Burmese: A Grammatical Sketch'. Berkeley, California: Ph.D dissertation.

藪 司郎

1991 「ビルマ語」、『言語学大辞典』(第3巻)、三省堂書店

ロンウオー語の名詞句構造

澤田英夫

- 1 ロンウオー語
 - 1.1 話し手と言語の概況
 - 1.2 音韻論
 - 1.3 文法範疇
 - 1.4 文法的に条件付けられた声調交替 (tonal alternation:TA)
- 2 調査協力者
- 3 先行研究
- 4 名詞句に現れる要素の分類
 - 4.1 グループ1：複数表示
 - 4.2 グループ2：量化表現
 - 4.3 グループ3：所有表現
 - 4.4 グループ4：指示表現
 - 4.5 グループ5：名詞的修飾表現
 - 4.6 グループ6：動詞的修飾表現
- 5 名詞句を構成する要素の共起と相対的順序
 - 5.1 主名詞に後続する要素
 - 5.2 主名詞に先行する要素
 - 5.3 主名詞に先行する要素と後続する要素の共起

注

参考文献

略号

&…動詞等位接続子, ABL…奪格標識, ACC…対格標識, ATTR…名詞修飾標識, CLFR…類別名詞, COM…共格標識, COPULA…コピュラ, DMN…指小辞, IRL…文標識：情報授受・肯定・非現実, LOC…位格標識, NEG…文標識：情報授受・否定, NPRF…名詞化前接辞, PLR…名詞の複数表示, RA…肯定現実の陳述文における場所埋め (placeholder)/名詞修飾節における繫辞 (linker), RDPL…重複, RLS…文標識：情報授受・肯定・現実, TOP…話題表示

1 ロンウオー語

1.1 話し手と言語の概況

ロンウオー *Lhaovo /lɔŋF voF/* はミャンマー（旧ビルマ）連邦のカチン州・シャン州北部、および中華人民共和国雲南省徳宏傣族景頗族自治州に居住する民族である。近隣に居住するジンポー *Jinghpaw*・ラチツ *Lacid*（ラシ *Lashi*）・ツアイワ *Zaiva*（アツイ *Atsi*）などの民族などと共に、「カチン」と呼ばれる文化的集団の成員をなす。人口は、中国に約 5000 人¹、ミャンマーに約 10 万人である²。なお「ロンウオー」は自称であり、ビルマ語・ジンポー語による名称はマル *Maru* である。

ロンウオー語はチベット・ビルマ語派 (*Tibeto-Burman*)、ロロ・ビルマ語群 (*Lolo-Burmese*) ビルマ語系 (*Burmish*) に属す。Nishi(1999) では母音に緊喉性の対立が見られるかどうかを基準にして、ビルマ語系を *Burmic* と *Maruic* に下位分類し、ロンウオー語を、ラチツ語・ツアイワ語などと共に *Maruic* に含めている。

1.2 音韻論

ロンウオー語音韻論の概略を示す。

1.2.1 音節構造

ロンウオー語の音節構造は次のとおり。

$$C(C)V(C)/QT$$

C =子音, V =母音, Q =緊喉性素性 [\pm creaky], T =声調

1.2.2 頭子音

(1)		LABIAL	DENTAL	ALVEOLAR	PALATAL	VELAR	GLOTTAL
NASAL		m		n	ɲ	ŋ	
STOP/	<i>unaspirated</i>	p	ts	t	c	k	ʔ
AFFRICATE	<i>aspirated</i>	ph	tsh	th	ch	kh	
FRICATIVE		f,v	s		š	x,ɣ	h
LATERAL				l			
FLAP				r			
APPROXIMANT					y		

1.2.3 介子音とそれを含む連続

my, py, phy, ky, khy

1.2.4 母音

(2)		FRONT	CENTRAL	BACK
CLOSE	i			u
MID	e		ø	o
OPEN		a		au

1.2.5 末子音（および母音との組み合わせ）

(3)	a	au	e	ø	o	i	u
-y	ay	auy	ey				uy
-ŋ	aŋ	auŋ	eŋ		oŋ		uŋ
-k	ak	auk					uk
-ʔ	aʔ		eʔ	øʔ	oʔ		
-n	an					in	un
-t	at					it	ut
-m	am			øm			
-p	ap						

1.2.6 緊喉性素性

[-creaky](V) 声帯の緊張を伴わない。時に息混じりの音

[+creaky](V) 声帯の緊張を伴う。きしんだ音

1.2.7 声調

Falling(*F*)、Low(*L*)、High(*H*) の3つ。

1.2.8 音節弱化

弱化して固有の声調を失った音節を *CV̇* で示す。

1.3 文法範疇

ロンウォー語の文法範疇は、名詞類 (N)・動詞類 (V) および辞類 (p) の合わせて3つに大きく分かれる。

名詞類の下位分類の中で、本稿で扱う名詞句構造を語る際に有意な閉じた類として、人称名詞 (personal nouns)・指示名詞 (demonstrative nouns)・数名詞 (numeral nouns)・類別名詞 (classifier nouns)・数量名詞 (quantifier nouns)などを挙げておく。

1.4 文法的に条件付けられた声調交替 (tonal alternation:TA)

ロンウォー語には、文法的に条件付けられた声調交替の現象がある。これは、ある特定の文法的環境で、動詞・助動詞・名詞の声調が次のように交替するというものである。

$$(4) F \rightarrow L ; L \rightarrow H ; H \rightarrow H$$

声調交替が起こる環境の主なものを次に挙げる。

1. 肯定・現実法の陳述文の核となる動詞 (+助動詞) の最終音節
2. 名詞修飾句・名詞修飾節の核となる名詞・動詞 (+助動詞) の最終音節
3. 動詞連続を成す動詞のうち、最終以外の各動詞の最終音節
4. 具格標識-*yayF* の直前

上記 1.-3. のいずれについても、声調交替の存在自体が特定の節や句のタイプの標識、あるいは動詞等位接続子 (verb coordinator) として機能するものと分析し、声調交替を引き起こす抽象的な小辞 TA を仮定する。この分析は、見かけ上声調交替の起こらない、基本調が *H* であるケースにもそのまま適用されるものとする。³一方、4. については具格標識自体が持つ特異性と考えるより他なさそうである。⁴

2 調査協力者

本稿の研究に協力しデータを提供していただいたバムウォー=コンナン Bamvo Khao Nan”/pamF voF khoyF nanH/女史は、1958年11月15日にミャンマー連邦シャン州北部のクツカイ Kutkai に生まれた。高等学校まで同地で過ごし、タウンジー=カレッジを経てヤンゴン教育大に進み、学位を取得した後、故郷で高校の教師をした経験を持つ。1993年来日して現在に至る。

3 先行研究

藪 (1992) および載・徐 (1992) に本稿で扱う形式のうちいくつかについての記述が散見するが、名詞句の構造のまとまった記述は未だない。

4 名詞句に現れる要素の分類

本節では、p.??で示した分類に従い、ロンウォー語の名詞句に現れる要素を観察する。これら要素のうちあるものは主名詞から独立した句要素とみなされ、またあるものは主名詞の一部であるとみなされる。

4.1 グループ1：複数表示

ロンウオー語の複数表示には、以下に示すような形式がある。いずれも名詞に後接する。

- (5) *-cgmF*
-pamF
-yeF (人間名詞のみ)

*-cgmF*は名詞*ăcgmF*「組・セット・団体」の文法化したもので、名詞が人間を表すか否かにかかわらず用いられる。

- (6) *pyinFchoŋL-cgmF* 友人たち
sătheH-cgmF 金持ちたち
loŋFvoF-cgmF ロンウオー人たち
mukFsukHpəukH-cgmF 本(複数)
yamF-cgmF 家(複数)

*-pamF*は名詞「山・堆積」の文法化したもので、人間名詞につく場合、各成員が「識別されている」特定性の高い集団を表す。*yoŋL*「彼・彼女」に付くこともある。民族名などの集団名称にはつかない。

- (7) *pyinFchoŋL-pamF* 友人たち
sătheH-pamF 金持ちたち
**loŋFvoF-pamF*

人間以外を表す名詞につく場合、*-pamF*は複数を表さず、「…の集積、…の山」の意味合いを持つ。(!!はその形式が不適格ではないものの、意図された以外の意味に解されることを示す。)

- (8) *!mukFsukHpəukH-pamF* 本の山/*本(複数)
**yamF-pamF*

*-yeF*は人間名詞一般につく。民族名にもつく。

- (9) *pyinFchoŋL-yeF* 友人たち
sătheH-yeF 金持ちたち
loŋFvoF-yeF ロンウオー人たち
**mukFsukHpəukH-yeF*
**yamF-yeF*

4.2 グループ2：量化表現

ロンウォー語の量化表現を構成する要素は、文法範疇としては名詞類に属する。数名詞（および *khǒnɔL* 「いくつ」）＋類別名詞からなるものと、そうでないものがある。

4.2.1 数名詞＋類別名詞

数名詞と結びつく類別名詞の主なものを、量化表現によって量化される名詞の例と共に挙げる。

- | | | | |
|------|----------------------------|--------------|---------------------------------|
| (10) | <i>pyuF tə-yaukF</i> | 人間 1人 | cf. <i>yaukFkaiF</i> 男 |
| | <i>nuŋL tə-tauL</i> | 牛 1頭 | cf. <i>kaunFtauL</i> 胴体 |
| | <i>sakʔH(keŋF) tə-keŋF</i> | 樹 1本 | |
| | <i>voL tə-keŋF</i> | 竹 1本 | |
| | <i>šiL tə-cheʔH</i> | 果物 1個 | |
| | <i>moLtoL tə-cheʔH</i> | 車 1台 | |
| | <i>khukʔH tə-lamL</i> | コップ 1個 | |
| | <i>tunHpaukH tə-paukH</i> | 本 1冊 | |
| | <i>gamF tə-yamF</i> | 家 1軒 | |
| | <i>voF tə-voF</i> | 村 1村 | |
| | <i>səlɪtF tə-keʔH</i> | 葉巻 1本 | |
| | <i>seŋF tə-pyoŋF</i> | 刀 1振り | cf. <i>seŋFpyoŋF</i> 剣 |
| | <i>myiʔamF tə-phauL</i> | 鉄砲 1丁 | |
| | <i>laL tə-phauL</i> | 弓 1張り | |
| | <i>toŋL tə-khəmL</i> | 言葉 1言 | cf. <i>caunLmoʔHkhəmL</i> 祈りの言葉 |
| | <i>ŋaunHthəF tə-tauF</i> | 歌 1曲 | cf. <i>ʔăthoʔHtauF</i> 上部 |
| | <i>mayF tə-khyeʔH</i> | ロンジー 1枚 | |
| | <i>thoŋL tə-khyaunL</i> | 薪 1本 | |
| | <i>mayF tə-taŋL</i> | ロンジー 1巻き < V | |
| | <i>tauŋL tə-cheŋH</i> | 紐 1巻き | |

厳密には類別名詞でないが、数名詞と結びついて何らかの量化の機能を果たす名詞としては、次のようなものがある。

(11) 容器などによる計量

yitF tə-khukH 水 1杯

yitF tä-kəmF 水 1 コップ

yitF tä-mətH 水 1 柄杓

(12) 動作の結果としての計量

šoL tä-khyiH 肉 1 切れ

shökyəkH tä-ce?F 乾肉 1 切れ

tsoF tä-kəkH 飯 1 包み < V

tsötshəmL tä-cəkH おかず 1 包み

(13) 対

khyitFtsəwL tä-tsamH サンダル 1 足

(14) その他

tä-pamL 1 部分

tä-caL 1 種

tä-namF 1 種

数名詞と結びつく名詞には他に、度量衡や暦などの単位を表す名詞や、位取りの名詞がある。

(15) 度量衡

tä-thuF 長さの単位 (=0.25yard=22.86cm)

tä-tawH 長さの単位 (=0.5yard=45.72cm)

tä-leŋF 長さの単位 (=2yard=182.88cm)

tä-pyeL 容量の単位 (=0.255710424l)

tä-kye?H 貨幣の単位

(16) 暦

tä-tsinF 1 年

tä-khye?H 1 月

tä-panF 1 週

tä-paL 1 日

(17) 位取り

tä-tsheF 十

tä-yoF 百

tǎ-taunF 千
tǎ-tukF 万
tǎ-kyitF 百万
tǎ-kukF 千万

数名詞を含む数量表現は、必ず量化される名詞句に後続する。

- (18) a. *mukFsukHpaukH tǎ-paukH* 1冊の本
 本 1-CLFR
- b. **tǎ-paukH mukFsukHpaukH*
- (19) a. *mukFsukHpaukH khǒnoH-paukH* 何冊の本?
 本 いくつ-CLFR
- b. **khǒnoH-paukH mukFsukHpaukH*

4.2.2 数名詞を含まないもの

数名詞を含まない数量表現としては、次のようなものがある。

- (20) 数量の多寡に言及するもの
- | | |
|------------------------------------|----|
| <i>taFcitH(-tsoL)</i> ⁵ | 少し |
| <i>myoL-šo?H</i> ⁶ | 多く |
| <i>myoLmyoL</i> ⁷ | 多く |
- (21) 全体に対する比率に言及するもの
- | | |
|------------------------|------|
| <i>myoL-phyonL</i> | ほとんど |
| <i>?älapH</i> | 全て |
| <i>tǎyeŋL ~ tǎheŋL</i> | あるもの |

これらの数量表現のほとんどは、量化される名詞句の後に置かれ、前には置かれぬ。

- (22) a. *mukFsukHpaukH taFcitH(-tsoL)* 数冊の本・わずかな本
 本 少し (-DMN)
 b. **taFcitH(tsoL) mukFsukHpaukH*
- (23) a. *mukFsukHpaukH myoLšo?H* たくさんの本
 本 多く
 b. **myoLšo?H mukFsukHpaukH*
- (24) a. *mukFsukHpaukH myoL-phyoŋL* ほとんどの本
 本 ほとんど
 b. **myoL-phyoŋL mukFsukHpaukH*
- (25) a. *mukFsukHpaukH ?älapH* 全ての本
 本 全て
 b. **?älapH mukFsukHpaukH*
- (26) a. *mukFsukHpaukH täheŋL* ある本
 本 あるもの
 b. **täheŋL mukFsukHpaukH*

4.3 グループ3：所有表現

所有表現は、名詞句に名詞修飾標識-*reH/-noL*を後接させて作られる名詞修飾句の一用法に数えられる。⁸

- (27) a. *cheL saFtheH-reH mukFsukHpaukH* この金持ちの本
 この 金持ち-ATTR 本
 b. *cheL saFtheH-noL mukFsukHpaukH* 同上
 この 金持ち-ATTR 本

yoyL「彼・彼女」・*khö-yaukF*「誰」・*pyuF tä-yaukF*「一人の人」など人間を指示する一部の名詞句は、名詞修飾句として用いられる際、最終音節が声調交替を起こす。(cf.1.4) これらの名詞句は-*reH/-noL*を後接させることなく名詞を修飾することができる。

- (28) *yoyL-TA mukFsukHpaukH* 彼(女)の本
yoyL-TA-reH mukFsukHpaukH 同上
yoyL-TA-noL mukFsukHpaukH 同上

- (29) *khöyaukF-TA mukFsukHpaukH* 誰の本?
khöyaukF-TA-reH mukFsukHpaukH 同上
khöyaukF-TA-noL mukFsukHpaukH 同上

ŋoF「私」・*noŋF*「あなた」は、それぞれ名詞修飾句専用の形式 *ŋaH*「私の」・*niH*「あなたの」を持ち、*-reH/-noL* なしに名詞を修飾することができる。

- (30) *ŋaH mukFsukHpaukH* 私の本
ŋaH-reH mukFsukHpaukH 同上
ŋaH-noL mukFsukHpaukH 同上

4.4 グループ4：指示表現

事物を直示的あるいは照応的に指示する名詞には、次のようなものがある。

- (31) *cheF* 近称「これ」(直示・照応) pl. *cheF-pamF* / *cheF-cgmF*
thøF 中称「それ」(直示) pl. *thøF-pamF* / *thøF-cgmF*
ʔayF 中称「それ」(直示・照応) pl. *ʔayF-pamF* / *ʔayF-cgmF*
khoF 不定称「どれ」⁹

これらに対応する名詞修飾要素には、4つの形式がある。

4.4.1 名詞修飾形

名詞の前に付加される。

- (32) 基本形 名詞修飾形
cheF cheL~chě
thøF thøL~thǒ
ʔayF ʔayL~ʔăy
khoF khoL~khǒ
- (33) *cheL pyuF* この人
この 人
thøL läkhaL その犬
その 犬
ʔayL ʔäšiL その果実
その 果実
ʔkhoL mukFsukH どの紙¹⁰
どの 紙

4.4.2 名詞修飾形+類別名詞

名詞の後に付加される。不定称の *khoL~khǒ* にはこの形式はない。¹¹

- (34) *pyuF chě-yaukF* この人
人 この-CLFR
läkhaL thǒ-tauL その犬
犬 その-CLFR
?äšiL ?äy-che?H その果実
果実 その-CLFR

4.4.3 名詞修飾形+*-ruF*

名詞修飾形 *cheL~chě / thǒL~thǒ / ?ayL~?äy* と *-ruF* 「もの」との組み合わせは、それぞれ *cheF/thǒF/?ayF* と同じ意味で用いられる。

- (35) *?ayL-ruF peH* それは何?
その-もの 何
(36) *chě-ruF-tho?H kayF-TA-raH* これよりも良い。
この-もの-より 良い-RLS-RA

これらが名詞の修飾要素となる場合、名詞の後に付加される。

- (37) *pyuF chě-ruF* この人
人 この-もの
läkhaL thǒ-ruF その犬
犬 その-もの
?äšiL ?äy-ruF その果実
果実 その-もの
mukFsukH khǒ-ruF どの紙
紙 どの-もの

4.4.4 指示名詞の基本形

前項の形式と同様に、名詞の後に付加される。*khoL~khǒ* はこの形式で用いられない。

- (38) *pyuF cheF* この人
 人 これ
läkhaL thøF その犬
 犬 それ
ʔäšiL ʔayF その果実
 果実 それ

4.5 グループ5：名詞的修飾表現

疑いなく名詞的修飾表現と扱ってよいものに、名詞句と格標識からなる句がある。また、属性を表す派生名詞が他の名詞に後続するケースも、名詞的修飾表現として扱ってよいであろう。もう一つ、一見名詞的修飾表現に見えるものとして、名詞が他の名詞に先行するケースがある。以下順に述べる。

4.5.1 名詞句と格標識からなる句

確かに名詞的修飾表現であると言えるのは、名詞句と格標識あるいはそれに相当する働きを持つ要素からなる句である。¹²

名詞句と奪格標識-*meŋH* からなる句は、起点だけでなく、ものが存在する場所を表すこともある。

- (39) *kāmaŋL-meŋH-TA pyinFchoŋL* 他の国からの友人・外国の友人
 他の¹³国-ABL-ATTR 友人

cf. *cheL pyinFchoŋL-flaF kāmaŋL-meŋH loF-TA-raH*
 この 友人-TOP 他の国-ABL 来る-RLS-RA
 この友人は、他の国から来た。

- (40) *tsoFpøH-toŋF-meŋH-TA mukFsukHpaukH* 机の上の本 cf.(76)
 机-上-ABL-ATTR 本

次の例は、本来「前」という意味を表す名詞 *yitH* が所有表現を取り、さらにそれが奪格標識-*meŋH* と合わさったものであるが、実質的には *yitH-meŋH* 全体で例外的に所有表現を取る格形式として働いている。

- (41) *tsoLšøŋF-TA yitH-meŋH-TA mukFsukHpaukH* 子供のための本
 子供-ATTR ため-ABL-ATTR 本

cf. *tsoLšøŋF-TA yitH-meŋH mauH tsauyL-TA-raH* 子供のために働く
 子供-ATTR ため-ABL 仕事 する-RLS-RA

次の例のように、格標識ではなく、特定の意味役割を表す名詞が句を形成 する ともある。

(42) *chě-ruL-TA mukFsukHpaukH* このような本
この-よう-ATTR 本

cf. *chě-ruL katH-TA-raH* このようにした
この-よう する-RLS-RA

4.5.2 属性を表す派生名詞など

属性を表す名詞のうち最も一般的なものは、前接辞 ?ă による動詞からの派生名詞である。?ă による派生の入力となる動詞のほとんどは状態あるいは変化といった無意志的な事象を表すものである。

?ă による派生名詞が動詞の補語として用いられる例を下に挙げる。

(43) *?ăkayF-reF katH-yaukF* 良いことをする人
NPRF 良い-ACC する-人

(44) *nănauŋH-fiaF nănauŋH yăphoH-nəL ?ăve?F?ăsamH-reF*
あなたがた-TOP あなたがたの 父-ATTR ふるまい-ACC
katH-choŋH-naL-?ăkoH
する-従う-いる-PLR

あなたがたは、あなたがたの父のふるまいに従っている。

属性を表す名詞は、被修飾名詞の後に置かれる。

(45) *mukFsukHpaukH ?ăyukL* 難しい本 cf.(61)
本 NPRF 難しい

(46) *mukFsukHpaukH ?ătshukH* 古い本
本 NPRF 古い

(47) *mukFsukHpaukH ?ăcatF* ぼろぼろの本
本 NPRF 破れる

(48) *mukFsukHpaukH ?ăthauF/?ăpoL(-tsoL)* 厚い/薄い本
本 NPRF 厚い/NPRF 薄い (-DMN)

(49) *myaŋFkhaL ?ătauyF* 生きた虎
虎 NPRF 生きている

(50) *loŋFmauyF ?ăyiL* 大きな蛇
蛇 NPRF 大きい

次の例は、動詞 *luF*「薄い」の重複と名詞 *ruF*の組み合わせによる、属性を表す複合名詞の例である。

- (51) *ʔäfoʔH luFluF-tsaL-TA ruF¹⁴* ひらひらした葉っぱ
 葉 薄い RDPL-[限定]-ATTR もの

(46)の *ʔätshukH*の反義語である *ʔäsakF*「新しいもの」は、対応する動詞 **sakF*を持たない。¹⁵

- (52) *mukFsukHpaukH ʔäsakF* 新しい本
 本 新しいもの

cf. *chě mukFsukHpaukH ʔäsakF pøH-TA-raH* この本は新しい。
 この 本 新しいもの なる-RLS-RA

cf. *chě mukFsukHpaukH ʔäsakF ɲatF-TA-raH* この本は新しい。
 この 本 新しいもの COPULA-RLS-RA

これらの例は、構造的には属性を表す名詞とそれに先行する名詞とが同格の関係にあると考えられる。しかし、前接辞 *ʔä*が脱落しない点と¹⁶、全体の意味が部分の意味から正しく予測できる点を考慮し、これも名詞的修飾表現の一種として扱う。

4.5.3 名詞

一見、名詞的修飾表現のように見える要素に、次の各例で太字で表された名詞要素がある。

- (53) *mayFkanF-mukFsukHpaukH* 外国の本
 外国¹⁷-本

- (54) *mukH-kyoL-pyuFmyuH / ɣitF-kyoL-pyuF / maŋL-kyoL-pyuF* 外国人
 地方-異なる-人種 / 水-異なる-人 / 国-異なる-人

cf. *maŋL-kyoL-mukH / ɣitF-kyoL-mukF / mukH-kyoL-mukH* 外国
 国-異なる-地方 / 水-異なる-地方 / 地方-異なる-地方

- (55) *caFpanF-pyinFchoŋL* 日本人の友人
 日本人¹⁸-友人

- (56) *phaukH(voF)-mukFsukHpaukH* ジンポー語の本
 ジンポー語¹⁹-本

(57) *pha?FciL(-khyoF) mukFsukHpaukH* 教育の本
 教育 (-事柄)-本

これら太字の要素と、後続する名詞との間の意味的關係は、言語外的要因から推し量らなければならない。また、これら太字の要素と後続する名詞との間に、他の要素を介在させることはできない。

(58) <i>ɣaH pha?FciL mukFsukHpaukH</i>	(59) <i>cheL pha?FciL mukFsukHpaukH</i>
私の 教育 本	この 教育 本
私の教育の本	この教育の本
<i>*pha?FciL ɣaH mukFsukHpaukH</i>	<i>*pha?FciL cheL mukFsukHpaukH</i>

以上のことから、ここで見る名詞-名詞の配列は、広い意味での複合語と考えるべきである。

4.6 グループ6：動詞的修飾表現

明らかに動詞的修飾表現であると考えてよいのは、名詞修飾節である。一見動詞的修飾表現に見えるものとして、属性を表す動詞が名詞に直接後続する例がある。

4.6.1 名詞修飾節

名詞修飾節の構造は次のとおり。

(60) 現実・肯定 [..... *V*²⁰ (-AUX) -TA -TA²¹](-raH)*
 RLS ATTR
 現実・否定²² [..... *mǎ-V* (-AUX) -φ -TA](-raH)*
 NEG ATTR
 非現実 [..... *(mǎ-)V* (-AUX) -negH -TA]*
 IRL ATTR

(61) *ɣukL-TA-TA (-raH) mukFsukHpaukH* 難しい本
 難しい-RLS-ATTR(-RA) 本
 cf. *chě mukFsukHpaukH ɣukL-TA-raH* この本は難しい。
 この 本 難しい-RLS-RA

(62) *myoŋF-TA-TA-raH pyinFchoŋL* 背の高い友人
 高い-RLS-ATTR-RA 友人

- (63) *ʔāsakH yiL-TA-TA-raH py inFc hoŋL* 年配の友人
 歳 大きい-RLS-ATT R-RA 友人
- (64) *ʔāsakH yiL-vaH-TA-TA py inFc hōŋL* 年を取っている友人
 歳 大きい-[認識]-RLS-ATTR 友人
- (65) *sātheH ŋatF-TA-TA-raH py inFc hoŋL*
 金持ち COPULA-RLS-AT R-RA 友人
 金持ちの (=金持ちである) 友人
- (66) (*natH*) *kyaqH-TA-TA-raH py inFc hɔ̃L* 親切な友人
 (心) 賢い-RLS-ATT R-RA 友人
- (67) (*natH*) *yoL-TA-TA-raH py inFc hɔ̃L* 怒りっぽい友人
 (心) 怒る-RLS-ATT R-RA 友人
- (68) *kayF-TA-TA-raH py inFc hoŋL* 良い友人
 良い-RLS-AT R-RA 友人
- (69) *mǎ-kayF-φ-TA-raH py inFc hoŋL* 良くない友人
 [否定]-良い-NEG-ATTR-RA 友人
- cf. *ʔəy L py inFc hōŋL mǎ-kay F- φ* その友人は良くない。
 その 友人 [否定]-良い-NEG

もちろん、名詞修飾節は陳述文と同様に補語を取ることができる。

- (70) *ŋauyF-haqF yoH-TA-TA-raH py inFc hōŋL* 金持ちの友人 cf.(65)
 銀-金 得る-RLS-ATT R-RA 友人
- (71) *ʔāñiHne?F vayF-TA-TA-raH mukFs ukHpq ukH* 昨日買った本
 昨日 買う-RLS-ATT R-RA 本
- cf. *ʔāñiHne?F ʔay L mukFsukHpq ukH- reFvay F-T A- raH*
 昨日 その 本 買う-RLS-RA
 昨日その本を買った。
- (72) *ʔaFñiHne?F cōH-hukH-TA-TA-raH py inFc hōŋL* 昨日会った友人
 昨日 互いに-会う-RLS-ATT R-RA 友人
- (73) *ŋaH-phoH pyitL-TA-TA-raH mukFs ukHpq ukH* 私の父がくれた本
 私の-父 与える-RLS-ATT R-RA 本
- (74) *ʔāphoH ma-ŋe?H-šiL-φ-TA-raH mukFs ukHpq ukH*
 父 ない-読む-まだ-NEG-ATT R-RA 本
 父がまだ読んでいない本

(75) *ʔǎphoH ma-pinF-TA-ŋeʔH-šiL-φ-TA-raH mukFsukHpaukH*

父 ない-終わる-&-読む-まだ-NEG-ATTR-RA 本
父がまだ読み終わっていない本

(76) *tsaFpøH-tonF-menF coʔF-TA-TA-raH mukFsukHpaukH*

机-上-LOC ある-RLS-ATTR-RA 本
机の上にある本

cf. *tsaFpøH-tonF-menF mukFsukHpaukH coʔF-TA-raH* 机の上に本がある。
机-上-LOC 本 ある-RLS-RA

(77) *tǎkaH naF-TA-TA-raH pyinFchoŋL(-camF)*

一緒に 住む-RLS-ATTR-RA 友人 (-PLR)
一緒に住んでいる友人 (たち)

cf. *cheL pyinFchoŋL(-camF)-fieʔH tǎkaH naF-TA-raH*
この 友人 (-PLR)-COM 一緒に 住む-RLS-RA
この友人 (たち) と一緒に住んでいる。

-*raH* は動詞句にしか付かないわけではない。以下の例では、-*raH* が2つの補語の組に付いている。

(78) *kǎneŋH-menH-TA ʔǎnaH-cøHšoʔH-raH pyinFchoŋL*

昔-ABL 今-まで-ATTR-RA 友人
昔から今に至るまでの友人

cf. *cheL pyinFchoŋL-fiaF kǎneŋH-menH ʔaFnaH-cøHšoʔH cøH-paF-TA-raH /*
この 友人-TOP 昔-ABL 今-まで 互いに-知る-RLS-RA
この友人は昔からずっと知り合いだ

cheL pyinFchoŋL-fiaF kǎneŋH-menH ʔaFnaH-cøHšoʔH-raH
この 友人-TOP 昔-ABL 今-まで-RA

4.6.2 属性を表す動詞

属性を表す動詞が、名詞に直接後続する例が見られる。

(79) *pyinFchoŋL-kayF* 良い友人 cf.(68)

友人-良い

(80) *logFmauyF-ʔiL* 大きい蛇 cf.(50)

蛇-大きい

- (81) *mukFsukHpaukH-tshukH* 古い本 cf.(46)
本-古い

否定辞つきの動詞は、名詞に後続することはできない。

- (82) **pyinFchoŋL-mă-kayF* cf. (69)
友人-[否定]-良い

(79)に限らずこれらの例は、いずれも 4. 5. 2に挙げたような属性名詞を含む構造にパラフレーズすることが可能である。

派生名詞でない *?äsakF* 「新しいもの」も、*?ä* なしで名詞に後続する例が見られる。

- (83) *mukFsukHpaukH-sakF* 新しい本 cf. (92)
本-新しいもの

これらの例は、いずれも前接辞 *?ä* を持つ名詞が前の名詞と複合して、*?ä* が脱落した例であると考えられる。というのも、複合に際して *?ä* が脱落する例は広く見られるからである。

- (84) *?ätuŋL* 「穴・口」; *noFtuŋL* 「鼻の穴」, *thukH?ätuŋL* 「出口」
?äkeŋF 「立ち木」; *myo?FkeŋF* 「草」, *vökeŋF* 「竹」
?äjöŋH 「階級」; *pyuFj'öŋH* 「人の身分」, *?oLjöŋH* 「下級」

5 名詞句を構成する要素の共起と相対的順序

これまで見てきた要素の共起および相対的順序に関しては、未だ十分な調査を行っていない。以下ではこれまで得たデータの中からわかる点についてのみ述べることにする。

5.1 主名詞に後続する要素

主名詞に後続する要素には、グループ 1 の複数表示 (4. 1)、グループ 2 の量化表現 (4. 2)、グループ 4 の指示表現の最初のを除く 3 つ (4. 4. 24. 4. 34. 4. 4)、グループ 5 のうちの属性を表す派生名詞 (4. 5. 2)がある。

5.1.1 複数表示と量化表現

一般に、複数表示は数名詞を含む量化表現とは共起しない。一方で、数名詞を含まない量化表現とは共起する。

- (85) *mauHtsoH-cəmF ?äləpH* 全ての仕事
仕事-PLR 全て
- (86) *lauLte?L-yeF tǎhəŋL* ある大人たち
大人-PLR ある
- (87) *ŋoL-myō?F-pauH-nauH-cəmF tǎcītHtsoL* わずかな出目魚の子
魚-目-飛び出る-子供-PLR 少し

5.1.2 後置される指示表現

いずれも、複数表示・量化表現と共起しない。言い替えば、複数表示・量化表現と共起できるのは、前置される指示表現(4.4.1)に限られる。

5.1.3 属性派生名詞と他の要素との共起

属性派生名詞は、複数表示とも量化表現とも共起する。

- (88) *tuŋHche?H-myiH ?äyanL-cəmF* 結合字母²³
文字-母 NPRF 合わせる PLR
- (89) *loŋFmauyF ?äyiL tǎ-tauL* 大きな蛇1匹
蛇 大きいもの 1-CLFR

5.2 主名詞に先行する要素

主名詞に先行する要素には、グループ3の所有表現(4.3)、グループ4の指示表現のうち最初のもの(4.4.1)、グループ5のうちの名詞句と格標識からなる句(4.5.1)およびグループ6のうちの名詞修飾節(4.6.1)がある。

5.2.1 共起・順序に影響を与える要因：主名詞となり得る要素の介在

これら主名詞に先行する修飾要素類の間には、特に共起制限は存在しない。

- (90) a. *?ǎñiHne?F cəH-hukH-TA-TA-raH ?äy pyinFchoŋL* 昨日会ったその友人
昨日 互いに-会う-RLS-ATTR-RA その 友人
- b. *?ǎy ?ǎñiHne?F cəH-hukH-TA-TA-raH pyinFchoŋL* 同上
- (91) a. *?ǎñiHne?F cəH-hukH-TA-TA-raH mukHkyoLmukH-meyH-TA*
昨日 互いに-会う-RLS-ATTR-RA 外国-ABL-ATTR
pyinFchoŋL
友人

昨日会った外国人の友人

- b. mukHkyoLmukH-meŋH-TA ?ãñiHne?F cəH-hukH-TA-TA-raH pyinFchoŋL
同上

次のように、2つの名詞修飾節が共起する例もある。

- (92) a. ?ãñiHne?F cəH-hukH-TA-TA-raH ?aFsakH yiL-TA-TA-raH
昨日 互いに-会う-RLS-ATTR-RA 歳 大きい-RLS-ATTR-RA
pyinFchoŋL 昨日会った年配の友人
友人
b. ?aFsakH yiL-TA-TA-raH ?ãñiHne?F cəH-hukH-TA-TA-raH pyinFchoŋL 同上

ただし、修飾要素が完全に自由に共起し配列されるわけではない。修飾要素の共起あるいはその順序に影響を与えるのは、当該修飾要素を承けることができる要素、言い替えれば「主名詞となり得る要素」が、当該修飾要素と主名詞の間に介在するかどうかである。この問題が最も生じやすいのは、指示表現とその他の要素の間である。

- (93) a. mukHkyoLmukH-meŋH-TA ?ăy pyinFchoŋL 外国人であるその友人
外国-ABL-ATTR その友人
b. !?ăy mukHkyoLmukH-meŋH-TA pyinFchoŋL

その(外)国から来た友人/*外国人であるその友人

名詞が、その意味的要因によって、あるいはイディオムの一部であることによって、「主名詞となり得ない」場合にはこの限りではない。

- (94) a. ?ãñiHne?F cəH-hukH-TA-TA-raH ?ăy pyinFchoŋL
昨日 互いに-会う-RLS-ATTR-RA その友人
昨日会ったその友人
b. ?ăy ?ãñiHne?F cəH-hukH-TA-TA-raH pyinFchoŋL 同上
- (95) a. ?ăy ?aFsakH yiL-TA-TA-raH pyinFchoŋL その年配の友人
その歳 大きい-RLS-ATTR-RA 友人
b. ?aFsakH yiL-TA-TA-raH ?ăy pyinFchoŋL 同上

5.2.2 明示的な名詞修飾標識を伴わない所有表現

主名詞に先行する要素の中で唯一、著しく生起位置が制限されるのは、*ŋaH*, *niH*, *yoyL-TA* などの明示的な名詞修飾標識を伴わない所有表現である。これは名詞の直前に置かれる。

- (96) *ʔǎy niH tsoL* そこにいるあなたの息子
 その あなたの 息子
- (97) *yamF-khukF-meŋH-TA yoyL-TA tsayF* 家の中にある彼の財産
 家-中-ABL-ATTR 彼-ATTR 財産
- (98) *ʔǎniHneʔF coH-hukH-TA-TA-raH ŋaH pyinFchoŋL*
 昨日 互いに-会う-RLS-ATTR-RA 私の 友人
 昨日会った私の友人
- (99) *ŋaHphoH laŋH-taH-TA-TA-raH niH moHkhoyF*
 父さん²⁴ いつも-話す-RLS-ATTR-RA あなたの 一番上の伯父
 父さんがいつも話していたお前の一番上の伯父

5.3 主名詞に先行する要素と後続する要素の共起

主名詞に先行する要素と後続する要素との間にも、とりたてて言うべき共起制限はない。

- (100) *mukHkyoLmukH-meŋH-TA pyinFchoŋL-camF* 外国からの友人たち
 外国-ABL-ATTR 友人-PLR
- (101) *ŋaHphoH pyitL-TA-TA-raH mukFsukHpaukH samF-paukH*
 私の父 与える-RLS-ATTR-RA 本 3-CLFR
 私の父がくれた本 3 冊

主名詞に先行する指示表現は、主名詞に後続するものと異なり、複数表示や量化表現と共起する。

- (102) *cheL mukFsukHpaukH-camF* これらの本
 この 本-PLR
- (103) *ʔayL pyuF shidF-yaukF* その 3 人の人
 その 人 2-CLFR

あえて言うならば、主名詞に先行する指示表現と後続する指示表現が共起することはない。

注

1 戴・徐 (1992):p.3.

2 *A short information about Lhaovo people*:p.1.

3 1. のケースでは動詞 (+助動詞) の直後に小辞 *-raH* が現れる例が多く見られること、また 2. のケースでも核となる名詞の直後に名詞修飾標識 *-reH* が、動詞 (+助動詞) の直後に *-raH* が現れる例が多く見られることを考えると、抽象的な小辞 TA を立てる分析は奇妙に思われるかもしれない。しかし、これらの小辞が義務的とは言えないのに対して声調交替は (こと基本調が *F, L* の場合は明らかに) 義務的であるという事実を考慮して、声調交替を標識と、明示的な小辞を補充的な要素と、それぞれみなす。

4 一見すると、2. の名詞修飾句の核となる名詞の場合に準じて考えられそうに思えるが、2. の名詞がほとんど人間を指示するものに限られるのに対し、*-yayF* の直前ではあらゆる名詞に声調交替が起こる。

5 *-tsoL* は指小辞。

6 *-šo?H* は「…まで」を表す派生名詞接辞。

7 多くのロロ=ビルマ系言語と同様、この言語でも重複は派生名詞形成の 1 手段である。

8 *-ngL* はカチン州方言では用いられないようである。

9 いずれも、位格標識 *-mejF* / 向格標識 *-khyoF* / 奪格標識 *-mejF* と共に使われ、場所を指示する。

10 今回調査に協力してくれたシャン州出身の話者はこの形式を許容しなかったが、1997 年にカチン州で調査を行った際の協力者は許容した。方言差なのか個人差なのかはわからない。

11 *khö-yaukF* 「誰」は単独でならば用いることができる。

12 このような句を何と呼ぶかについては検討の余地がある。このような句とそこに含まれる名詞句の間の関係は、例えば従属節と動詞句の間の関係と並行的に捉えられる。しかし不幸にして「節」のような確立した名称をこのような句は与えられていない。これらの句を例えば「格標識つきの名詞句」と呼ぶことは、特定の事物を指示する言語形式と、事物の指示にとどまらず他の言語形式に対する関係の表示までも含んだ言語形式との間の区別をばやけさせることにつながり、望ましいことではないと考える。筆者は仮に「格句」という名称を提案する。

13 *kä* はいくつかの名詞について「他の…」の意味を表す前接辞であるが、すべての名詞に自由につくわけではない。

14 *ruF* を伴わない形式 *luFl uF-tsaL* は、名詞を修飾する後置要素となれない。コンピュータを伴って述語となることはできる。

- a. *cě-ruF ʔǎfoʔH luFluF-tsaL ɲatF-TA-raH
 これ 葉 薄い RDPL-[限定] COPULA-RLS-RA
- b. cě-ruF ʔǎfoʔH luFluF-tsaL-TA ruF ɲatF-TA-raH
 薄い RDPL-[限定]-TA もの
 これはひらひらした葉っぱだ。
- c. ceL-ʔǎfoʔH luFluF-tsaL ɲatF-TA-raH
 この-葉
 この葉っぱはひらひらしている。
- d. ceL-ʔǎfoʔH luFluF-tsaL-TA ruF ɲatF-TA-raH
 この葉っぱはひらひらした葉っぱだ。

15 この ʔǎsakF は、同じく対応する動詞を持たないビルマ語の /ǎTiʔ/ 「新しい」と同源の形式である。

16 この点については、4.6.2 を参照

17 ジンポー語 maiLganM の借用。

18 caFpanF は第一義的に「日本人」を表す。「日本」という国を表すには、後に muŋH 「国」を付加しなければならない。他の民族についても同じことがあてはまる。

19 一般に、民族名はその民族が話す言語の名前としても用いられる。

20 *は複数個の生起を許すことを表す。つまり、動詞連続が可能であるということである。動詞連続の場合には、前述の通り、要素間に TA が入る。

21 1 つ目の TA は肯定・現実の文標識であり、2 つ目の TA は名詞修飾標識である。ちなみに、TA は直前の音節に対してしか働かず、従って TA の列の効果は TA1 つと変わらない。

22 動詞文の場合、肯定で見られる現実：非現実の対立が否定においては中和されるが、名詞修飾節の場合には否定でもこの対立が保持される。

23 ラテン文字によるロンウオー語正書法で、1 つの音素を表すアルファベット 2 字以上の組のこと (Lhao Tung" Mho" Hhid Paug'(Lhaovo Primer)(1973) からの用例)。

24 ʔǎphoH 「父」の前接辞を ɲaH 「私の」で置き換えた形で、子が自分の父に言及する際に用いるのが普通だが、ここでのように父親が自分の子に対して自分自身に言及する場合にも用いられる。他の親族名称にも同様の形が見られる。

参考文献

- Lhaovo Littero-Cultural Commitee (ed.) *A short information about Lhaovo people*. Myitkyina: Lhaovo Littero-Cultural Commitee.
- Lhaovo Littero-Cultural Commitee (ed.)(1973) *Lhao Tung" Mho" Hhid Paug'(Lhaovo Primer)*. Myitkyina: Lhaovo Littero-Cultural Commitee.

- Nishi, Yoshio (1999) *Four papers on Burmese, Toward the history of Burmese (the Myanmar language)*, Tokyo: ILCAA, Tokyo Univ. of Foreign Studies, 115pp.
- Sawada, Hideo (1999) 'Outline of Phonology of Lhaovo(Maru) of Kachin State', *Linguistic & Anthropological Study on the Shan Culture Area*, report of research project, Grant-in-Aid for International Scientific Research (Field Research): 97-147.
- 載慶厦・徐悉艱 (1992) 『景頗語語法』. 北京: 中央民族学院出版社.
- 藪司郎 (1992) 「マル語」. 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典』第4巻・世界言語編(下-2), 東京: 三省堂: 168-172.

東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造

三上 直光

目次

はじめに

- 1 グループ1：複数表現
- 2 グループ2：量化表現
- 3 グループ3：所有者表現
- 4 グループ4：指示表現
- 5 グループ5：名詞的修飾表現
- 6 グループ6：動詞的修飾表現
- 7 名詞句構成要素間の共起関係と位置関係

おわりに

注

参考文献

はじめに

本稿では、本書に収められている6篇の論文を参考にして、東南アジア大陸部6言語の名詞句構造を比較対照し、言語間の類似点と相違点を大まかに整理する。まず、各言語の系統と文法的特徴の概略を以下に示しておく。

	ベトナム語	クメール語	タイ語	ラオ語	ビルマ語	ロンウォー語
系統	モン・クメール系		タイ・カダイ系		チベット・ビルマ系	
形態特徴	孤立語的				膠着語的	
基本語順	SVO				SOV	
	被修飾要素＋修飾要素				修飾要素＋被修飾要素	

系統関係を考慮せず、文法的観点から6言語を眺めると、ベトナム語、クメール語、タイ語、ラオ語のグループとビルマ語、ロンウォー語のグループに大きく2分される。本稿における記述も、グループ内での対照が先行している点で、この分類を反映した内容になっている。以下、言語名は、各言語のカタカナ表記の頭文字をとって(ベ)(ク)(タ)(ラ)(ピ)(ロ)で示すことにする。

1 グループ1：複数表現

〔名詞に直接付加される（随意的な）複数表示〕

一般に印欧語は、数（number）を文法範疇としてもつ。名詞の指示対象が単数か、複数かによって、名詞や動詞などの語形が変化する。ここで扱う 6 言語にはそのようなかたちでの数概念の表出はない。名詞は裸のまま、文脈によって単数にも複数にも理解される。しかし、複数概念を表す形式が全く存在しないというのではない。6 言語における複数表現の意味合いは印欧語のそれとは異なるが、以下に挙げる形式も複数を表す形式の一種とみなすことができるだろう¹⁾。それらは、必要に応じて、名詞に付加され、その名詞の指示対象が複数であることを含意する形式（以下、複数表示形式と呼ぶことがある）である。

ベ	các + 名詞	các : 漢語「各」に由来する漢越語
	những + 名詞	
ク	kòmndò + 名詞	kòmndò : 「堆積、山」
	voong + 名詞	voong : 「群れ」
	puok + 名詞	puok : 「集団」
タ	phûak + 名詞	phûak : 「集団」
	camphûak + 名詞	camphûak : 「類」
ラ	cămphûak + 名詞	cămphûak : 「類」
	phûak + 名詞	phûak : 「集団」
	súm + 名詞	súm : 「集団、軍団」
ビ	名詞-twe	
	名詞-to.	
ロ	名詞-camF	←acamF 「組、セット、団体」
	名詞-pamF	←pamF 「山、堆積」
	名詞-yeF	

複数表現を言語別に概観する前に、次の 2 点に注意しておこう。上掲の複数表示形式を全体として見るならば、そこには名詞としての意味・機能を保つものから接辞的に用いられるものまで、様々な性格のものが含まれているという点、およびそれらの形式と名詞との結合には一定の意味的制約があるという点である。

それでは、言語ごとに見ていこう。(ベ) (ク) (タ) (ラ) では、複数表示形式は等しく名詞に前置されている。しかし、(ク) (タ) (ラ) と (ベ) では、複数表示形式それ自体の意味および〔複数表示形式 + 名詞〕の構造と意味に違いがある。すなわち、(ク) (タ) (ラ) の形式はいずれもある種の集まりを意味する名詞であり、その後に名詞を伴った表現は、構造的には〔被修飾要素 + 修飾要素〕として分析される一種の複合名詞と考えられる。そ

して、結合全体の意味は、単に複数の事物を指示するというのではなく、複数の事物の集まりを指示するものである。一方、(ベ)のcác(漢越語「各」)とnhữngは名詞ではなく、つねに名詞を伴って用いられる拘束形式であり、それが後続の名詞を限定するという関係で複数表現が形成されていると考えられる。(タ)のphôakの用法に少し触れておくと、その後に名詞を置いただけではすわりが悪く、それを限定する要素を加える必要がある。(ベ)のnhữngの使用にも同様の制約が課される。

(ビ)の複数概念は、名詞への接尾辞添加によって表現される。[名詞-twe]が表す集合の成員はすべてその名詞の類に属するものであるのに対して、[名詞-to.]の場合は必ずしもそうでなくてもよい。(ロ)のcamFとpamFは元来の名詞が文法化したものと考えられている。

以上のほかに、日本語の量語(「人々、国々、山々」など)のように、単語の反復によっても複数の意味が表される言語がある。(ク)(タ)がそれである。しかし、このプロセスはすべての名詞に適用されるわけではなく、一部の特定の名詞に限定される²⁾。

2 グループ2：量化表現

[1冊の、2冊の、何冊の] [ある、全ての、殆どの] [数冊の、わずかの、たくさんの]

個体として数えられる事物の数量を表現する場合、形式上、数詞と名詞がそれだけで直接結びつく言語もあれば、他の要素の介在が要求される言語もある。後者のタイプの言語において、他の要素とは、類別詞ないしは助数詞と呼ばれる要素である。6言語はいずれもこの要素を用いるのを原則とする(ここでは、類別詞という用語を助数詞を含めた意味で用いる)。

名詞句が名詞、数詞、類別詞の3要素で構成される場合、6言語における基本語順は次のようになる。

ベ	数詞+類別詞+名詞		
ク	名詞+数詞+類別詞	数詞が「1」の場合：[名詞+類別詞+数詞「1」]も可能	
タ			
ラ			
ビ			1の位が0(10を除く)の場合：[名詞+類別詞+数詞「0」]
ロ			

(ベ)は[被修飾要素+修飾要素]の語順を原則とする言語であるが、量化表現においては、その原則に従っていないかみえる語順[被修飾要素+修飾要素]をとる。(タ)(ラ)(ビ)については、上記の基本語順に反する場合もある。(タ)(ラ)では、数詞が「1」の場合には[名詞+類別詞+数詞「1」]も可能である。また(ビ)では、1の位が0(10を除く)の場合には[名詞+類別詞+数詞「0」]が用いられる。

上に示した語順は、各構成要素がすべて現れた場合のそれであって、類別詞の「重み」は考慮されていない。(ク)は類別詞を有する言語ではあるが、他の5言語に比べれば、類別詞の数も少なく、また使用頻度も高くない。類別詞により程度差はあるものの、量化表現における類別詞の存在はそれほど強く要求されるものではない。

次に、名詞、数詞、類別詞を構成要素とする名詞句の構造について考えてみよう。6言語とも、これらの構成要素の結合の仕方が同じであるとは断定できないようである。名詞の指示対象が聞き手にも了解される場合には、名詞のない〔数詞＋類別詞〕だけでも使うことができるが、この事実は名詞と〔数詞＋類別詞〕から成る句とする分析を支持する根拠になるかもしれない。しかし、(ベ)のように、〔数詞＋類別詞〕のほかに〔類別詞＋名詞〕も独立して用いられる言語にはこの基準は適用できない。(ベ)を除く言語においては、類別詞と名詞の結合だけでは発話されることがないため、構造分析の可能性は名詞と〔数詞＋類別詞〕の結合ということになるであろう。そうであるとすれば、次に考えるべき問題は、(1)〔数詞＋類別詞〕が名詞を修飾する構造になっているのか、(2)名詞と〔数詞＋類別詞〕が同格的な構造になっているのか、(3)構造的にあいまいなのか、という点である。

(ク)(タ)(ラ)の例(日本語に置き換えた例)で言うなら、「彼＋殺す＋友達＋3＋人」という文は、上記(1)の構造で「彼は3人の友達を殺した」と解釈されるのか、(2)の構造で「彼は友達を3人殺した」と解釈されるのか、意味的にあいまいなのか、という問題がある。(ビ)では、名詞と〔数詞＋類別詞〕の結合は同格関係にあると解釈するのが適当であろう。

数量を表す語には、数詞のほかに、「すべての、おのその、ほとんどの、多くの、いくつかの、少しの、ある」などの意味を表す語がある(これらの語と数詞を含めて、数量詞(quantifier)と呼ばれることがある)。これらの語のなかには、数詞の位置に現れるもの、数詞以外の位置に現れるもの、類別詞を伴わずに名詞と共起するもの、などがあり、また文中における機能も語によって異なる。

類別詞はグループ4(指示表現)で見ると、(ビ)を除き数詞のない環境にも現れる。

3 グループ3：所有者表現

[私の、あなたの、彼の・彼女の、母の、その金持ちの]

[被修飾要素＋修飾要素]の語順をとる(ベ)(ク)(タ)(ラ)では、[所有物を表す名詞＋所有者を表す名詞](以下、所有物、所有者と略記)の語順になり、逆に[修飾要素＋被修飾要素]の語順をとる(ビ)(ロ)では[所有者＋所有物]の語順になる。また、いずれの言語にも所有者と所有物が直接結合する表現(直接結合と呼ぶ)、所有者と所有物の間に相互の関係を表す要素を介在させた表現(間接結合と呼ぶ)がある。

ベ	a. 所有物+所有者	
	b. 所有物+cúa+所有者	cúa : 「財産」
ク	a. 所有物+所有者	
	b. 所有物+r ðoboh+所有者	r ðoboh : 「物」
タ	a. 所有物+所有者	
	b. 所有物+khǝŋ+所有者	khǝŋ : 「物」
ラ	a. 所有物+所有者	
	b. 所有物+khǝŋ+所有者	khǝŋ : 「～の」
ピ	a. 所有者-y ε.+所有物	-y ε. : 属格助詞
	b. 声調変化	下降調への変化、一部の名詞句
	c. 上記 a と b の併用	
口	a. 所有者-r eH/-nǝL+所有物	-r eH/-nǝL : 名詞修飾標識 (-nǝL はカチン州方言では用いられない)
	b. 声調変化	一部の名詞句

まず (ベ) (ク) (タ) の (b) 形式を見よう。所有物と所有者の間に置かれている要素は実質的な意味をもつ名詞としても用いられるものである。(ベ)cúa は「財産」を、(ク)r ðoboh、(タ) khǝŋ はいずれも「物、品物」を意味する名詞である³⁾。このことは、(ベ) [cúa+所有者]、(ク) [rðoboh+所有者]、(タ) [khǝŋ+所有者] が単独でも機能しうる (指示対象の名詞を表現する必要のない場合などに用いられる) ことと無関係ではないであろう。

(ベ) (ク) (タ) (ラ) の 4 言語の所有者表現で問題にすべきは、(a) (b) 両形式の違いである。大雑把な言い方をすれば、所有者に重点を置いて、所有物と所有者の関係を明確に述べる場合には (b) 形式が、そのような意味的強調の必要がない場合 (所有の関係が正しく解釈される場合など) には (a) 形式が用いられるということになるだろうか。さらに、4 言語における (b) 形式の意味について言えば、それは単に所有の意味のみを表すわけではない。日本語の [名詞+の+名詞] が表す意味は多様きわまりないが、4 言語でも様々な意味関係が (b) 形式で表現される。同じことは (a) 形式についても言えることであり、(a) 形式と (b) 形式の意味的な相違はさらに検討すべき課題である。

(ピ) と (口) については両言語とも、所有者名詞に助詞を付加する形式と所有者名詞の声調変化による形式をもつ。後者の形式は人を表す名詞句の一部に見られる。(口) にはさらに名詞修飾句専用の形式をもつ人称代名詞もあり、この場合助詞の使用は随意的である。

4 グループ4：指示表現

〔この、その、あの、どの〕〔これらの、それらの、あれらの〕

名詞が指示詞によって限定される場合、6言語とも指示詞と名詞が直接結びつくことができるが、(ベ) (タ) (ラ) (ロ) においては、その他に類別詞が介在することもある。(ク)の類別詞は指示表現においてもあまり使われることはなく、名詞が直接、指示詞と結びつくのが一般的である。また、(ビ)では他の5言語と異なり、類別詞の使用が数詞の存在を前提とするため、指示詞が直接、名詞と結びつく形式のみが可能である。(ベ) (ク) (タ) (ラ) では、名詞の指示対象が聞き手にも了解される場合には、類別詞と指示詞のみの結合も用いられる。

ベ	a. 名詞+指示詞 b. 類別詞+名詞+指示詞	
ク	a. 名詞+指示詞	
タ	b. 名詞+類別詞+指示詞	
ラ		
ビ	指示詞+名詞	
ロ	a. 指示詞 (名詞修飾形) +名詞	
	b. 名詞+指示詞 (名詞修飾形) +類別詞	
	c. 名詞+指示詞 (名詞修飾形) -ruF	ruF : 「もの」
	d. 名詞+指示詞 (基本形)	「どの」を除く

特に(ベ) (タ) (ラ) では類別詞の有無による違いが問題となる。(a) と (b) の両方の形式が同一物を指示する場合があるからである。ここで類別詞の個別化機能に着目したい。この機能は、単一の個体を表すというものであり、そこから他のものとの対比という意味合いが生まれる。したがって、類別詞を伴った (b) 形式は、指示対象の個体を際立たせ、対比的意味を強調した表現ということになる。一方、類別詞のない〔名詞+指示詞〕は、そのような意味合いを含まず、個体(単数、複数)も、類も指示することが可能である。

(ビ) では〔指示詞+名詞〕が唯一の可能な形式であるのに対して、(ロ) ではその他に3種の形式がある。この事実は、(ビ) と (ロ) の系統関係(の近さ)を考え合わせると興味深い。

5 グループ5：名詞的修飾表現

〔外国の、タイ語の、言語学の、子供向けの(本)〕〔タイ人の、医者(の友人)〕

ここでは名詞的修飾語が名詞を修飾する場合を扱う。所有者表現も形式としてはこれに含まれるが、グループ3として別に取り上げたので、ここではそれ以外の場合を検討する。

ベ	a. 名詞+名詞 b. 名詞+前置詞+名詞	修飾関係は「後から前へ」
ク		
タ		
ラ		
ビ	a. 名詞-格標識+名詞 b. 名詞+名詞	修飾関係は「前から後へ」
ロ		

6 言語とも、名詞と名詞が直接結びつく形式と名詞と名詞の関係を示す要素が介在する形式とがある。(ベ) (ク) (タ) (ラ) では、それぞれの言語における修飾関係の原則に従い、名詞的修飾語は主要名詞に後置され、(ビ) (ロ) では、逆の語順になる。「外国の本、タイ語の本、言語学の本」などの表現では、名詞と名詞は直接結びつくことができる。この結合形態は、各論文での分析でも示されている通り、一般に意味的な結合度の強さに対応する。複合名詞はふつうこの形態をとる。「子供の本」のように意味的に不明瞭な表現は、名詞と名詞との意味的な関係を明示するような要素が用いられることがある。なお、用例の中で、「医者友人」の「医者」の部分は、名詞的修飾表現ではなく、動詞的修飾表現のかたちをとる言語が多い。

要点を繰り返すならば、名詞と名詞の直接結合は構成要素が緊密に結びついており（典型例は複合名詞）、ひとまとまりとして解釈される傾向があるのに対して、間接結合は個々の構成要素の意味の総和として解釈される。直接結合の成立には間接結合よりもはるかに厳しい制約が課される。以上述べたことは、系統関係を離れて、6 言語に等しく当てはまることである。しかし、両結合形態の関係はきわめて微妙であり、その違いについては言語ごとにさらに検討する余地が残されている。

6 グループ6：動詞的修飾表現

〔分厚い、大きい、高価な、古い、ぼろぼろの、難しい、昨日買った、父がくれた、机の上にある、まだ読んでいない (本)〕

〔背の高い、古い、裕福な、親しい、親切な、良い、悪い、昨日会った、一緒に住んでいる、しばらく会っていない (友人)〕

ここで言う動詞的修飾表現には動詞のほかに、いわゆる形容詞も含まれる(6 言語においては、少なくとも統語的にはそれらを区別する根拠はない)。動詞を含む要素が名詞を修飾する場合の形式としては、名詞と動詞的修飾語が直接結合する場合と名詞と動詞的修飾語の間に修飾語であることを示す標識が置かれる場合がある。後者の場合の代表的な標識を各言語で示せば、(ベ) *mà* (ク) *dael* (タ) *thii* (ラ) *thii* (ビ) *-te./-me.* (ロ) *-TA* が挙げられる。それらの統語環境は次の表の通りである。

ベ	a. 名詞+動詞 b. 名詞+mà+...動詞...	
ク	a. 名詞+動詞 b. 名詞+dael+...動詞...	
タ	a. 名詞+動詞 b. 名詞+thii+...動詞...	
ラ	a. 名詞+動詞 b. 名詞+thii+...動詞...	
ピ	a. 名詞+ʔǎ-動詞	ʔǎ：名詞化接頭辞
	b. 名詞+動詞の反復	
	c. 名詞+動詞	[名詞+ʔǎ-動詞]のʔǎが脱落
	d. 名詞修飾節 (①/ ②)+名詞 ① 動詞-te. ② 動詞-me.	①確定 (←動詞文標識-te_) ②未確定 (←動詞文標識-me_)
口	a. 名詞+ʔǎ-動詞	ʔǎ-：名詞化接頭辞
	b. 名詞+動詞	[名詞+ʔǎ-動詞]のʔǎが脱落
	c. 名詞修飾節 (①/ ②)+名詞 ① 動詞-TA-TA (-raH) ② 動詞-neŋH-TA	①現実 ②非現実

標識の有無による違いについての検討が求められるのも、名詞と名詞が結合する場合と同様である。まず、(ベ)(ク)(タ)(ラ)について言えば、ここでも、名詞と名詞が結合する場合と同様のことを指摘することができる。すなわち、直接結合は、構成要素間の意味関係が密接であり、表現全体がひとまとまりとして(被修飾語の類別として)解釈される傾向がある(複合名詞はこの形式をとる)⁴⁾。他方、構成要素間に修飾関係を示す要素が介在する間接結合では、意味の重点が修飾語に置かれ、動詞的修飾語は名詞を限定、特定する。名詞句全体の意味は、各構成要素の意味の総和として理解される。表現の成立に厳しい制約が課されるのが直接結合である点も、名詞と名詞の結合について述べたことと同じである。

(ピ)の動詞的修飾表現は、(a)名詞+[ʔǎ-動詞]、(b)名詞+[動詞の反復]、(c)名詞+動詞、(d)修飾節+名詞、などの形式が区別される。この中で名詞と動詞が直接結びついた(c)が複合化の度合いが強い点、および名詞修飾節標識(動詞文標識が声調変化した形式)を伴う(d)が制約の少ない、生産的な表現である点は、それぞれ(ベ)(ク)(タ)(ラ)の(a)、(b)と並行的な特徴とみなすことができる。また(ピ)の(a)については、(ベ)(タ)(ラ)などの類別詞を伴った表現と類似した特徴を有している。つまり、いずれも個別のものを指示し、対比的に用いられる。(口)にも(ピ)の(a)(c)(d)に対応

する3種の表現がある⁵⁾。(ビ)との比較で興味深いのは、「難しい本」のように、外見だけでは判断できない属性形容詞は(ビ)では(a)形式は用いられないが((b)(c)も不可)、(ロ)の(a)形式ではこれが可能であることである。

標識を伴う修飾節については、修飾要素の資格の問題がある。まず、(ベ)(ク)(タ)(ラ)の4言語では、(ク)(タ)(ラ)の(b)形式は、動詞的修飾語が動詞(形容詞)一語から成る修飾要素であっても成立するが、(ベ)の(b)形式はそのような場合には成立しない。

(ベ)の(b)形式の成立条件は現段階では明確に述べることができないが、修飾節が主述構造を含む場合に使われるのがふつうであることから、修飾節には限定度を高めるような、ある程度の複雑性を備えた内容が要求されるのであろう。(ビ)の(d)についても(ベ)の場合と類似した制約がある。

7 名詞句構成要素間の共起関係と位置関係

名詞句構成要素間の共起関係についての詳細は個々の論文に譲ることにして、ここでは位置関係に関して簡単に整理しておきたい。本書では(ベ)(ク)(ラ)(ビ)について、構成要素の全体的な位置関係が示されているが、それは以下のごとくである。なお、表中のNは主要名詞を表す。修飾語句の名称は個々の論文に従った。

ベ	量化表現 + N + 名詞的修飾表現 + 動詞的修飾表現 + 所有者表現 + 指示表現
ク	N + 名詞的要素 + 所有表現 + 動詞的要素 + 量化表現 + 指示表現
ラ	N + 名詞的成分 + 動詞的成分 + 所有 + 修飾節 + 数量 + 指示
ビ	名詞修飾節 + 所有者表現 + 指示表現 + マーカーを伴う動詞 + マーカーを伴う名詞 + N + 動名詞 + 量化表現

上記の語順は、各論文でも述べられているように、基本語順とでも言うべきもので、決して固定したものではない。特に修飾語句であることを示す標識がある場合には、他の語順の可能性も生ずる⁶⁾。

まず、どの言語にも共通する特徴として指摘できるのは、主要名詞の属性を表す要素(名詞的修飾表現、動詞的修飾表現)が主要名詞に隣接する位置を占めるということである。これは主要名詞と修飾語句との意味的な緊密度の形式面への反映として説明することが可能であろう。

次に、[被修飾要素 + 修飾要素]の基本語順をとる言語((ベ)(ク)(ラ))では、指示詞を名詞句の末尾に置くという点が共通している。指示詞が名詞句の区切りを示す役割を担っていると考えられる。また、[修飾要素 + 被修飾要素]の基本語順をとる(ビ)には、修飾節が他の修飾語句よりも前に置かれるという一般的特徴が認められる。

最後に、情報の重要度という要因も語順の決定に強く働いていることを付け加えておこう。

おわりに

以上、東南アジア大陸部 6 言語の名詞句構造を概観した。その中でも指摘したように、構成要素の連続についての単位認定の問題、修飾標識を伴う場合と伴わない場合の意味的相違の問題などは、今後さらに追究する必要がある。構成要素の連続性の問題は、6 言語とともに、名詞句のみならず動詞句においても存在し、これらの言語の特質の解明に深く関わるものである。それはまた同時に人間言語一般に対しても投げかけられるべき重要な問題でもある。その問題を考える上で、東南アジアの言語が貴重な材料を提供することは間違いない。

注

- 1) ここで取り上げた形式を単純に比較対照することに問題がないとは言えない。比較対照するにふさわしい形式が選ばれるような基準を定めるべきであろう。
- 2) (ク) (タ) の反復現象の意味機能についてはなお不明な点が多い。(ベ) にも名詞の反復現象が存在する。いずれの言語においても、さらに詳細な検討が必要である。
- 3) (ラ) khǒŋ は (タ) khǒŋ と同源語と考えられるが、(ラ) では「物」の意味ではなく、「～の」の意味で用いられる。
- 4) このことは、修飾語句が比較的単純な構造をもつ場合にはある程度当てはまるが、構成が複雑な場合(たとえば、修飾語句が主語と述語を含む場合)も含めた説明としては不十分であろう。
- 5) (ロ) の (a) 形式は、澤田論文では「グループ 5: 名詞的修飾表現」に含まれているが、(c) 形式との関連性を考え、便宜上ここで扱う。
- 6) タイ語、ラオ語などでは、類別詞の生起によっても語順入れ替えの可能性は広がる。

参考文献

- Rijkhoff, J. (2002) *The noun phrase*. Oxford: Oxford University Press.
- 三上直光 (1998) 「タイ語の名詞連接」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』30: 287-300.
- (1999) 「タイ語における連結形式と意味の関係について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』31: 209-223.
- (2006) 「ベトナム語類別詞再考」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』37: 183-200.

東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造

2006(平成18)年3月20日発行

編者 東南アジア諸言語研究会
発行 慶應義塾大学言語文化研究所
〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45
印刷 株式会社 白峰社
〒170-0013 東京都豊島区東池袋 5-49-6
